

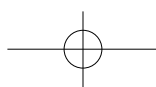
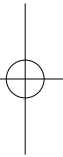
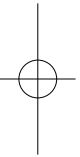
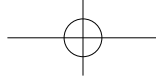
# 横隈狐塚遺跡 8・9

—福岡県小郡市横隈所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第324集

2019

小郡市教育委員会



## <序 文>

福岡県の中西部、佐賀県との県境に所在する小郡市は、これまで市域北部・中南部を中心とした宅地開発や北東・中南部における工業団地開発が相次いで行われ、これに伴う交通網の整備も着々と進捗しつつあります。これらの開発に先立って、埋蔵文化財発掘調査が実施されてきており、様々な時代の人々の暮らしに関する事柄が着々と蓄積されつつあります。これらの埋蔵文化財発掘調査で判明した歴史的事象は、当時の小郡における人々の暮らしを復元するうえで大きな役割を果たしています。

今回ここに報告いたします「横隈狐塚遺跡 8・9」は、宅地造成に先立って小郡市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。遺跡は、小郡市北部の三国丘陵の一角を占める独立丘陵の縁辺部に位置しています。本遺跡が所在する周辺地域では、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多数発見されてきており、その数の多さと内容の濃さから全国的にその名が知られています。今回の調査でも弥生時代に相当する遺構を数多く発見しており、改めて当時の集落の広がりを確認することができました。この成果が、小郡市内における歴史の全体像を解明する一助となれば幸いです。

最後になりましたが、地権者さん、調査にご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様、現地作業にあたった地元作業員の皆様など、発掘調査を進める際にお世話になった多くの方々に深く感謝を申し上げ、序文といたします。

平成 31 年 3 月 29 日

小郡市教育委員会

教育長 清武 輝

## <例 言>

- 1、本書は、小郡市横隈地内における土地造成に伴って小郡市教育委員会が平成 29 年度に発掘調査を行った横隈狐塚遺跡 8・9 の埋蔵文化財発掘調査の記録である。
- 2、遺構の写真撮影は西江幸子が行った。
- 3、遺構の実測、遺物の復元・実測・製図には担当者の他に久住愛子、宮崎美穂子、佐々木智子、山川清日、永富加奈子、牛原真弓・林知恵ら諸氏に多大なる協力を得た。また、遺物の写真撮影は（有）システム・レコに委託した。
- 4、遺構図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に則している。
- 5、本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（T. P.）を基準としている。
- 6、本書で用いている略号は以下のとおりである。  
    竪穴式住居跡：SC    土坑：SK    溝：SD    ピット：P
- 7、遺物・実測図・写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
- 8、本書の執筆・編集は西江が担当した。

## 本文目次

第1章	調査の経過と組織	1
	1. 調査の経緯	
	2. 調査の経過	
	3. 調査の体制	
第2章	位置と環境	2
第3章	横隈狐塚遺跡8 遺跡の概要	6
第4章	横隈狐塚遺跡8 遺構と遺物	6
	1. 竪穴式住居跡〔SC〕	
	2. 土坑〔SK〕	
	3. 溝〔SD〕	
	4. ピット〔P〕	
	5. その他	
第5章	横隈狐塚遺跡9 遺跡の概要	58
第6章	横隈狐塚遺跡9 遺構と遺物	58
	1. 竪穴式住居跡〔SC〕	
	2. 土坑〔SK〕	
	3. 溝〔SD〕	
	4. ピット〔P〕	
	5. その他	
第7章	まとめ	100
	1. 横隈狐塚遺跡8次調査区・9次調査区における弥生時代前期の遺構について	
	2. 横隈狐塚遺跡8次調査区・9次調査区が位置する丘陵上の遺構の広がりについて	
	3. 弥生時代前期後半～中期初頭における横隈狐塚遺跡周辺の遺構動向	

## 挿図目次

第1図	横隈狐塚遺跡8・9調査地位置図 (S=1/2,500)
第2図	横隈狐塚遺跡8・9周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)
第3図	横隈狐塚遺跡8・9地形測量図及び主要遺構配置図 (S=1/200)
第4図	横隈狐塚遺跡8 1号・2号竪穴式住居跡遺構実測図 (S=1/60)
第5図	横隈狐塚遺跡8 1号・2号・3号竪穴式住居跡出土土器実測図 (S=1/4)
第6図	横隈狐塚遺跡8 1号・2号竪穴式住居跡出土石器実測図 (1・2・3・7:S=2/3、4・5・6・8:S=1/2)
第7図	横隈狐塚遺跡8 3号竪穴式住居跡遺構実測図 (S=1/60)
第8図	横隈狐塚遺跡8 3号竪穴式住居跡出土石器実測図 (1・2・3:S=2/3、4・5・6・7:S=1/2)
第9図	横隈狐塚遺跡8 1号・2号土坑遺構実測図 (S=1/40)
第10図	横隈狐塚遺跡8 1号・2号・3号土坑出土土器実測図 (S=1/4)
第11図	横隈狐塚遺跡8 2号・4号土坑出土石器実測図 (S=1/2)
第12図	横隈狐塚遺跡8 3号・4号土坑遺構実測図 (S=1/40)
第13図	横隈狐塚遺跡8 4号・5号土坑出土土器実測図 (S=1/4)
第14図	横隈狐塚遺跡8 5号・7号・8号・9号・11号・12号・15号・16号出土石器実測図 (1・4・7・8・9:S=2/3、その他:S=1/2)
第15図	横隈狐塚遺跡8 5号・6号土坑遺構実測図 (S=1/40)
第16図	横隈狐塚遺跡8 7号・8号土坑遺構実測図 (S=1/40)
第17図	横隈狐塚遺跡8 9号・10号土坑遺構実測図 (S=1/40)

- 第18図 横隈狐塚遺跡8 7号・8号・9号・11号土坑出土土器実測図 (S=1/4)
- 第19図 横隈狐塚遺跡8 11号・12号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第20図 横隈狐塚遺跡8 13号・17号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第21図 横隈狐塚遺跡8 15号・18号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第22図 横隈狐塚遺跡8 13号・15号・16号・17号18号土坑出土土器実測図 (S=1/4)
- 第23図 横隈狐塚遺跡8 16号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第24図 横隈狐塚遺跡8 17号・18号土坑出土土器実測図 (1:S=2/3、5:S=1/4、その他:S=1/2)
- 第25図 横隈狐塚遺跡8 19号・30号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第26図 横隈狐塚遺跡8 20号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第27図 横隈狐塚遺跡8 19号・20号土坑出土土器実測図 (S=1/4)
- 第28図 横隈狐塚遺跡8 19号・20号・23号・24号土坑出土土器実測図 (1・9・10:S=2/3、その他:S=1/2)
- 第29図 横隈狐塚遺跡8 21号・23号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第30図 横隈狐塚遺跡8 22号・24号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第31図 横隈狐塚遺跡8 21号・22号・23号・24号・25号土坑出土土器実測図 (S=1/4)
- 第32図 横隈狐塚遺跡8 25号・26号・29号・31号・32号・33号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第33図 横隈狐塚遺跡8 25号・28号・30号・32号・34号土坑出土土器実測図  
(1:S=1/8、2:S=2/3、その他:S=1/2)
- 第34図 横隈狐塚遺跡8 28号・34号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第35図 横隈狐塚遺跡8 28号・30号土坑、3号溝、P10出土土器実測図 (S=1/4)
- 第36図 横隈狐塚遺跡8 2号・3号・4号・5号溝遺構実測図 (S=1/40)
- 第37図 横隈狐塚遺跡8 2号・3号溝、遺構検出時出土土器実測図 (1・4:S=2/3、2・3・5:S=1/2)
- 第38図 横隈狐塚遺跡9 1号竪穴式住居跡遺構実測図 (S=1/60)
- 第39図 横隈狐塚遺跡9 1号・2号竪穴式住居跡出土土器実測図 (S=1/4)
- 第40図 横隈狐塚遺跡9 1号竪穴式住居跡出土土器・土製品実測図 (1~5:S=2/3、6~15:S=1/2)
- 第41図 横隈狐塚遺跡9 2号・4号竪穴式住居跡、27号土坑遺構実測図 (S=1/60)
- 第42図 横隈狐塚遺跡9 5号・7号竪穴式住居跡遺構実測図 (S=1/60)
- 第43図 横隈狐塚遺跡9 4号・5号・7号竪穴式住居跡出土土器実測図 (S=1/2)
- 第44図 横隈狐塚遺跡9 4号・5号・7号竪穴式住居跡、1号土坑出土土器実測図 (S=1/4)
- 第45図 横隈狐塚遺跡9 1号・2号・3号・4号・5号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第46図 横隈狐塚遺跡9 6号・7号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第47図 横隈狐塚遺跡9 7'号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第48図 横隈狐塚遺跡9 7号土坑出土土器実測図 (1~8:S=2/3、9~11:S=1/2)
- 第49図 横隈狐塚遺跡9 7号・7'号土坑出土土器実測図 (S=1/4)
- 第50図 横隈狐塚遺跡9 7'号・8号土坑出土土器・土製品実測図  
(1・2・7・8:S=2/3、3~6・10・11:S=1/2、9:S=1/4)
- 第51図 横隈狐塚遺跡9 8号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第52図 横隈狐塚遺跡9 8号土坑上層・中層・最下層出土土器実測図 (S=1/4)
- 第53図 横隈狐塚遺跡9 8号土坑下層出土土器実測図 (S=1/4)
- 第54図 横隈狐塚遺跡9 9号・10号・11号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第55図 横隈狐塚遺跡9 12号・13号・14号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第56図 横隈狐塚遺跡9 15号・16号・17号・18号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第57図 横隈狐塚遺跡9 19号・20号・21号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第58図 横隈狐塚遺跡9 14号・18号・19号・22号土坑出土土器実測図 (S=1/4)
- 第59図 横隈狐塚遺跡9 18号土坑下層、19号・35号土坑、P9・P20、表採出土土器実測図  
(1~6:S=1/2、7~9:S=2/3)
- 第60図 横隈狐塚遺跡9 22号・24号・25号土坑遺構実測図 (S=1/40)
- 第61図 横隈狐塚遺跡9 23号・26号・28号・29号土坑遺構実測図 (SK23・26:S=1/60、SK28・29:S=1/40)

- 第62図 横隈狐塚遺跡9 23号・25号土坑出土土器実測図 (S=1/4)  
第63図 横隈狐塚遺跡9 22号・23号土坑出土石器実測図 (1～3 : S=2/3、4～9 : S=1/2)  
第64図 横隈狐塚遺跡9 26号・30号・32号・33号・35号土坑、ピット出土土器実測図 (S=1/4)  
第65図 横隈狐塚遺跡9 30号・32号・33号・34号土坑遺構実測図 (S=1/40)  
第66図 横隈狐塚遺跡9 35号土坑、1号溝遺構実測図 (S=1/40)  
第67図 横隈狐塚遺跡8 1号・5号・9号・17号・18号土坑平面図 (S=1/100)  
第68図 横隈狐塚遺跡7次調査区・8次調査区・9次調査区の弥生時代前期遺構分布  
第69図 弥生時代前期(板付Ⅱ式)における三国丘陵の遺構分布

## 付図

- 付図1 横隈狐塚遺跡8 調査区遺構配置図 (S=1/100)  
付図2 横隈狐塚遺跡9 調査区遺構配置図 (S=1/100)

## 表目次

- 表1 横隈狐塚遺跡のこれまでの調査実績一覧  
表2 横隈狐塚遺跡8次調査区・9次調査区 貯蔵穴一覧表  
横隈狐塚遺跡8出土遺物観察表  
横隈狐塚遺跡9出土遺物観察表

## 図版目次

### <横隈狐塚遺跡8>

- 図版1 ①横隈狐塚遺跡8 全景(真上から)  
②横隈狐塚遺跡8 調査区より花立山を臨む  
(北西側から)
- 図版2 ①横隈狐塚遺跡8 1号竪穴式住居跡完掘  
(南側から)  
②横隈狐塚遺跡8 2号竪穴式住居跡完掘  
(南側から)  
③横隈狐塚遺跡8 2号竪穴式住居跡  
東西土層断面(南側から)  
④横隈狐塚遺跡8 2号竪穴式住居跡  
南北土層断面(東側から)  
⑤横隈狐塚遺跡8 3号竪穴式住居跡完掘  
(南側から)  
⑥横隈狐塚遺跡8 3号竪穴式住居跡  
東西土層断面(南側から)  
⑦横隈狐塚遺跡8 3号竪穴式住居跡  
南北土層断面(西側から)  
⑧横隈狐塚遺跡8 1号土坑完掘(東側から)
- 図版3 ①横隈狐塚遺跡8 2号土坑完掘(南側から)  
②横隈狐塚遺跡8 2号土坑遺物出土状況(南側から)  
③横隈狐塚遺跡8 2号土坑土層断面(西側から)  
④横隈狐塚遺跡8 3号土坑完掘(南側から)  
⑤横隈狐塚遺跡8 3号土坑土層断面(西側から)  
⑥横隈狐塚遺跡8 4号土坑完掘(北側から)  
図版4 ①横隈狐塚遺跡8 5号土坑完掘(南側から)  
②横隈狐塚遺跡8 5号土坑土層断面(西側から)  
③横隈狐塚遺跡8 6号土坑完掘(南側から)  
④横隈狐塚遺跡8 7号土坑完掘(南側から)  
⑤横隈狐塚遺跡8 7号土坑土層断面(東側から)  
⑥横隈狐塚遺跡8 8号土坑完掘(南側から)
- 図版5 ①横隈狐塚遺跡8 8号土坑土層断面(東側から)  
②横隈狐塚遺跡8 9号土坑完掘(南側から)  
③横隈狐塚遺跡8 9号土坑土層断面(東側から)  
④横隈狐塚遺跡8 10号土坑完掘(南側から)  
⑤横隈狐塚遺跡8 11号土坑遺物出土状況  
(北東側から)  
⑥横隈狐塚遺跡8 11号土坑遺物出土状況 up  
(北側から)
- 図版6 ①横隈狐塚遺跡8 12号土坑完掘(南側から)  
②横隈狐塚遺跡8 12号土坑土層断面(東側から)

- ③横隈狐塚遺跡8 13号土坑完掘（南側から）
- ④横隈狐塚遺跡8 13号土坑土層断面（東側から）
- ⑤横隈狐塚遺跡8 15号土坑完掘（南側から）
- ⑥横隈狐塚遺跡8 15号土坑土層断面上層（南側から）
- ⑦横隈狐塚遺跡8 15号土坑土層断面下層（南側から）
- ⑧横隈狐塚遺跡8 16号土坑完掘（南側から）

- 図版7 ①横隈狐塚遺跡8 16号土坑土層断面（西側から）
- ②横隈狐塚遺跡8 17号土坑完掘（南側から）
  - ③横隈狐塚遺跡8 18号土坑完掘（東側から）
  - ④横隈狐塚遺跡8 18号土坑土層断面（西側から）
  - ⑤横隈狐塚遺跡8 19号土坑半掘（南側から）
  - ⑥横隈狐塚遺跡8 19号土坑土層断面（東側から）
  - ⑦横隈狐塚遺跡8 19号土坑遺物出土状況（北側から）
  - ⑧横隈狐塚遺跡8 20号土坑完掘（北側から）

- 図版8 ①横隈狐塚遺跡8 20号土坑土層断面（東側から）
- ②横隈狐塚遺跡8 21号土坑完掘（南側から）
  - ③横隈狐塚遺跡8 21号土坑土層断面（西側から）
  - ④横隈狐塚遺跡8 22号土坑土層断面（西側から）
  - ⑤横隈狐塚遺跡8 23号土坑完掘（南側から）
  - ⑥横隈狐塚遺跡8 23号土坑土層断面（東側から）
  - ⑦横隈狐塚遺跡8 24号土坑半掘（南側から）
  - ⑧横隈狐塚遺跡8 24号土坑土層断面（南側から）

<横隈狐塚遺跡9>

- 図版17 ①横隈狐塚遺跡9 東側全景（真上から）
- ②横隈狐塚遺跡9 西側全景（南側から）
  - ③横隈狐塚遺跡9 遠景（南西側から）

- 図版18 ①横隈狐塚遺跡9 1号竪穴式住居跡貼床（南側から）
- ②横隈狐塚遺跡9 1号竪穴式住居跡完掘（南側から）
  - ③横隈狐塚遺跡9 1号竪穴式住居跡東西土層断面（南側から）
  - ④横隈狐塚遺跡9 1号竪穴式住居跡南北土層断面（西側から）
  - ⑤横隈狐塚遺跡9 2号竪穴式住居跡完掘（南側から）
  - ⑥横隈狐塚遺跡9 4号竪穴式住居跡完掘（東側から）
  - ⑦横隈狐塚遺跡9 4号竪穴式住居跡土層断面（南側から）
  - ⑧横隈狐塚遺跡9 5号竪穴式住居跡西壁土層断面（東側から）

- 図版9 ①横隈狐塚遺跡8 25号土坑完掘（南側から）
- ②横隈狐塚遺跡8 25号土坑土層断面（西側から）
  - ③横隈狐塚遺跡8 25号土坑遺物出土状況（南側から）
  - ④横隈狐塚遺跡8 28号土坑半掘（西側から）
  - ⑤横隈狐塚遺跡8 28号土坑半掘（南側から）
  - ⑥横隈狐塚遺跡8 29号土坑完掘（南側から）

- 図版10 ①横隈狐塚遺跡8 28号土坑土層断面（西側から）
- ②横隈狐塚遺跡8 30号土坑完掘（南側から）
  - ③横隈狐塚遺跡8 31号土坑完掘（北側から）
  - ④横隈狐塚遺跡8 32号土坑完掘（北側から）
  - ⑤横隈狐塚遺跡8 34号土坑完掘（西側から）
  - ⑥横隈狐塚遺跡8 作業風景（東側から）

- 図版11 ①横隈狐塚遺跡8 33号土坑完掘（南側から）
- ②横隈狐塚遺跡8 作業風景（西側から）
  - ③横隈狐塚遺跡8 2号溝完掘（西側から）
  - ④横隈狐塚遺跡8 4号溝完掘（東側から）
  - ⑤横隈狐塚遺跡8 5号溝完掘（西側から）
  - ⑥横隈狐塚遺跡8 出土遺物①

- 図版12 横隈狐塚遺跡8 出土遺物②

- 図版13 横隈狐塚遺跡8 出土遺物③

- 図版14 横隈狐塚遺跡8 出土遺物④

- 図版15 横隈狐塚遺跡8 出土遺物⑤

- 図版16 横隈狐塚遺跡8 出土遺物⑥

- ⑨横隈狐塚遺跡9 5号竪穴式住居跡、35号土坑土層断面（南側から）

- 図版19 ①横隈狐塚遺跡9 5号竪穴式住居跡完掘（西側から）
- ②横隈狐塚遺跡9 7号竪穴式住居跡完掘（西側から）
  - ③横隈狐塚遺跡9 7号竪穴式住居跡完掘（北側から）
  - ④横隈狐塚遺跡9 1号土坑完掘（北側から）
  - ⑤横隈狐塚遺跡9 1号土坑土層断面（南側から）
  - ⑥横隈狐塚遺跡9 2号土坑完掘（北側から）
  - ⑦横隈狐塚遺跡9 3号土坑完掘（南側から）

- 図版20 ①横隈狐塚遺跡9 4号土坑完掘（南側から）
- ②横隈狐塚遺跡9 4号土坑土層断面（北側から）
  - ③横隈狐塚遺跡9 5号土坑完掘（西側から）
  - ④横隈狐塚遺跡9 5号土坑土層断面（南側から）
  - ⑤横隈狐塚遺跡9 6号土坑完掘（南側から）
  - ⑥横隈狐塚遺跡9 6号土坑土層断面（南側から）
  - ⑦横隈狐塚遺跡9 7号土坑完掘（西側から）
  - ⑧横隈狐塚遺跡9 7'号土坑完掘（東側から）

- 図版21 ①横隈狐塚遺跡9 7号土坑土層断面（西側から）  
②横隈狐塚遺跡9 8号土坑完掘（西側から）  
③横隈狐塚遺跡9 8号土坑土層断面（西側から）  
④横隈狐塚遺跡9 9号土坑完掘（西側から）  
⑤横隈狐塚遺跡9 9号土坑土層断面（西側から）  
⑥横隈狐塚遺跡9 10号土坑完掘（東側から）  
⑦横隈狐塚遺跡9 10号土坑土層断面（東側から）  
⑧横隈狐塚遺跡9 11号土坑完掘（北側から）

- 図版22 ①横隈狐塚遺跡9 11号土坑土層断面（南側から）  
②横隈狐塚遺跡9 12号土坑完掘（西側から）  
③横隈狐塚遺跡9 12号土坑土層断面（東側から）  
④横隈狐塚遺跡9 13号土坑完掘（南側から）  
⑤横隈狐塚遺跡9 13号土坑土層断面（南側から）  
⑥横隈狐塚遺跡9 14号土坑完掘（東側から）  
⑦横隈狐塚遺跡9 14号土坑土層断面（東側から）  
⑧横隈狐塚遺跡9 15号土坑完掘（南側から）

- 図版23 ①横隈狐塚遺跡9 16号土坑完掘（西側から）  
②横隈狐塚遺跡9 16号土坑土層断面（西側から）  
③横隈狐塚遺跡9 17号土坑完掘（西側から）  
④横隈狐塚遺跡9 17号土坑土層断面（東側から）  
⑤横隈狐塚遺跡9 18号土坑完掘（南側から）  
⑥横隈狐塚遺跡9 19号土坑完掘（南側から）

- 図版24 ①横隈狐塚遺跡9 19号土坑土層断面（南側から）  
②横隈狐塚遺跡9 20号土坑完掘（南側から）  
③横隈狐塚遺跡9 20号土坑土層断面（東側から）  
④横隈狐塚遺跡9 21号土坑完掘（南側から）  
⑤横隈狐塚遺跡9 22号土坑完掘（北側から）  
⑥横隈狐塚遺跡9 22号土坑土層断面（北側から）  
⑦横隈狐塚遺跡9 23号・26号土坑半掘  
（南側から）  
⑧横隈狐塚遺跡9 23号土坑土層断面（西側から）

- 図版25 ①横隈狐塚遺跡9 24号土坑完掘（東側から）  
②横隈狐塚遺跡9 24号土坑土層断面（東側から）  
③横隈狐塚遺跡9 25号土坑完掘（東側から）  
④横隈狐塚遺跡9 25号土坑土層断面（東側から）  
⑤横隈狐塚遺跡9 26号土坑土層断面（南側から）  
⑥横隈狐塚遺跡9 28号土坑半掘（東側から）  
⑦横隈狐塚遺跡9 28号土坑土層断面（東側から）  
⑧横隈狐塚遺跡9 30号土坑完掘（南側から）

- 図版26 ①横隈狐塚遺跡9 29号土坑完掘（南側から）  
②横隈狐塚遺跡9 33号土坑完掘（南側から）  
③横隈狐塚遺跡9 32号土坑完掘（東側から）  
④横隈狐塚遺跡9 32号土坑土層断面（東側から）  
⑤横隈狐塚遺跡9 35号土坑完掘（西側から）  
⑥横隈狐塚遺跡9 調査区西側の丘陵削平状況  
（北側から）

- 図版27 ①横隈狐塚遺跡9 1号溝完掘（南側から）  
②横隈狐塚遺跡9 1号溝土層断面（南側から）  
③横隈狐塚遺跡9 出土遺物①

図版28 横隈狐塚遺跡9 出土遺物②

図版29 横隈狐塚遺跡9 出土遺物③

図版30 横隈狐塚遺跡9 出土遺物④

図版31 横隈狐塚遺跡9 出土遺物⑤

図版32 横隈狐塚遺跡9 出土遺物⑥



# 第1章 調査の経過と組織

## 1. 調査の経緯

横隈狐塚遺跡 8・9 の発掘調査は、小郡市横隈字狐塚 375 - 19 の一部、三沢字東古賀 5017 - 7 の一部における宅地開発による土地の造成に伴い、地権者より平成 28 年 8 月 29 日付で小郡市教育委員会に対して埋蔵文化財の有無に関する照会（審査番号：16071 号）が提出されたことに始まる。市教委では、これを受けて平成 29 年 3 月 16 日に申請地の試掘調査を行った結果、地表下約 10cm の深さで遺構が確認されたことから、開発に先立って埋蔵文化財に関する協議が必要であると回答した。協議の結果、敷地のうち法面部分を除く全域を北側と南側の 2 地点（8 次調査区：366.56㎡、9 次調査区：1019.62㎡）に分けて契約を結び、発掘調査を実施することとなった。

## 2. 調査の経過

横隈狐塚遺跡 8・9 の発掘調査は、平成 29 年 5 月 15 日から同年 10 月 7 日にかけて実施した。調査期間中には、記録的な大雨を観測した日があったり、相次ぐ台風の襲来があったりと、なかなか作業が進まず苦労を要した。なお、調査の主な経過は以下のとおりである。

- 5 月 15 日 横隈狐塚遺跡 8 次調査区の表土剥ぎ開始。（～ 17 日）
  - 5 月 18 日 横隈狐塚遺跡 8 次調査区に発掘作業員を投入し、遺構検出・掘削開始。
  - 7 月 27 日 横隈狐塚遺跡 8 次調査区の全景写真撮影。
  - 8 月 3 日 横隈狐塚遺跡 8 次調査区の遺構実測終了。
  - 8 月 4 日 横隈狐塚遺跡 8 次調査区の廃土を 8 地点へ移動開始。
  - 8 月 7 日 横隈狐塚遺跡 9 次調査区東側の表土剥ぎ開始。（～ 9 日）
  - 8 月 17 日 横隈狐塚遺跡 9 次調査区東側に発掘作業員を投入し、遺構検出・掘削開始。
  - 9 月 21 日 横隈狐塚遺跡 9 次調査区東側の全景写真撮影。
  - 9 月 28 日 横隈狐塚遺跡 9 次調査区東側の遺構実測終了。
  - 9 月 29 日 横隈狐塚遺跡 9 次調査区西側の表土剥ぎ開始、終了後、発掘作業員を投入し、遺構検出・掘削開始。
  - 10 月 5 日 横隈狐塚遺跡 9 次調査区西側の全景写真撮影、及び、遺構実測終了。
  - 10 月 7 日 横隈狐塚遺跡 9 次調査区の一部埋戻し後、同日、現場引き渡し、調査完了。
- 以後、図面・遺物整理作業及び報告書作成実施。

## 3. 調査の体制

横隈狐塚遺跡 8・9 の調査の体制は、以下のとおりである。

[平成 29 年度]

小郡市教育委員会

教育長	清武 輝
教育部長	山下 博文
文化財課長	柏原 孝俊
係長	杉本 岳史
技師	西江 幸子（調査担当）

[平成 30 年度]

小郡市教育委員会

教育長	清武 輝
教育部長	黒岩 重彦
文化財課長	柏原 孝俊
係長	杉本 岳史
技師	西江 幸子（整理担当）

## 第2章 位置と環境

### 1. 地理的環境

小郡市は、福岡県と佐賀県の県境に位置し、福岡県内では中西部に所在する。東西約6km、南北約12kmの行政区域を有する。小郡市の北側は、福岡県北部に広がる福岡平野と南部に広がる筑紫平野を分断するかのよう東側から宝満山が、西側から脊振山系が張り出す地峡帯が形成されている。この地峡帯を形成する山地の1つである宝満山の山麓に水源がある宝満川が市内中央部を南北方向に流れ、久留米市内で筑後川へ合流する。

小郡市内の地形の特徴は、北側に広がる丘陵から南側に向かって緩やかに下る平坦な台地へと移行し、筑紫平野へと連なる点にある。北側に広がる丘陵は、北東部に独立丘陵である花立山（標高130.6m）、北西部に脊振山系から派生した通称三国丘陵と呼ばれる標高30～40mのなだらかな低丘陵によって構成されている。特に三国丘陵では、浅い谷が複雑に入り組むことで、南に下るにつれ八手状・舌状に丘陵が延びる複雑な地形を呈しており、古くは旧石器時代から数多くの人々の痕跡が発見されてきている。今回報告する横隈狐塚遺跡8・9もこうした台地上の独立丘陵において発見された。一方、谷筋からは古くから湧き水がわいており、この湧水が市内を流れる小河川の源となり、これら小河川は合流しながら宝満川へと注がれている。以上のような複雑な地形を呈した三国丘陵は、まさに人々の生活を支える自然の恵みそのものでもあり、現代に生きる私たちに当時の人々の生活を知る手がかりを数多く与えてくれている。

### 2. 歴史的環境

横隈狐塚遺跡は、これまでに7回調査が行われており、弥生時代前期の集落、弥生時代中期～後期にかけての墓域、古墳時代後期の古墳2基を含む6世紀から8世紀を中心とした集落を中心に発見されている。弥生時代前期の集落は、2次調査・7次調査において発見されており、松菊里型住居を含む集落に貯蔵穴が多数発見されている。弥生時代中期初頭から後期中頃の墓域は、2次調査（2：市報告27集）・5次調査（3：市報告70集）・7次調査（4：市報告250集）において発見されており、7次調査の方が時期がやや古く、2次調査・5次調査はほぼ同時期を示している。これらの墓域の特徴は、総数393基の甕棺墓群に人骨が残存する状況で発見されていることで、中には、7次調査の197号甕棺墓のように殺傷を受けた状態のまま埋葬されているものもあり、同時期の墓制を捉える上で非常に大きな成果をもたらしている。古墳時代後期以降になると終末期古墳2基が2次調査と7次調査で発見されている。同時期から8世紀にかけて、竪穴住居を含む集落域が1次調査（5：市報告17集）・3次調査（6：市報告29集）・4次調査（7：市報告46集）・5次調査・6次調査（8：市報告116集）・7次調査において発見されており、弥生時代の集落域に比べ平地でムラを形成していたことがうかがえる。この他にも出土数が未だ少ない蔵骨器が、3次調査において9世紀前半に比定できるものを1基発見できたことも、大きな成果と言えよう。

以下では、本遺跡周辺に分布する弥生時代から古墳時代にかけての三国丘陵に立地する遺跡を中心に歴史的環境の概要を記すこととする。

弥生時代の三国丘陵では、数多くの遺跡が発見されてきている。三国丘陵において、弥生時代に最初に築かれたムラは、三国丘陵の先端に位置する力武内畑遺跡（9：市報告190集）である。市内で最初に水田が造られたムラであり、すぐ近くを流れる谷からの水をせき止めて水田に流す井堰を築いていた。この遺跡のすぐ西隣には、力武内畑遺跡より若干時期が新しいムラとして三沢南崎遺跡（10：市報告220・241・242・243・316集）が発見されている。同時期の遺跡は、北側の丘陵一帯へと広がっていくことが山崎氏（山崎2007）に指摘されているので、参照願いたい。前期の代表的な遺跡としては、ムラの性格を持つ三国小学校遺跡（11：市報告10・36集）、朝鮮系無文土器が多数出土する横隈北田遺跡（12：市報告48集）、横隈鍋倉遺跡（13：市報告

26・34集)、環濠を伴う三沢北中尾遺跡(14:市報告169・182・204・209・211・212・216・217・232・233集)や横隈山遺跡(15:『小郡市史』第4巻)、墓域の性格を持つ横隈上内畑遺跡(16:市報告89・143・152・155・162・172・269・323集)、横隈狐塚遺跡などが、浅い谷を隔てながら丘陵上に築かれている。中期になると、前期と比較し遺跡の数は減少するが、中期初頭までは前期からの流れで数多くの遺跡が存在する。代表的な遺跡としては、集落では、柵列に囲まれ楼閣とも想定できる大型建物を持つ一ノ口遺跡(17:市報告86集)、複数の小丘陵をまとめる

表1 横隈狐塚遺跡のこれまでの調査実績一覧(「横隈狐塚遺跡7」掲載表1に追記)

調査次	調査期間	面積	内容	成果
第1次調査	S57.5.24 ～6.16	443 m <sup>2</sup>	住居跡2軒(7世紀中葉)、竪穴状遺構(7世紀後半～8世紀前半)、木棺墓1基(5世紀)、鉄製鋤先1点、滑石製子持勾玉1点、滑石製白玉361点	「横隈狐塚遺跡」小郡市文化財調査報告書第17集 1983
第2次調査	S59.4.9 ～12.28	5,316 m <sup>2</sup>	甕棺墓176基、土壙墓187基、石棺墓12基(甕棺2基以外は中期後半～後期中頃)、古墳1基(円墳、6世紀後半築造)、周溝墓10基(2基の周溝中より6世紀後半の須恵器出土)、住居跡1軒(円形、前期後半)、埋葬施設を持った集積遺構1基	「横隈狐塚遺跡Ⅱ」小郡市文化財調査報告書第27集 1985
第3次調査	S60.7.1 ～7.29	389.5 m <sup>2</sup>	住居跡4軒(6世紀末～7世紀前半、7世紀後半)、竪穴状遺構5基(7世紀中頃～後半)、火葬墓蔵骨器1基(9世紀前半)、鏡片	「横隈狐塚遺跡Ⅲ」小郡市文化財調査報告書第29集 1986
第4次調査	S62.11.13 ～12.26	506 m <sup>2</sup>	住居跡3軒(うち1軒は7世紀後半、2軒は時期不明)	「横隈狐塚遺跡Ⅳ」小郡市文化財調査報告書第46集 1988
第5次調査	H元4.24 ～6.8	1,950 m <sup>2</sup>	甕棺墓2基、土壙墓2基、木棺墓2基(いずれも弥生後期初頭)、竪穴住居跡4軒(6世紀～8世紀)	「横隈狐塚遺跡Ⅴ」小郡市文化財調査報告書第70集 1991
第6次調査	H7.7.26 ～8.12	200 m <sup>2</sup>	溝1条(6世紀～8世紀)、カマド状遺構1基(時期不明)	「市道・都市計画街路関係埋蔵文化財調査報告書—1—埋蔵文化財調査報告書2」小郡市文化財調査報告書第116集 1997
第7次調査	H18.11.6 ～H19.10.2	7,299 m <sup>2</sup>	竪穴住居8軒、貯蔵穴58基、土坑31基、道路状遺構1条(いずれも弥生時代前期)、甕棺墓215基、木棺墓16基、土壙墓24基、祭祀土坑5基、溝3条(いずれも弥生時代中期)、古墳1基(古墳時代後期)、竪穴住居9軒、竪穴状遺構2基、土坑3基(いずれも飛鳥・奈良時代)	「横隈狐塚遺跡7」小郡市文化財調査報告書250集 2010

形で1つのムラを形成していた県指定史跡三沢遺跡（18：県概 1971、市報告 266・284 集）、三沢蓬ヶ浦遺跡（19：県報告 66 集、市報告 151・194 集）があり、ムラからクニへの過渡期にあると考えられている。墓域では、横隈狐塚遺跡で甕棺墓群が密集した状態で検出され、三沢ハサコの宮遺跡（20：市報告 161・173 集）では鹿が描かれた甕棺が出土している。後期になると、前期ほどの集落規模ではないが、三国丘陵において広く集落が築かれている。代表的な遺跡としては、ムラの性格を持つ三沢南崎遺跡、墓域の性格を持つ横隈上内畑遺跡が挙がる。

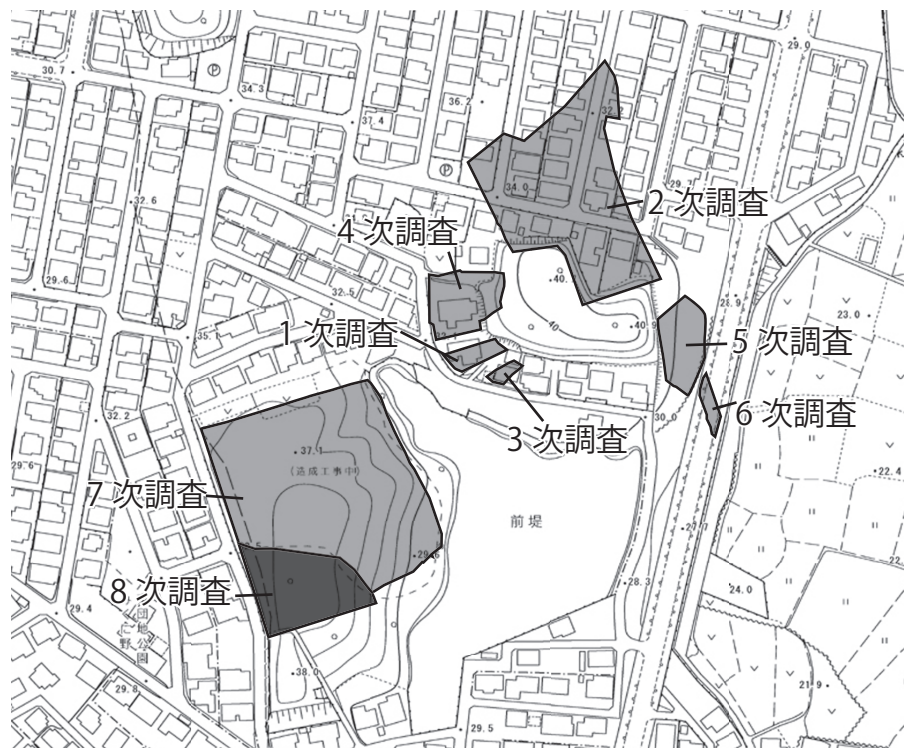
古墳時代になると、三国丘陵では前期・後期を中心に古墳が築造されている。前期には、筑後地域唯一の首長墓系列である「津古古墳群」が築造され、「津古2号墳（21：市報告 84 集）→津古生掛古墳（22：市報告 44 集）→津古1号墳（23：市報告 326 集）→三国の鼻1号墳（24：市報告 25 集）」の順に築かれた。これらの各古墳からは、畿内の影響を色濃く受けた出土遺物が出土していることから、古墳時代初頭の早い時期から畿内の文化を受け入れていたと考えられている。一方で、古墳以外の墓制として、弥生時代以来の墓制（石棺墓群、甕棺墓群等）を受け継いでおり、横隈井の浦遺跡（甕棺墓群）（25：市報告 66 集）、横隈山遺跡第七地点（方形周溝墓）、三沢畝道町遺跡（方形周溝墓）（26：市報告 72 集）、横隈上内畑遺跡（方形周溝墓）で発見されている。畿内系の出土遺物があることから、他地域からの文化流入に関して寛容であり、これらに埋葬された人々は、津古古墳群に埋葬された首長を助けた地域の有力な人とも考えられている。後期には、三国丘陵の広い範囲で古墳 75 基、横穴墓 38 基が築造され、「三沢古墳群」（27：市報告 62・79 集）と総称されている。これらの古墳群は、5 世紀後半頃に築造が開始され、6 世紀末から 7 世紀前半に築造の最盛期を迎え、その後、石室の縮小化や副葬品の貧弱化がすすみ、8 世紀前半に終焉を迎える。一方、ムラの性格を持つ遺跡は、弥生時代と比較すると少ないものの、中期に須恵器の窯跡が発見された苅又遺跡群（28：市報告 80・83・88・94 集）、三国の鼻遺跡や津古生掛遺跡などにおいて数軒住居跡が確認されている。6 世紀後半段階になると、三国丘陵を中心に津古土取遺跡（29：市報告 59 集）、横隈北田遺跡、横隈鍋倉遺跡、横隈狐塚遺跡、津古中剪遺跡（30：市報告 33 集）、横隈井の浦遺跡等で集落が営まれている。

以上より、弥生時代・古墳時代の三国丘陵は、まさに歴史の宝庫であり、一つ一つの事象から歴史的な位置づけを行なうことがより一層求められているといえよう

### 3. 対象地の地形

本遺跡が立地する三国丘陵は、丘陵部に対して谷部が複雑に入り組むことによって、八手状や舌状に丘陵が入り組む点が特徴である。本遺跡は、八手状に入り組んだ谷部によって形成された開発以前の地形において標高 44.9m を測る小高い丘陵地に位置し、7 次調査区と同じ丘陵に所在する。この丘陵の東側は前堤に向かって急激に傾斜し、宝満川へと続く平野に至る。一方、南側は東側よりも緩やかに傾斜し、低地へと向かっている。北側は団地造成の影響を受けているが、現況の標高分布から推察するに、7 次調査区北端付近で東西方向に谷部が入るものの北側には別の小高い丘陵が存在したものと考えられる。西側は、本遺跡の 9 次調査区西端の地点で既に道路使用のために削られていることから、状況は不明である。

次に、本遺跡の標高と遺構の配置についてである。遺構面を検出した標高は、32.2m～38.8m であり、9 次調査区側が丘陵頂部に近い地点に、8 次調査区側が斜面部に位置している。特に、8 次調査区内の東側では、等高線が密なことからもわかるとおり、やや急な斜面を呈していた。そのため、調査期間中の梅雨の影響による豪雨後に現場内を歩いていると、調査区南端を中心に、遺構を検出した地山直上において、剥片を中心とした石器を発見することが多々あった。恐らく、年月を経て丘陵が削られる中で遺物が地山の土とともに流れ、堆積した可能性が考えられよう。



第1図 横隈狐塚遺跡8・9 調査位置図 (S=1/2,500)



- 1：横隈狐塚遺跡8・9
- 2：横隈狐塚遺跡2
- 3：横隈狐塚遺跡5
- 4：横隈狐塚遺跡7
- 5：横隈狐塚遺跡1
- 6：横隈狐塚遺跡3
- 7：横隈狐塚遺跡4
- 8：横隈狐塚遺跡6
- 9：力武内畑遺跡
- 10：三沢南崎遺跡
- 11：三国小学校遺跡
- 12：横隈北田遺跡
- 13：横隈鍋倉遺跡
- 14：三沢北中尾遺跡
- 15：横隈山遺跡
- 16：横隈上内畑遺跡
- 17：一ノ口遺跡
- 18：三沢遺跡
- 19：三沢蓬ヶ浦遺跡
- 20：三沢ハサコの宮遺跡
- 21：津古2号墳
- 22：津古生掛古墳
- 23：津古1号墳
- 24：三国の鼻1号墳
- 25：横隈井の浦遺跡
- 26：三沢畝道町遺跡
- 27：三沢古墳群
- 28：荻又遺跡群
- 29：津古土取遺跡
- 30：津古中剪遺跡

第2図 横隈狐塚遺跡8・9周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

### 第3章 横隈狐塚遺跡8 遺跡の概要

横隈狐塚遺跡8は、三国丘陵の頂部から南側へと下る標高32.2m～38.0mの斜面上に位置する。調査区は、東西約33m×南北約17mの台形状の範囲である。本調査前に実施した試掘調査の結果、遺構検出面は現地表面から約30cm下る高さで確認された。調査に入る前の現状は山林であり、隣接する住宅地よりも高い大小数多くの木々が見られた。そのため造成に伴い伐採する木々について根まで伐根すると遺構面に影響を及ぼす可能性が非常に高かったことから、調査区内に関しては、現況地表面より高い高さでの木々の伐採をお願いし、伐根については、調査中に重機及び人力で必要と判断した箇所のみ行うこととした。

層位は、地表面より、灰褐色土、さらに黒褐色土や暗茶褐色土が堆積した後、その下より遺構検出面であるにぶい黄橙色土や橙色土や明黄橙色砂の地山を検出した。なお、明黄橙色砂の地山は、貯蔵穴など1.5m以上の深さのある遺構の床面でも検出していることから、本来はにぶい黄橙色土や橙色土の層位の下位に堆積している層と考えられよう。

遺構は、竪穴式住居跡3基、土坑32基（貯蔵穴9基含む）、溝5条、その他ピットを検出した。標高35.0m～35.6mの斜面上には、段状遺構としての隅丸方形の土坑が連続して検出されており、この中の18号土坑より石鎌が出土していることは特筆に値する。

遺物は、弥生土器を中心に石器も多数出土している。弥生土器は全体的に摩滅が激しいため調整が不明なものが多く、また、遺構数に比べて出土量が少ない。一方で、弥生土器の出土量と比較すると石器の出土量が比率的に多い。特に、石器とは断定するまでには至らない石核や剥片、投弾に類する可能性が非常に高い河原石が多数出土している。紙面の関係上、これらの報告については本報告書では掲載を割愛しているが、中には石器の未製品になり得る可能性を秘めていたものも散見されていたことを記す。

横隈狐塚遺跡8で検出した遺構・遺物は以下のとおりである。

●遺構

- ・竪穴式住居跡3基
- ・土坑32基（貯蔵穴9基含む）
- ・溝5条
- ・ピット

●遺物

- ・弥生土器
- ・石器
- ・土製品

### 第4章 横隈狐塚遺跡8 遺構と遺物

#### 1. 竪穴式住居跡【SC】

##### 1号竪穴式住居跡（第4図、図版2）

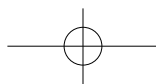
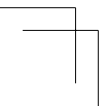
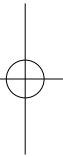
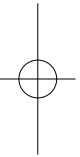
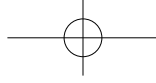
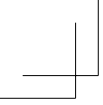
調査区北東側中央部に位置し、2号竪穴式住居跡・21号土坑・28号土坑・5号溝を切る。平面形は、現状5.25×3.00mの隅丸長方形を呈し、深さは斜面傾斜に沿って最大10cmであった。しかし、9次調査区の1号竪穴式住居跡を掘削している際、調査区内は場所によって地山に非常に近い質の土が遺構の底面直上に5cm以上の厚さで堆積していた例があったことを考慮に入れると、本来、斜面上側の北側の遺構底面は検出面より深い可能性が想定されよう。床面において支柱穴等を確認することはできなかった。

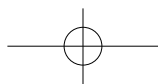
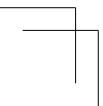
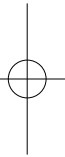
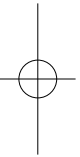
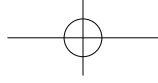
埋土からは、弥生土器の甕をはじめ、石器として打製石鎌、砥石、投弾といった石製品や剥片、土製紡錘車が出土している。

##### 出土遺物（第5・6図、図版13・14・15・16）

第5図1～4は弥生土器、第6図1～5は石器・土製品である。

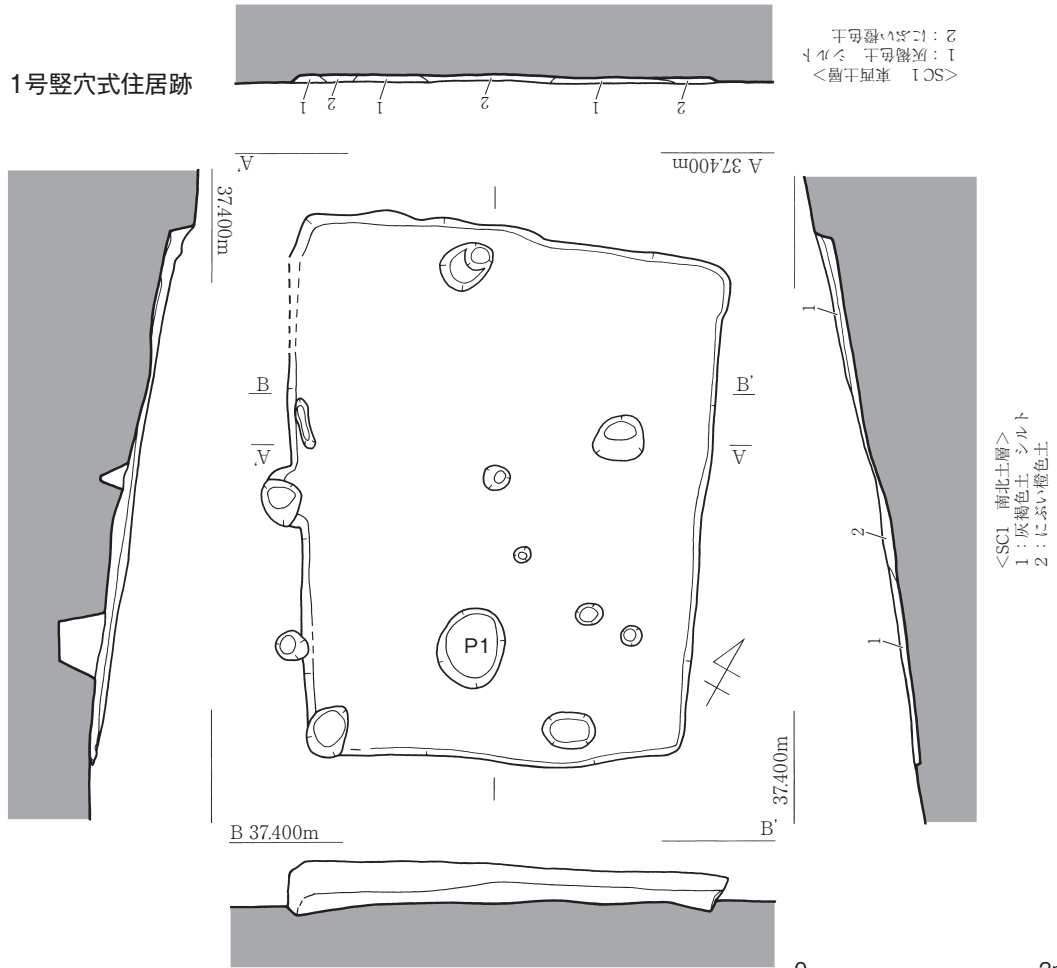
第5図1～4は全て弥生土器の甕である。1・2は口縁部から胴部にかけて残存する小片である。口縁部の形状はともに如意口縁を呈しているが、1のみ口縁端部に刻目が施されている。1は外面全面にススが付着し、2は内面胴部上にコゲが有る。3・4は胴部から底部にかけて残存する



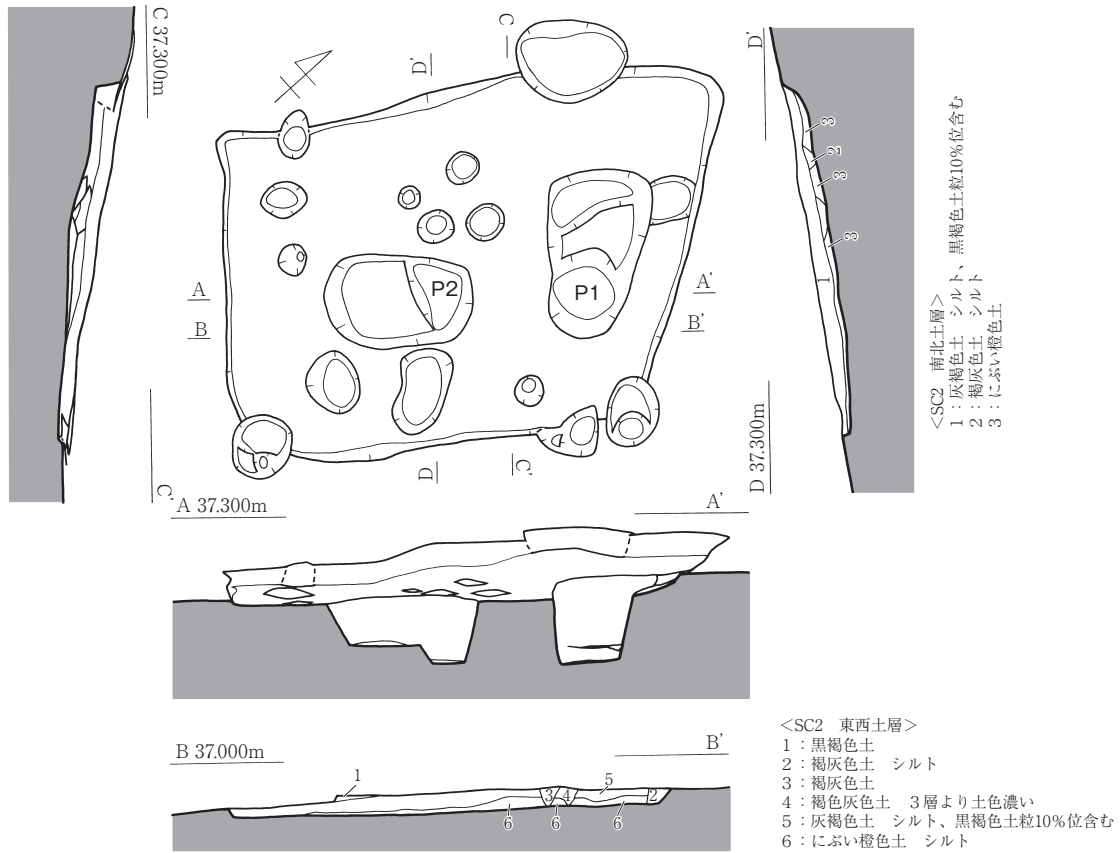




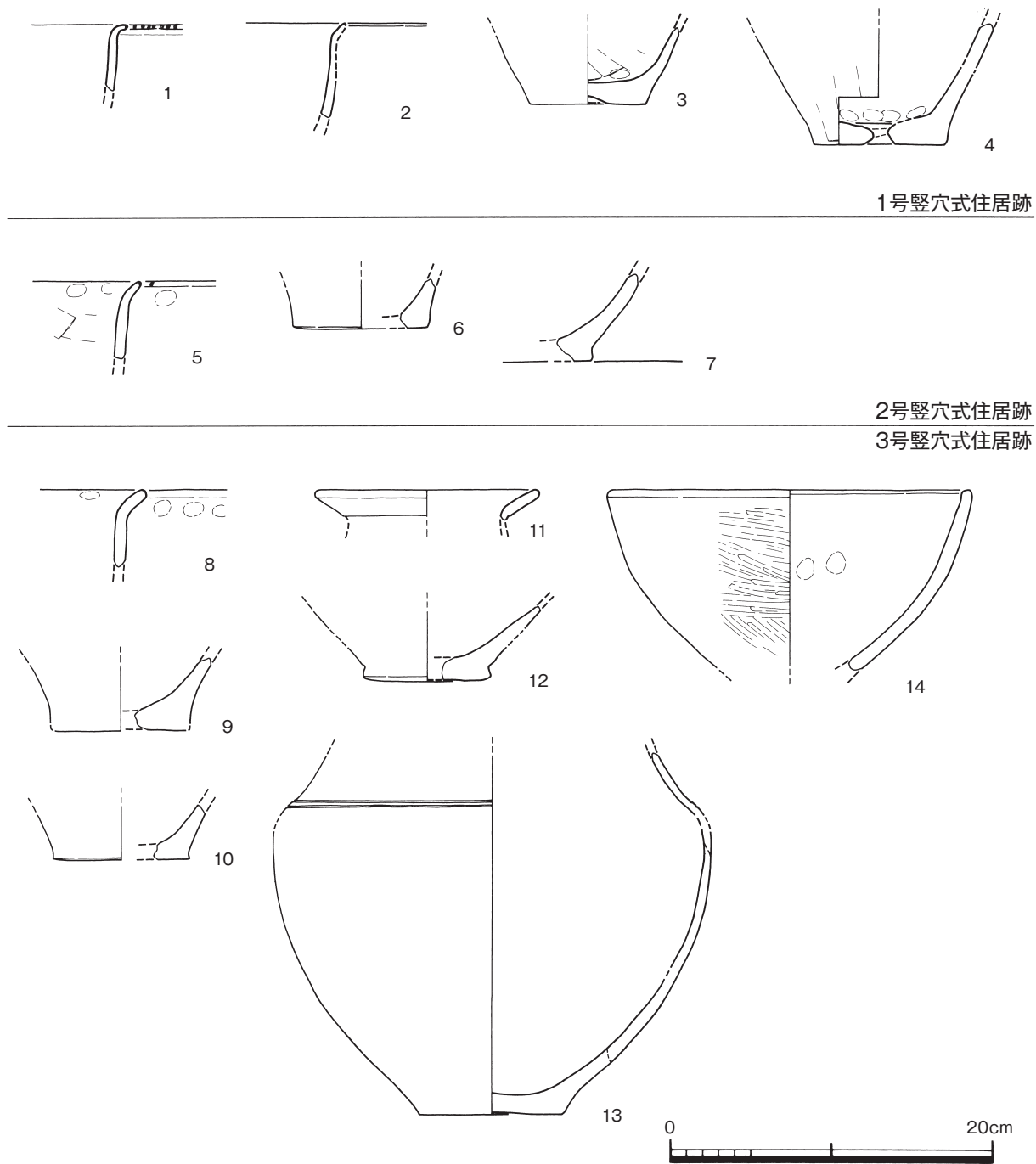
1号竖穴式住居跡



2号竖穴式住居跡



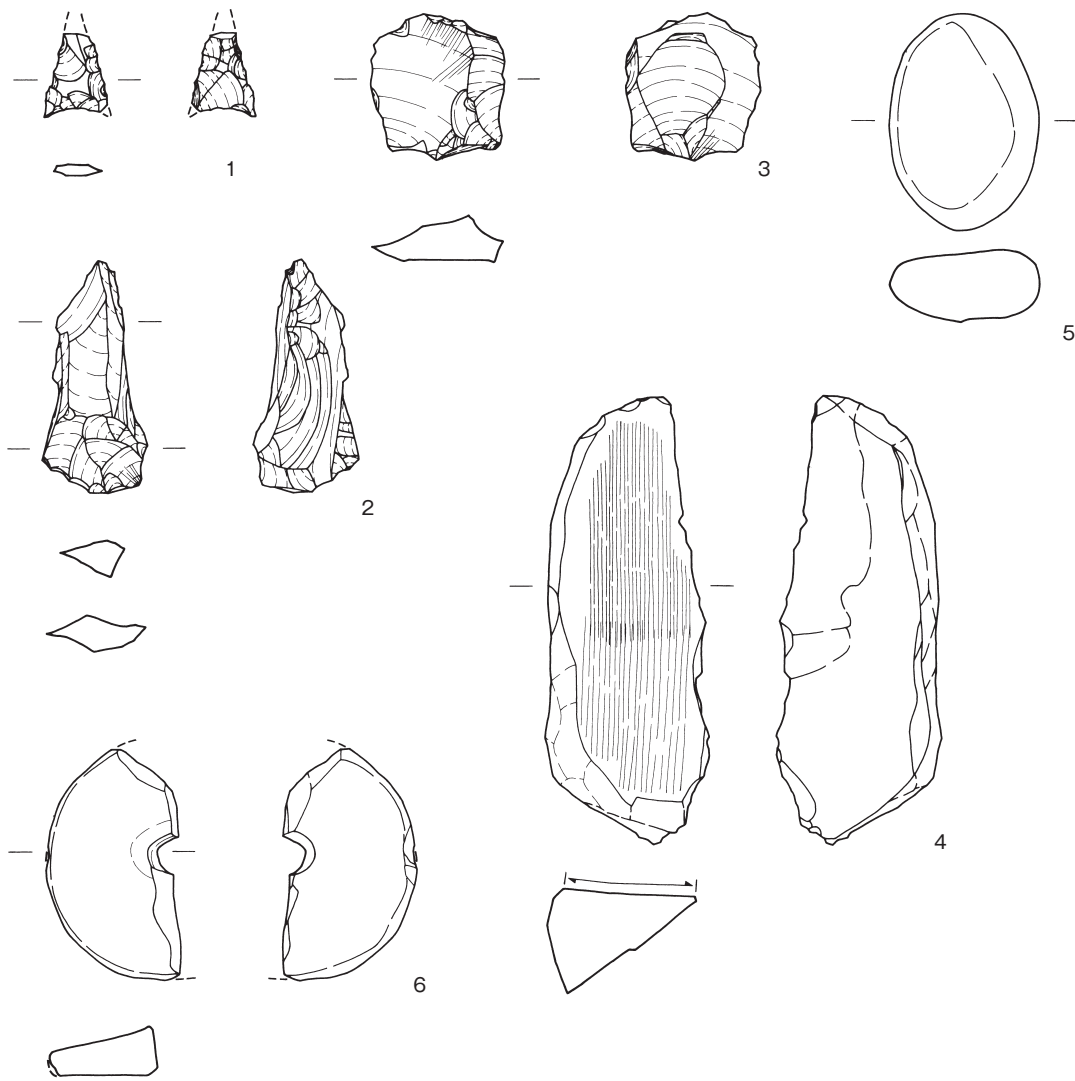
第4図 横隈狐塚遺跡8 1号・2号竖穴式住居跡遺構実測図 (S=1/60)



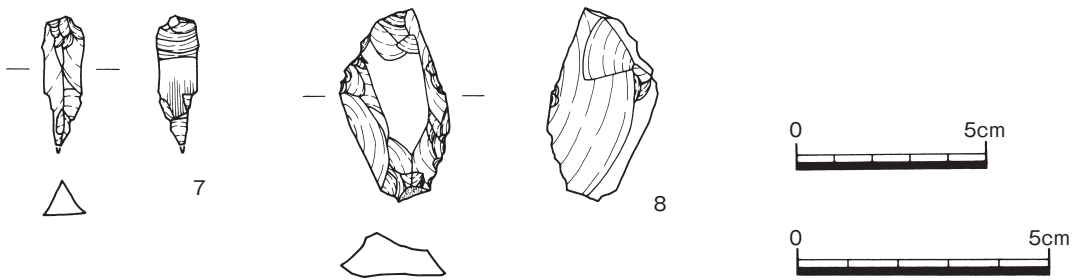
第5図 横隈狐塚遺跡8 1号・2号・3号竖穴式住居跡出土土器実測図 (S=1/4)

土器片である。3は外面のみ底面中央部の厚さが押し上げにより薄くなっており、4は底部中央に焼成後に穿孔を施した痕跡が残るが、どちらも大枠では平底に分類できよう。3は内面胴部にススが付着し、4は内面胴部にコゲが付着している。

第6図1は打製石鏃であり、頂部が欠損している。石材は安山岩である。2・3は石核であるが、小さな剥離面が石材の側面の先端を中心に数か所確認されたことから、打製石鏃の未製品の可能性も想定されよう。なお、2の石材は安山岩、3の石材は黒曜石である。4は砥石であり、砥面を1面確認している。確認した砥面は中央部に向かって凹んでいることから、砥石として使用している中で、中央がより削られていったと考えられよう。5は石製の投弾である。6は土製の紡錘車である。表面は摩滅が激しいことから調整方法は不明である。



1号竪穴式住居跡  
2号竪穴式住居跡



第6図 横隈狐塚遺跡8 1号・2号竪穴式住居跡出土石器実測図  
(1・2・3・7：S=2/3、4・5・6・8：S=1/2)

出土遺物はいずれも小片であるが、如意口縁を呈する口縁部からやや直線気味に胴部へと伸びる形態的特徴を有する甕が出土している点を考慮するならば、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられよう。ただし、出土数が少なく小片の為、時期についての細分化は難しい状況である。

## 2号竪穴式住居跡（第4図、図版2）

調査区北東側中央部に位置し、1号竪穴式住居跡に切られ、19号土坑・5号溝を切る。平面形は、現状3.75×2.85mの隅丸長方形を呈し、深さは斜面傾斜に沿って最大10cmであった。しかし、8次調査区の1号竪穴式住居跡と同様に、本来、斜面上側の北側の遺構底面は検出面より深い可能性が想定される。床面は、大小さまざまなピットがあったが、支柱穴等を確定させることはできなかった。

埋土からは、弥生土器の甕をはじめ、石核や剥片が多数出土し、投弾も出土している。

### 出土遺物（第5・6図、図版14）

第5図5～7は弥生土器、第6図7・8は石器である。

第5図5・6は甕、7は壺である。5は口縁部から胴部にかけて残存する小片である。口縁部の形状は如意口縁を呈し、口縁端部に刻目が施され、外面全体にススが付着している。6は底部片であり、平底を呈すると考えられる。7は胴部から底部にかけて残存する小片であり、平底を呈すると考えられる。内面全面に黒斑が有る。

第6図7は先端が尖っていることから石錐の可能性が想定される。8は石核であるが、小さな剥離面が石材の側面の先端を中心に数か所確認したこと、打製石鏃の未製品の可能性も想定されよう。なお、7の石材は安山岩、8の石材は黒曜石である。

出土遺物はいずれも小片であるが、如意口縁を呈する口縁部からやや直線気味に胴部へと伸びる形態的特徴を有する甕が出土している点を考慮するならば、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられよう。ただし、出土数が少なく小片の為、時期についての細分化は難しい状況である。

## 3号竪穴式住居跡（第7図、図版2）

調査区西側北よりに位置し、北側が9次調査区（9次調査区2号竪穴式住居跡として報告）へと延び、23号・25号土坑を切る。平面形は、現状直径6.03mの楕円形を呈し、深さは最大で45cmである。床面直上の埋土は、地山に非常に類似した橙色土が広がっており、遺構埋土と床面検出面の質の差が判然としなかった。まずは、地山に非常に類似した橙色土内の所々で出土している遺物が出土しなくなる面まで掘削を行った。その後、最終確認として8次調査区埋め戻しの際に、床面と捉えている面よりさらに下側に向かって重機でトレンチ風に約45cmの深さで掘削を行った。結果、床面と捉えた橙色粘質土の下に貯蔵穴の底面で検出した地山に類似した明橙色砂層を検出し、さらにその下に暗明橙色砂層を検出した。このことから、当初に地山面と捉えたにぶい橙色土が3号竪穴式住居跡の床面であると言えよう。床面には、大小さまざまなピットがあったが、支柱穴と捉えられるほど深いピットはなかったことから、支柱穴等を確定させることはできなかった。

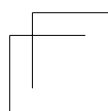
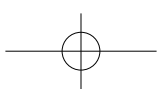
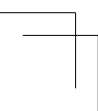
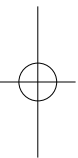
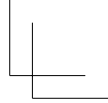
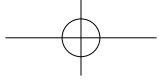
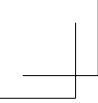
埋土からは、弥生土器の甕・壺・鉢をはじめ、石器として打製石鏃、スクレイパー、投弾、石製紡錘車、ひきりうす状石器、その他多数の石核や剥片が出土した。

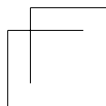
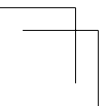
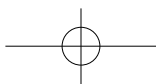
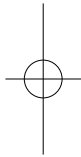
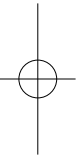
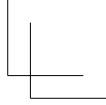
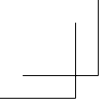
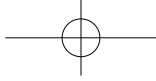
### 出土遺物（第5・8図、図版11・13・14・15・16）

第5図8～14は弥生土器、第8図7・8は石器である。

第5図8～10は甕、11～13は壺、14は鉢である。8は口縁部から胴部にかけて残存する小片である。口縁部の形状は如意口縁を呈する。9・10は胴部から底部にかけて残存する底部片であり、ともに平底を呈する。9のみ外面底部に黒斑が見られる。11は口縁部から頸部にかけての小片であり、口縁部は短く外傾し、内面前面に黒斑が見られる。12・13は胴部から底部にかけての土器片である。12は器壁の厚い平底から胴部へと外湾していく。13は平底から胴部へと外湾しながら胴部最大径まで伸びたのち、沈線が2条施され、内傾しながら頸部へと延びている。14は口縁部から底部近くまで残存する。口縁端部は素口縁であり、底部に向かって外湾しながらすぼまっている。

第8図1・2は打製石鏃であるが、2は頂部端部ともに欠損している。石材はともに安山岩である。3は小さな剥離面が石材の側面の先端を中心に数か所確認できたことから、打製石鏃の





未製品の可能性が想定される。石材は安山岩である。4は石核であるが、石材の側面が所々刃状になっているところもあることから、スクレイパーの可能性も想定できるが判然としない。石材は安山岩である。5は石製紡錘車であるが、紡錘車の外縁部にも穿孔と考えられる穴があげられていることから、2次利用の可能性が想定される。6は投弾である。7はひきりうす状石器で、形状は上部がややすぼまる三角柱状を呈し、上部に穿孔があげられている。胴部下側面には、小さなでこぼこした凹みがいくつか見受けられる。また、表面のうち1面のほとんどは剥離している。類例は、曲り田遺跡（福岡県 1984『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第9集』）で出土しているので、ご参照願いたい。

出土遺物は第5図13の壺と14の鉢を除くといずれも小片であるが、如意口縁を呈する口縁部からやや直線気味に胴部へと伸びる形態的特徴を有する甕が出土していること、また、胴部最大径から頸部に向かってやや屈曲気味に伸びる境に沈線を施す壺が出土していることを考慮するならば、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられよう。ただし、出土数が少なく小片の為、時期についての細分化は難しい状況である。



第8図 横隈狐塚遺跡8 3号竖穴式住居跡出土石器実測図  
(1・2・3：S=2/3、4・5・6・7：S=1/2)

## 2. 土坑【SK】

### 1号土坑（第9図、図版2・3）

調査区東側中央部に位置し、15号土坑・2号溝を切る。平面形は、現状210×156cmの隅丸三角形を呈し、深さは最大約66cmを測る。南側へとなだらかに下る斜面上に掘られた土坑であるが、底面がフラットであることから段状遺構としての性格も想定されよう。

埋土からは、弥生土器をはじめ、砥石や石核が出土した。砥石は小片のため実測には至っていない。

#### 出土遺物（第10図）

第10図1・2は弥生土器である。1は甕であり、口縁部から胴部にかけての小片である。口縁部の形状は、如意口縁の屈曲角度がきつく、T字状に近い形状をしており、口縁端部には刻目が施され、ススが付着している。2は壺であり、口縁部から頸部にかけての小片である。口縁部は外側に緩く広がる。

### 2号土坑（第9図、図版3）

調査区東側南よりに位置し、4号土坑を切る。また、本遺構の北側の一部は、遺構検出時に大きな切り株が残存していた。この切り株の根が遺構内を無数に張り巡っていたことから、遺構掘削時には大変な労力を要した。平面形は、現状236×145cmの隅丸長方形を呈し、深さは最大約123cmを測る。南側へとなだらかに下る斜面上に掘られた土坑であるが、底面がフラットであることから段状遺構としての性格も想定されよう。埋土の堆積状況は基本水平堆積を呈するが、10層より上位では意図的な掘り直しの痕跡が見受けられる。立地的にも斜面に位置することから、流れてきた土砂を数回掘り出して使用した可能性が想定される。

遺物は、弥生土器の甕と壺を中心に比較的多く出土しており、中には底面よりまとまって出土したものもあった。石器も、スクレイパー、柱状片刃石斧、太型蛤刃石斧、投弾をはじめ石核や剥片も多数出土しているが、小片のものが多く、実測に至ったものは少ない。

#### 出土遺物（第10・11図、図版11・14・15・16）

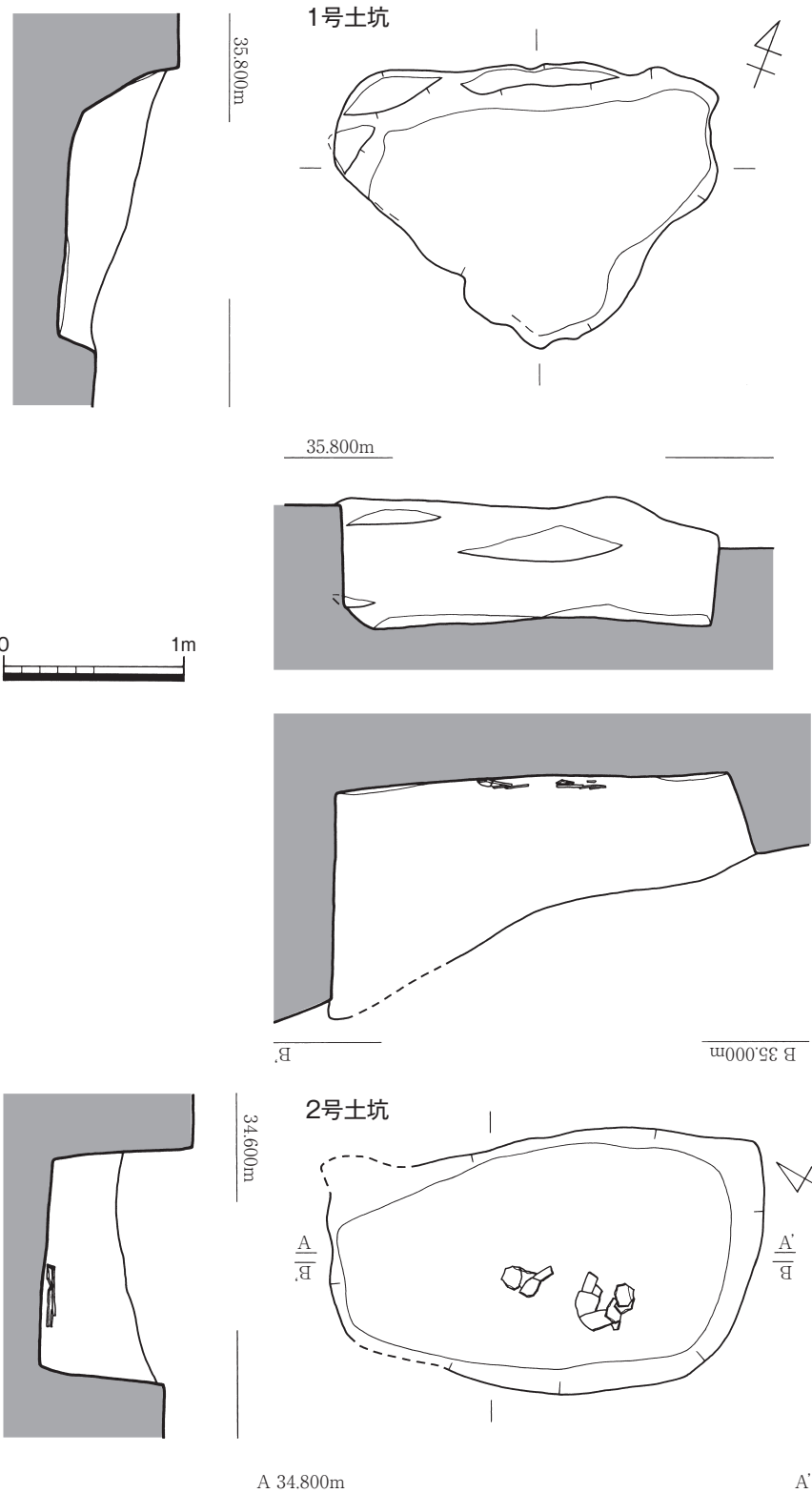
第10図3～16は弥生土器、第11図1～10は石器である。

第10図3～10は甕、11～15は壺、16は蓋である。3～5は口縁部から胴部にかけて残存する小片である。口縁部の形状は、如意口縁を呈するが、3・5は直線気味に胴部が延びるのに対し、4は外傾気味にすぼまる。6～10は胴部から底部にかけて残存する底部片であり、8のみ上げ底であり、その他は全て平底である。11は口縁部から頸部にかけての小片であり、口縁端部は肉厚である。12～15は胴部から底部にかけての底部片である。12・13・15はやや上げ底気味で、14・10はややレンズ底気味であるが、差異は小さいことから基本平底と考えられよう。12のみ外面に赤色顔料が見られる点が特筆に値する。16は体部から裾部にかけて残存している。

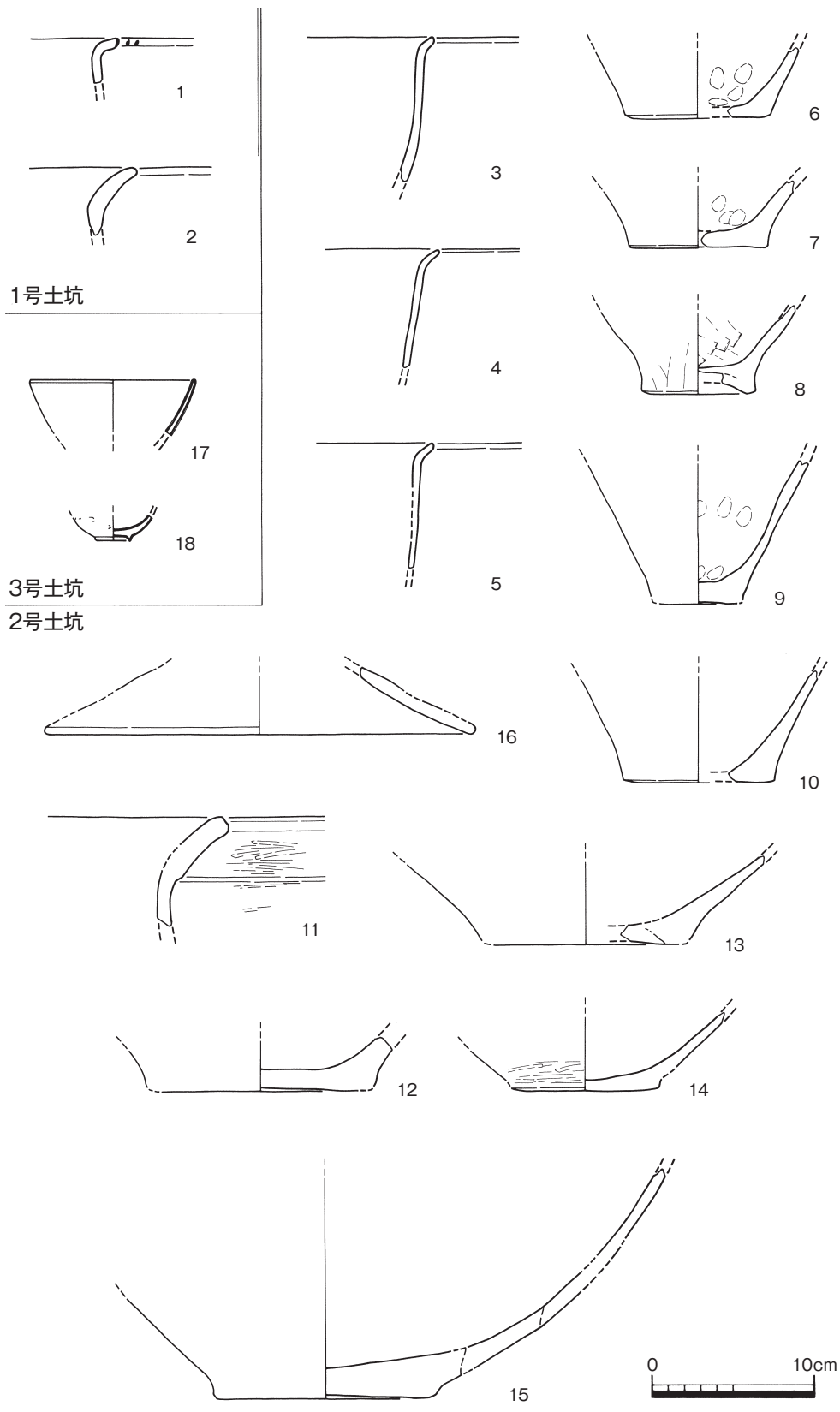
第11図1はスクレイパーであり、石材は安山岩である。2は柱状片刃石斧である。両側面が剥離しているが、刃の部分は残存している。3は石杵であり、敲打痕が見られる。4は小片ではあるが、石の材質や色調より石斧の握り部の小片と考えられる。5～10は投弾である。9のみ表面にコゲが付着していることから、投弾以外の二次利用も考えられよう。

出土遺物はいずれも小片であるが、如意口縁を呈する口縁部からやや直線気味に胴部へと伸びる形態的特徴を有する甕が出土していること、また、肉厚の口縁部から内湾気味に頸部へと伸びる壺が出土していることを考慮するならば、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられよう。ただし、出土数が少なく小片の為、時期についての細分化は難しい状況である。

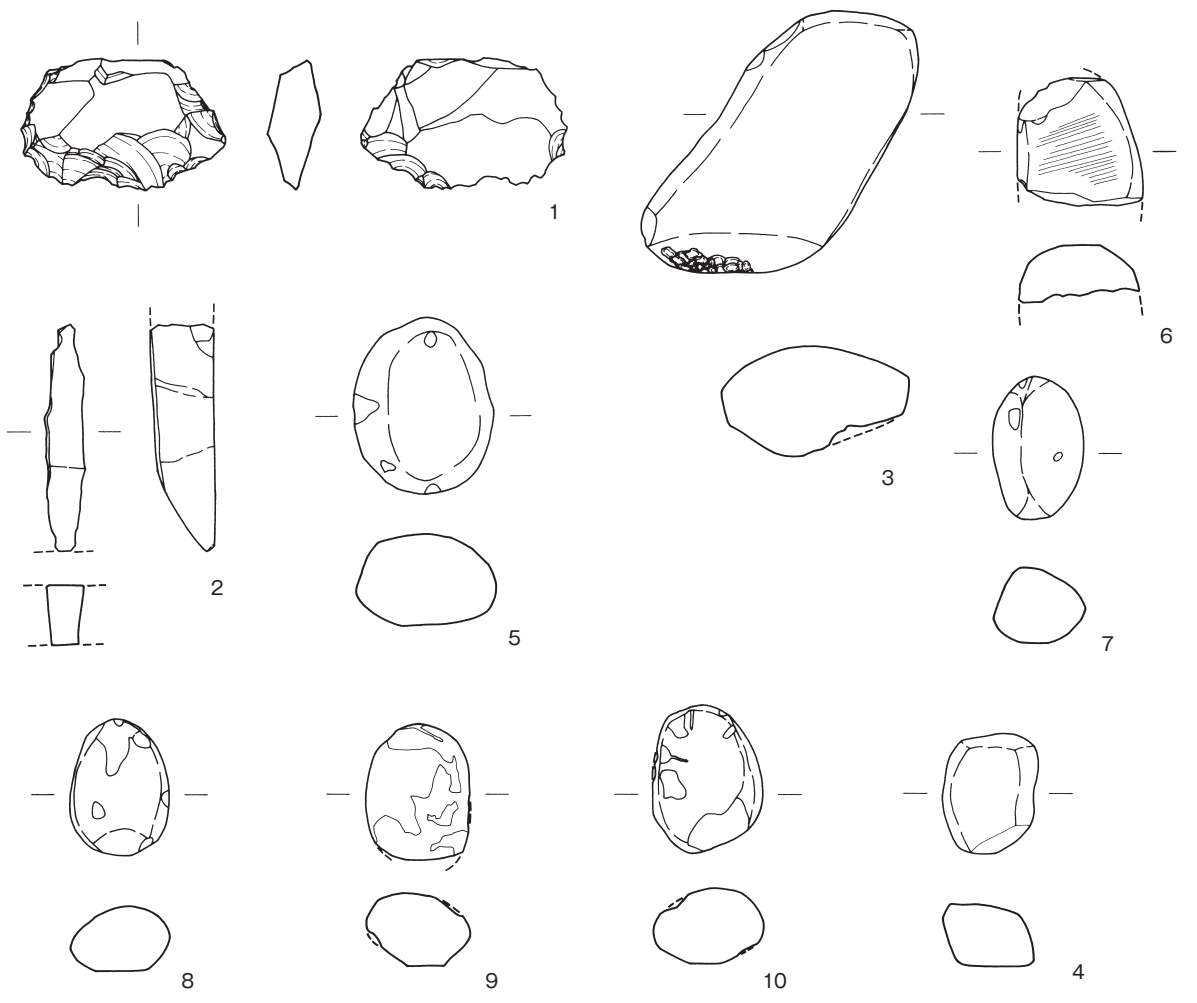




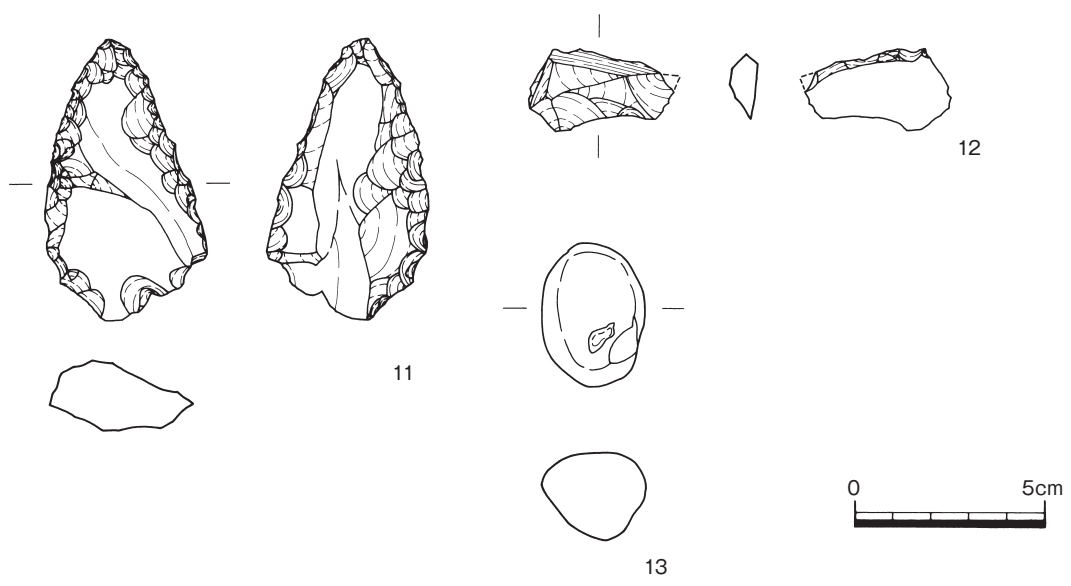
第9図 横隈狐塚遺跡8 1号・2号土坑遺構実測図 (S=1/40)



第10图 横隈狐塚遺跡8 1号・2号・3号土坑出土土器実測図 (S=1/4)



1号土坑  
4号土坑



第 11 图 横隈狐塚遺跡 8 2号・4号土坑出土石器実測図 (S=1/2)

### 3号土坑（第12図、図版3）

調査区東側南よりに位置し、本調査区内において標高が最も低い位置で検出した遺構である。平面形は、現状162×139cmの楕円形を呈し、深さは最大約54cmを測る。南側へとなだらかに下る斜面上に掘られた土坑であるが、底面がフラットであることから段状遺構としての性格も想定されよう。

埋土からは、磁器を中心に少量出土している。

#### 出土遺物（第10図）

第10図17・18は磁器である。17は口縁部から胴部にかけて残存する碗であり、全面に釉薬が施されている。18は胴部から高台付き底部にかけて残存する猪口であり、全面に釉薬が施され、外面には染付が見られる。

### 4号土坑（第12図、図版3）

調査区東側壁際の南よりに位置し、2号土坑に切られるとともに西側は木の根による攪乱を受けている。平面形は、現状280×170cmの隅丸長方形を呈し、深さは最大約117cmを測る。南側へとなだらかに下る斜面上に掘られた土坑であるが、底面がフラットであることから段状遺構としての性格も想定されよう。

埋土からは、弥生土器の甕が中心に出土しており、下面からもまとまって出土している。石器は、スクレイパー、石包丁をはじめ石核や剥片も多数出土しているが、小片のものが多く、実測に至ったものは少ない。

#### 出土遺物（第11・13図、図版11・14・16）

第13図1～11は弥生土器、第11図11～13は石器であり、その中で第13図8～11は下層より出土している。

第13図1～3・8・9は甕、4～7・10は壺、11は高杯である。1は口縁部から胴部にかけて残存する小片である。口縁部の形状は如意口縁を呈し、直線気味に胴部へと延びる。口縁端部は刻目を施した可能性のある痕跡が見受けられるが、摩滅が激しいため断定はできない。2は胴部から底部にかけての小片である。内面胴部には薄くコゲが見られ、平底である。3はほぼ完形であり、口縁端部に刻目が施され、底部は平底を呈する。4は口縁部から胴部にかけての小片である。素口縁の端部から緩く内湾し、胴部に向かって膨らむ。5は口縁部の小片であり、肉厚の口縁端部である。6・7は胴部から底部にかけての小片であり、どちらも平底を呈する。

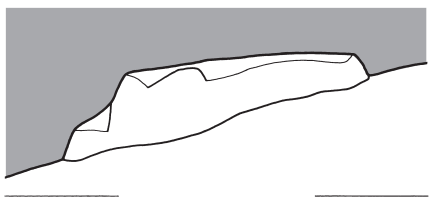
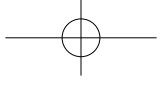
次に、下層出土の土器についてである。8は口縁部から胴部にかけて残存する小片である。口縁部の形状は如意口縁を呈し、外斜気味に底部へと延び、口縁端部には刻目が施されている。9は胴部から底部にかけての小片であり、底部中央付近に穿孔がある。10は胴部から底部にかけての小片である。11は杯部から脚部にかけて残存しており、杯部は碗状を呈する。

第11図11は小さな剥離面が石材の側面の先端を中心に数か所確認できたことから、打製石鏃の未製品であると考えられ、石材は安山岩である。12は石材の側面先端を中心とした剥離面が少ないもののその刃先の鋭さからスクレイパーと考えられ、石材は安山岩である。13は投弾である。

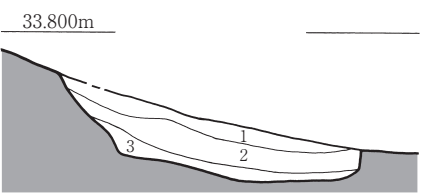
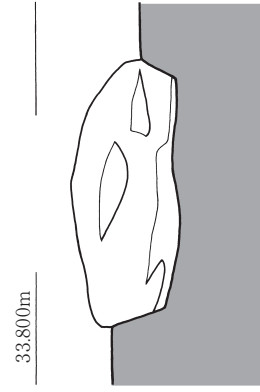
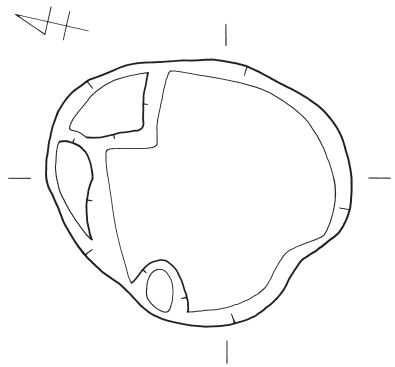
出土遺物は第13図3の甕と11の高杯を除くといずれも小片である。しかし、如意口縁を呈する口縁部からやや直線気味に胴部へと伸びる形態的特徴を有する甕が出土していること、また、内湾する頸部から外傾しながら胴部へと伸びる壺が出土していることを考慮するならば、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられよう。ただし、出土数が少なく小片の為、時期についての細分化は難しい状況である。

### 5号土坑（第15図、図版4）

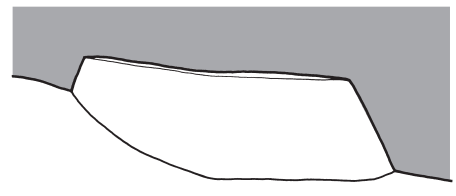
調査区東側南よりに位置し、2号溝を切り、9号・15号土坑に切られる。平面形は、現状288×186cmの隅丸長方形を呈し、深さは最大約50cmを測る。南側へとなだらかに下る斜面上に掘られた土坑であるが、底面がフラットであることから段状遺構としての性格も想定されよう。



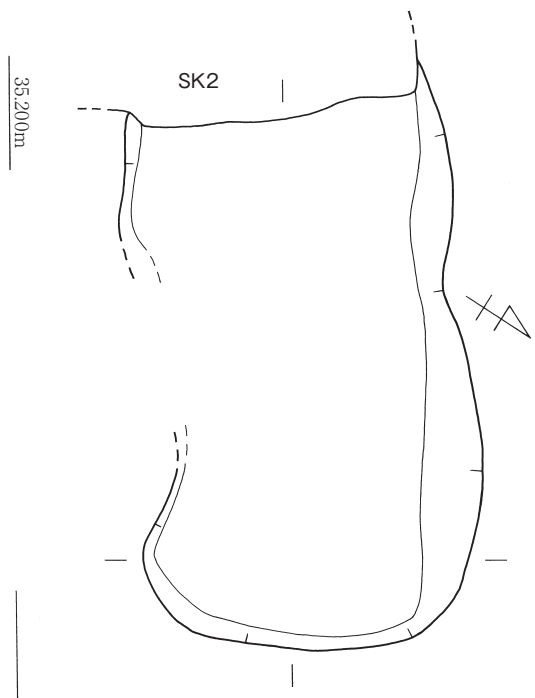
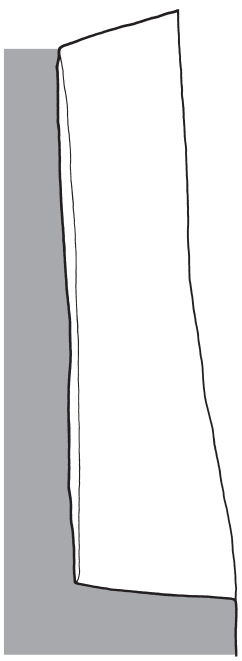
3号土坑



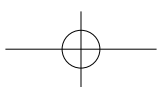
<SK3 土層>  
1:黒褐色土  
2:にぶい赤褐色土  
3:赤褐色土 地山の土色より濃い  
【整地層の可能性あり】

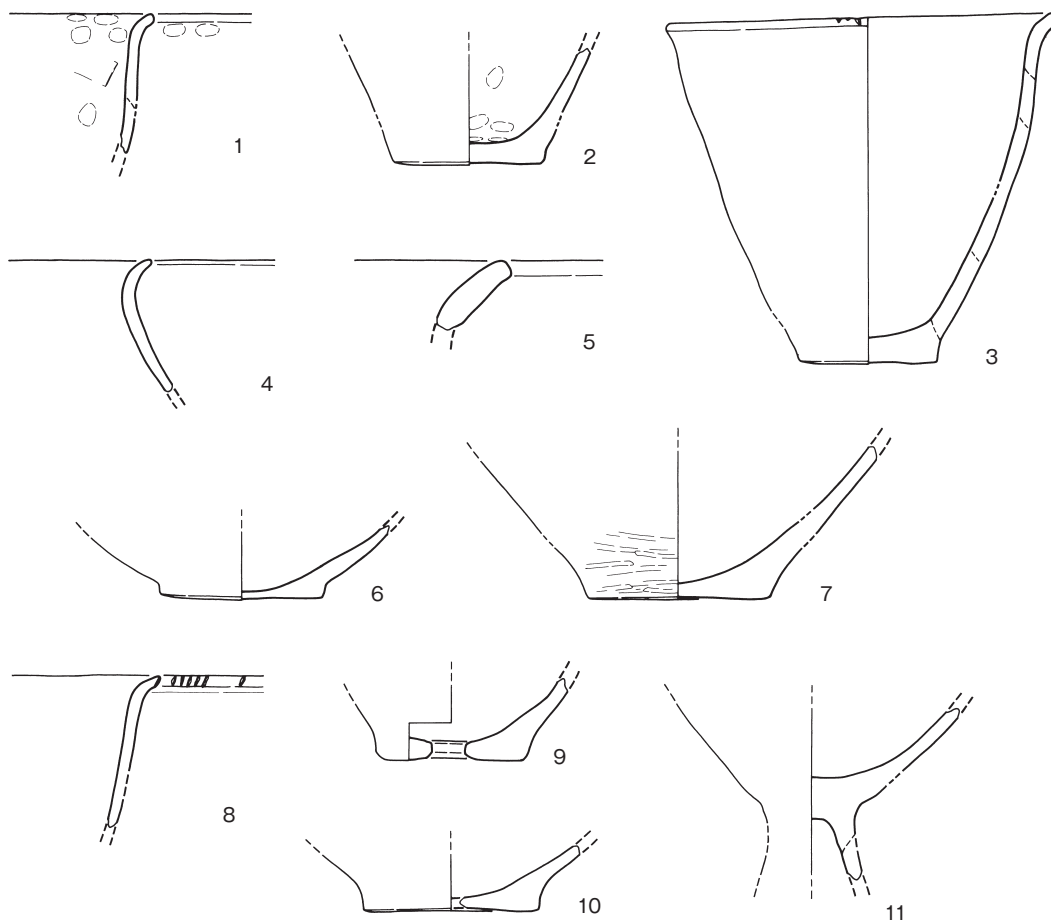


4号土坑

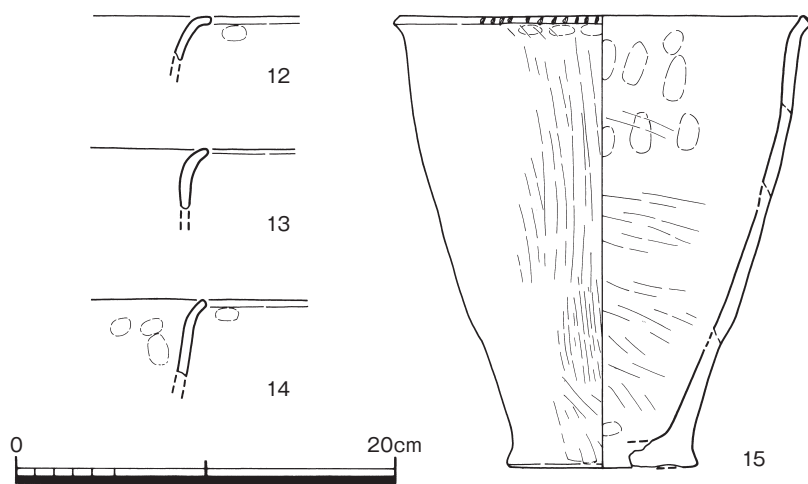


第 12 図 横隈狐塚遺跡 8 3号・4号土坑遺構実測図 (S=1/40)

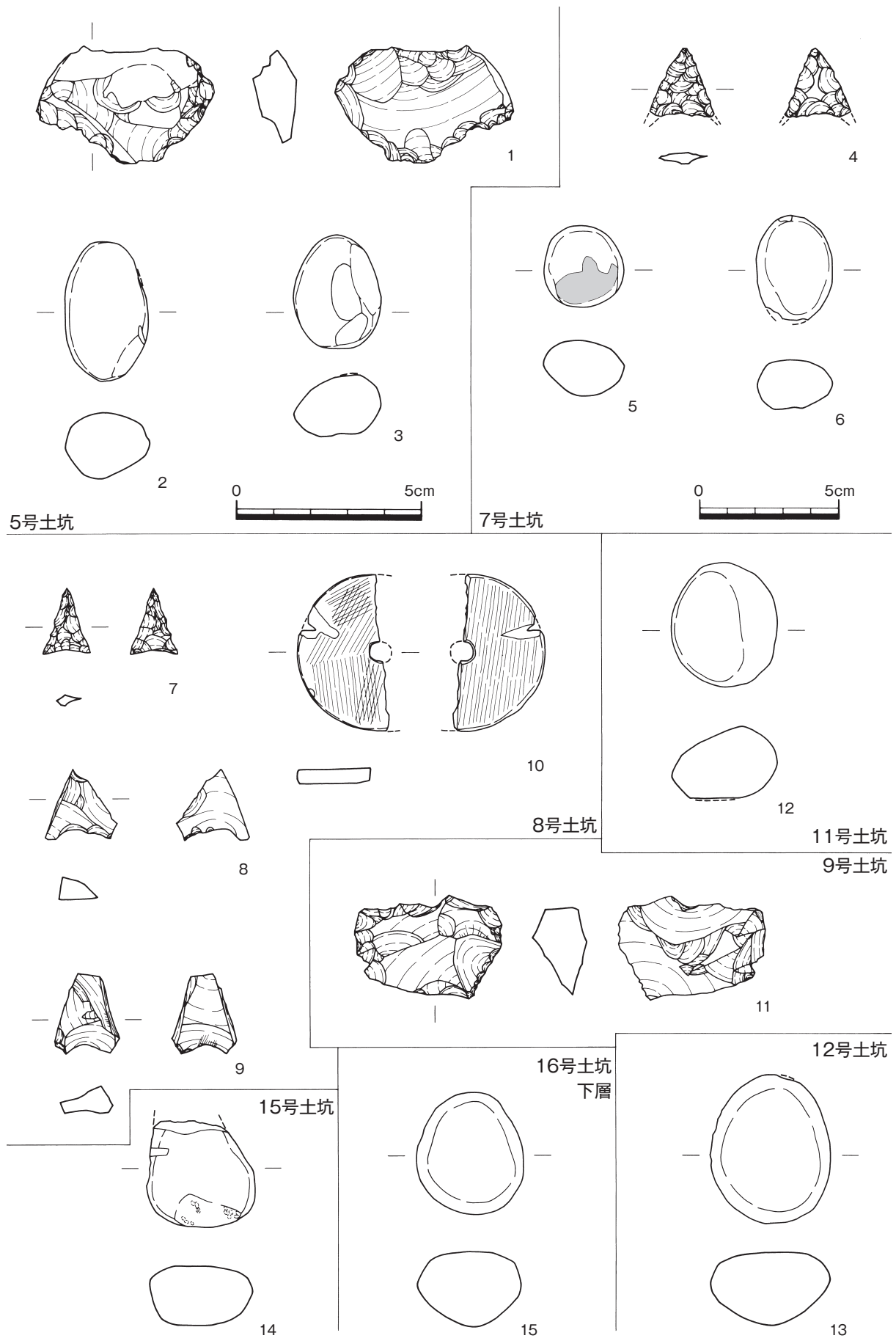




4号土坑  
5号土坑



第13图 横隈狐塚遺跡8 4号・5号土坑出土土器実測図 (S=1/4)



第14図 横隈狐塚遺跡8 5号・7号・8号・9号・11号・12号・15号・16号出土石器実測図  
(1・4・7・8・9:S=2/3、その他:S=1/2)

また、北側壁沿いに深さが同等のピットが掘られていることから、土坑に伴う柱穴の可能性が想定されるが、確証を得られるだけの痕跡は見受けられなかった。

埋土からは、弥生土器が甕を中心に出土し、石器も種類を判別できるものは少なかったものの剥片や河原石も少量出土している。

#### 出土遺物（第13・14図、図版11）

第13図12～15は弥生土器、第14図1～3は石器である。

第13図12～15は全て甕である。12～14は口縁部から胴部にかけて残存する小片であり、口縁部の形状は全て如意口縁を呈する。口縁端部に刻目が残存するのは12のみであり、14は可能性が考えられるが摩滅の為判然としない。14は外面胴部にススの痕跡が見られる。15は口縁部から底部まで残存しており、口縁端部に刻目が施された如意口縁から底部へと砲弾状に伸び、やや外側に突出気味の平底底部へと至る。外面胴部にはススの痕跡が見られる。

第14図1はスクレイパーであり、石材は安山岩である。2・3は投弾である。

出土遺物は第13図15の甕を除くといずれも小片である。しかし、如意口縁を呈する口縁部からやや直線気味に胴部へと伸びる形態的特徴を有する甕が出土していることを考慮するならば、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられよう。ただし、出土数が少なく小片の為、時期についての細分化は難しい状況である。

#### 6号土坑（第15図、図版4）

調査区東側中央部に位置し、33号土坑を切る。平面形は、現状239×174cmの楕円形を呈し、深さは最大約17cmを測る。南側へとなだらかに下る斜面上に掘られた土坑であり、深さは南側へ下るにつれ浅くなり南壁ではほぼ立ち上がっている。このことから、上面が後世に削平された可能性が想定される。また、中央に木の根があることから、木の根による攪乱により形成された掘り込みの可能性が考えられるが、土器が数点出土していることから、土坑として報告することとした。

埋土からは、石器の他石核が数点出土したが、小片の為、残念ながら実測に至らなかった。

#### 7号土坑（第16図、図版4）

調査区東側北端に位置し、20号土坑を切る。平面形は、現状245×154cmの隅丸長方形を呈し、深さは最大約59cmを測る。南側へとなだらかに下る斜面上に掘られた土坑であり、底面に若干凹凸が見られるが、最北端と最南端でほぼ同じ高さになることから、段状遺構として何らかの機能を有したことが窺えよう。埋土の堆積状況は基本水平堆積を呈するが、1層のように木の根やピットのような掘り込みがところどころ見られる。

埋土からは、弥生土器が少量のみの出土に対し、石器が種類を断定できるものは少ないものの石核・剥片・河原石が比較的多く出土している点の特筆される。しかし、その多くが小片であるため、残念ながら実測に至ったものは少ない。

#### 出土遺物（第14・18図、図版14・16）

第18図1は弥生土器、第14図4～6は石器である。

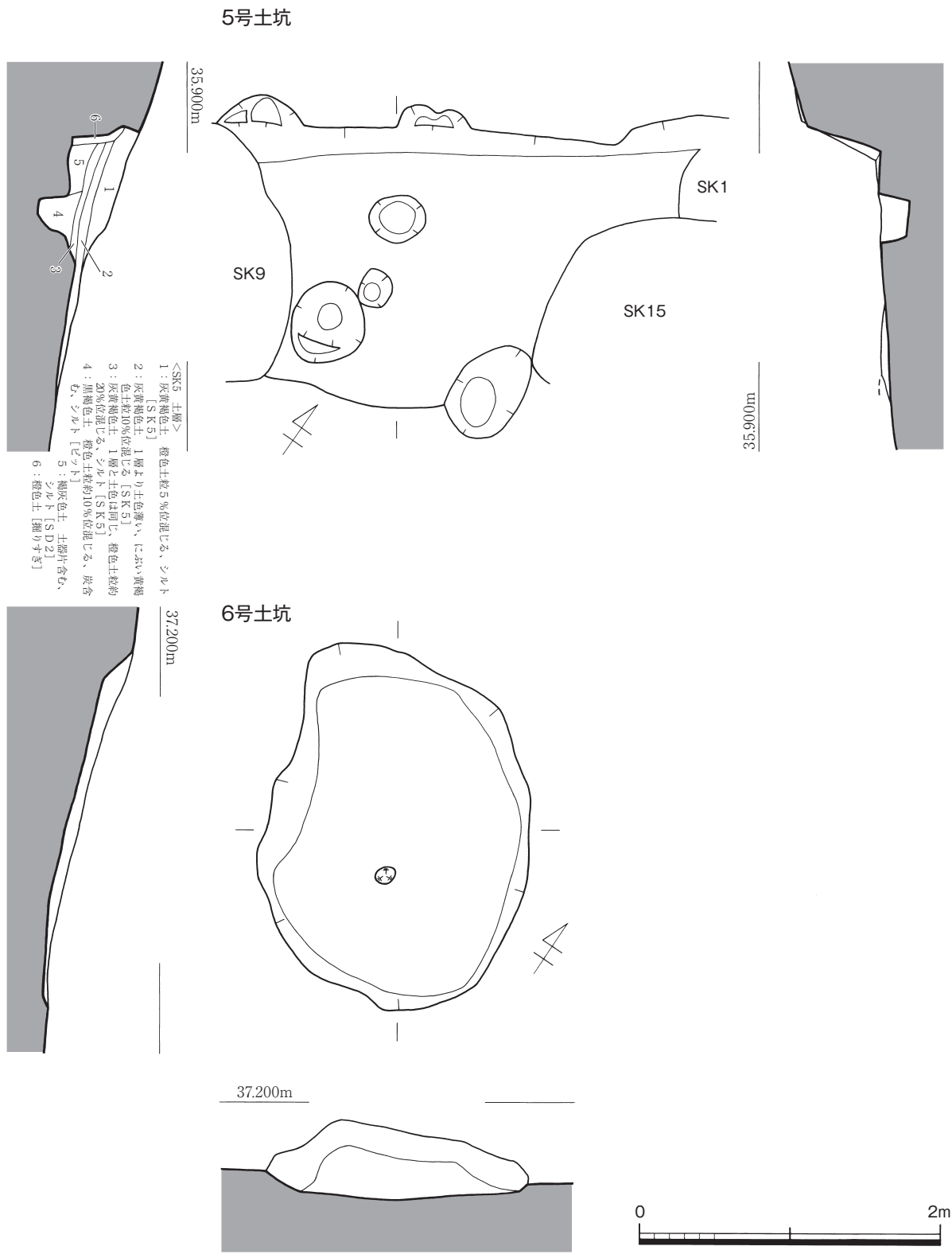
第18図1は甕であり、胴部から底部にかけて残存する小片である。

第14図4は打製石鏃であり、石材は安山岩である。5・6は投弾である。

#### 8号土坑（第16図、図版4・5）

調査区東側北よりに位置する。遺構は現状、上面の平面形153×124cm、底面の平面形152×87cm、深さ最大約148cmを測る隅丸長方形を呈する。遺構の南西側隅付近は現状テラス状になっているが、これはもともとピットが掘られていた地点を掘りすぎてしまいこのような状況になっているのであり、本来はテラス底面の東側上端ラインが8号土坑の本来の上端ラインである。なお、遺構南東側隅にもピットによる掘り込みが確認されており、8号土坑が北側から南側へ下る斜面上に築かれていることから、土坑を覆う覆い屋を支える柱穴として機能していた





第15図 横隈狐塚遺跡8 5号・6号土坑遺構実測図 (S=1/40)

可能性が想定できよう。埋土の堆積状況は基本水平堆積を呈し、3層以下では地山を一度掘り起こし再度埋めたと想定できる土に炭・土器片を含む黒褐色土粒が混じっていることから、貯蔵穴として機能していたことが考えられる。

埋土からは、弥生土器の甕を中心に出土し、石器は石鏃、紡錘車をはじめ石核・剥片など多数出土している。特に、石核と剥片は下層を含む埋土全面から多数出土している点が特筆される。

#### 出土遺物（第14・18図、図版11・14・15）

第18図2～5は弥生土器、第14図7～10は石器である。

第18図2～5は甕である。2～4は胴部から底部にかけて残存する小片であり、2・4が上げ底気味、3が平底を呈する。3のみ内面胴部にコゲが見られる。5は口縁部から胴部にかけて残存する。口縁端部に刻目を施した如意口縁からやや直線気味に底部に向かってすぼまり、内面胴部にはコゲが見られる。

第14図7は打製石鏃であり、石材は安山岩である。8・9は先端が欠損しているが、その形状から打製石鏃の未製品と考えられる。石材は、8が安山岩、9が黒曜石である。10は紡錘車であり、穿孔を施すにあたっては両側より作業を行ったと考えられる。

出土遺物の内、弥生土器の多くは甕の底部片であるが、中には短く如意口縁を呈する口縁部からやや直線気味に胴部へと伸びる形態的特徴を有する甕が出土していることを考慮するならば、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられよう。また、口縁部の形態より、他の遺構に比べて若干古い様相を呈している可能性が考えられる。

#### 9号土坑（第17図、図版5）

調査区中央南よりに位置し、5号・17号・32号土坑、2号溝を切る。平面形は、現状175×167cmの楕円形を呈し、深さは最大約77cmを測る。1号・5号土坑と同様に、南側へとただらかに下る斜面上に掘られた土坑であるが、底面がほぼフラットであることから段状遺構としての性格も想定されよう。また、土坑内の北側壁面付近と南側壁面近くにピットを数基確認しているが、9号土坑に伴うものかどうかについては確証を得られなかった。

埋土からは、弥生土器の甕やスクレイパー、河原石等出土しているが、小片の為実測に至ったものは少ない。

#### 出土遺物（第14・18図、図版9・14）

第18図6～8は弥生土器、第14図11は石器である。

第18図6～8は甕である。6は口縁部から胴部にかけて残存する。素口縁の口縁部から直線的に外斜し、底部へと至る。7・8は胴部から底部にかけての底部片であり、いずれも平底を呈するが、7は底部中央付近に焼成後に施された穿孔がある。7・8ともに外面にススが付着し、7は内面全面にコゲも付着している。

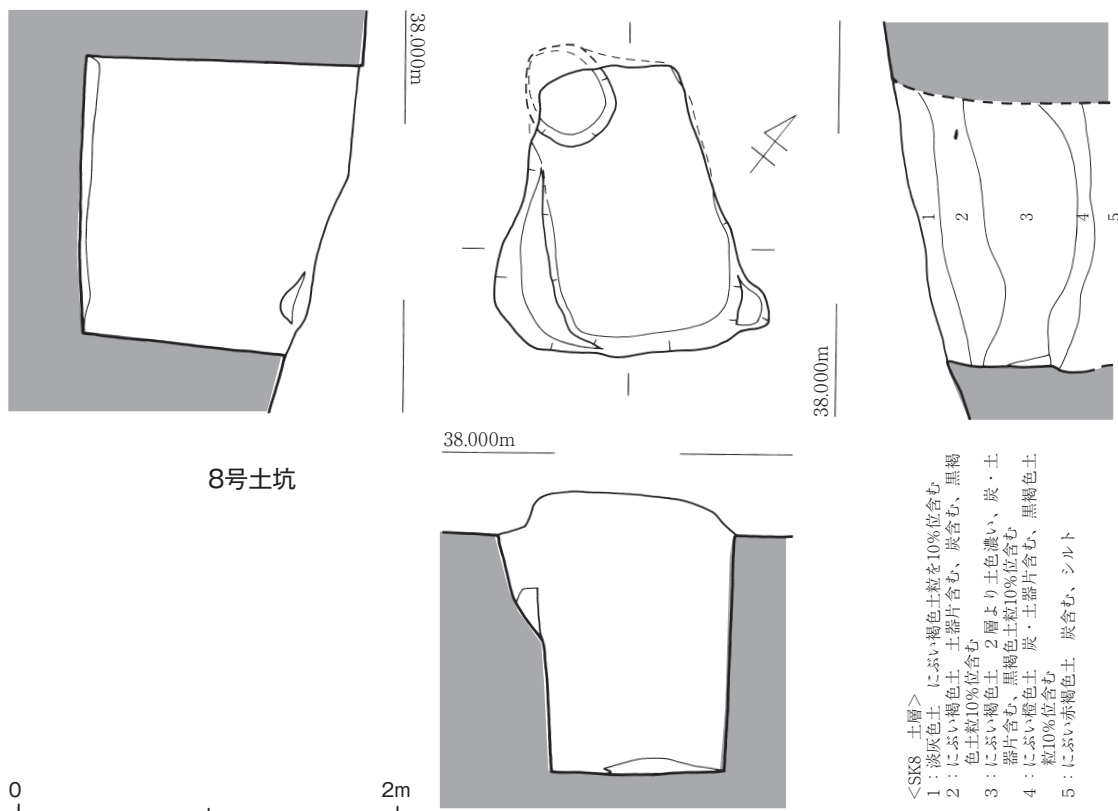
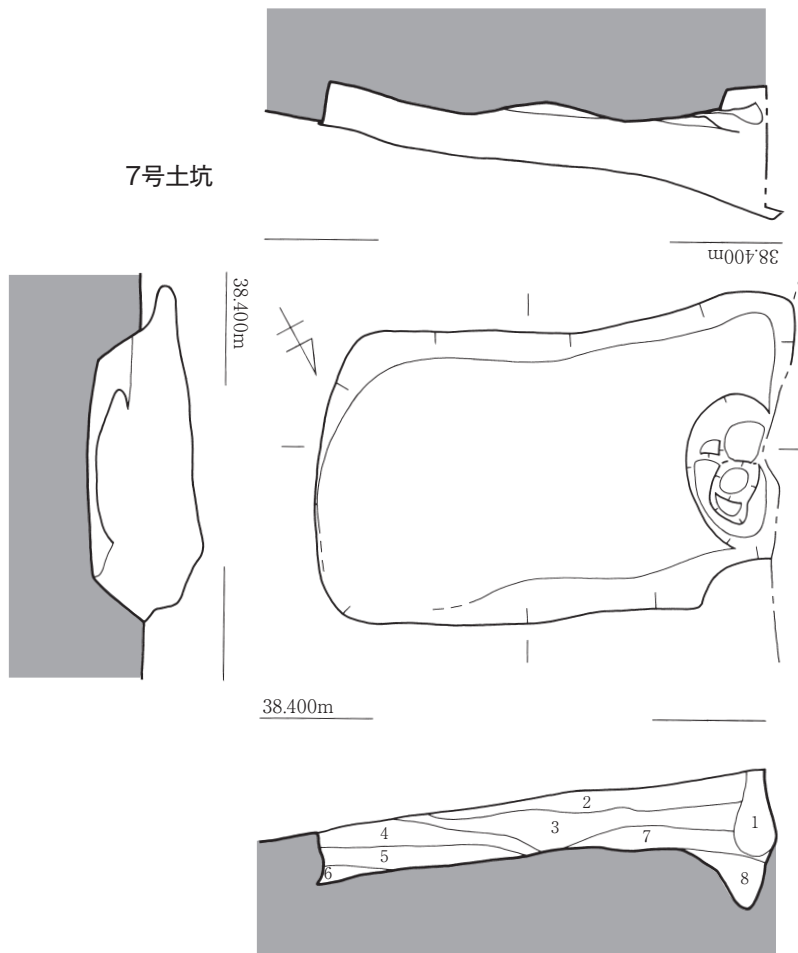
第14図11はスクレイパーであり、石材は安山岩である。

第18図6の甕の形態は、他の遺構出土の甕と比べて口縁部が如意口縁を呈していない点で異なるが、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられよう。ただし、出土数が少なく小片の為、時期についての細分化は難しい状況である。

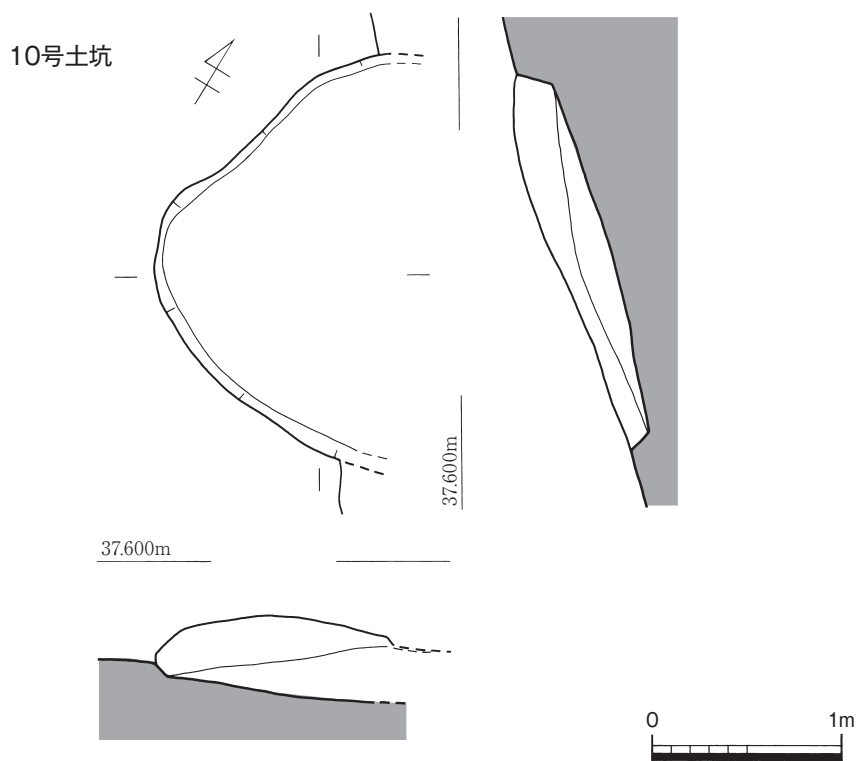
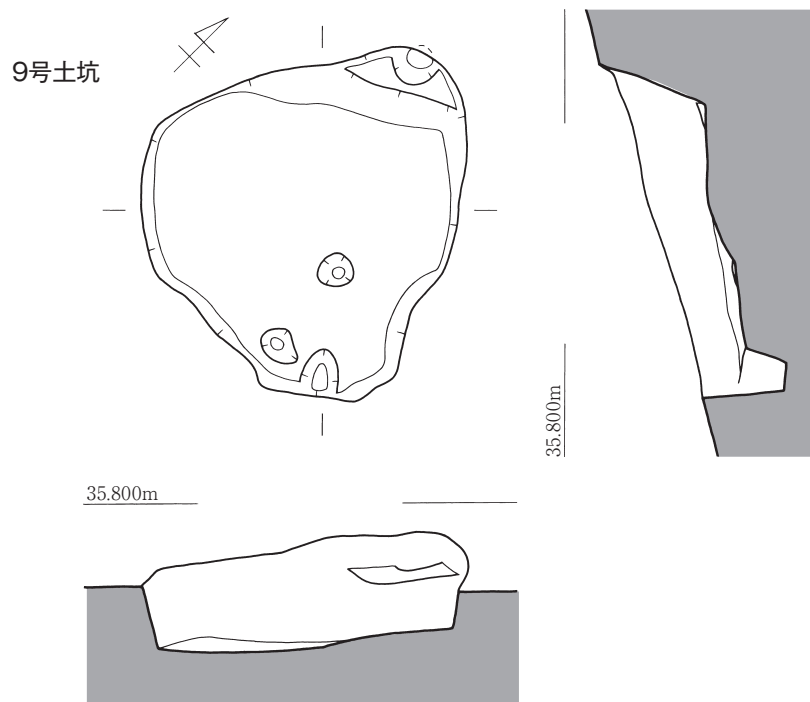
#### 10号土坑（第17図、図版5）

調査区東側中央よりに位置し、16号・29号土坑を切る。この付近は、現代の樹木による攪乱がひどく、また、丘陵が北東方向へとカーブしていく部分でもあった。そのため重機での表土剥ぎ時に、遺構の埋土と丘陵の堆積土との違いを見誤り、結果的に10号土坑の東側半分を中心に重機で一段大きく下げてしまった。そのため、10号土坑の検出は西側部分のみの検出となってしまった。平面形は、現状214×120cmの半円形を呈し、深さは最大約52cmを測る。南側へとただらかに下る斜面上に掘られた土坑であり、底面においてフラット面は確認できなかった。

埋土からの出土遺物はみられなかった。



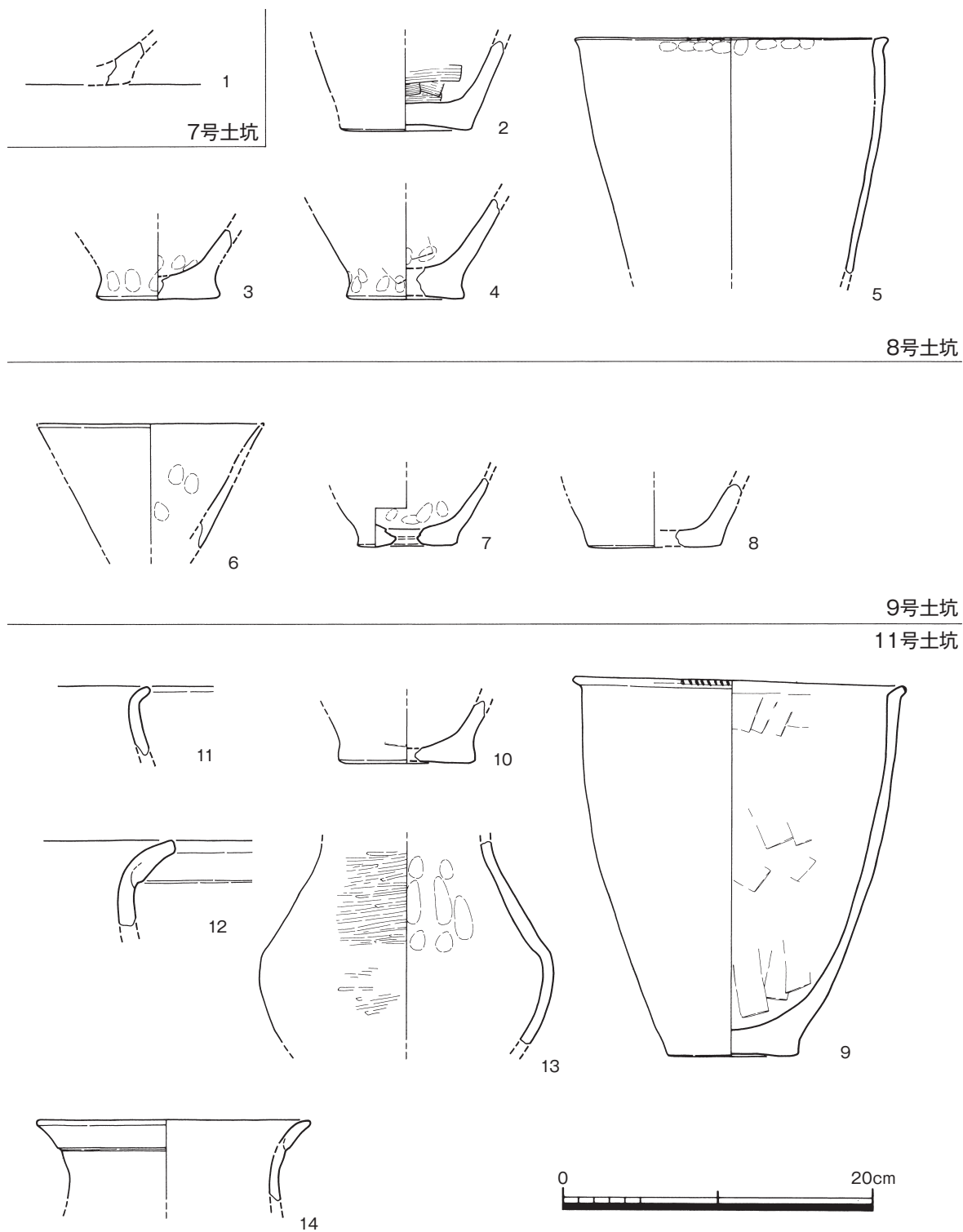
第 16 図 横隈狐塚遺跡 8 7号・8号土坑遺構実測図 (S=1/40)



第17図 横隈狐塚遺跡8 9号・10号土坑遺構実測図 (S=1/40)

### 11号土坑 (第19図、図版5)

調査区中央よりに位置する。現状の平面形は、上面  $153 \times 162\text{cm}$ 、中段  $147 \times 122\text{cm}$ 、底面の平面形  $128 \times 154\text{cm}$ 、深さ最大約  $164\text{cm}$ を測る隅丸方形を呈する。遺構の東側では、中段から底面に向かってテラス状の段を検出している。このテラスの上端は、中段掘り込みラインとレベ



第 18 図 横隈狐塚遺跡 8 7号・8号・9号・11号土坑出土土器実測図 (S=1/4)

ルが一致することから、本来は平面的にはテラスの下端と中段掘り込みラインとを結ぶ軸より底面までの箇所が本来の壁面が残存している部分であり、これより上側の遺構の上端からテラスの上端までの箇所は、雨などにより壁面が崩れたため、本来の遺構の掘り込みより広がったと考えられよう。

なお、中段掘り込みライン直下より、ほぼ完形の甕（第18図9）が1点出土している。土層断面図は記録できなかったが、遺構図面記載の甕が出土した層以下では、土器片や炭を含む地山と非常に類似した埋土が底面まで続いていたことから、貯蔵穴として機能していた可能性が高いと考えられる。

その他埋土からは、炭化物が付着している土器片を含む弥生土器が多数出土し、石核・剥片・河原石もまとまった量で検出したが、小片の為実測に至ったものは少ない。

#### 出土遺物（第14・18図、図版12・16）

第18図9～14は弥生土器、第14図11は石器であり、その中で第18図14は下層より出土している。

第18図9・10は甕、11～14は壺である。9は口縁部から底部にかけて残存する。口縁端部に刻目が施された短めの如意口縁から砲弾状に膨らみながら平底の底部へと伸びる。底部外面には種子圧痕の痕跡があり、外面口縁部から胴部にかけてススが付着している。10は胴部から底部にかけての小片であり平底を呈する。11～12は口縁部から頸部にかけての小片である。11は素口縁の端部から緩く内湾し、胴部に向かって膨らむ。12は外湾する肉厚の口縁部から直立気味に頸部へと伸びる。13は頸部から胴部にかけて残存しており、頸部から胴部最大径まで内傾気味に伸び、胴部最大径で膨らんだ後、外湾しながら底部へとすぼまる。内面頸部には有機質の炭化物が残存している。14は素口縁から内湾しながら頸部へと伸びる。

第14図12は投弾である。

出土遺物は他の遺構と比べ、比較的残存率の良い土器が出土している。8号土坑出土の甕と類似したプロポーシオンを有する甕の出土や、頸部から胴部にかけての屈曲がやや明瞭な壺などが出土していることを考慮するならば、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられ、8号土坑同様、他の遺構に比べて若干古い様相を呈している可能性が考えられる。

#### 12号土坑（第19図、図版6）

調査区中央北よりに位置する。平面形は、現状264×174cmの隅丸長方形を呈し、深さは最大約75cmを測る。埋土の堆積状況は基本水平堆積を呈するが、1層や3層のように木の根やピットがところどころ見られる。

埋土からは、石核や投弾が出土しているが、小片のため実測に至ったものは少ない。

#### 出土遺物（第14図、図版16）

第14図13は投弾である。

#### 13号土坑（第20図、図版6）

調査区中央北よりに位置する。遺構は現状、上面の平面形164×166cm、底面の平面形138×154cmの隅丸長方形を呈し、深さは最大約165cmを測る。埋土の堆積状況は基本水平堆積を呈するが、7層で黒褐色層を確認した以外は全て地山に類似したにぶい橙色土～橙色土に黒褐色土粒が混ざる土質をしていることから、一度掘り起こした地山の土を再度埋めたものと考えられる。

埋土からは、弥生土器を中心に上層・中層・下層とまとまって出土し、石器もスクレイパー、砥石をはじめ石核や剥片が出土しているが、小片の為実測に至ったものは少ない。

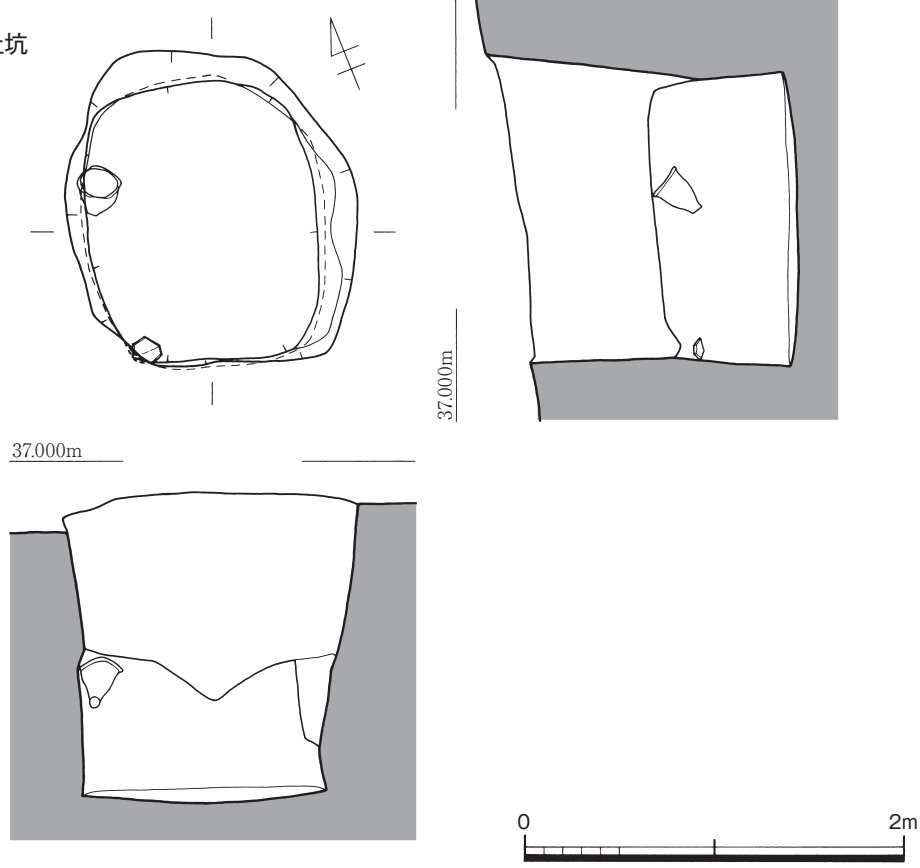
#### 出土遺物（第22図、図版12）

第22図1～7は弥生土器、その中で、4～6は下層、7は最下層より出土している。

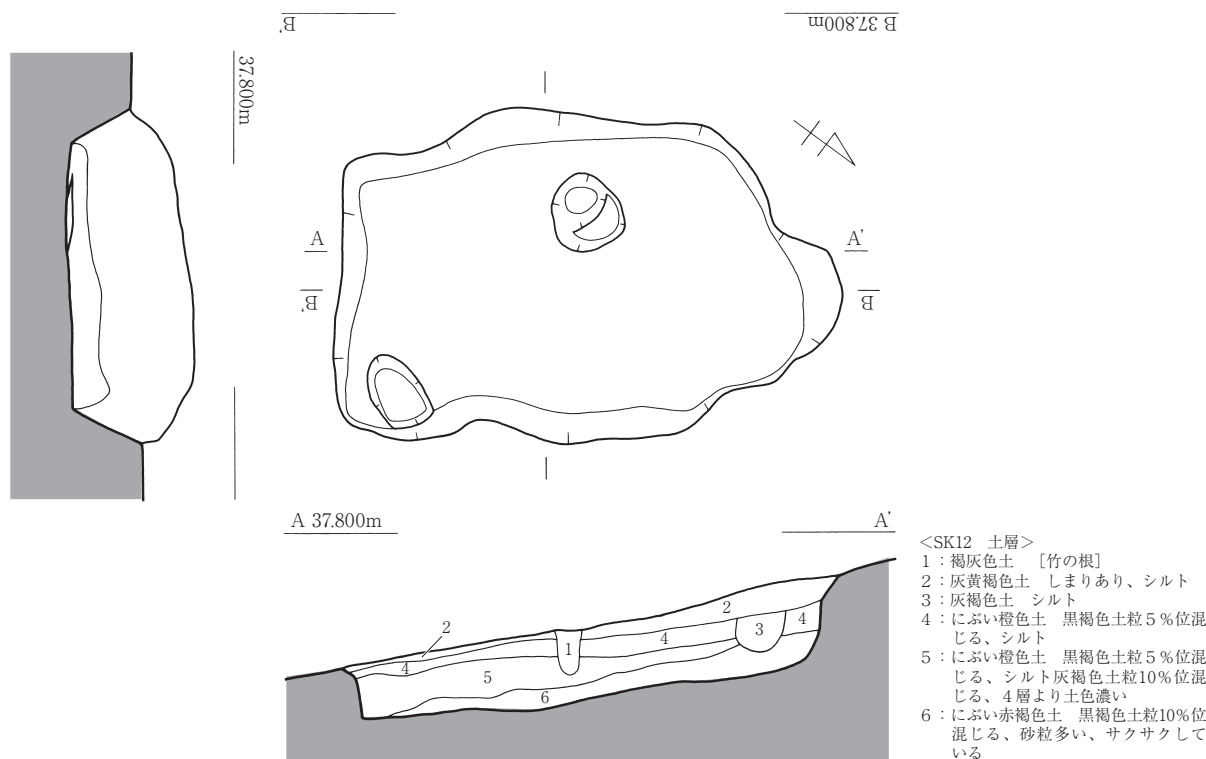
1は壺であり、胴部から底部にかけて残存する。形状は、胴部最大径で大きく膨らみ、外湾しながら平底の底部へと伸びる。2は蓋の裾部を中心とした小片である。素口縁から直線的に内斜しながら伸び、外面にススが付着している。3は鉢である。素口縁から外湾しながら底部に向かってすぼまっている。

次に下層出土の土器についてである。4は口縁部から胴部にかけて残存する小片である。素口縁の如意口縁から直線的に胴部へと伸び、底部に向かって砲弾状にすぼまる。5は蓋である。6は鉢である。素口縁から短く直線的に内傾した後、緩く外湾しながら底部へと伸び、内外面

11号土坑



12号土坑



第 19 図 横隈狐塚遺跡 8 11号・12号土坑遺構実測図 (S=1/40)

ともに全面ヘラミガキが施されている。

最後に最下層出土の土器についてである。7は蓋である。肉厚の頂部から直線的に裾部へと伸びる。外面にはススが付着し、内面には炭化物を含むコゲの痕跡を確認できる。

出土遺物は、甕・壺・鉢・蓋と出土遺物の器種組成に富む遺構であり、かつ、他の遺構と比べて蓋の比率が高いことが特徴として挙がる。小片が多いが、如意口縁を呈する口縁部から肥厚しながら胴部へと伸びる形態的特徴を有する甕が出土している点を考慮するならば、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられよう。ただし、時期を判別できる遺物の出土数が少なく小片の為、時期についての細分化は難しい状況である。

#### 15号土坑（第21図、図版6）

調査区東側中央部に位置し、1号・5号土坑と2号溝に切られる。遺構は現状、上面の平面形139×81cm、底面の平面形132×69cm、深さ最大約120cmを測る隅丸長方形を呈する。埋土の堆積状況は基本水平堆積を呈しており、特に10層以下では地山の土に黒褐色土粒を含む土の層を中心に平坦面を築こうとした傾向が見受けられることから、貯蔵穴として機能していたことが考えられよう。また、9層直上において4～8層で土砂の流れ込みと考えられる堆積状況を検出したことから、遺構の西側の上面テラス部分は、土砂の流れ込みの際に掘り込みが拡大した範囲であり、その後1～3層が堆積したと考えられよう。

埋土からは、弥生土器を中心に上層・下層と出土しており、石器も少量ながらも石杵をはじめ石核や剥片が出土しているが、小片の為実測に至ったものは少ない。

#### 出土遺物（第14・22図、図版15）

第22図8～10は弥生土器であり、8は上層、10は下層より出土している。第14図14は石器である。

第22図8は甕である。口縁部から胴部にかけて残存する小片であり、素口縁からやや外湾気味に胴部が伸びており、口縁部と胴部の突帯に刻目が施されている。9は壺である。口縁部から頸部にかけて残存する小片であり、短く内湾している。10は鉢である。口縁部から胴部にかけて残存する小片であり、短く直立気味の口縁部から頸部で緩く外湾する形状へと変化する。

第14図14は石杵である。全体的に摩滅が広がっていたことから、敲打痕はほとんど確認できなかった。

出土遺物はいずれも小片であるが、第22図8の亀の甲タイプの甕が出土している点を考慮すると、相対的に弥生時代前期（板付Ⅱ式期）に位置図けられると考えられるが、他の遺構と比べてやや新しい様相を呈していると言えよう。

#### 16号土坑（第23図、図版6・7）

調査区東側中央よりに位置し、29号・33号土坑を切り、10号土坑に切られる。遺構は現状、上面の平面形179×186cm、底面の平面形176×132cm、深さ最大約255cmを測る隅丸長方形を呈する。南側へとなだらかに下る斜面上に掘られた土坑であり、底面も北側の標高が南側より約20cm高い。また、土層観察においても全体的に北側から南側へと土砂が流れ込んでいる状況であることがわかる。埋土は、その多くはにぶい橙色～橙色の地山に類似した土に黒褐色土粒を含む一度掘り返し再度埋めた土であり、特に、14層以下では砂層と表現するまでには至らないが、それと類似する程の砂質の層が堆積しており、サクサクと掘削できる状況であった。遺構の形状や埋土の堆積状況から、貯蔵穴として機能していたと考えられよう。

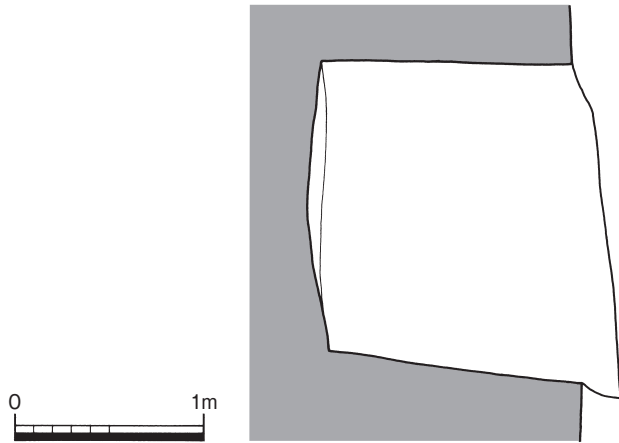
埋土からは、弥生土器や石錐、スクレイパーをはじめ剥片が少量出土しているが、小片の為実測に至ったものは少ない。

#### 出土遺物（第14・22図、図版16）

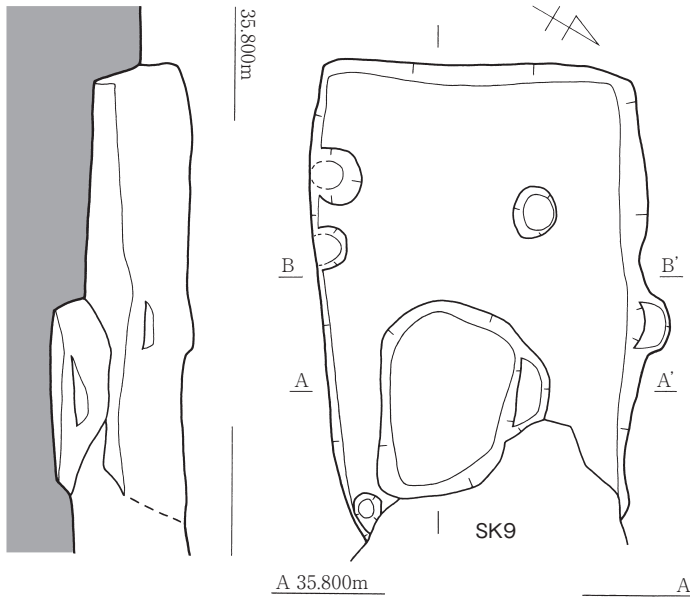
第22図11～14は弥生土器であり、第14図15は石器である。

第22図11～13は甕である。11は口縁部から胴部にかけて残存する小片である。素口縁の如意口縁から直立気味に胴部へと伸びる。12・13は胴部から底部にかけての底部片であり、やや



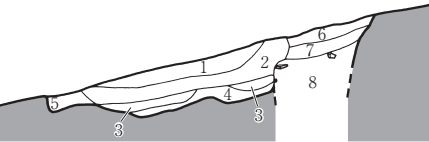


17号土坑

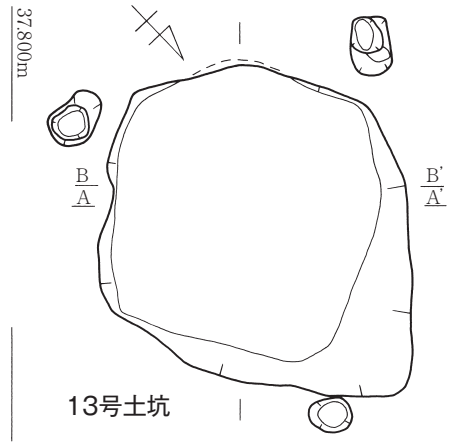


A 35.800m

B 35.800m



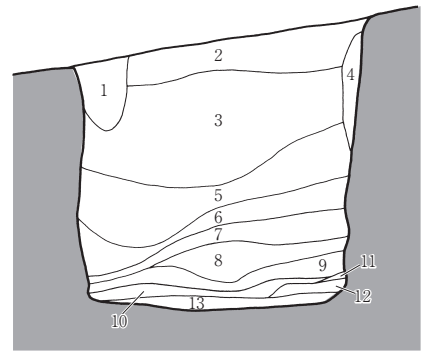
- <SK17 土層>
- 1: にぶい黄橙色土 シルト、黒褐色土粒15%位混じる [SK17]
  - 2: 灰黄褐色土 黒褐色土粒と黄褐色土粒5%位混じる [SK17]
  - 3: 灰黄色土 2層より土色濃い [SK17]
  - 4: 黄褐色土 灰黄褐色土粒20%位混じる [地山面直上] [SK17]
  - 5: 黄褐色土 シルト、黒褐色土粒5%位混じる [SK17]
  - 6: 灰黄褐色土 シルト
  - 7: 灰黄褐色土 6層より土色濃い、炭含む
  - 8: 褐灰色土 土器片含む [SD2]



13号土坑

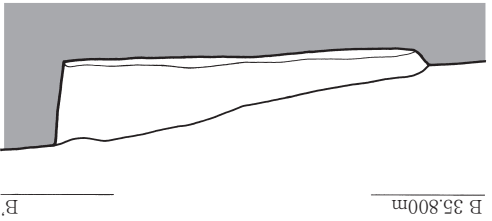
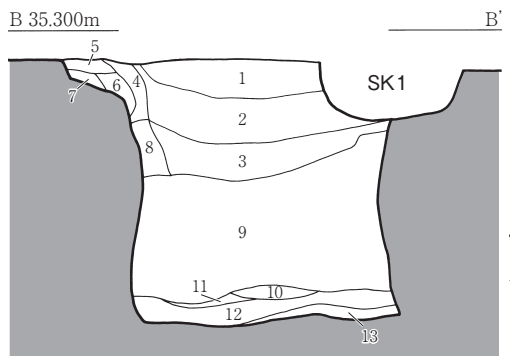
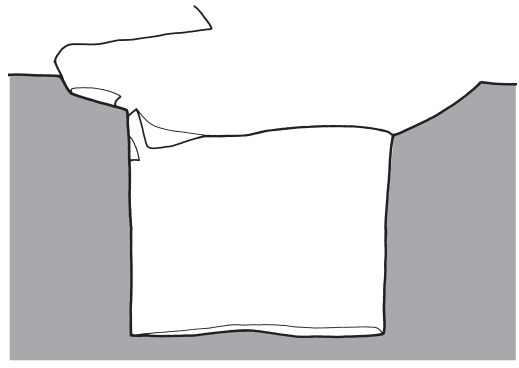
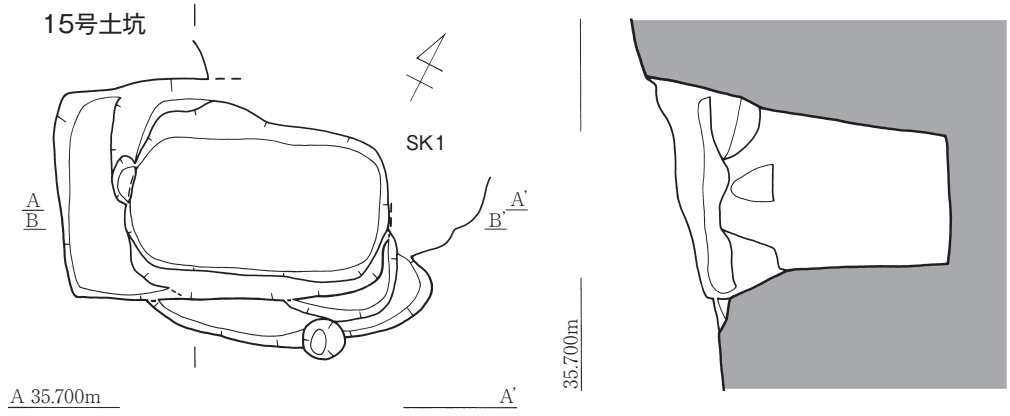
A 37.800m

B 37.800m

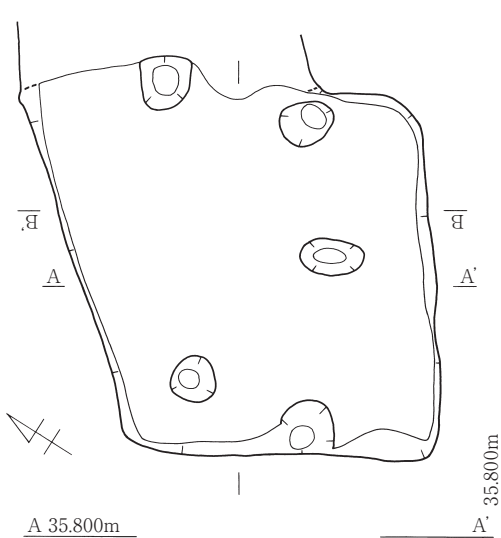


- <SK13 土層>
- 1: 灰黄褐色土
  - 2: にぶい橙色土 黒褐色土粒10%位含む、シルト
  - 3: 橙色土 黒褐色土粒5%位含む、シルト
  - 4: にぶい黄橙色土 黒褐色土粒5%位含む、シルト、サクサクしている
  - 5: にぶい橙色土 2層より土色薄い
  - 6: にぶい黄橙色土 2層より土色濃い、黒褐色土粒20%位含む
  - 7: 黒褐色土 にぶい橙色土粒5%位含む、シルト
  - 8: 橙色土 黒褐色土粒10%位含む
  - 9: 橙色土 8層より土色暗め、灰褐色土粒10%位含む
  - 10: にぶい黄橙色土、6層より土色明るい、灰褐色土粒10%位含む
  - 11: 橙色土 サクサクしている、砂層に近い
  - 12: 橙色土 サクサクしている、砂層に近い、11層より土色薄い
  - 13: にぶい橙色土 掘りすぎ、サクサクしている、砂層に近い [地山]

第20図 横隈狐塚遺跡8 13号・17号土坑遺構実測図 (S=1/40)

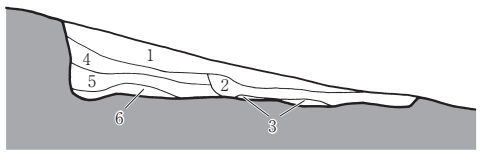


18号土坑

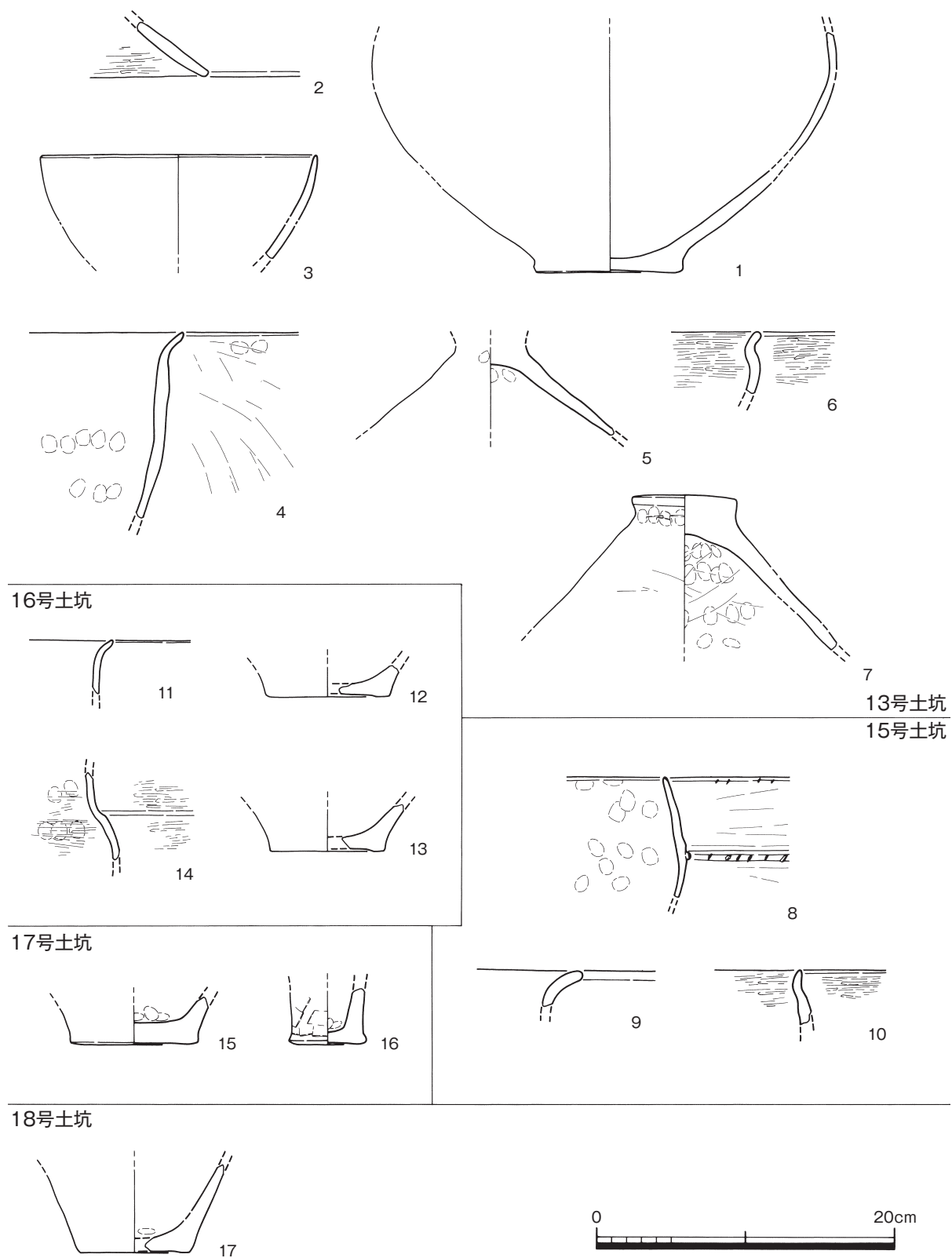


- <SK15 土層>
- 1: 橙色土 シルト、黒褐色土粒5%位混じる
  - 2: 黒褐色土 シルト、炭少し混じる
  - 3: 灰褐色土 橙色土粒5%位混じる
  - 4: 黒褐色土 [流れ込み]
  - 5: 灰褐色土 [流れ込み]
  - 6: にぶい褐色土 [流れ込み]
  - 7: 灰褐色土 5層より土色濃い [流れ込み]
  - 8: 灰褐色土 7層より土色濃い、橙色土粒5%位混じる [流れ込み]
  - 9: 黒褐色土 炭混じる、やや粘質
  - 10: 灰褐色土 黒色土粒約5%位含む [底面整地層部分]
  - 11: 灰褐色土 10層より土色薄い、黒色土粒約5%位含む [底面整地層部分]
  - 12: にぶい橙色土 黒色土粒約5%位混じる、シルト、サクサクしている [底面整地層部分]
  - 13: 橙色土 黒色や黄色の土粒少し混じる、シルト、サクサクしている [底面整地層部分]

- <SK18 土層>
- 1: 灰黄褐色土 橙色土粒5%位混じる、シルト
  - 2: 灰黄褐色土 1層より土色薄い、黒褐色土粒10%位混じる
  - 3: 黄褐色土 黒褐色土粒5%位混じる、やや粘質
  - 4: 浅黄褐色土 灰黄褐色土粒10%位混じる、やや粘質
  - 5: 黒褐色土 炭含む、黄褐色土粒5%位含む
  - 6: 黄褐色土 黒褐色土粒10%位混じる、やや粘質



第 21 図 横隈狐塚遺跡 8 15号・18号土坑遺構実測図 (S=1/40)



第 22 图 横隈狐塚遺跡 8 13 号・15 号・16 号・17 号・18 号土坑出土土器実測図 (S=1/4)

上げ底気味である。13は外面底面にコゲが付着している。14は壺である。頸部から胴部にかけての破片であり、直線気味の頸部が胴部に至ってから緩く外湾気味に伸びる。

第14図15は投弾であり、下層より出土している。

出土遺物はいずれも小片であるが、上記の形態的特徴から、相対的に弥生時代前期（板付Ⅱ式期）に位置付けられると考えられる。ただし、出土数が少なく小片の為、時期についての細分化は難しい状況である。

#### 17号土坑（第20図、図版7）

調査区中央南よりに位置し、18号・31号・32号土坑と2号溝を切り、9号土坑に切られる。平面形は、現状218×177cmの隅丸方形を呈し、深さは最大約90cmを測る。南側へと下るなだらかな斜面上に掘られた遺構であり、底面も南側へ向かって下っている。東側底面において掘り込まれている平面形88×103cmの楕円形の掘り込みは、17号土坑に伴うかどうかについては確認を得られなかった。

埋土からは、甕を中心に弥生土器が出土し、石器も打製石鏃、紡錘車をはじめ石核・剥片・河原石が多数出土しているが、小片の為実測に至ったものは少ない。

#### 出土遺物（第22・24図、図版14・15・16）

第22図15・16は弥生土器であり、第24図1～4は石器である。

第22図15は甕である。胴部から底部にかけての破片であり、平底を呈する。内面胴部には薄くコゲの痕跡が見られる。16はミニチュア土器の甕である。胴部から底部にかけての破片であり、直立気味の胴部が上げ底気味の底部へと至る。

第24図1は打製石鏃で、石材は安山岩である。2は紡錘車であり、穿孔を施すにあたっては両側より作業を行ったと考えられる。3・4は投弾である。

#### 18号土坑（第21図、図版7）

調査区中央南よりに位置し、31号土坑と2号溝を切り、17号土坑に切られる。平面形は、現状192×201cmの隅丸方形を呈し、深さは最大約52cmを測る。南側へと下るなだらかな斜面上に掘られた遺構であり、底面がほぼフラットであることから段状遺構としての性格も想定されよう。また、土坑内においてピットを数基確認しているが、18号土坑に伴うものかどうかについては確認を得られなかった。埋土は基本水平堆積を呈しているが、4～6層を切るように2層が堆積している。

埋土からは、弥生土器をはじめ、石鏃や河原石等石製品が数点出土している。特に、石鏃は遺構検出面直下より出土している。

#### 出土遺物（第22・24図、図版14・16）

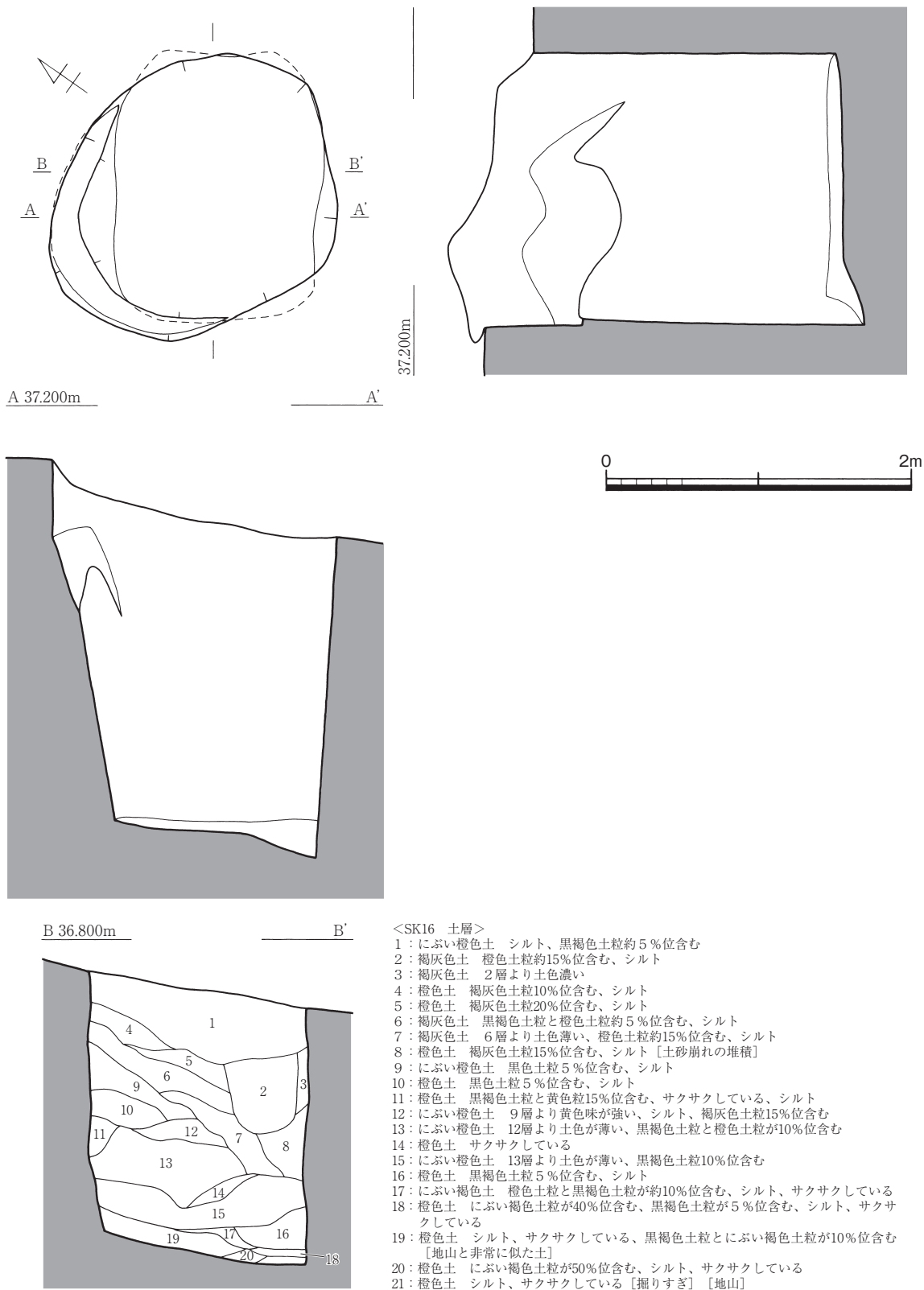
第22図17は弥生土器、第24図5～8は石器である。

第22図17は甕である。胴部から底部にかけての破片であり、平底を呈する。内面胴部にはコゲが付着している。

第24図5は石鏃である。全体的に欠損部分が多く、表面も全体的に剥離部分が多いことから石鏃としての状態は比較的悪い。しかしながら、刃の部分が角度を変えて連続して形成されている箇所が見られることから、2度刃を形成している可能性が考えられる。また、柄から中央部にかけて装着痕と考えられる隆起が所々確認できる。6～8は投弾である。

#### 19号土坑（第25図、図版7）

調査区中央南よりに位置し、30号土坑を切る。なお、残念ながら調査期間の関係で半掘しかできなかった。平面形は、現状253×196cmの隅丸長方形を呈し、深さは最大約130cmを測る。南側へと下るなだらかな斜面上に掘られた遺構であり、底面がほぼフラットであることから段状遺構としての性格も想定されよう。埋土は基本水平堆積を呈し、3層以下ではにぶい橙色～橙色の地山に類似した土が堆積していることから、貯蔵穴として使用された可能性が考えられ



第23図 横隈狐塚遺跡8 16号土坑遺構実測図 (S=1/40)

るが、深さが浅いことから上面は後世に削平されたと想定できよう。

底面近くより、残りの良い弥生土器の広口壺（第27図5）が出土している。また、埋土からは、甕を中心に弥生土器が出土し、石器は打製石鏃、投弾をはじめ剥片が少量出土しているが、小片の為実測に至ったものは少ない。

#### 出土遺物（第27・28図、図版12・14・16）

第27図1～7は弥生土器、第28図1・2は石器であり、その内、第27図6は上層、第27図7と第28図1は下層より出土している。

第27図1は甕である。胴部から底部にかけての破片である。2～5は壺である。2は口縁部から頸部にかけて残存する小片であり、素口縁から緩く内湾する頸部へとつながる。3・4は胴部から底部にかけての破片であり、胴部に向かって底部より大きく外湾する。5は口縁部から胴部にかけて残存する。素口縁の口縁部から緩く頸部へと内湾し、その後、直立気味に伸びたのち、やや外傾気味に胴部最大径へと至る。胴部最大径では大きく外湾した後底部に向かってすばまる。第28図2は投弾である。

次に上層出土の土器についてである。第27図6は蓋である。裾部を中心とした小片である。

最後に下層出土の土器についてである。第27図7は甕である。口縁部から胴部にかけて残存する小片である。緩い如意口縁が直立気味に伸びている。第28図1は打製石鏃であり、石材は、黒曜石である。

出土遺物は、第27図5の広口壺を除けばいずれも小片であるが、上記の形態的特徴から、如意口縁の甕が出土していることなどを考慮すれば、相対的に弥生時代前期（板付Ⅱ式期）に位置づけられると考えられる。ただし、出土数が少なく小片の為、時期についての細分化は難しい状況である。

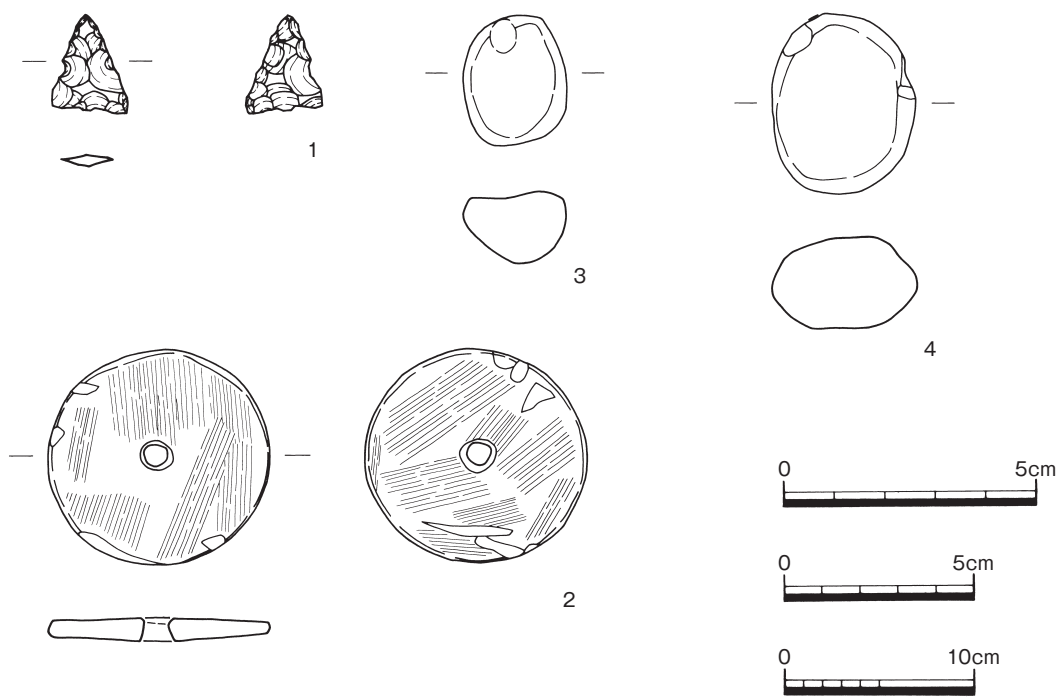
#### 20号土坑（第26図、図版7・8）

調査区東側北よりに位置し、7号土坑に切られる。遺構は現状、上面の平面形194×210cm、深さ最大約242cmを測る楕円形を呈する。埋土は、5層以下がにぶい黄褐色・にぶい黄橙色・にぶい橙色・橙色土と地山と非常に見分けのつきにくい土質であったため、遺構の壁面は底面に向かうにつれ掘り残してしまった。本来であれば、遺構の壁を検出したかったところだが、調査期間が押してきており、深さも深く掘るための足場を確保することが困難な状況となってしまうことから、底面が検出できた時点で掘削を止めることとした。なお、土層断面図を作成する時点では、深く狭く危険を伴うことから底面まで観察できていないが、その後も15層同様のなぶい橙色土が続いていた。埋土は、2層を除き基本水平堆積を呈しているが、6～9層の堆積状況から、10層まで堆積した後、一度土砂を取り除き、再度使用した可能性が想定出来よう。規模や埋土の堆積状況から、貯蔵穴として使用された可能性が高いと考えられる。埋土からは、2・3層を中心に残りの良い土器が数点まとまって出土している。20号土坑は丘陵頂部から緩やかな傾斜面へと変換する部分に立地することから、廃棄時にまとめて投げ入れた可能性が考えられようか。その他にも、多数の弥生土器が出土しており、石器も大型蛤刃石斧、砥石、紡錘車をはじめ石核・剥片・河原石も出土している。

#### 出土遺物（第27・28図、図版12・13・15・16）

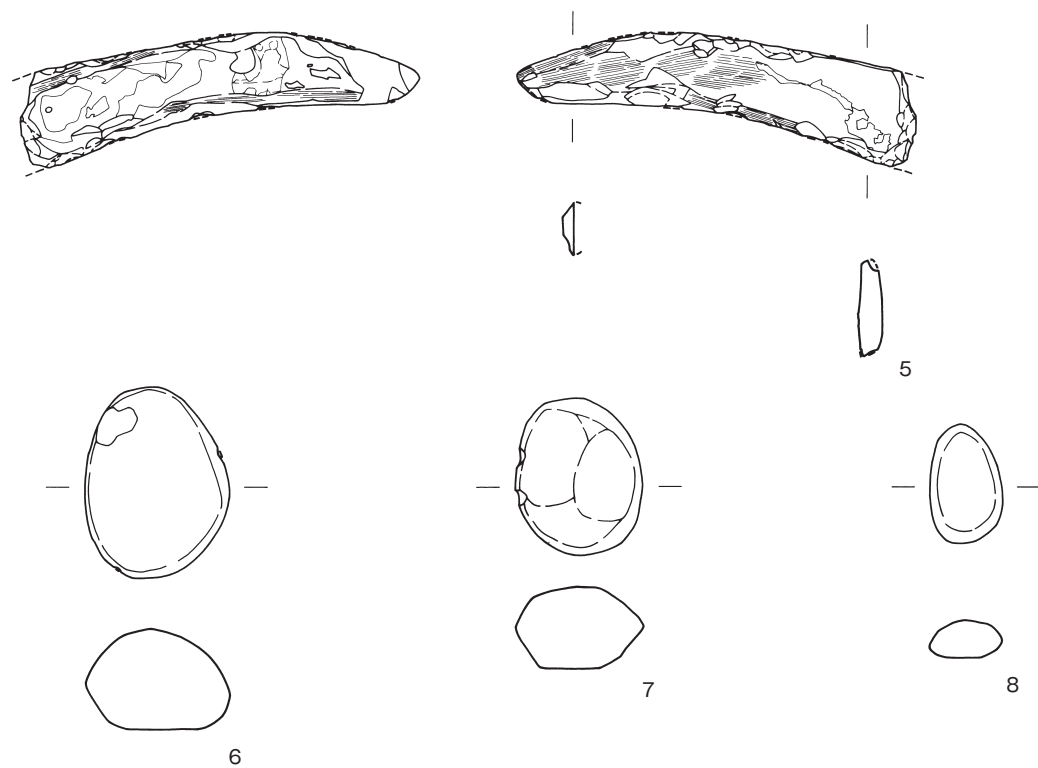
第27図8～21は弥生土器、第28図3～7は石器、第28図8は土製品であり、その内、第27図19は上層、第27図20・21と第28図4・5・8は下層より出土している。

第27図8～13は甕である。8・9は口縁部から胴部にかけて残存する小片である。8・9ともに口縁端部に刻目を施した如意口縁であるが、8はやや外湾気味に胴部へと伸びるのに対し、9は直線気味に胴部へと伸びる。8・9はともに外面にススが付着しており、8は内面胴部にコゲも付着している。10は口縁部から底部にかけて残存する。口縁端部に刻目が施された如意口縁を呈し、直立気味に胴部へと伸びたのち、やや直線気味の内斜で平底の底部へと至る。11～13は胴部から底部にかけての底部片であり、11・13は平底で、12はやや上げ底である。14は広口壺であり、口縁部から頸部にかけて残存する。素口縁からやや内湾状の頸部を呈する。15～18は壺であり、胴部から底部にかけての破片である。平底の底部から胴部に向かって大きく広がっ

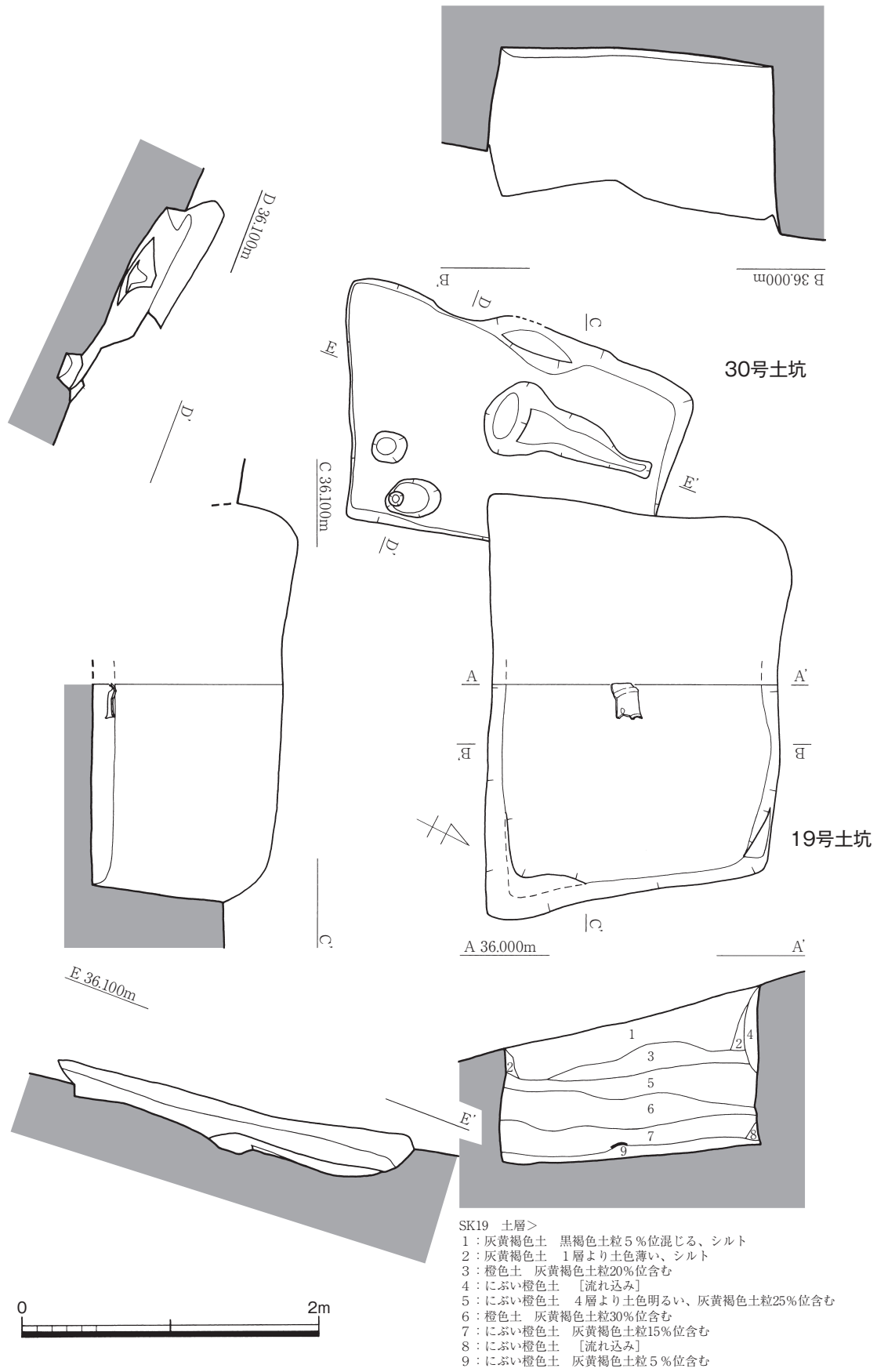


17号土坑

18号土坑

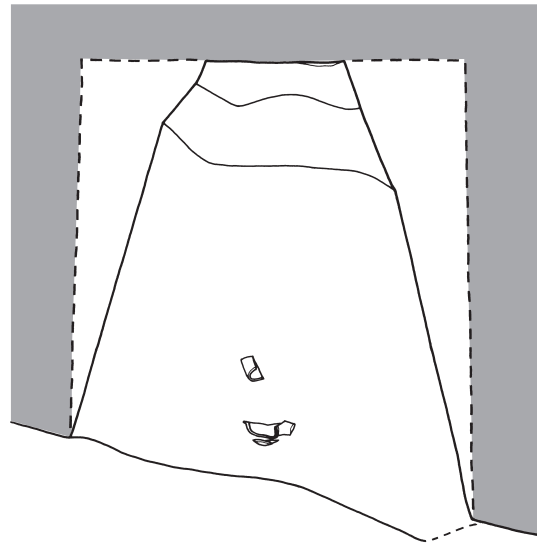


第 24 図 横隈狐塚遺跡 8 17号・18号土坑出土石器実測図 (1 : S=2/3、5 : S=1/4、その他 : S=1/2)

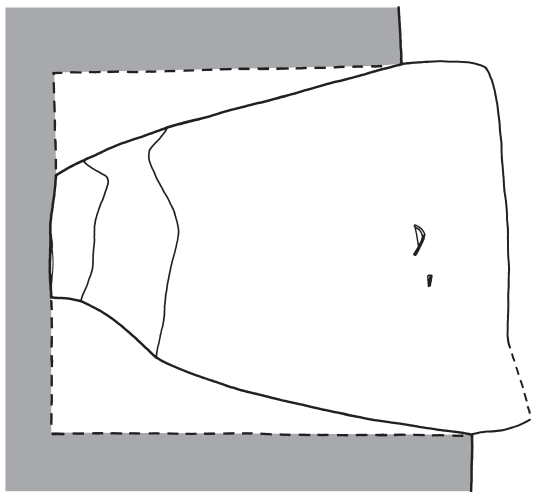


第25図 横隈狐塚遺跡8 19号・30号土坑遺構実測図 (S=1/40)



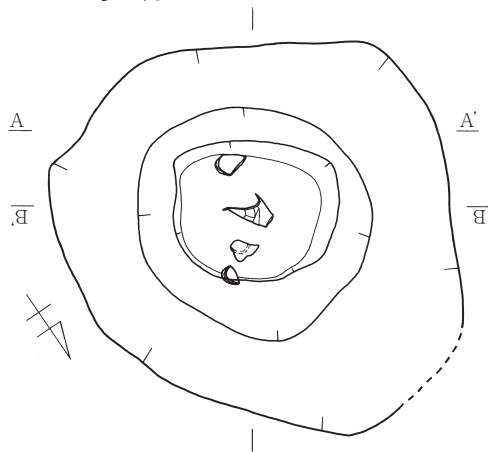


B 38.400m



20号土坑

38.400m

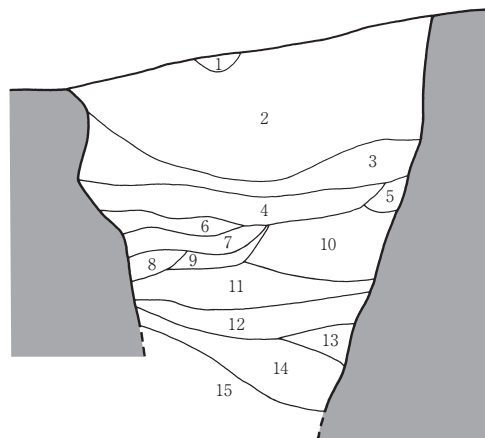


A 38.400m

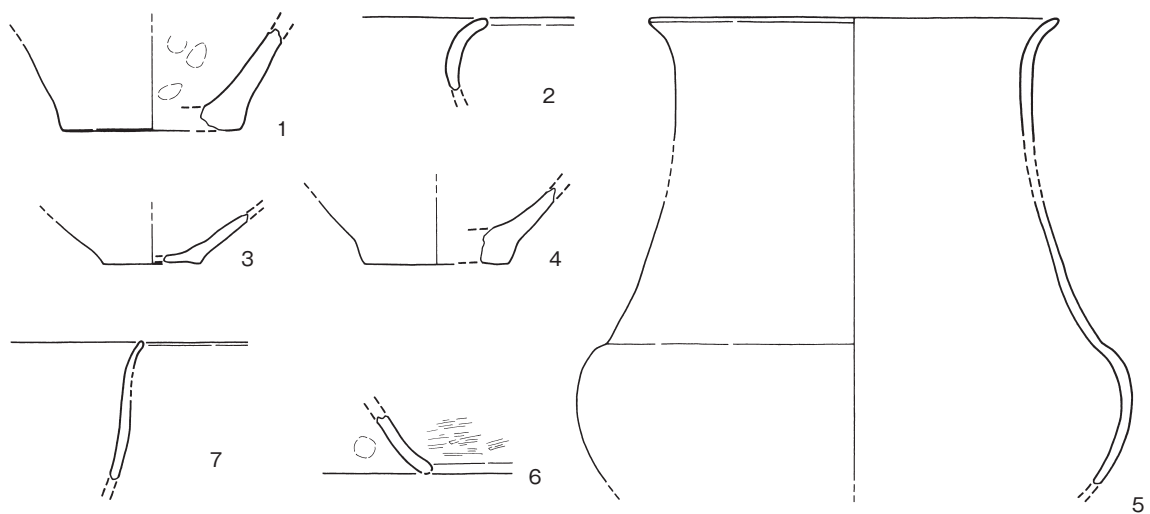
A'

<SK20 土層>

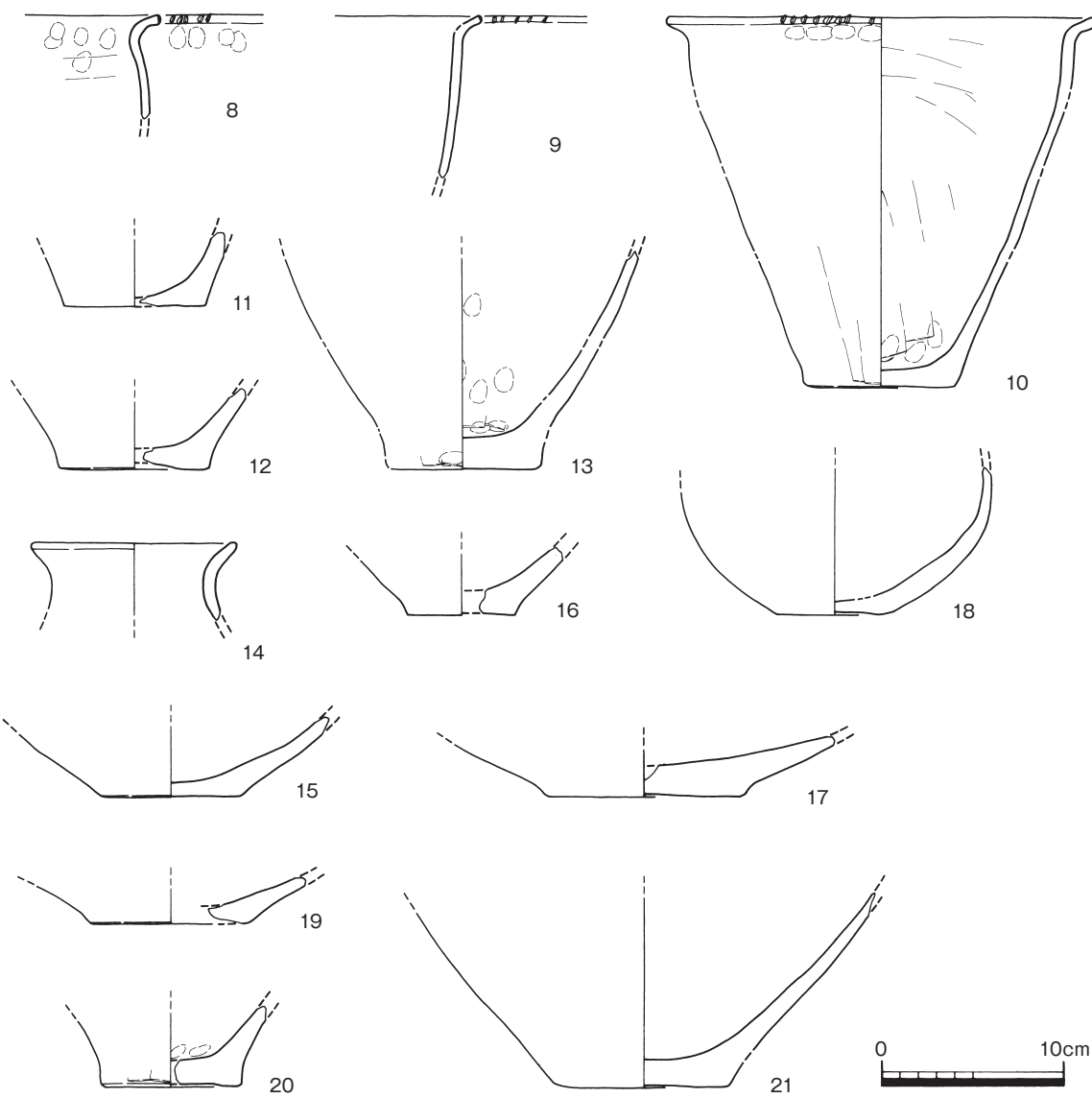
- 1: 黒褐色土 [ピット]
- 2: 灰黄褐色土 褐灰色土粒を20%位含む、黒褐色土粒5%位含む、シルト
- 3: にぶい褐色土 褐灰色土粒を15%位含む
- 4: 灰褐色土 にぶい橙色土粒10%位含む、シルト
- 5: にぶい褐色土 3層より土色が濃い、シルト
- 6: 橙色土 褐灰色土粒を10%位含む
- 7: にぶい黄褐色土 シルト、褐灰色土粒を5%位含む
- 8: 橙色土
- 9: にぶい黄褐色土 7層より土色が薄い、シルト
- 10: 橙色土 褐灰色土粒を15%位含む、シルト
- 11: にぶい黄褐色土 褐灰色土粒を20%位含む、シルト
- 12: 橙色土 褐灰色土粒を10%位含む、シルト
- 13: にぶい橙色土 砂層
- 14: 橙色土 褐灰色土粒を5%位含む
- 15: にぶい橙色土 褐灰色土粒を20%位含む



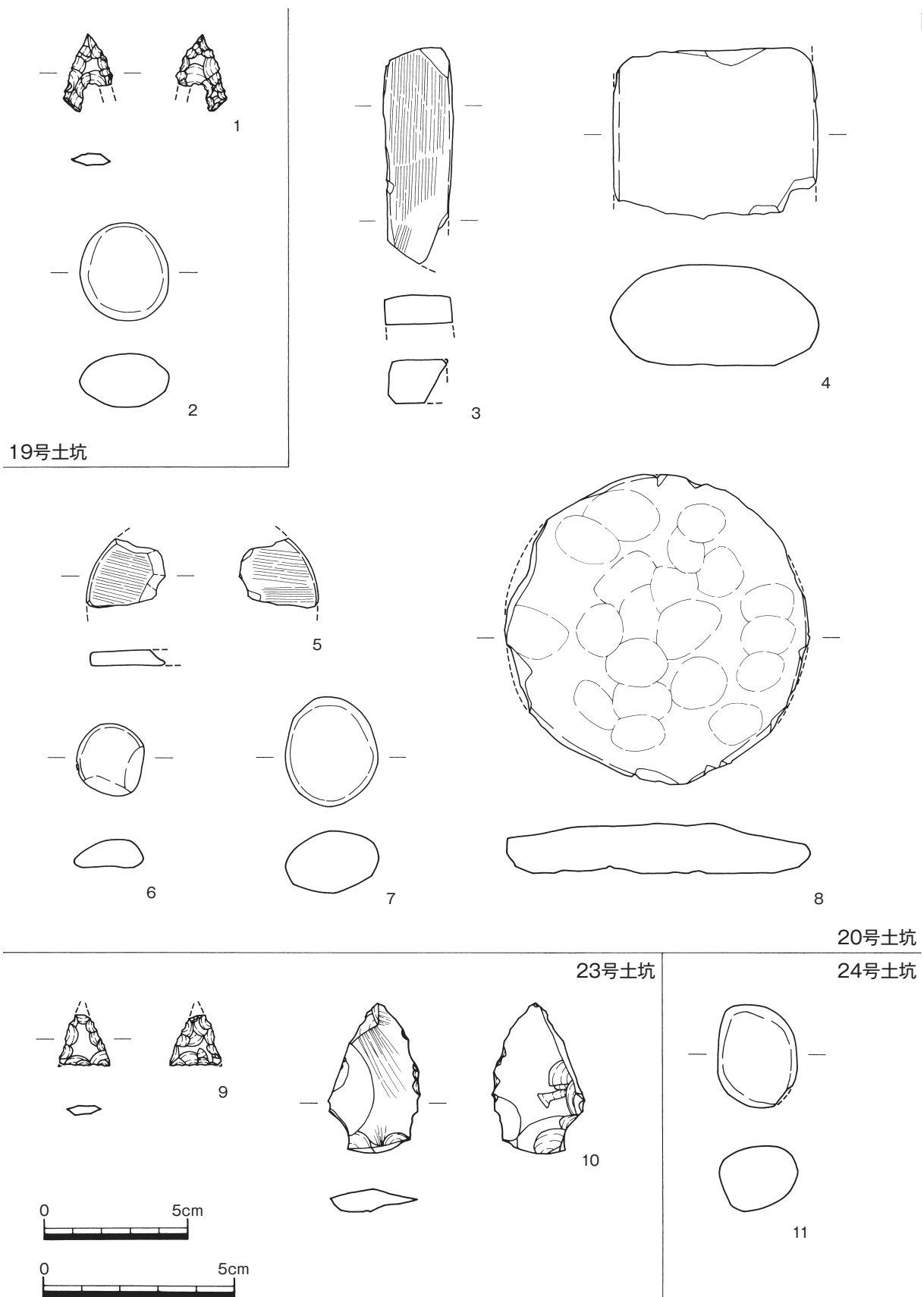
第 26 図 横隈狐塚遺跡 8 20号土坑遺構実測図 (S=1/40)



19号土坑  
20号土坑



第 27 图 横隈狐塚遺跡 8 19号・20号土坑出土土器実測図 (S=1/4)



ている。18は胴部から底部にかけて残存する。平底の底部から外湾気味に胴部へと広がり、口縁部に向かって直線的に伸びる。形態的特徴から、無頸壺の可能性が考えられる。第28図3は砥石である。欠損部位が多いが、砥面を1面確認している。6・7は投弾である。

次に、上層出土の土器についてである。第27図19は壺である。平底の底部から胴部に向かって大きく広がっている。

最後に、下層出土土器についてである。第27図20は甕である。胴部から底部にかけて残存し、底部はやや上げ底気味である。21は壺である。胴部から底部にかけて残存し、底部は平底である。

次に石器と土製品についてである。第28図4は石斧の小片である。刃や柄の部分は残存していなかったが、形態や他の遺構で出土した大型蛤刃石斧と石材の材質が酷似していたことから、大型蛤刃石斧と考えられよう。5は紡錘車の小片である。8は円盤状の土製品である。一面が平坦を意識している一方で、指圧痕を確認した面はやや中央に向かって隆起している点が特徴としてあがる。本遺跡と同じく三国丘陵に所在した近隣の遺跡からも同様の円盤状土製品が出土しているが、本遺跡のものと比べると規格が小さいことから、用途に関しては熟考が必要であろう。

出土遺物は、第27図10の甕を除けばいずれも小片であるが、上記の形態的特徴から、如意口縁の甕が出土していること、頸部が内湾する壺が出土していることなどを考慮すれば、相対的に弥生時代前期（板付Ⅱ式期）に位置づけられると考えられる。ただし、出土数が少なく小片の為、時期についての細分化は難しい状況である。

#### 21号土坑（第29図、図版8）

調査区中央に位置し、1号竪穴式住居に切られ、5号溝を切る。平面形は、現状159×168cmの楕円形を呈し、深さは最大約107cmを測る。

埋土からは、弥生土器や剥片が少量出土しているが、小片の為実測に至ったものは少ない。

#### 出土遺物（第31図）

第31図1は弥生土器の壺であり、口縁部から頸部にかけて残存する。口縁端部がやや丸みを帯びた素口縁から頸部に向かって緩やかに内湾している。

#### 22号土坑（第30図、図版8）

調査区西側南よりに位置し、24号土坑を切る。平面形は、現状138×131cmの隅丸方形を呈し、深さは最大約25cmを測る。24号土坑との埋土の境が不明瞭であったため掘りすぎてしまったが、南側と北側で深さが異なり、且つ、土層観察から南側の浅い面の最下層の堆積土が北側に向かって続いていることから、この層より上位が22号土坑に伴うものと判断するに至った。

埋土からは、弥生土器が数点出土したが、小片の為実測に至ったものは少ない。

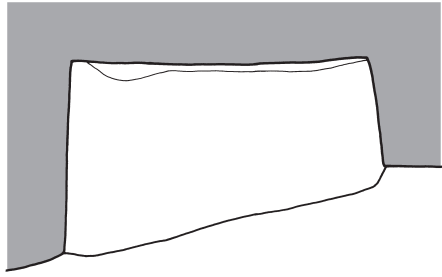
#### 出土遺物（第31図）

第31図2は弥生土器の壺であり、胴部から底部にかけて残存する。平底の底部から胴部に向かって大きく広がっている。

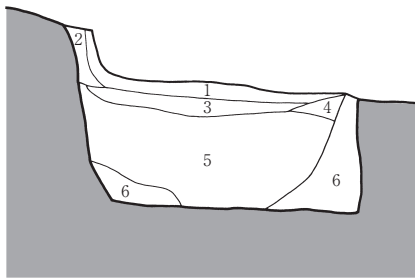
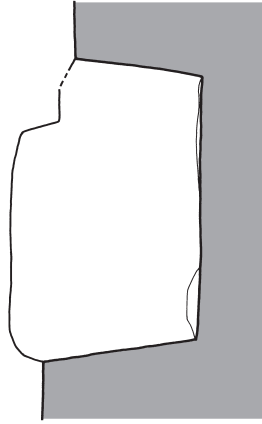
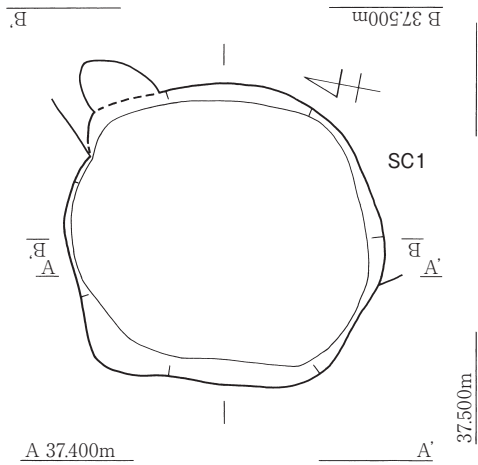
#### 23号土坑（第29図、図版8）

調査区西側北よりに位置し、3号竪穴住居に切られる。平面形は、現状168×208cmの隅丸長方形を呈し、深さは最大約90cmを測る。埋土は、2層において焼土混じりの堆積土を確認したほかは、基本水平堆積の様相を呈している。

埋土からは、甕を中心に弥生土器が出土し、石器は打製石鏃をはじめ石核・剥片が出土しているが、小片の為実測に至ったものは少ない。

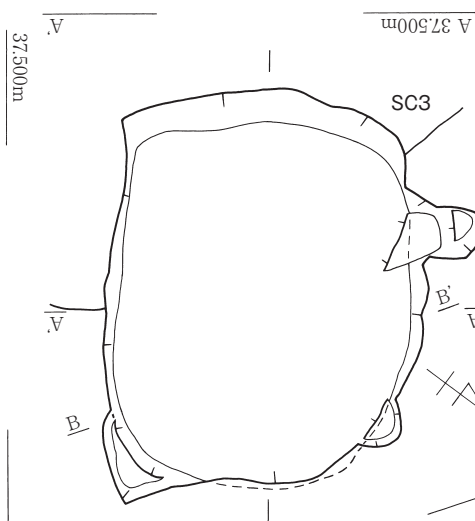


21号土坑



<SK21 土層>

- 1: にぶい橙色土 石含む、シルト
- 2: にぶい橙色土 1層より橙色の土色が濃い
- 3: にぶい橙色土 1層より土色明るく、2層より土色が薄い、シルト
- 4: にぶい橙色土 シルト
- 5: にぶい橙色土 2層より土色暗い、シルト、黒褐色土粒10%位混じる
- 6: 橙色土 黒褐色土粒10%位混じる、シルト、サクサクしている

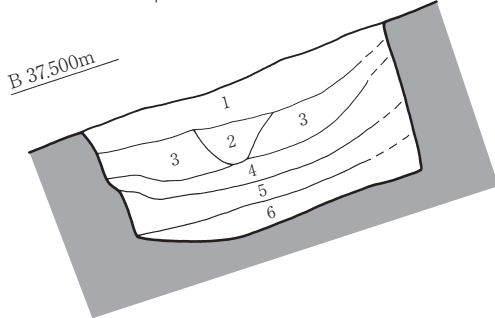


23号土坑

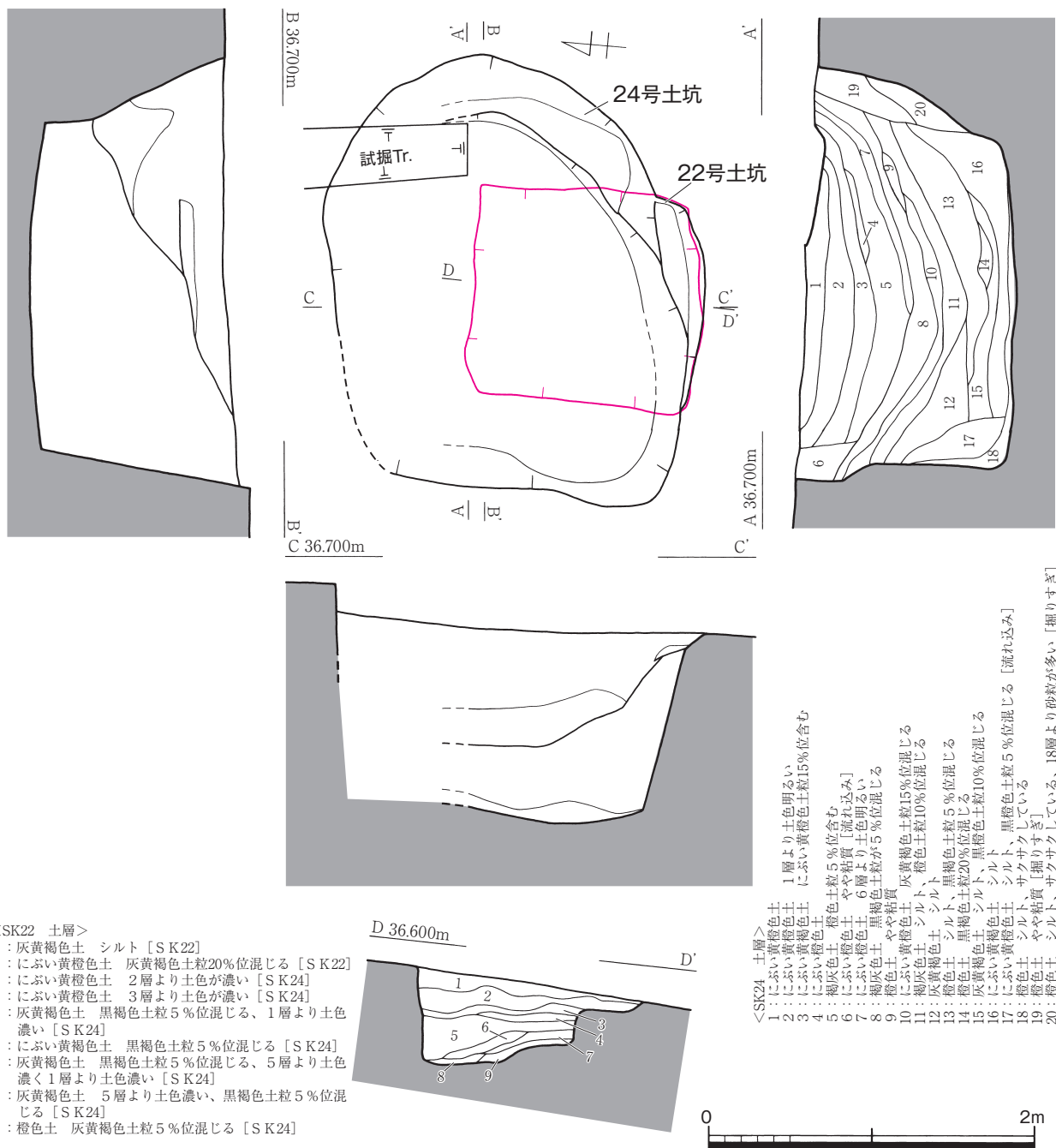


<SK23 土層>

- 1: 灰褐色土 シルト、土器片含む、黒褐色土粒5%位含む
- 2: 褐色土 焼土と黒褐色土粒10%位含む
- 3: 褐色土 2層より土色薄い、土器片含む、シルト
- 4: にぶい橙色土 6層より土色薄い、シルト、黒褐色土粒5%位含む
- 5: 褐色土 1層より土色濃い、黒褐色土粒15%位含む
- 6: にぶい橙色土 シルト、サクサクしている



第 29 図 横隈狐塚遺跡 8 21号・23号土坑遺構実測図 (S=1/40)

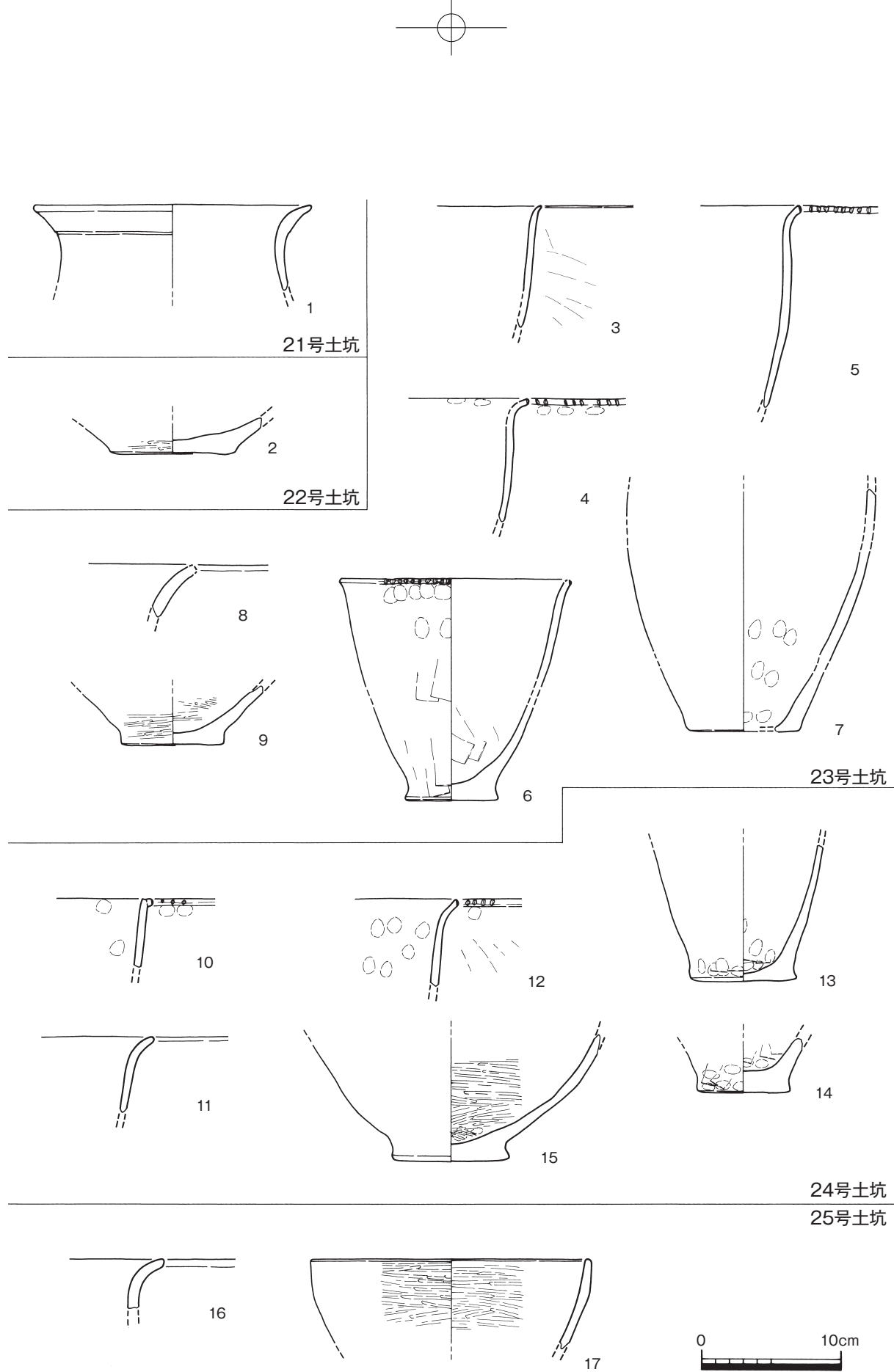


第30図 横隈狐塚遺跡8 22号・24号土坑遺構実測図 (S=1/40)

### 出土遺物 (第28・31図、図版14・16)

第31図3～9は全て弥生土器、第28図9・10は出土石器である。

第31図3～7は甕である。3～5は口縁部から胴部にかけて残存している。3は素口縁、4・5は口縁端部に刻目が施された如意口縁を呈し、胴部に向かって直線的に伸びる。3～5全ての外面にススの痕跡が見られる。6は口縁部から底部にかけて残存する。口縁端部に刻目が施された口縁部から砲弾状に胴部へと延び、やや外側へ突出した平底気味の肉厚の底部へと至る。外面にススの痕跡、内面胴部にコゲが見られる。また、底部外面には種子圧痕も確認できた。7は胴部から底部にかけて残存し、砲弾状の胴部が平底へと至る。外面胴部にススの痕跡、内面胴部にコゲが見られる。8・9は壺である。8は口縁部の小片であり、素口縁を呈する。9は胴部から底部にかけて残存し、やや肉厚の平底底部から胴部へと大きく広がる。



第31図 横隈狐塚遺跡8 21号・22号・23号・24号・25号土坑出土土器実測図 (S=1/4)

第28図9は打製石鏃であり、頂部が一部欠損している。石材は、安山岩である。10は小さな剥離面が石材の側面の先端を中心に数か所確認されたことから、打製石鏃の未製品であると考えられる。石材は黒曜石である。

出土遺物は、他の遺構と比べて残存率の良い甕が2点出土している。その他の上記に記した

出土遺物の形態的特徴を考慮するに、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相を中心とした一群と考えられよう。ただし、出土数が少なく小片の為、時期についての細分化は難しい状況である。

#### 24号土坑（第30図、図版8）

調査区西側南よりに位置し、22号土坑に切られる。なお、残念ながら調査期間の関係で半掘しかできなかった。平面形は、現状267×226cmの楕円形を呈し、深さは最大約142cmを測る。土坑東壁面は東側方向へ掘りすぎてしまった。埋土は、レンズ状堆積である点が他の土坑の様相と異なるが、土質がにぶい黄橙色や橙色をベースとした地山に類似した土が堆積していることから、貯蔵穴として使用された可能性が考えられる。

埋土からは、甕を中心に弥生土器が出土し、石器は投弾や剥片が少量出土している。

#### 出土遺物（第31図、図版12・16）

第31図10～15は弥生土器、第28図11は石器である。その内、第31図12は下層、第31図13～15は最下層より出土している。

第31図10・11は甕であり、口縁部から胴部にかけて残存する小片である。10は口縁部に突帯を貼り付け、その部位に刻目を施し、胴部に向かって直線的に伸びる。11は緩い如意口縁から内斜気味に胴部に向かって伸びる。第28図11は投弾である。

次に、下層出土の土器についてである。第31図12は甕であり、口縁部から胴部にかけて残存する小片である。口縁端部に刻目が施された如意口縁であり、直線気味に胴部へと伸びる。

最後に、最下層出土の土器についてである。第31図13・14は甕であり、胴部から底部にかけて残存する。13は砲弾状の胴部からやや外側に突出気味の平底へと至る。外面胴部には薄くススの痕跡が見られる。14もやや外側に突出気味の平底を呈する。15は壺であり、胴部から底部にかけて残存する。平底の底部から外に大きく広がる胴部を呈する。

出土遺物はいずれも小片であるが、上記の形態的特徴から、如意口縁の甕が出土していることなどを考慮すれば、相対的に弥生時代前期（板付Ⅱ式期）に位置づけられると考えられる。第31図10の甕のように口縁端部に貼り付けた突帯に刻目を施しているものが混じることから、他の遺構と比べてやや古い様相を呈している可能性が想定できよう。

#### 25号土坑（第32図、図版9）

調査区西側北よりに位置し、3号竪穴式住居跡に切られる。平面形は、現状154×130cmの楕円形を呈し、深さは最大約50cmを測る。埋土は、1層が3号竪穴式住居跡に伴うピットの可能性が高いほかは、基本的に水平堆積を呈している。当初は、土層断面図のように4層が最下層と想定していたが、半掘した際に、砥石（第33図1）が出土したことから、砥石の底面の高さまで少なくとも土坑の底面が下がることがわかったため、その面まで掘り下げを行った。この砥石が出土したのは、にぶい橙色土のサクサクと掘れる層である。

埋土からは、弥生土器をはじめ、石器として砥石を含む石核や剥片が少量出土している。

#### 出土遺物（第31・33図、図版12・13）

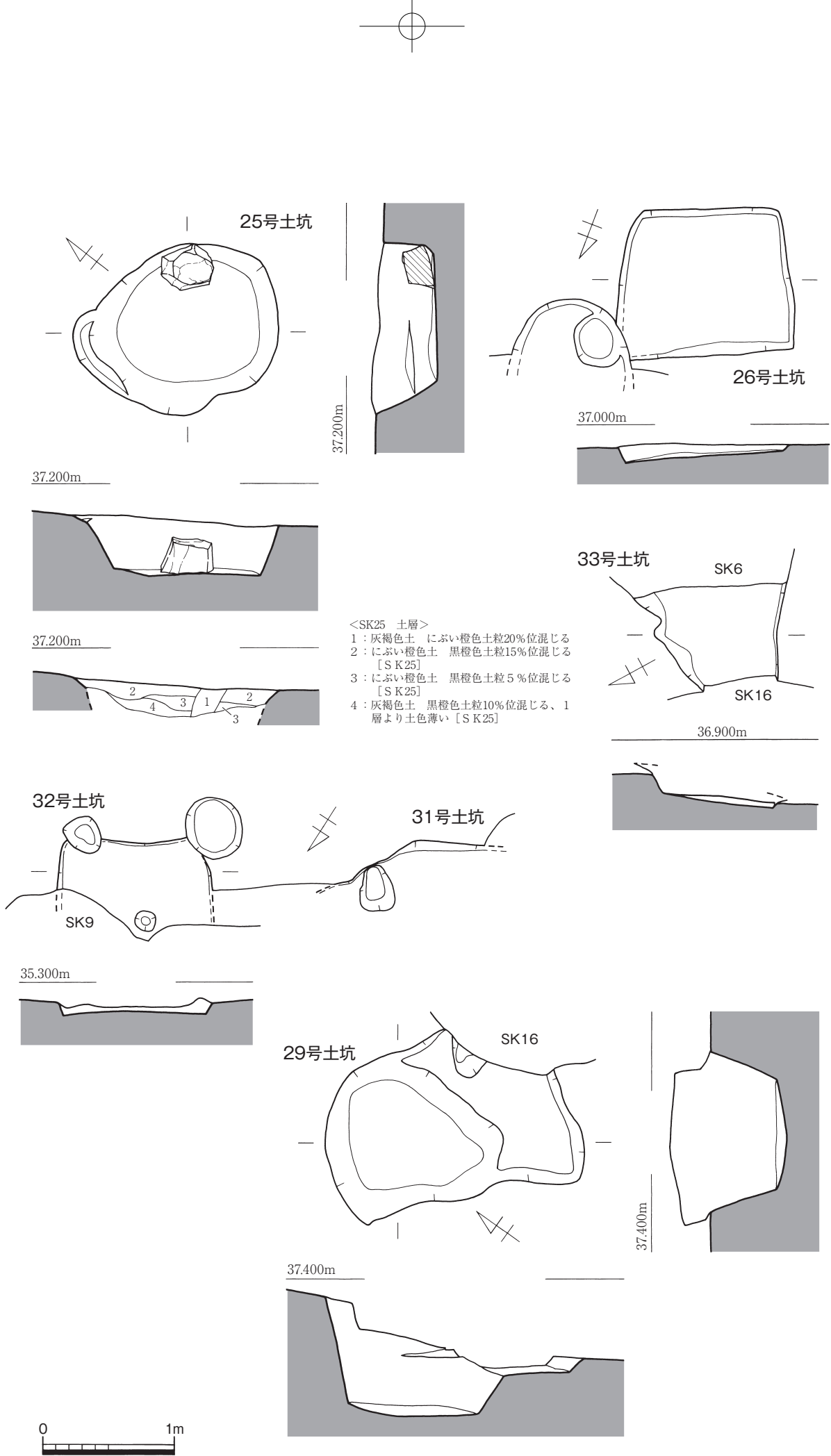
第31図16・17は弥生土器、第33図1は砥石である。

第31図16は壺であり、口縁部から頸部にかけて残存する小片である。素口縁から頸部に向かって内湾した後、直線気味に胴部へと伸びる。17は鉢であり、口縁部から胴部にかけて残存する。素口縁から胴部に向かってやや外湾気味に伸びる。内面には黒色顔料が塗布されている可能性が考えられる痕跡が見受けられる。

第33図1は砥石である。縦37.3cm×横38.8cm×幅22.8cm、重さ40,200gと規格が大きいことから、地面に据えて使用したと考えられる。

出土遺物はいずれも小片であるが、上記の形態的特徴から、如意口縁の甕が出土していることなどを考慮すれば、相対的に弥生時代前期（板付Ⅱ式期）に位置づけられると考えられる。ただし、出土数が少なく小片の為、時期についての細分化は難しい状況である。





第 32 図 横隈狐塚遺跡 8 25号・26号・29号・31号・32号・33号土坑遺構実測図 (S=1/40)

## 26号土坑（第32図）

調査区西側北よりに位置し、3号竪穴式住居跡に切られる。平面形は、現状130×111cmの隅丸方形を呈し、深さは最大約11cmを測る。

埋土からは、弥生土器が数点出土したが、小片の為実測に至らなかった。

## 28号土坑（第34図、図版9）

調査区中央北よりに位置し、1号竪穴式住居跡に切られる。なお、残念ながら調査期間の関係で半掘しかできなかった。現状の平面形は、上面237×134cmの長方形を呈し、深さは最大約223cmを測る。埋土は、4・5・19・20・21層で上面から下面に向かって流れ込みと捉えられる層位を確認できている。埋土は、8～17層にかけて南側から北側へと流れ込む層を確認しているが、基本、水平堆積と捉えられよう。土質が、にぶい黄橙色や橙色をベースとした地山に類似した土が堆積していることから、貯蔵穴として使用された可能性が考えられる。

埋土からは、弥生土器を中心に、石器では打製石鏃、扁平片刃石斧、投弾をはじめ剥片や河原石も多数出土している。特に、土器は下層を中心にまとまって出土している。

## 出土遺物（第33・35図、図版13・14・16）

第35図1～7は弥生土器であり、第33図2・3は石器である。その内、1～6は下層、7は最下層より出土している。

まず、下層出土土器についてである。第35図1～4は甕である。1は口縁端部に刻目が施された如意口縁が直線気味に胴部へと伸びている。外面にはススが付着している。2～4は胴部から底部にかけて残存する底部片であり、2・4は上げ底気味の平底、3は平底である。2～4は全て外面にススの痕跡が見られ、その内2・3では外面底部に種子圧痕が残る。5・6は壺であり、胴部から底部にかけて残存する。平底気味の底部から外側に大きく広がりながら胴部へと伸びる。

次に、最下層出土土器についてである。第35図7は甕であり、胴部から底部に向かって残存する破片で、底部は平底である。外面にはススが付着している。

最後に石器である。第33図2は、打製石鏃であり、石材は安山岩である。3は投弾である。

出土遺物はいずれも小片であるが、上記の形態的特徴から、如意口縁の甕が出土していることなどを考慮すれば、相対的に弥生時代前期（板付Ⅱ式期）に位置づけられると考えられる。ただし、出土数が少なく小片の為、時期についての細分化は難しい状況である。

## 29号土坑（第32図、図版9）

調査区東側北よりに位置し、2号竪穴式住居跡と10号・16号土坑に切られる。平面形は、現状196×123cmの隅丸長方形を呈し、深さは最大約89cmを測る。

埋土からは、弥生土器が数点出土したが、小片の為実測に至らなかった。

## 30号土坑（第25図、図版10）

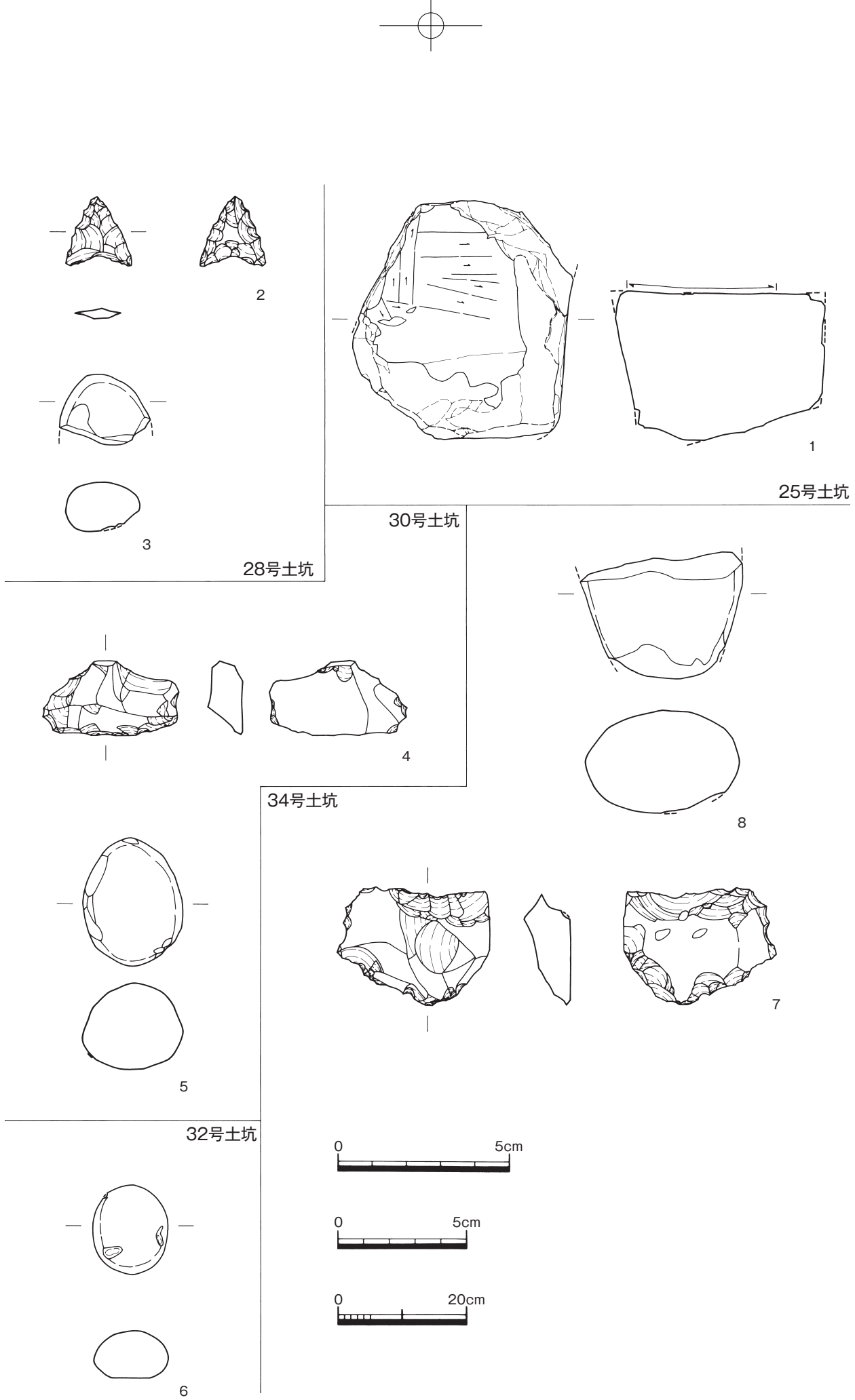
調査区中央南よりに位置し、19号土坑に切られる。平面形は、現状228×148cmの隅丸長方形を呈し、深さは最大約53cmを測る。隣接する19号土坑と比較し、深さが浅く、ピットによる掘り込みを数基確認しており、様相が異なる。

埋土からは、弥生土器数点と石匙、投弾が出土している。

## 出土遺物（第33・35図、図版14・16）

第35図8・9は弥生土器、第33図4・5は石器である。

第35図8・9は壺であり、胴部から底部にかけて残存する。どちらも平底の底部から胴部に向かって外側に大きく開く。



第33図 横隈狐塚遺跡8 25号・28号・30号・32号・34号土坑出土石器実測図  
 (1: S=1/8、2: S=2/3、その他: S=1/2)

第 33 図 4 は石匙である。つまみ部が欠損しているが、刃の部分に小さな剥離面が見られる。全体的に剥離の面が少ないことから未製品の可能性も想定されよう。5 は投弾である。

### 31 号土坑（第 32 図、図版 10）

調査区東側北よりに位置し、17 号・18 号土坑に切られる。平面形は、現状 100 × 34cm で、17 号・18 号土坑に大きく切られていることから、平面形状を表現することは困難である。

出土遺物は発見できなかった。

### 32 号土坑（第 32 図、図版 10）

調査区東側北よりに位置し、9 号・17 号土坑に切られる。平面形は、現状 118 × 65cm で、隅丸長方形を呈すると考えられる。また、土坑内の南側壁面の各コーナ部分に置いて、ピットを確認しているが、32 号土坑に伴うものかどうかについては確証を得られなかった。

埋土からは、投弾が 1 点出土している。

### 出土遺物（第 33 図、図版 16）

第 33 図 6 は投弾である。

### 33 号土坑（第 32 図、図版 11）

調査区東側北よりに位置し、6 号・16 号土坑に切られる。平面形は、現状 92 × 73cm で、隅丸長方形を呈すると考えられる。

出土遺物は発見できなかった。

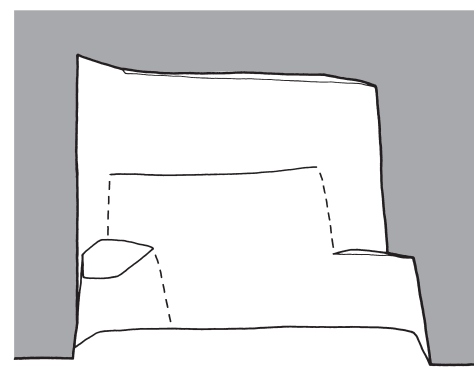
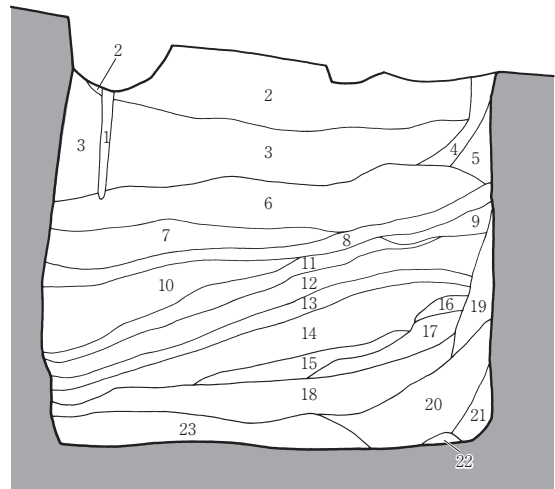
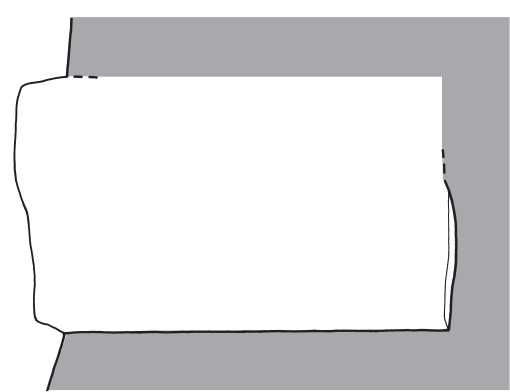
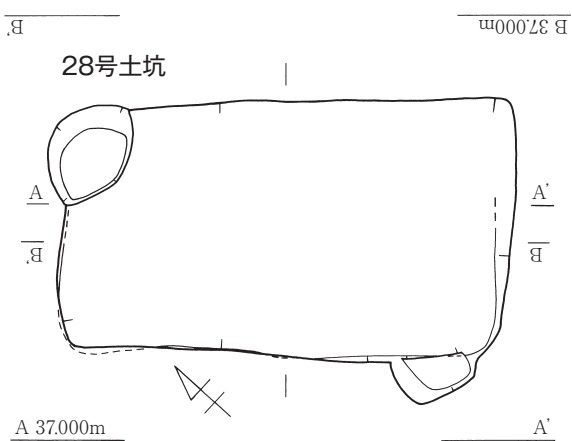
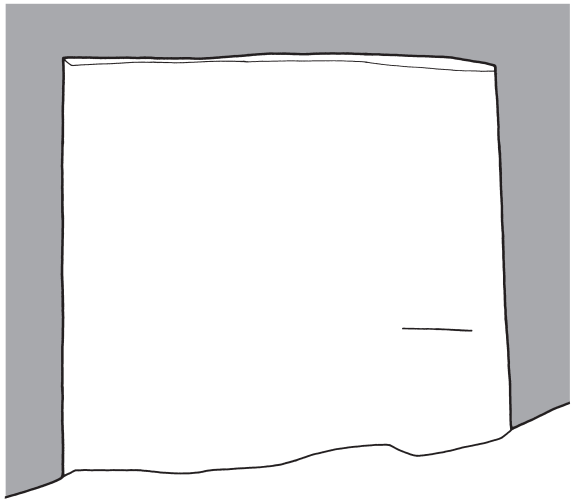
### 34 号土坑（第 34 図、図版 10）

調査区中央よりに位置する。遺構は 2 段掘りになっており、現状の平面形は、上面 187 × 117cm、中段掘り込み面 152 × 117cm、底面の平面形 150 × 96cm、深さ最大約 164cm を測る隅丸長方形を呈する。遺構の西側では、2 段掘りの最初の掘り込みの方角と次の掘り込みの方角が少しずれたことから、テラスが形成されている。遺構の規模や形状より、貯蔵穴として機能していた可能性が想定される。埋土は、最下層で橙色土の粘質土が 5 ～ 10cm 体積し、この直下で地山である明黄橙色砂層を検出した。

埋土からは、弥生土器が数点出土しているが、どれも小片の為実測に至らなかった。石器は、大型蛤刃石斧やスクレイパーをはじめ石核や河原石も出土しているが、実測に至ったものは少ない。

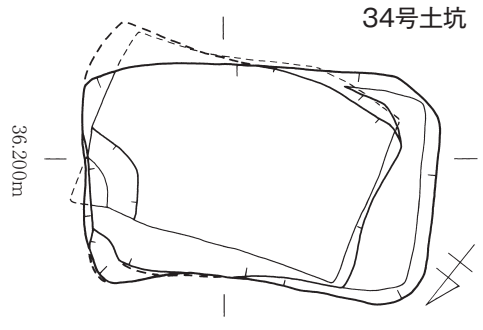
### 出土遺物（第 33 図、図版 14・15）

第 33 図 7 は石材の側面先端を中心とした剥離面が少ないものの、その刃先の鋭さからスクレイパーと考えられ、石材は安山岩である。8 は大型蛤刃石斧の刃の小片である。



36.200m

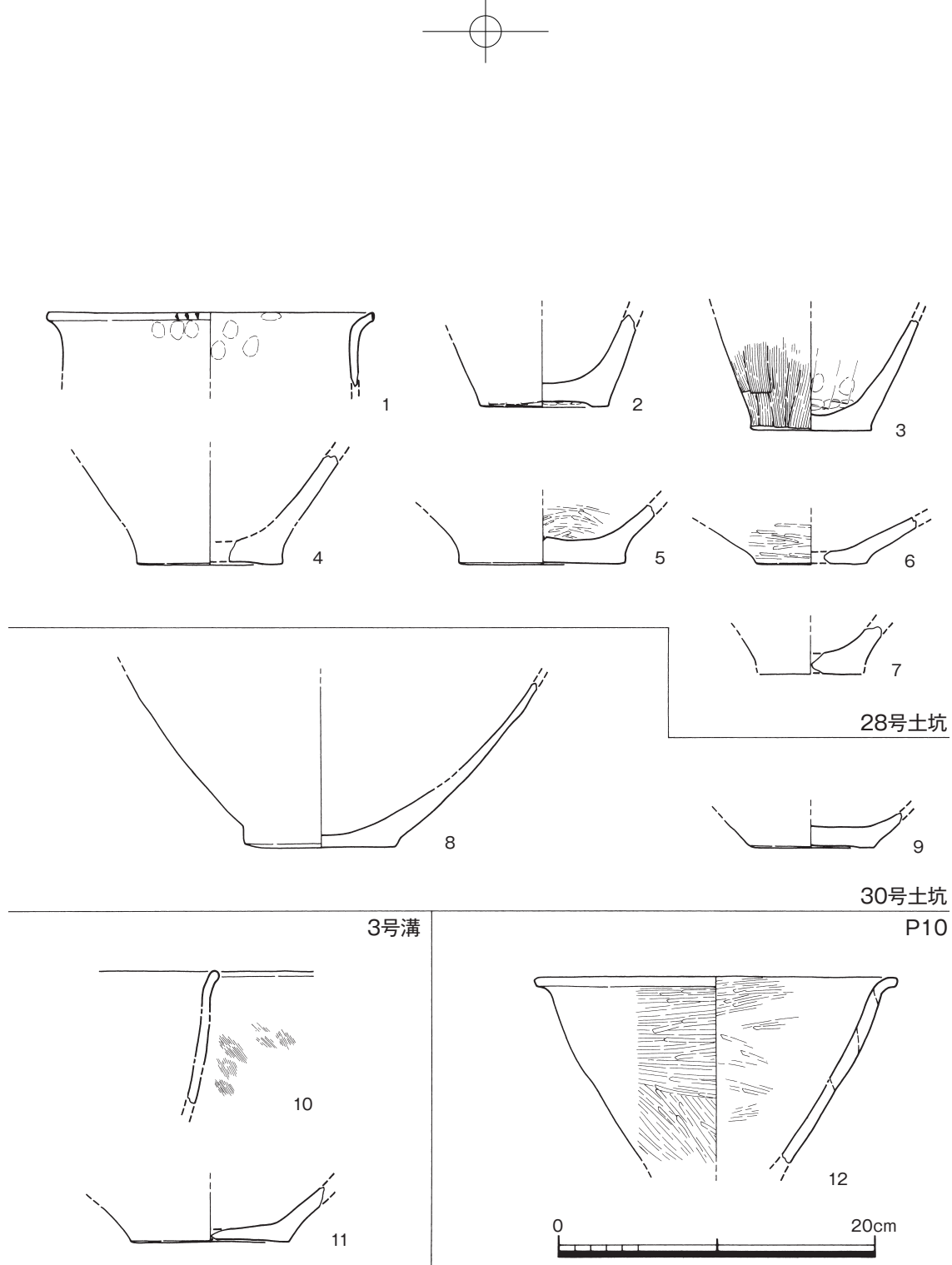
34号土坑



<SK28 土層>

- 1: 黒褐色土 [根]
- 2: 褐灰色土
- 3: にぶい橙色土 黒褐色土粒5%位含む
- 4: にぶい黄褐色土
- 5: にぶい黄褐色土 4層より土色は黄色味が強い
- 6: にぶい褐色土 黒褐色土粒5%位含む
- 7: にぶい赤褐色土 黒褐色土粒10%位含む
- 8: 灰黄褐色土 黒褐色土粒10%位含む
- 9: にぶい黄褐色土 12層より黄色味強い
- 10: にぶい橙色土 黒褐色土粒5%位含む
- 11: 橙色土 黒褐色土粒5%位含む
- 12: にぶい黄褐色土 黒褐色土粒10%位含む
- 13: にぶい黄褐色土 12層より黄色味強い[9層と同じ]
- 14: にぶい橙色土 黒褐色土粒5%位含む[10層と同じ]
- 15: にぶい黄褐色土 黒褐色土粒5%位含む
- 16: にぶい黄褐色土 15層より橙色味強い
- 17: 灰黄褐色土 黒褐色土粒10%位含む
- 18: にぶい橙色土 黒褐色土粒5%位含む、土器片含む
- 19: にぶい黄褐色土 20層より黄色味強い
- 20: にぶい黄褐色土 黒褐色土粒10%位含む橙色土 [12層と同じ]
- 21: にぶい橙色土 黒褐色土粒わずかに含む
- 22: 褐色土 粘質
- 23: にぶい褐色土 黒褐色土粒10%位含む

第34図 横隈狐塚遺跡8 28号・34号土坑遺構実測図 (S=1/40)



第 35 図 横隈狐塚遺跡 8 28 号・30 号土坑、3 号溝、P10 出土土器実測図 (S=1/4)

### 3. 溝【SD】

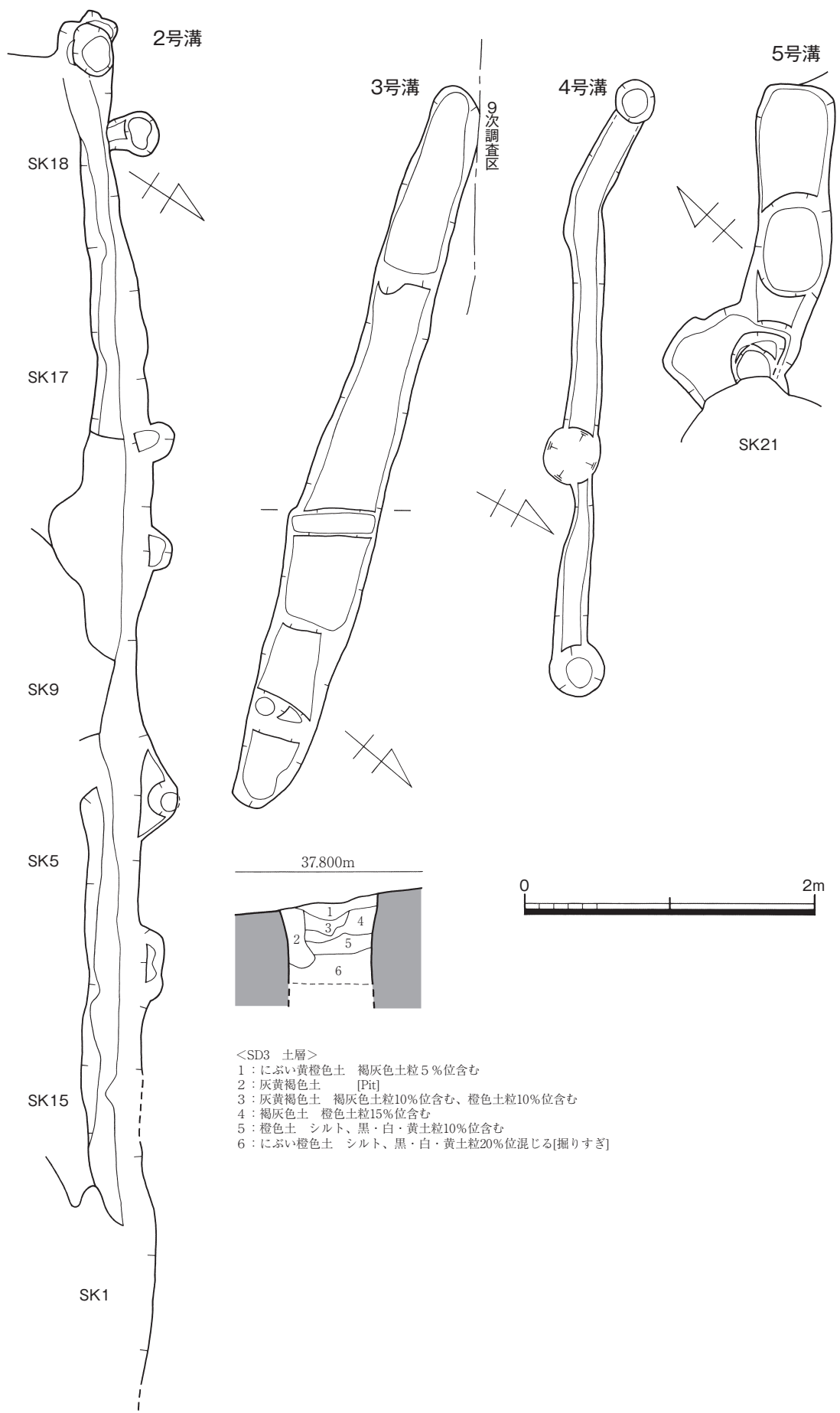
#### 2 号溝 (第 36 図、図版 11)

調査区中央南よりに位置し、1 号・5 号・7 号・9 号・15 号・17 号・18 号土坑に切られる。現状で全長約 8.35 m、幅約 25 ~ 36cm、深さ最大約 58cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。北側の上面ではピット状の掘り込みを確認しているが、土坑と溝のどちらに伴うか判然としない。

埋土からは、打製石鏟が 1 点出土した他は、剥片のみであった。

#### 出土遺物 (第 37 図、図版 14)

第 37 図 1 は、打製石鏟であり、石材は安山岩である。



第36図 横隈狐塚遺跡8 2号・3号・4号・5号溝遺構実測図 (S=1/40)

### 3号溝（第36図）

調査区西側北よりに位置し、調査区外へと延びる。現状で全長約5.14m、幅約43～55cm、深さ最大約40cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土と地山の土が非常に類似していたため一部掘り過ぎてしまったところがあるが、土層断面図観察より、6層から地山と考えられることがわかった。

埋土からは、弥生土器が数点と投弾が数点、そのほか剥片が出土している。

#### 出土遺物（第35・37図、図版16）

第35図10・11は弥生土器、第37図2・3は石器である。

第35図10は甕であり、口縁部から胴部にかけての小片である。緩い如意口縁から胴部に向かって直線気味に伸びている。11は壺であり、胴部から底部にかけて残存する。平底から胴部に向かって大きく外側に開く。

第37図2・3は投弾である。

出土遺物はいずれも小片であるが、上記の形態的特徴から、如意口縁の甕が出土していることなどを考慮すれば、相対的に弥生時代前期（板付Ⅱ式期）に位置づけられると考えられる。ただし、出土数が少なく小片の為、時期についての細分化は難しい状況である。

### 4号溝（第36図、図版11）

調査区中央北よりに位置する。現状で全長約4.32m、幅約14～23cm、深さ最大約17cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。溝の始点・終点にはピットがあり、溝の途中も根により一部壊されている。

埋土からは、弥生土器が数点出土しているが、小片の為実測に至らなかった。

### 5号溝（第36図、図版11）

調査区中央北よりに位置し、1号竪穴式住居跡と21号土坑に切られる。現状で全長約2.02m、幅約50～55cm、深さ最大約31cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。溝としては短く、1号竪穴式住居跡の東西軸の幅に合わせて溝が掘られている点、また、溝の底面において隆起が多々生じていることから、1号竪穴式住居跡に関する掘り込みという可能性も想定できよう。なお、西側の21号土坑と接する部分においてピット状の掘り込みを確認している。

埋土からは、弥生土器が数点出土しているが、小片の為実測に至らなかった。

## 4. ピット【P】

調査区域内において、20基のピットを確認した。その内、遺物が出土したピットは20基あるが、実測に耐えうる資料が出土したのはP10の1点のみである。なお、P10は5号溝を切るように直上で検出したため、遺構配置図に地点を記することができなかった。

#### 出土遺物（第35図、図版13）

第35図12は甕であり、口縁部から胴部にかけて残存する。水平傾向の強い如意口縁からやや内斜気味の直線に伸びる胴部を呈する。

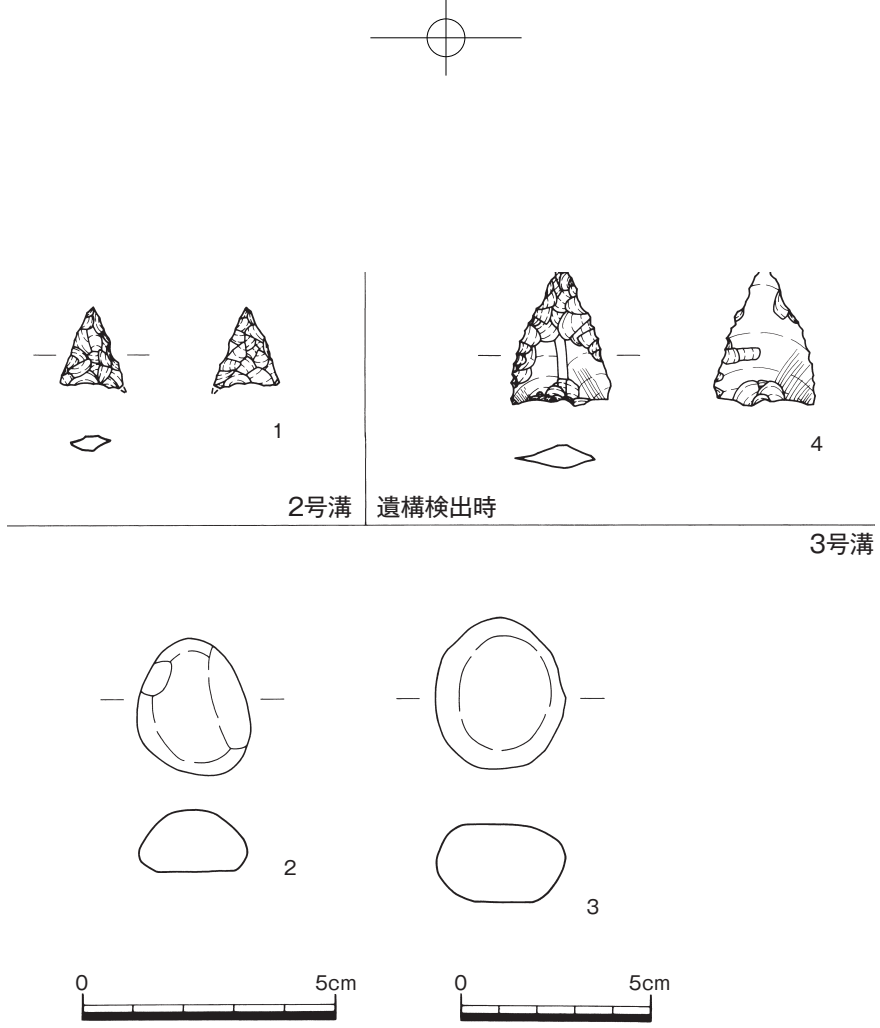
## 5. その他

調査区域内が丘陵の傾斜部に位置しており、調査期間がちょうど梅雨等大雨の時期にあっていたこともあってか、雨上がり時には、斜面の下側を中心に打製石鏃や剥片が検出されることが多々あった。その中で、状態の良い打製石鏃を報告する。

#### 出土遺物（第37図、図版14）

第37図4は打製石鏃であり、石材は黒曜石である。





第37図 横隈狐塚遺跡8 2号・3号溝、遺構検出時出土石器実測図  
 (1・4 : S=2/3、2・3・5 : S=1/2)

## 第5章 横隈狐塚遺跡9 遺跡の概要

横隈狐塚遺跡9は、三国丘陵の頂部から西側・南側へと下る標高37.2～38.8mの丘陵頂部から斜面上に位置する。表土を剥ぐ際の重機の搬入・搬出路確保のため、調査区を東側調査区と西側調査区に分けて調査を実施した。東側調査区は、東西約25m×南北約16.6mの三角形の範囲であり、西側調査区は、東西約2.6m×南北約16.6mの台形状の範囲である。なお、西側調査区の西端には、丘陵を南北方向に削ることで最近まで使用されていたと推察される小道が築かれており、この小道に向かって丘陵が段落ちしていた。よって、この小道の東側上端を西側調査区の西端として設定した。遺構検出面まで深さは、本調査前に実施した試掘調査の結果、現地表面から約25cm下の高さで確認されており、8次調査区に比べ丘陵頂部であるためか若干浅い。しかし、9次調査区の西側調査区は、調査地の大部分において遺構を検出したこともあり、若干深めに表土を剥ぎすぎてしまった。そのため、37.2mの等高線が丘陵をめぐるように回らなかったが、本来は37.4mの等高線と同様に、北西側方向へと巡ったと考えられる。

層位は、地表面より、灰褐色土、さらに黒褐色土や暗茶褐色土が体積した後、その下より遺構検出面であるにぶい黄橙色土や橙色土、明黄橙色砂の地山を検出した。なお、明黄橙色砂の地山は、貯蔵穴など1.5m以上の深さのある遺構の床面で検出していることから、本来はにぶい黄橙色土や橙色土の下層に堆積している層と考えられよう。

出土遺構は、竪穴式住居跡5基、土坑35基（貯蔵穴5基、土壙墓2基含む）、溝1条、その他ピットを検出した。遺構配置として、竪穴式住居跡が調査区西側に、貯蔵穴が調査区東側に集中する傾向がうかがえる。

出土遺物は、8次調査区と同様に弥生土器を中心に石器を多数発見した。また、8号土坑から、碧玉製管玉1点が出土している点は特筆に値する。

横隈狐塚遺跡9で検出した遺構・遺物は以下のとおりである。

### ●遺構

- ・竪穴式住居跡5基
- ・土坑35基（貯蔵穴5基、土壙墓2基含む）
- ・溝1条
- ・ピット

### ●遺物

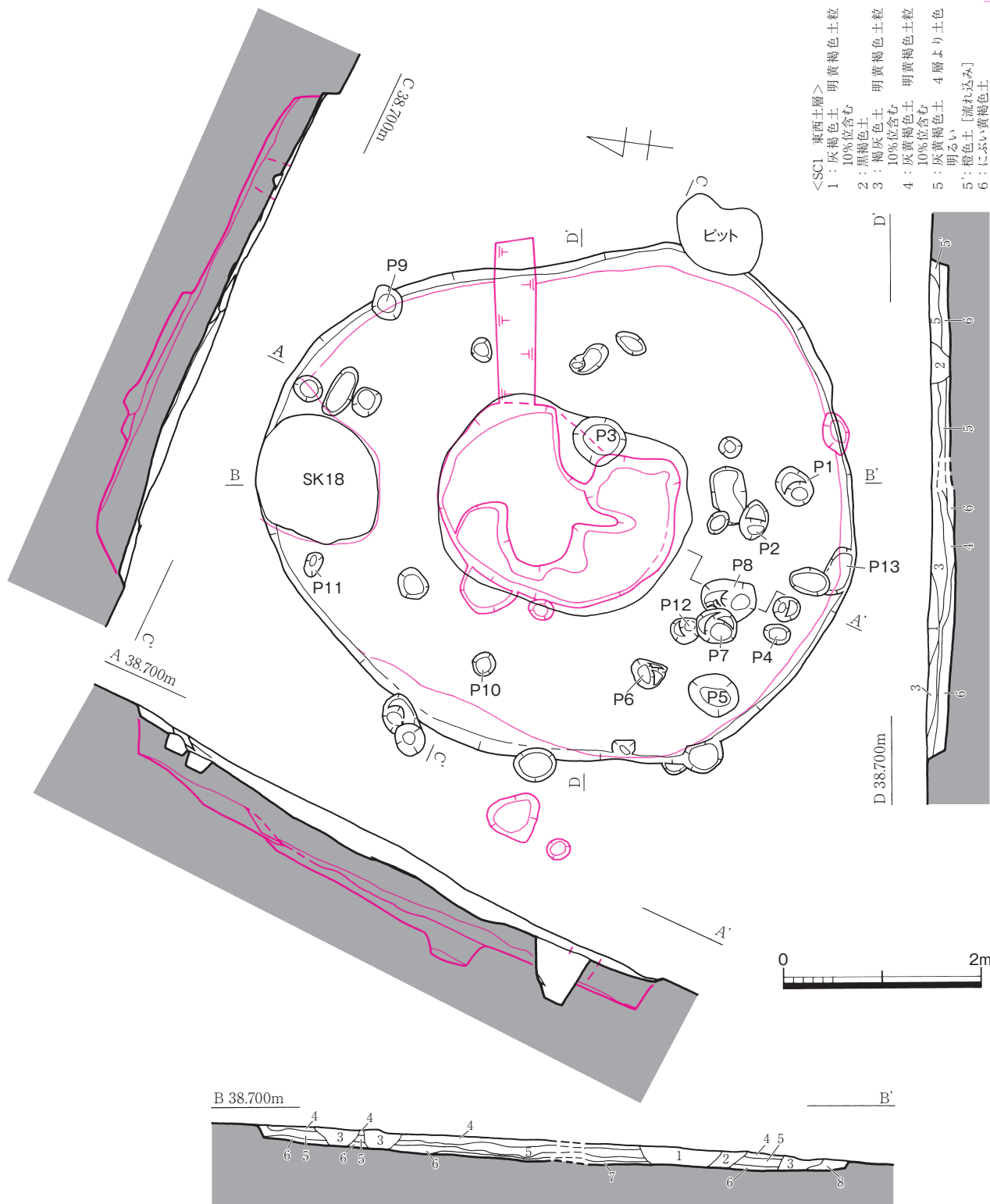
- ・弥生土器
- ・石器
- ・土製品
- ・管玉

## 第6章 横隈狐塚遺跡9 遺構と遺物

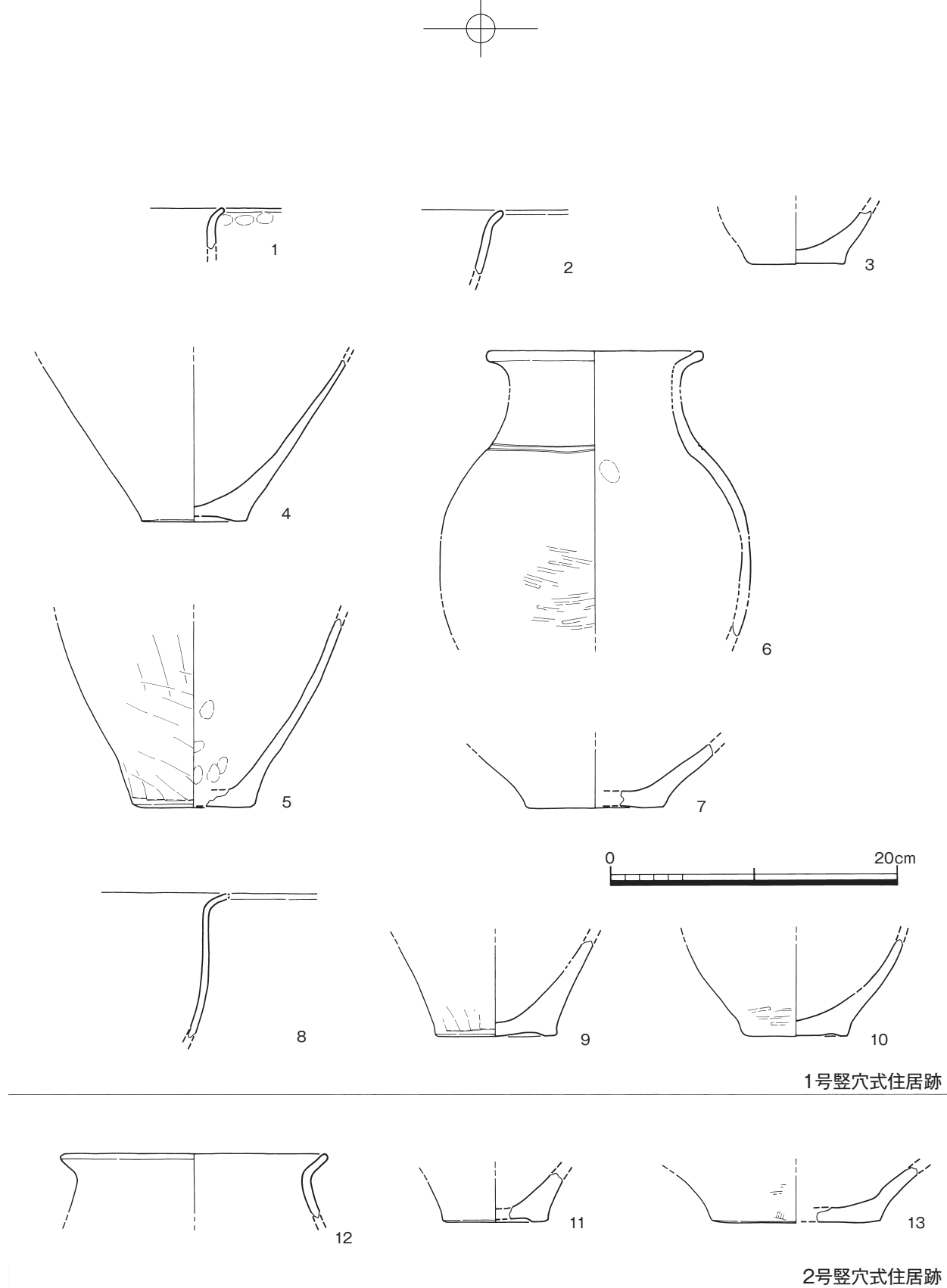
### 1. 竪穴式住居跡【SC】

#### 1号竪穴式住居跡（第38図、図版18）

調査区西側北よりに位置し、7号土坑・18号土坑を切る。平面形は、現状、直径6.0×5.8mの楕円形を呈し、深さは最大で66cmである。床面直上の埋土は、地山に非常に類似した橙色土が広がっており、この埋土中から所々で遺物が出土していたことから、底面が判然としなかった。そこで、東西方向にサブトレンチを入れ埋土の堆積状況を確認した後、底面まで掘削を行った。その結果、竪穴式住居跡中央に平面形が現状2.55×2.1m、深さが最大48cmの楕円形の土坑を検出している。中央土坑として捉えるにはやや規模が大きすぎる感が否めないが、周辺の土坑の深さと比較すると比較的浅かったことから、土坑としての報告は控えた。支柱穴等については、P8が深さ47cmで、埋土中よりまとまって土器が出土していることから柱穴と想定でき、隣接するP7も同様に深さがほぼP8と同じことから柱穴の建て替えとも想定できよう。その他では、P1で同じく深さが48cmと同等であることから、支柱穴の可能性が想定できるが、そのほかの場所では、ここまで深いピットの掘り込みがなかったことから、柱穴としての位置づけを明確に行うことができない。しかし、少なくともP1・P7・P8の存在から考えると、本来は6～7本が周回していた可能性も考えられる。



第38図 横隈狐塚遺跡9 1号竪穴式住居跡遺構実測図 (S=1/60)



第39図 横隈狐塚遺跡9 1号・2号竖穴式住居跡出土土器実測図 (S=1/4)

埋土からは、弥生土器の甕・壺を中心に出土しており、最下層においてもまとまって出土している。石器は、打製石鏃、石錐、太型蛤刃石斧、石包丁、紡錘車、投弾をはじめ石核や剥片、河原石も多数出土しているが、小片の為実測に至ったものは少ない。

**出土遺物 (第39・40図、図版27・29・30・31・32)**

第39図1～10は弥生土器、第40図1～13は石器である。その内、第39図8～10と第40図12～15は最下層より出土している。

まず、埋土中からの出土遺物についてである。第39図1～5は甕である。1・2は口縁部から胴部にかけて残存する小片であり、ともに如意口縁を呈する。1は摩滅が激しいため判然としないが、口縁端部に刻目が施された可能性を想定できる痕跡を確認している。3～5は胴部



第40図 横隈狐塚遺跡9 1号竖穴式住居跡出土石器・土製品実測図  
 (1~5: S=2/3、6~15: S=1/2)

から底部にかけて残存し、3・5は平底、4は上げ底である。6・7は壺である。6は口縁部から胴部にかけて残存する。やや肥厚した口縁部が如意口縁を呈し、その後直線的に伸びる頸部から緩く外湾する胴部へと至る。頸部と胴部の境には、沈線が2条施されている。7は胴部から底部にかけて残存する。平底の底部から胴部へと外に大きく広がる。

第40図1・2は打製石鏃で、ともに石材は黒曜石である。3は小さな剥離面が石材の側面の先端を中心に数か所確認したことから、打製石鏃の未製品の可能性が想定されよう。石材は黒曜石である。4・5は石錐であるが、ともに先端が欠損している。石材はともに安山岩である。6は欠損部分が多く残存状況としては悪いが、膨らんだ形態や他の遺構で出土した太型蛤刃石斧と石材の材質が酷似していたことから、太型蛤刃石斧と考えられよう。7・8は砥石である。7は砥面を2面確認しており、また、コゲもしくはタール状と想定される痕跡が一部付着している。8も砥面を2面確認しているが、その内の1面において中央部が凹んでいることから、手に持って細かい部分を磨いたと想定されよう。9・10は土製の投弾であり、9は表面にススが付着しており、10は表面が一部赤変している。11は土製の紡錘車である。

次に、最下層出土遺物についてである。第39図8・9は甕である。8は口縁部から胴部にかけて残存する小片であり、如意口縁から直線気味に胴部へと伸びる。9は胴部から底部にかけて残存し、ナデにより端部と中央との間がややくぼむ平底を呈する。10は壺であり、胴部から底部にかけて残存する。底部は平底である。

第40図12は石核であり、石材は黒曜石である。13～15は投弾である。

出土遺物は第39図6を除くといずれも小片であるが、上記の形態的特徴より、弥生時代前期(板付Ⅱ式期)の様相を中心とした一群であり、この時期の間に少しずつ遺構が埋まっていったと考えられよう。

## 2号竪穴式住居跡(第41図、図版18)

調査区西側南壁際に位置し、南側が8次調査区(8次調査区3号竪穴式住居跡として報告)へと延びる。平面形は、現状4.6×1.3mの半円形を呈し、深さは最大で40cmである。8次調査区の3号竪穴式住居跡と比較した際、東西方向に遺構が大きくなっている。8次調査区で3号竪穴式住居跡を検出した際、全体的にもやっとした灰色土で輪郭が見えていた。丘陵上での発掘の場合、丘陵上からの地山の流れ込みによる影響を受ける傾向が強く、この影響で8次調査区の3号竪穴式住居跡の本来の輪郭をうまく検出できなかったためである。

埋土からは、弥生土器数点をはじめ、石核や剥片が少量出土しているが、小片が多く実測に至ったものは少ない。

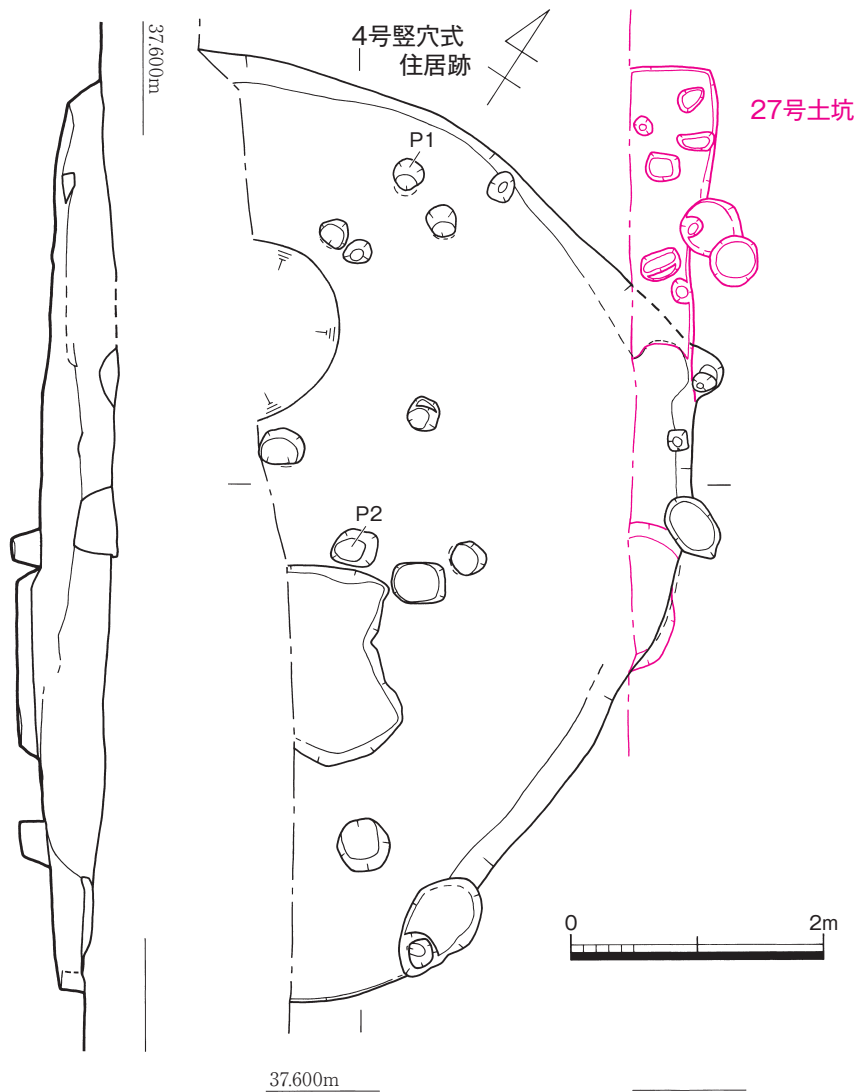
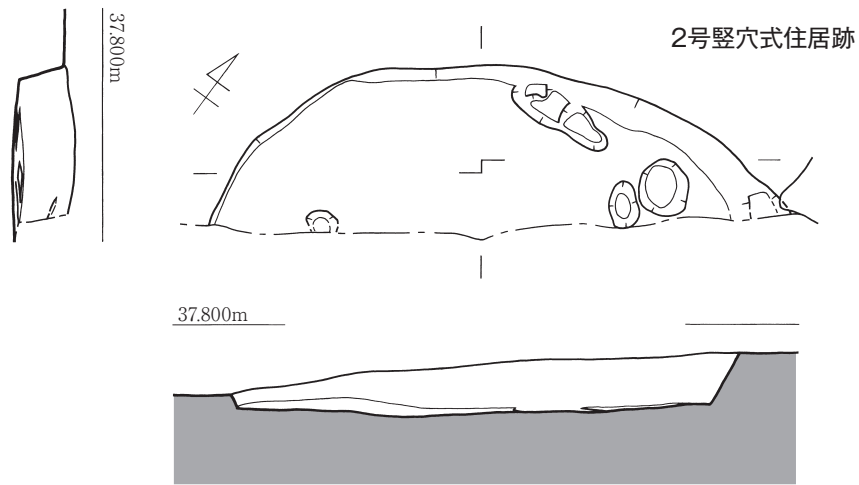
### 出土遺物(第39図)

第39図11～13は弥生土器である。11は甕であり、胴部から底部にかけて残存する。底部は上げ底気味である。底部中央部が欠損しており、欠損部分の摩滅も激しいことから判然としなが、他の遺構出土資料と比較し、底部中央に穿孔が施された可能性が想定できる。12・13は壺である。12は口縁部から頸部にかけて残存する。素口縁から緩く内湾しながら頸部へと伸びる。13は胴部から底部にかけて残存し、平底の底部から胴部が外側に広がる。

出土遺物はいずれも小片であるが、上記の形態的特徴より、弥生時代前期(板付Ⅱ式期)の様相に比定できると考えられる。ただし、出土数が少なく小片の為、細分化は難しい状況である。

## 4号竪穴式住居跡(第41図、図版18)

西側調査区中央に位置し、7号竪穴式住居跡と27号・33号土坑を切る。調査は東側調査区より実施したが、27号土坑を掘削した際、南北で床面の深さが異なることに疑問を感じていた。しかし、西側調査区の調査を進めると、27号土坑の南側の深さが最大30cmと北側に比べて一段深くなり、この深さが4号竪穴式住居跡の東側の深さとほぼ一致した。かつ、平面においてもこの一段深くなっている箇所が4号竪穴式住居跡の輪郭と一致していることから、27号土坑掘削の際に4号竪穴式住居跡の一部も同時に掘削してしまっていたことがわかった。平面形は、



- <SC4 土層>
- 1: 黒褐色土
  - 2: 橙色土
  - 3: 褐灰色土 におい褐色土粒10%位含む〔柱穴の可能性あり〕
  - 4: におい橙色土 黒褐色土粒40%位含む
  - 5: 灰褐色土 におい褐色土粒10%位含む〔柱穴の可能性あり〕
  - 6: におい褐色土 黒褐色土粒10%位含む
  - 7: 橙色土 やや粘質、黒褐色土粒10%位含む

第 41 図 横隈狐塚遺跡 9 2号・4号竖穴式住居跡、27号土坑遺構実測図 (S=1/60)

現状、直径 7.55 × 3.4 m の半円形を呈し、深さは最大で 53cm である。埋土の堆積では、7 層で橙色土の地山に近い埋土を確認した。さらに 7 層の下には砂質系の固い地山層が広がっていたことから、7 層が遺構の埋土であると判断することができた。床面にはピットが数基あるが、ピットの深さや配列から支柱穴と判断するには根拠が薄い。また、西壁際のやや南寄りに現状 1.55 × 0.8 m、深さ約 16cm の掘り込みがあるが、中央土坑と判断するには遺構が浅く、配置に違和感がある。

埋土からは、弥生土器の甕を中心に出土しており、石器は石包丁や投弾をはじめ剥片や河原石が出土しているが、小片の為実測に至ったものは少ない。

#### 出土遺物（第 43・44 図、図版 27・32）

第 44 図 1～3 は弥生土器、第 43 図 1・2 は石器である。その内、第 44 図 3 と第 43 図 2 は下層より出土している。

まず、埋土中からの出土遺物についてである。第 44 図 1・2 は甕であり、胴部から底部にかけて残存する。1・2 とともに上げ底気味の底部である。2 は外面底部中心部に縄席痕が見られる。

第 43 図 1 は投弾である。

次に、下層出土遺物についてである。第 44 図 3 は甕であり、胴部から底部にかけて残存する。底部はややレンズ状を呈する。

第 43 図 2 は投弾である。

出土遺物はいずれも小片であるが、上記の形態的特徴より、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられる。ただし、出土数が少なく小片の為、細分化は難しい状況である。

#### 5号竪穴式住居跡（第 42 図、図版 18・19）

西側調査区北隅に位置し、35号土坑を切り、32号土坑に切られ、調査区外へと延びる。平面形は、現状で 3.1 × 2.6m の円形を呈し、深さは最大で 45cm を測る。当初検出した遺構の輪郭より 20cm 程外側でも同様のカーブを描く遺構の輪郭を検出していたことから、竪穴式住居跡の建て直しの痕と想定して掘削することとした。実際に、掘削を始めると、遺構検出面で確認した遺構の輪郭の違いに応じて、外側で確認した遺構の深さが浅く、内側で確認した遺構の深さが深くなっており、遺構の輪郭に合わせてテラス状の二段掘りになっていた。このことから、竪穴式住居跡の建て直しの可能性だけでなく、壁際をテラス状にめぐらせた構造を持つ竪穴式住居跡の可能性も想定する必要があることがわかった。床面には数基のピットを検出したが、どれも深さが 20～30cm と浅いことから、支柱穴と判断する根拠が薄かった。

埋土からは、弥生土器の甕を中心に出土しており、石器は石斧をはじめ剥片や河原石が出土しているが、小片の為実測に至ったものは少ない。

#### 出土遺物（第 43・44 図、図版 27・31）

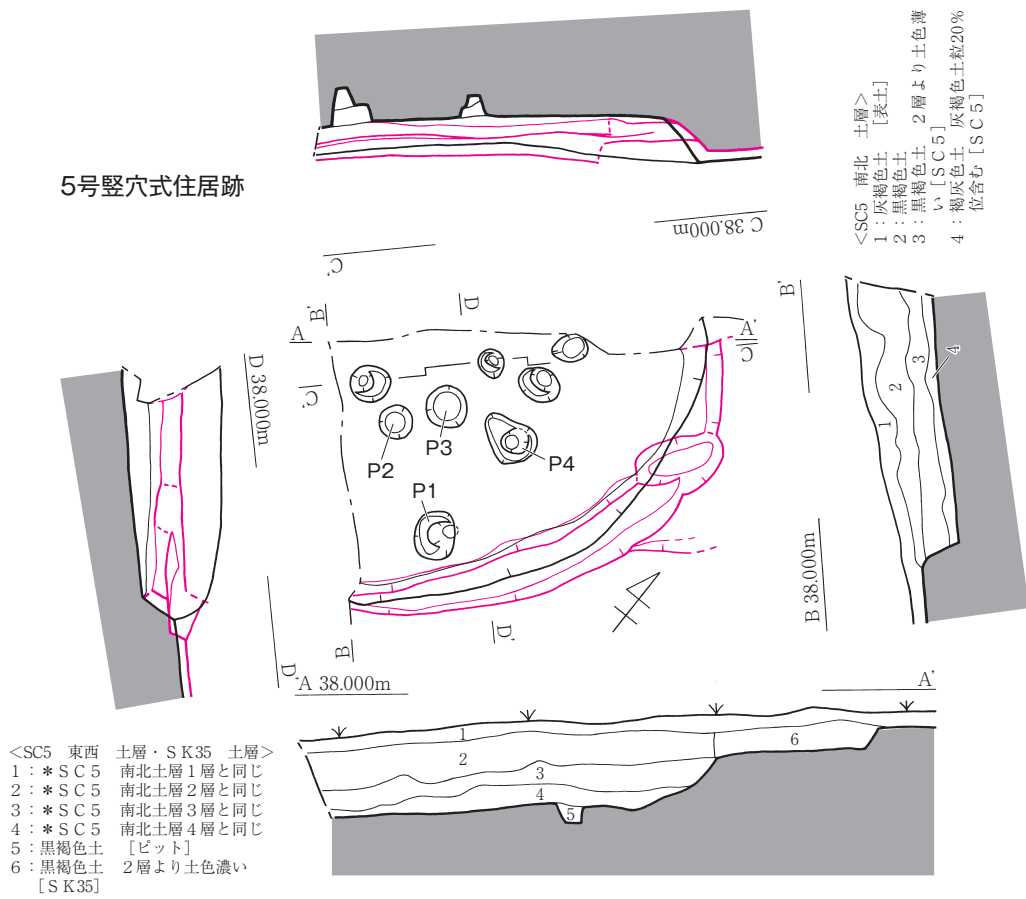
第 44 図 4～8 は弥生土器、第 43 図 3 は石器である。

第 44 図 4～7 は甕である。4・5 は口縁部から胴部にかけて残存する小片である。口縁端部に刻目が施された如意口縁を呈し、直線気味に胴部へと伸びる。6・7 は胴部から底部にかけて残存しており、ともに平底を呈する。8 は壺であり、胴部から底部にかけて残存し、底部は平底である。

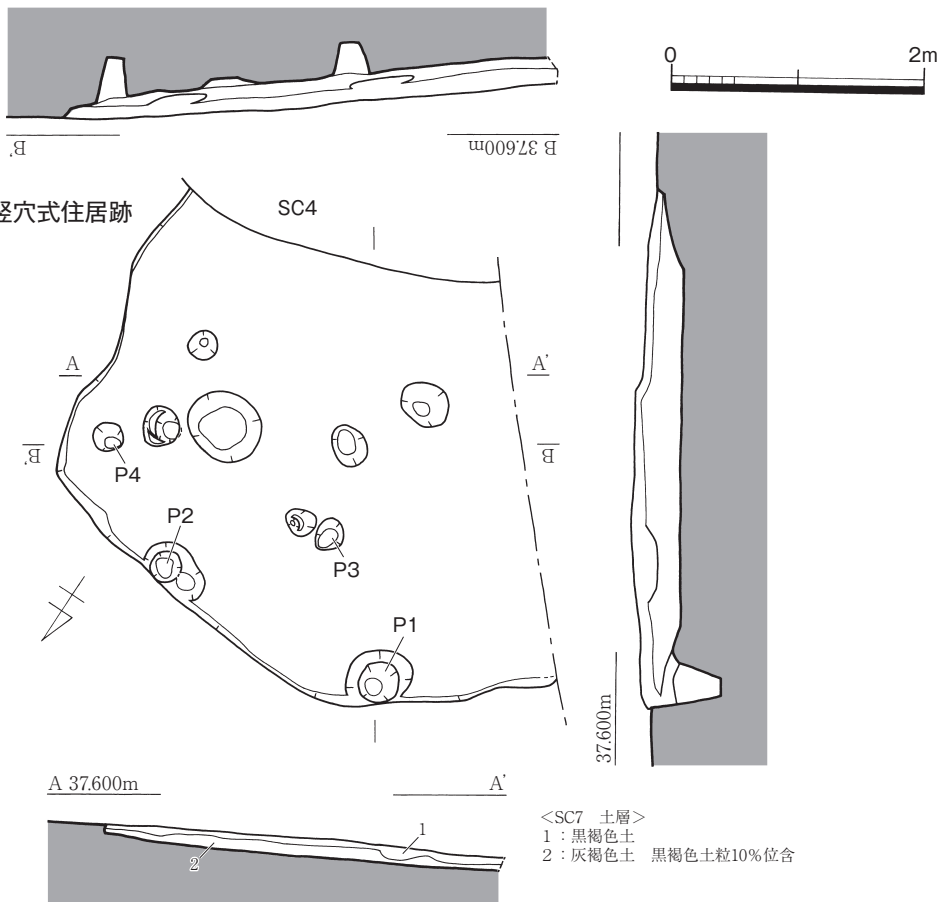
第 43 図 3 は太型蛤刃石斧の刃部分の小片である。



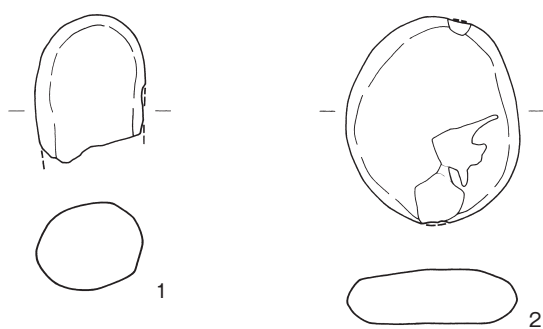
5号竖穴式住居跡



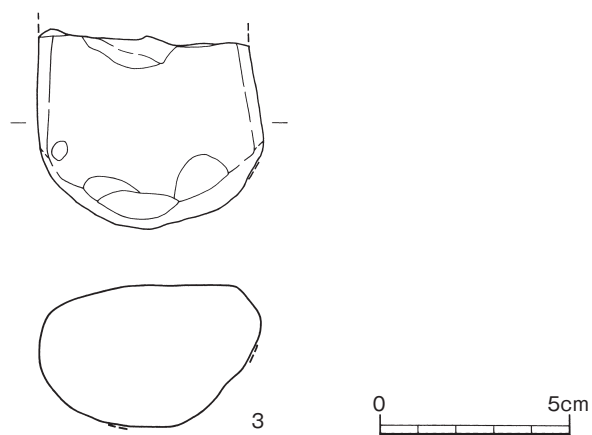
7号竖穴式住居跡



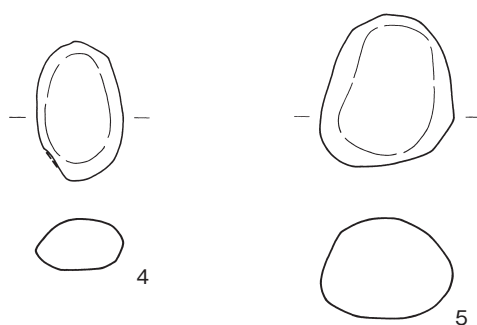
第42図 横隈狐塚遺跡9 5号・7号竖穴式住居跡遺構実測図 (S=1/60)



4号竪穴式住居跡



5号竪穴式住居跡



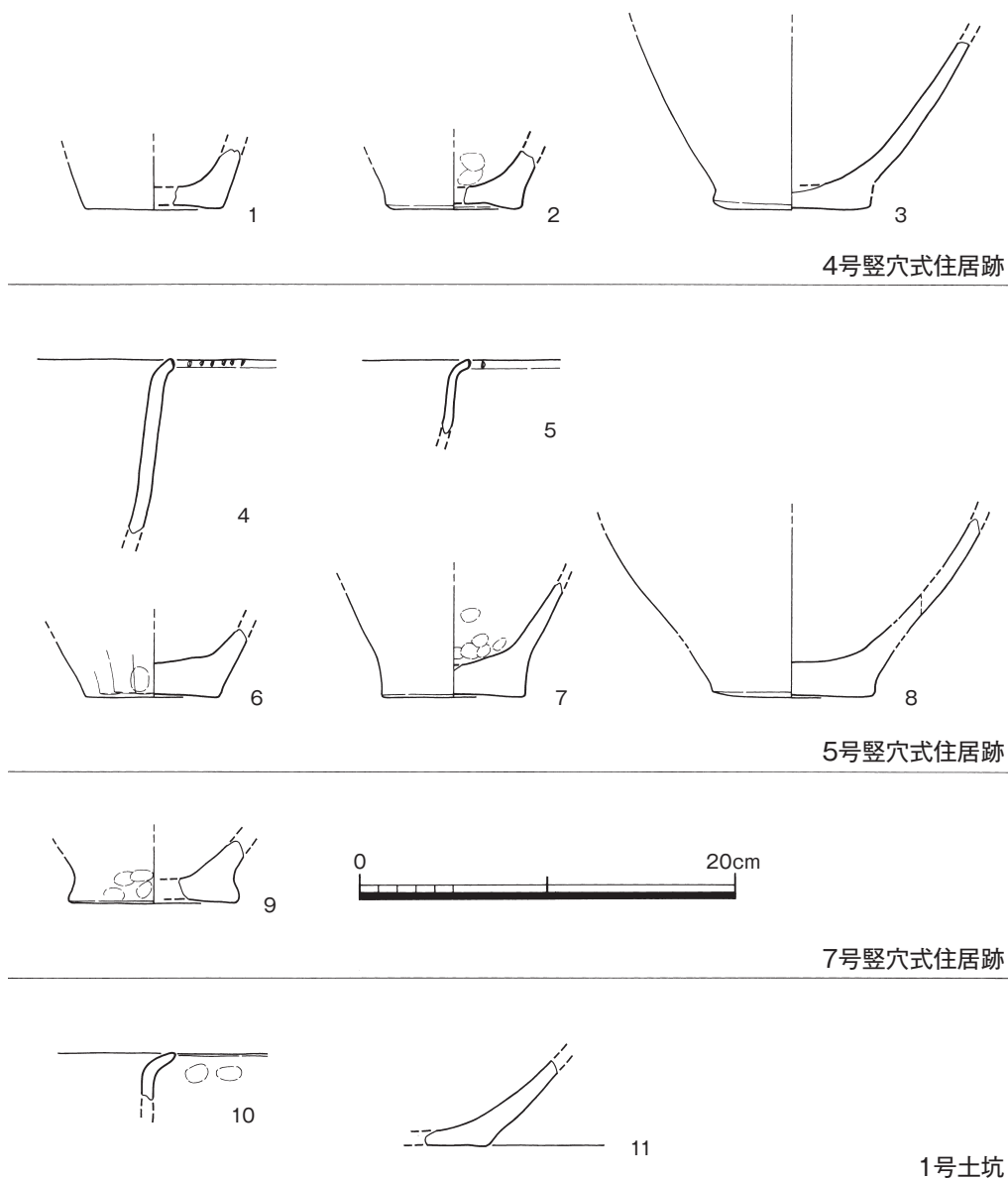
7号竪穴式住居跡

第43図 横隈狐塚遺跡9 4号・5号・7号竪穴式住居跡出土石器実測図 (S=1/2)

出土遺物はいずれも小片であるが、上記の形態的特徴より、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられる。ただし、出土数が少なく小片の為、細分化は難しい状況である。

#### 7号竪穴式住居跡（第42図、図版19）

西側調査区中央に位置し、4号竪穴式住居跡に切られ、調査区外へと延びる。平面形は、現状で3.7×3.45mの楕円形を呈し、深さは最大で46cmを図る。床面には深さ10～30cmの数基のピットを、壁際で深さ56cmのP1、深さ44cmのP2を検出した。深さ的にも、壁際沿いのP1・P2が支柱穴になる可能性が高い。支柱穴の配列としては、竪穴式住居跡の壁際をめぐるように配置



第44図 横隈狐塚遺跡9 4号・5号・7号竖穴式住居跡、1号土坑出土土器実測図 (S=1/4)

されていたと考えられるが、P1・P2以外に壁際でピットを検出できていないため判然としない。

埋土からは、弥生土器数点と剥片・河原石が数点出土しているが、小片の為実測に至ったものは少ない。

**出土遺物 (第43・44図、図版32)**

第44図9は弥生土器、第43図4・5は石器である。

第44図9は甕であり、胴部から底部にかけて残存する。底部はやや上げ底気味を呈する。

第43図4・5は投弾である。

出土遺物は小片であるが、上記の形態的特徴より、弥生時代前期(板付Ⅱ式期)の様相に比定できると考えられよう。ただし、実測に至らなかった遺物を含めて考慮しても出土数が少なく、いずれも小片の為、これ以上の細分化は難しい状況である。

## 2. 土坑【SK】

### 1号土坑（第45図、図版19）

調査区東側南よりに位置し、1号溝を切る。平面形は、現状138×140cmの隅丸三角形を呈し、深さは最大約18cmを測る。

埋土からは、弥生土器が数点出土したが、小片の為実測に至ったものは少ない。

### 出土遺物（第44図）

第44図10・11は弥生土器である。10は甕であり、口縁部から胴部にかけて残存する小片である。素口縁の如意口縁を呈し、直線的に胴部へと伸びる。11は壺であり、胴部から底部にかけて残存する小片である。底部は平底を呈する。

### 2号土坑（第45図、図版19）

調査区東側北よりに位置し、3号土坑を切る。平面形は、現状145×127cmの隅丸方形を呈し、深さは最大約14cmを測る。

埋土からは、弥生土器が数点出土しているが、いずれも小片の為実測に至らなかった。

### 3号土坑（第45図、図版19）

調査区東側北よりに位置し、2号土坑を切る。平面形は、現状150×125cmの隅丸方形を呈し、深さは最大約19cmを測る。

埋土からは、弥生土器が数点出土しているが、いずれも小片の為実測に至らなかった。

### 4号土坑（第45図、図版20）

調査区東側南よりに位置し、21号土坑と1号溝を切る。平面形は、現状189×105cmの隅丸長方形を呈し、深さは最大約17cmを測る。

埋土からは、弥生土器が数点出土しているが、いずれも小片の為実測に至らなかった。

### 5号土坑（第45図、図版20）

調査区東側北よりに位置する。平面形は、現状125×96cmの隅丸方形を呈し、深さは最大約17cmを測る。埋土は明赤褐色土の単層である。

埋土からは、弥生土器が数点出土しているが、いずれも小片の為実測に至らなかった。

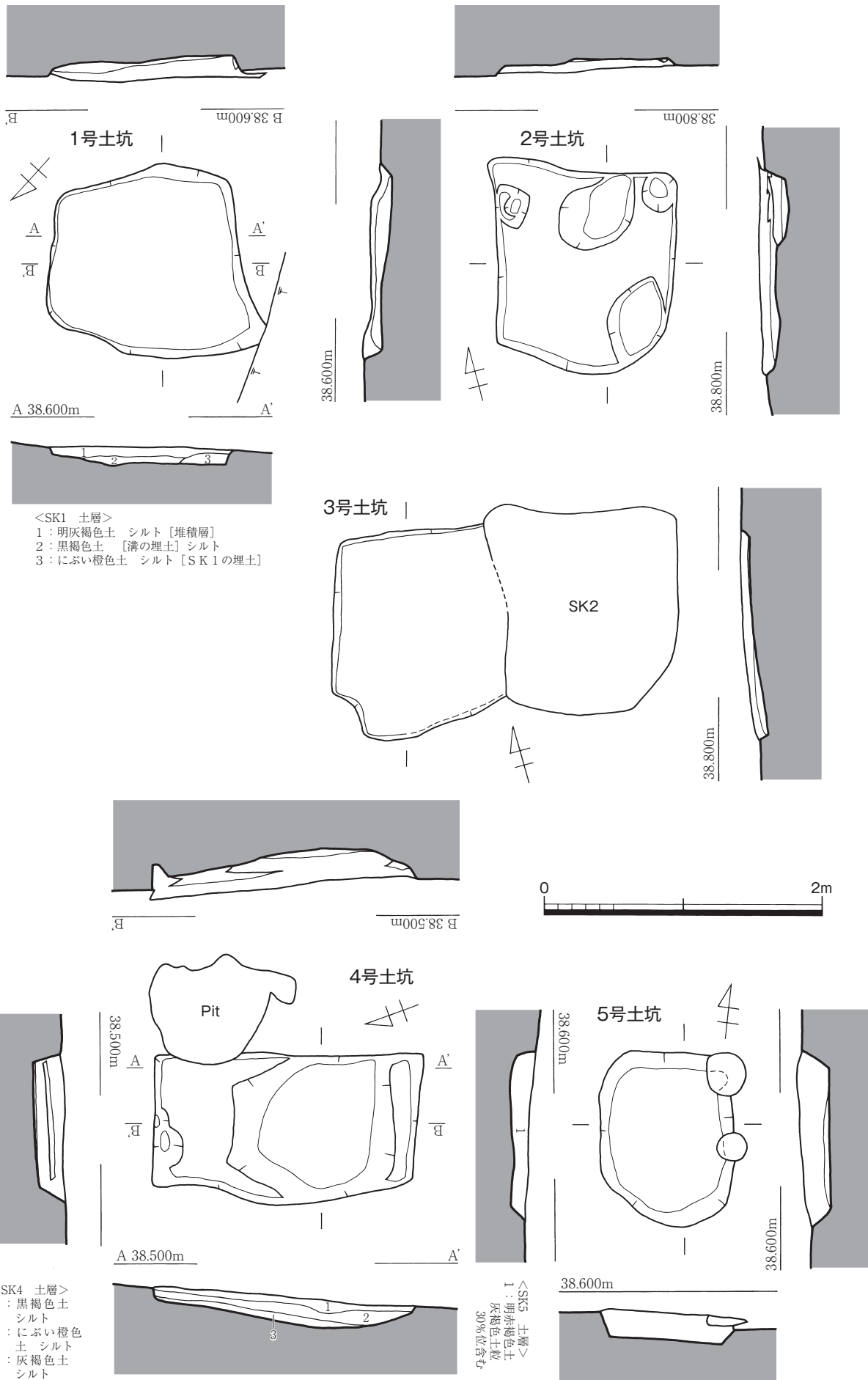
### 6号土坑（第46図、図版20）

調査区東側南よりに位置する。平面形は、現状99×87cmの隅丸方形を呈し、深さは最大約30cmを測る。東側壁面付近にピット1基を確認しているが、6号土坑にと伴うかどうかの確証は得られなかった。埋土は水平堆積を呈する。

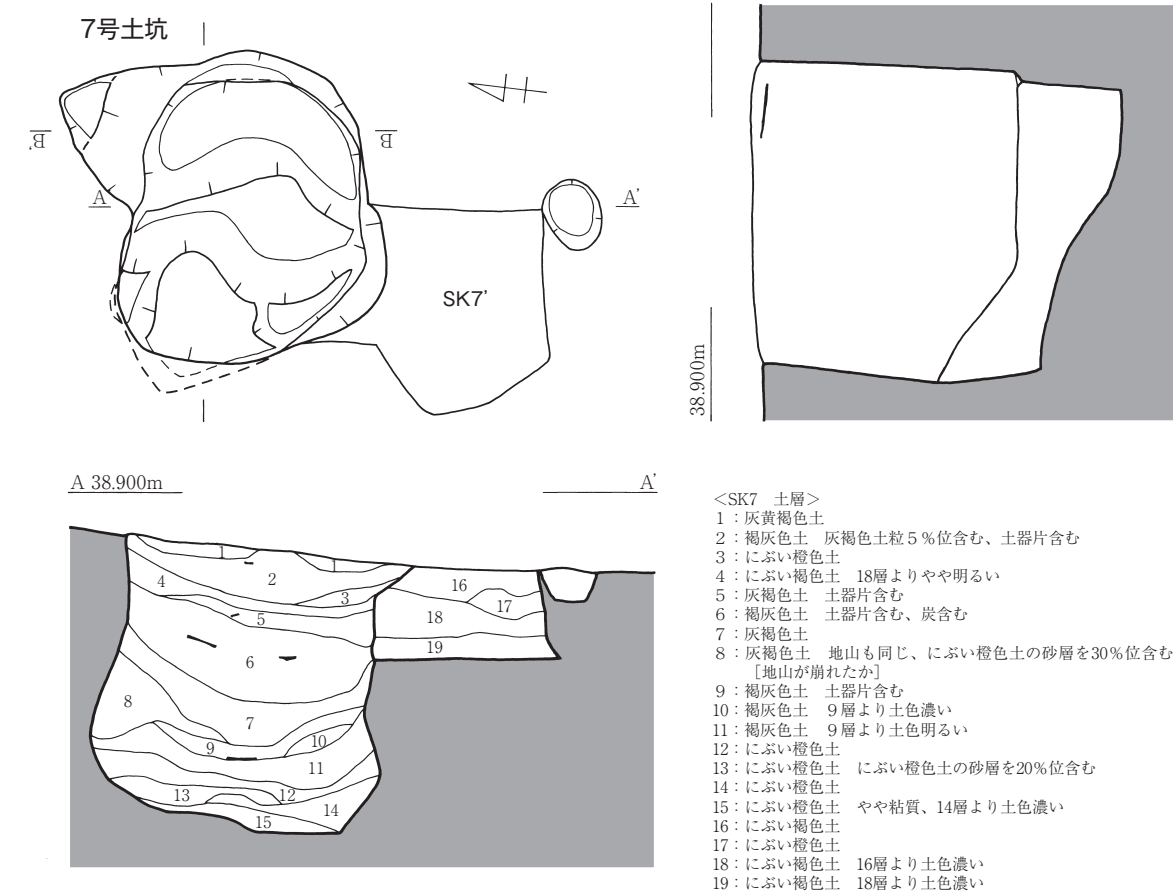
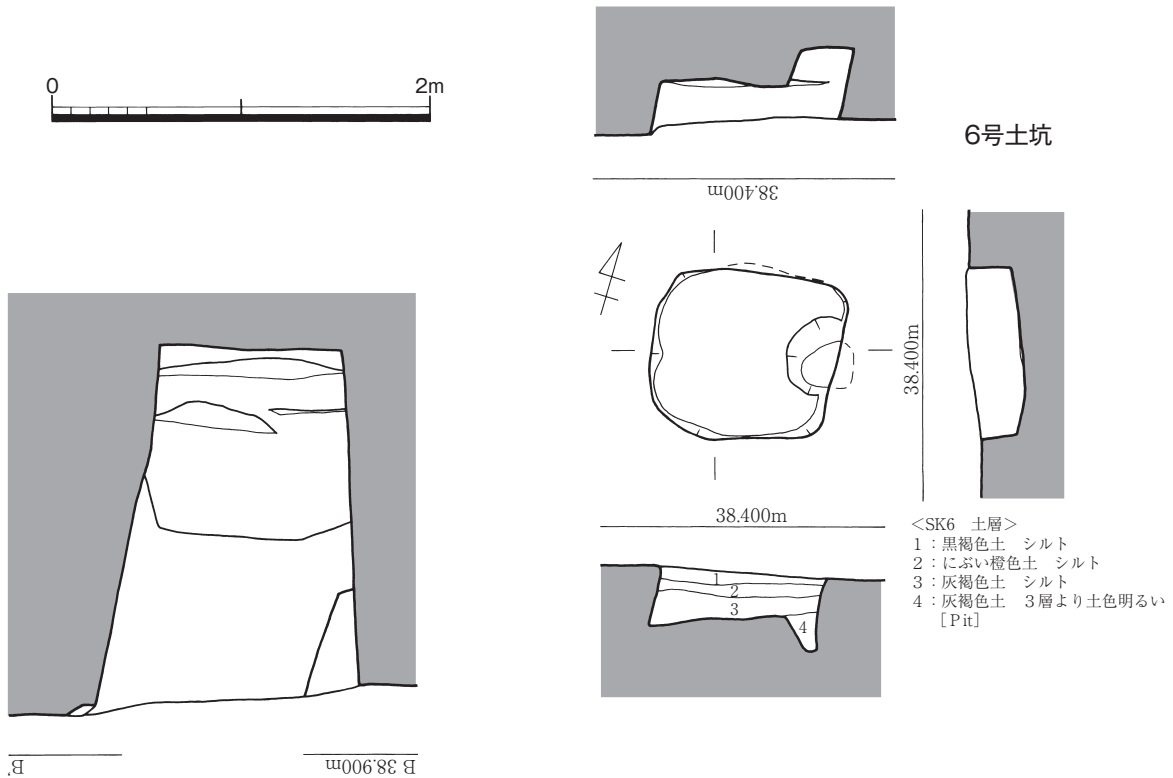
埋土からは、弥生土器が数点出土しているが、いずれも小片の為実測に至らなかった。

### 7号土坑（第46図、図版20・21）

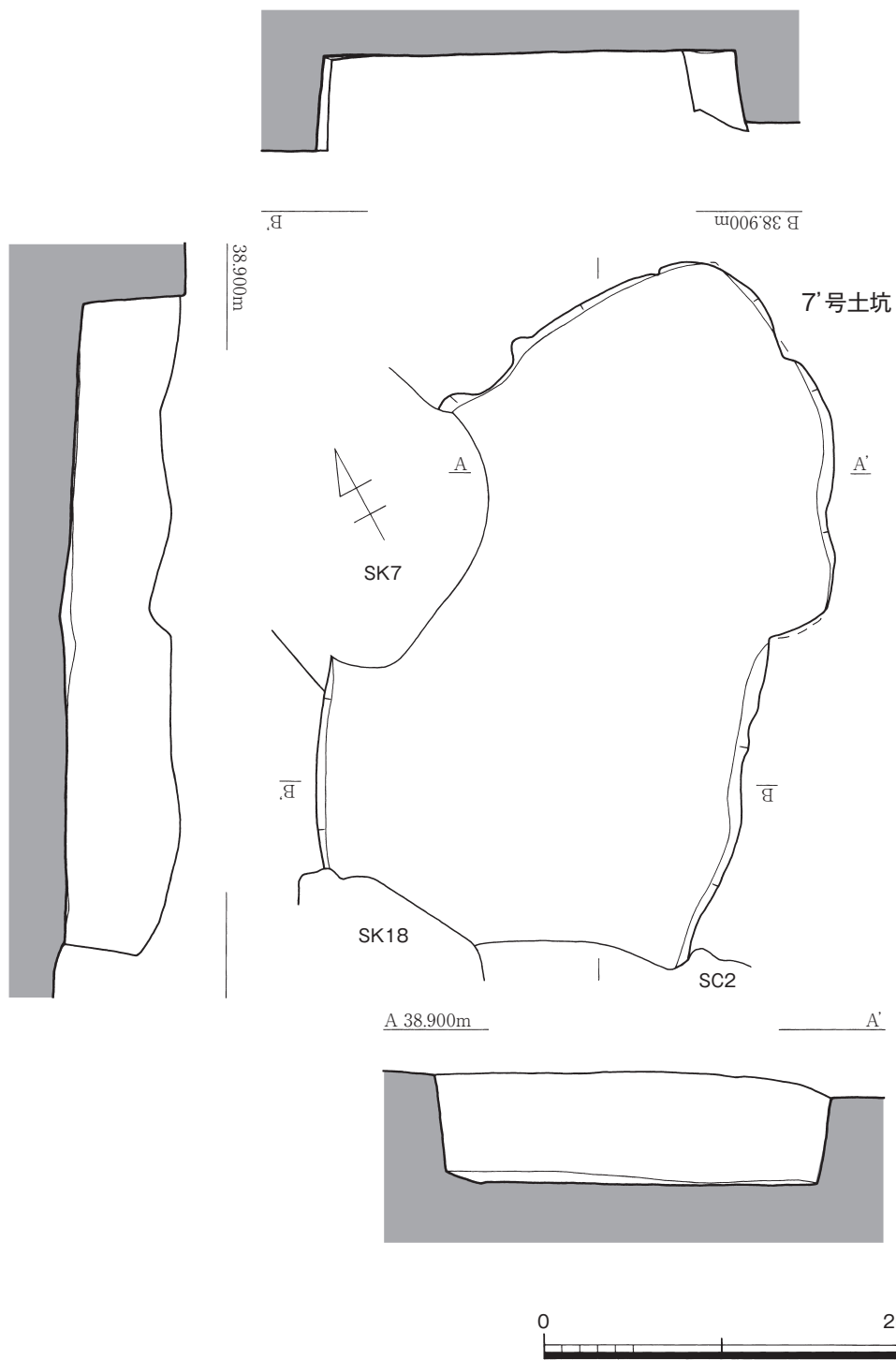
調査区中央北よりに位置し、7'号土坑を切る。7号土坑と7'号土坑の遺構検出面の土は、非常に類似していたことから、当初は、7'号土坑を含めて1つの遺構と捉えていた。しかし、掘削を進める中で、7号土坑部分のみが深く掘り込まれていることがわかった。このことから、一段深く掘り込まれている方を7号土坑、浅い掘り込みの方を7'号土坑と捉えることとした。現状の平面形は、上面159×137cm、底面150×95cm、深さ最大約190cmを測る楕円形を呈する。底面は東側に向かって低くなっている。埋土は、9層以上においてレンズ状堆積の傾向が見受けられるが、11層以下では基本水平堆積の様相を示す。遺構の形状等から貯蔵穴の可能性が想定できる。



第45図 横隈狐塚遺跡9 1号・2号・3号・4号・5号土坑遺構実測図 (S=1/40)



第46図 横隈狐塚遺跡9 6号・7号土坑遺構実測図 (S=1/40)



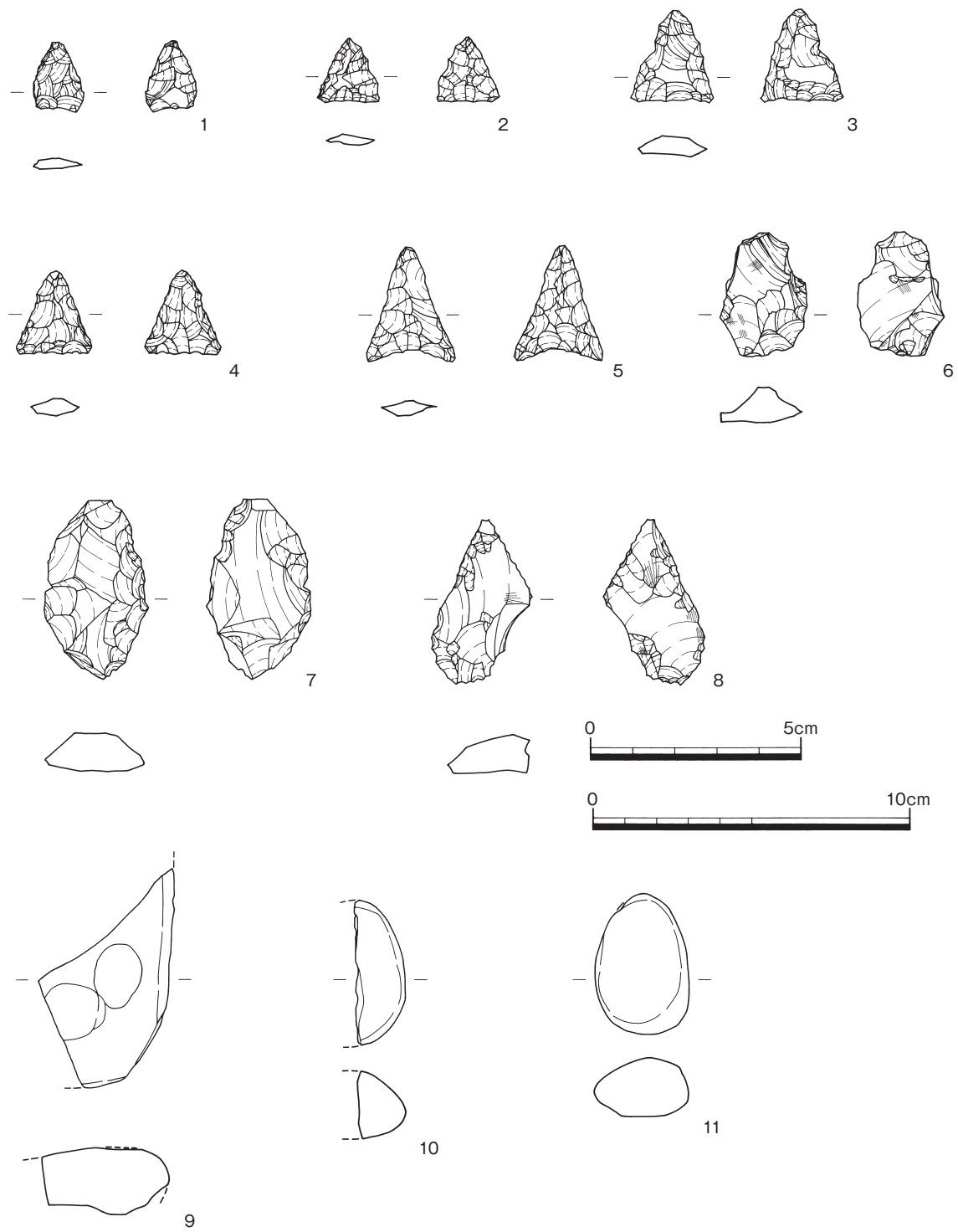
第47図 横隈狐塚遺跡9 7'号土坑遺構実測図 (S=1/40)

埋土からは、甕を中心に弥生土器が出土し、石器も打製石鏃、石斧、投弾をはじめ石核や剥片、河原石が多数出土している。

**出土遺物 (第48・49図、図版27・28・30・31・32)**

第49図1～10は弥生土器、第48図1～11は石器である。その内、第49図8～10と第48図1～3は下層より出土している。

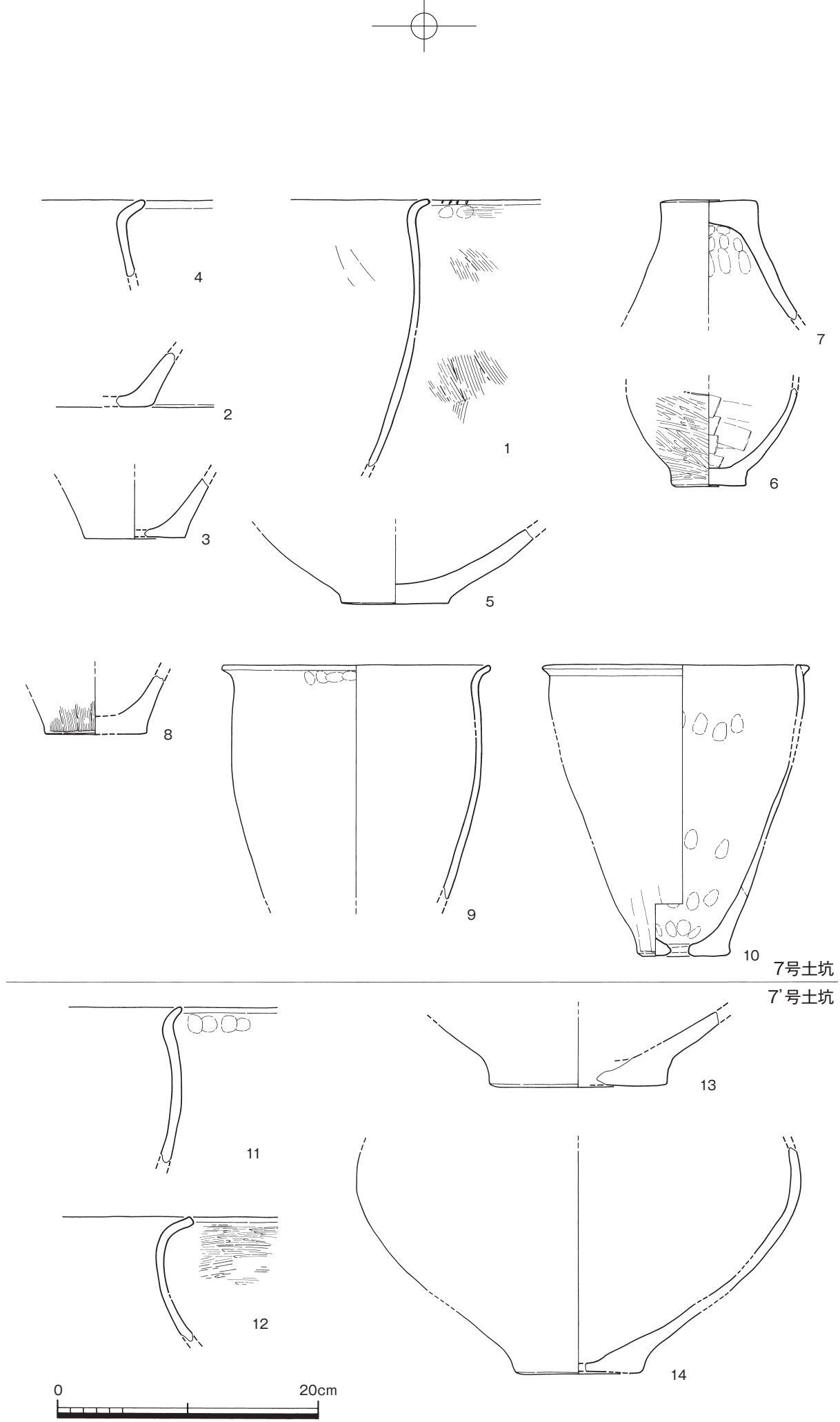
まず、埋土中からの出土遺物についてである。第49図1～3は甕である。1は口縁部から胴部にかけて残存する小片である。口縁端部に刻目を施した如意口縁が、直線気味に胴部へと伸



第48図 横隈狐塚遺跡9 7号土坑出土石器実測図 (1～8：S=2/3、9～11：S=1/2)

び、砲弾状を呈しながら底部へとすぼまる。外面胴部にはススが付着している。2・3は胴部から底部にかけて残存しており、ともに平底を呈する。4～6は壺である。4は口縁部から頸部にかけて残存する小片であり、素口縁からやや強めに内湾した後、胴部に向かって内傾的に伸びる。5・6は胴部から底部にかけて残存する。5は肉厚の平底の底部から胴部に向かって強く広がるのに対し、6は肉厚の平底の底部から緩く外湾しながら胴部へと伸びる。6は外面全面にへ





第49图 横隈狐塚遺跡9 7号・7'号土坑出土土器実測図 (S=1/4)

ラミガキ調整を施しており、黒色磨研土器の可能性が想定される。外面底部には、植物圧痕も確認している。7は蓋であり、頂部から体部にかけて残存している。内面体部にはコゲが付着している。

第48図4・5は打製石鏃であり、石材は4が安山岩、5が黒曜石である。6～8は小さな剥離面が石材の側面の先端を中心に数か所確認したことから、打製石鏃の未製品の可能性が想定されよう。石材は、6・8が黒曜石、7が安山岩である。9は膨らんだ形状より石斧と考えられるが、残存状況が悪い。10・11は投弾である。

次に、下層出土遺物についてである。第49図8～10は甕である。8は胴部から底部にかけて残存する。底部は平底を呈し、外面に植物圧痕が見られる。9は口縁部から胴部にかけて残存する。素口縁の如意口縁から直線気味に胴部へと伸び、砲弾状を呈しながら底部へとすぼまる。10は口縁部から底部にかけて残存する。口縁部は断面三角形突帯を1条巡らせており、砲弾状を呈しながら底部へとすぼまる。底部は平底であるが、中央部に焼成後に施された穿孔が見られる。

第48図1～3は打製石鏃であるが、他の遺構出土のものに比べ法量が小さい。石材は、すべて黒曜石である。

上記の形態的特徴より、弥生時代前期後葉～末（板付Ⅱb～c式期）の様相を中心とした一群であり、この時期の間に遺構が埋まっていったと考えられよう。なお、本書の中で最も打製石鏃がまとまって出土した遺構であった。

#### 7'号土坑（第47図、図版20）

調査区中央北よりに位置し、7号土坑に切られる。平面形は、現状364×238cmの隅丸長方形を呈し、深さ最大約56cmを測る。遺構検出時には、にぶい褐色土やにぶい橙色土が一面に広がる1つの大きな土坑と捉えていたが、東南側に遺構の掘り込みが広がることから、東西2つの土坑が本来切り合っていたと考えられよう。底面部で2つの土坑の切り合い関係を検出できなかったことから、本稿では可能性の提示にとどめ、7'号土坑として報告することとした。

埋土からは、弥生土器数点、土製紡錘車3点のほか、打製石鏃や投弾をはじめ石核や剥片、河原石が少量出土しているが、実測に至ったものは少ない。

#### 出土遺物（第49・50図、図版28・29・30・32）

第49図11～14は弥生土器、第50図1～4は石器、第50図5・6は土製品である。

第49図11は甕である。口縁部から胴部にかけて残存する小片であり、素口縁の短い如意口縁からやや膨らみを持ちながら胴部へと至る。12～14は壺である。12は口縁部から頸部にかけて残存する小片であり、素口縁から内湾しながら頸部へと至る。内外面ともにススが付着している。13・14は胴部から底部にかけて残存する。ともに端部が肉厚の平底ではあるが、13は胴部に向かって外側に強く開くのに対し、14は外側にやや強めに外湾しながら胴部最大径へと至る。

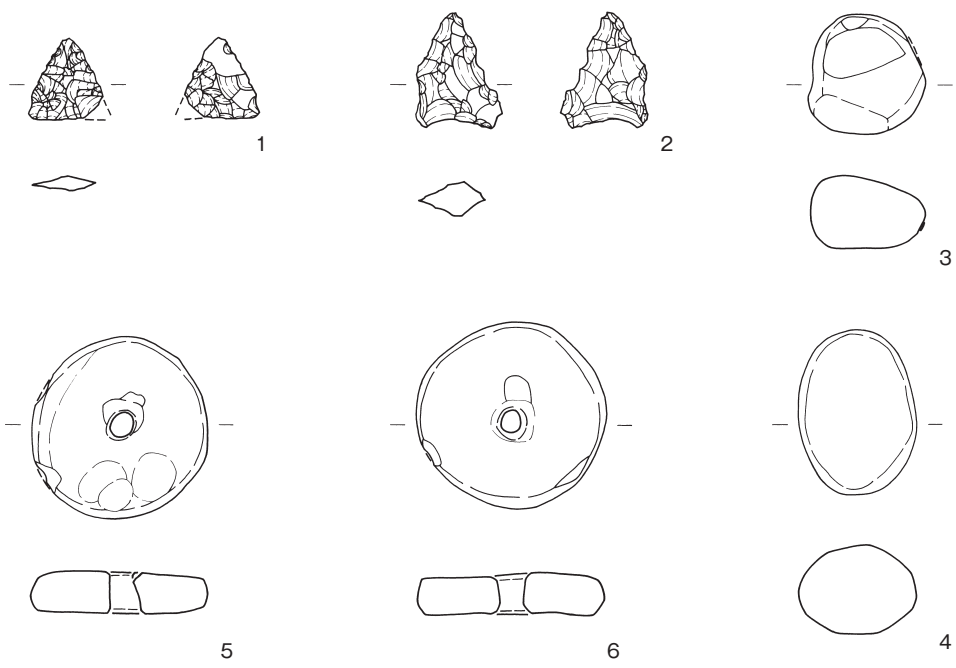
第50図1・2は打製石鏃であり、石材はともに黒曜石である。3・4は投弾である。

第50図5・6は土製紡錘車である。5は穿孔を施す際、片面において大きく抉っていることから、一方向からのみで穿孔を行ったと想定できる。

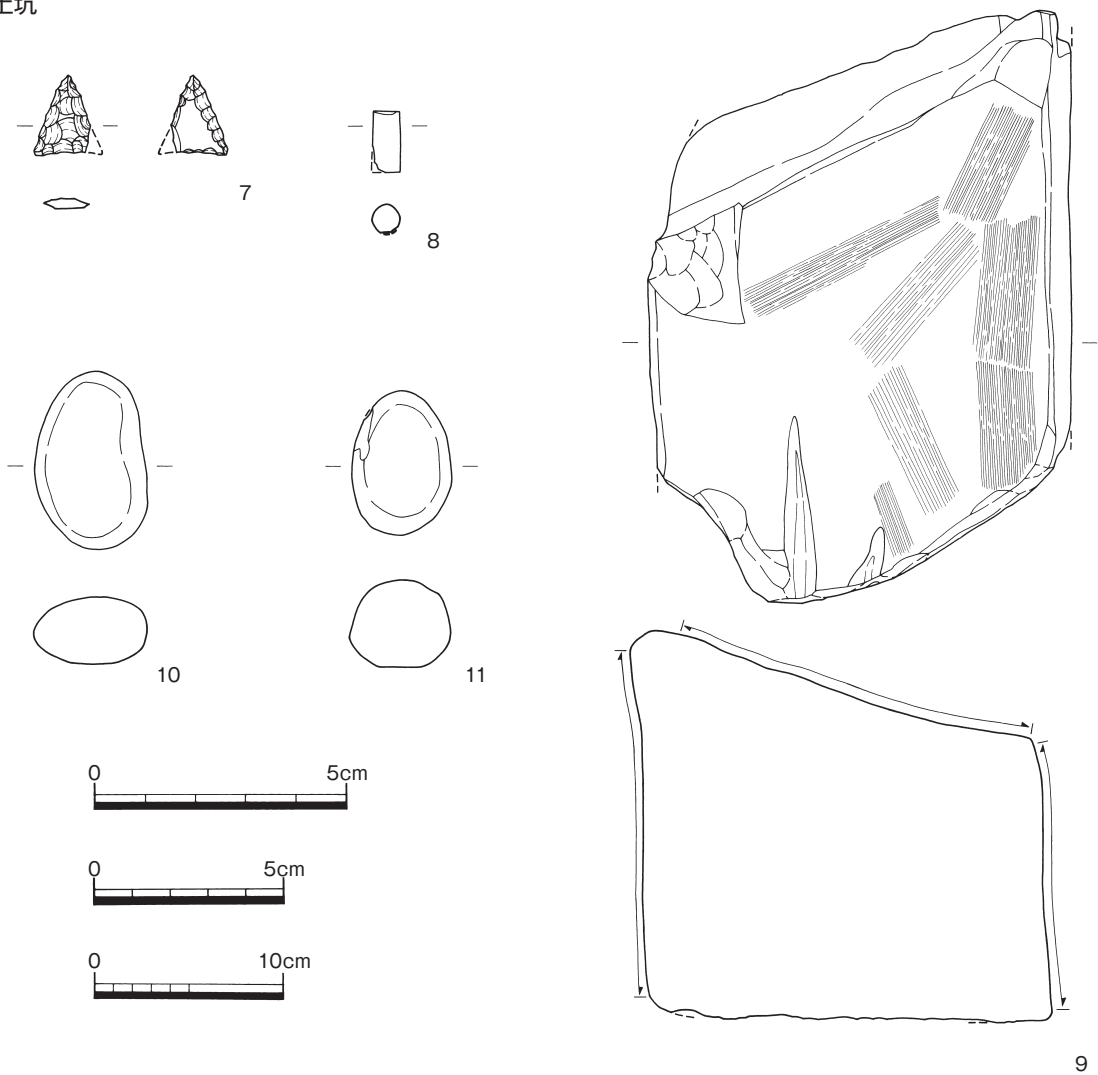
出土遺物の多くは小片であったが、上記の形態的特徴より、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられる。ただし、出土数が少なく小片の為、細分化は難しい状況である。

#### 8号土坑（第51図、図版21）

調査区中央北よりに位置する。遺構は2段掘りになっており、現状の平面形は、上面208×167cm、中段掘り込み面165×137cm、底面の平面形195×165cm、深さ最大約233cmを測る隅丸長方形を呈する。上面の掘り込みに対し、下面の掘り込みが小さいため、四方の壁にテラスが形成されているが、下面は底面に向かってフラスコ状に広がり、且つ、上側の掘り込みに対し若干東側にずれている。埋土は、上面・下面ともに水平堆積の様相を呈しながらも、下面上部に



7'号土坑  
8号土坑



第50图 横隈狐塚遺跡9 7'号・8号土坑出土石器・土製品実測図  
(1・2・7・8 : S=2/3、3~6・10・11 : S=1/2、9 : S=1/4)

おいては北側から南側への流れ込みによる堆積層も確認しており、他の土坑の埋土の堆積状況と若干異なる。遺構の形状等から、貯蔵穴として使用された可能性が考えられよう。

埋土からは最上層において管玉1点が出土し、下面上部を中心に甕・壺といった残りの良い弥生土器片が多数出土している。その他にも、打製石鏃や砥石をはじめ剥片や河原石といった石器も多数出土した。

#### 出土遺物（第50・52・53図、図版28・29・30・31・32）

第52図・第53図は全て弥生土器、第50図7～11は石器である。その内、第50図7は最上層より、第52図6・7は上層より、第52図8～14は中層より、第53図1～21と第50図11は下層より、第52図15は最下層より出土している。

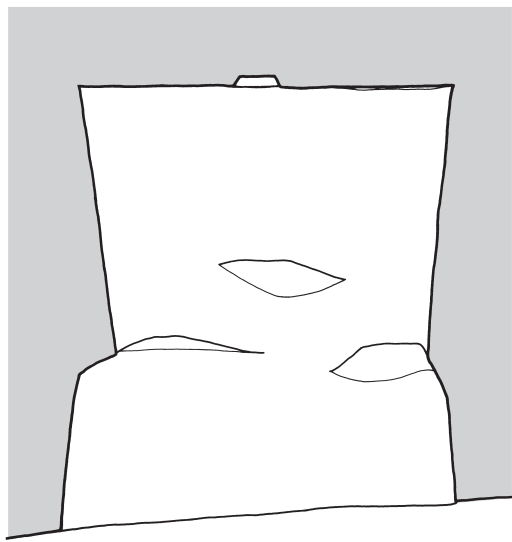
まず、出土地点を特定できていない出土遺物についてである。第52図1・2は甕である。1・2ともに口縁部から胴部にかけて残存している。1は口縁端部に刻目を施した如意口縁が、直線的に胴部へと伸びている。2は水平方向への伸びが強い如意口縁がやや膨らみを持ちながら胴部へと伸び、胴部最大径の付近で強く一周ナデることで段を形成している。3・4は壺である。3は頸部から底部にかけて残存する。上げ底気味の底部から緩く外湾しながら胴部が伸び、頸部に向かってすぼまる。4は胴部から底部にかけて残存しており、平底の底部から胴部に向かって強く広がる。5は高杯である。グラス状の杯部から太く肉厚の脚部へと至り、裾が短く伸びる。石器は、3点出土している。第50図8は打製石鏃であり、一部欠損している。石材は安山岩である。9・10は投弾である。

次に最上層出土遺物についてである。第50図7は明緑灰色の管玉である。一部剥離しているが総体的に残りは良い。

次に上層出土遺物についてである。第52図6・7は甕である。6は口縁部から胴部にかけて残存する小片であり、素口縁の如意口縁から直線的に胴部へと伸びている。7は胴部から底部にかけて残存しており、底部は平底を呈する。

次に中層出土遺物についてである。第52図8～10は甕である。8・9は口縁部から胴部にかけて残存している。8はやや肥厚した口縁端部を呈する如意口縁から、胴部に向かって直線的に伸びている。9は口縁端部に刻目を施した如意口縁から砲弾状を呈しながら底部へとすぼまる。10・11は胴部から底部にかけて残存しており、どちらも平底を呈する。12～14は壺である。12は口縁部から頸部にかけて残存する小片であり、素口縁から内湾しながら頸部へと至る。13・14は胴部から底部にかけて残存しており、13はやや上げ底気味で、14は平底である。

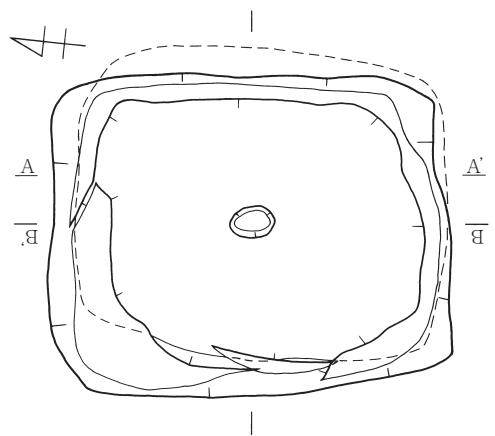
次に下層出土遺物についてである。第53図1～12は甕である。1～5は口縁部から胴部にかけて残存している。どれも如意口縁であるが、2・3は水平方向への屈曲が強く、5は胴部上位に粘土紐をずらして接合することで一周突帯風の段を形成している。6は口縁部から底部にかけて残存する。如意口縁から砲弾状に胴部がのび、平底の底部へと至る。胴部上位には突帯が1条施されている。また、内面胴部下半にコゲが付着している。7～12は胴部から底部にかけて残存しており、すべて平底である。10は外面底部に種子圧痕があり、12は内面胴部にコゲが付着している。13～16は壺であり、胴部から底部にかけて残存する。13・16は平底、14は肉厚の平底、15は上げ底である。17は蓋であり、頂部から体部にかけて残存する。体部内面にはススの痕跡が見られる。18～21は鉢である。18・19は口縁部から胴部にかけて残存する。ともに如意口縁であるが、18は胴部中位で強いナデにより段落ちが形成されているが、19は外傾しながら胴部が伸びている。20・21は口縁部から底部にかけて残存する。ともに如意口縁から外湾しながら底部へとすぼまり、肉厚の平底の底部へと至る。石器は1点出土している。第50図11は砥石であり、砥面を3面確認している。縦31.25cm×横22.2cm×厚さ20.1cm、重さ19,800gと法量が大きいことから、地面に据えて使用したと考えられる。



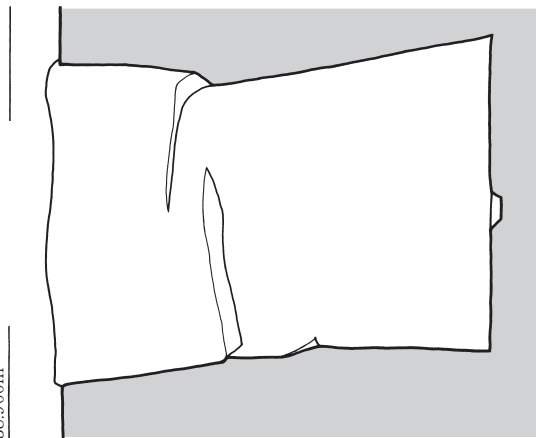
B 38.900m



8号土坑

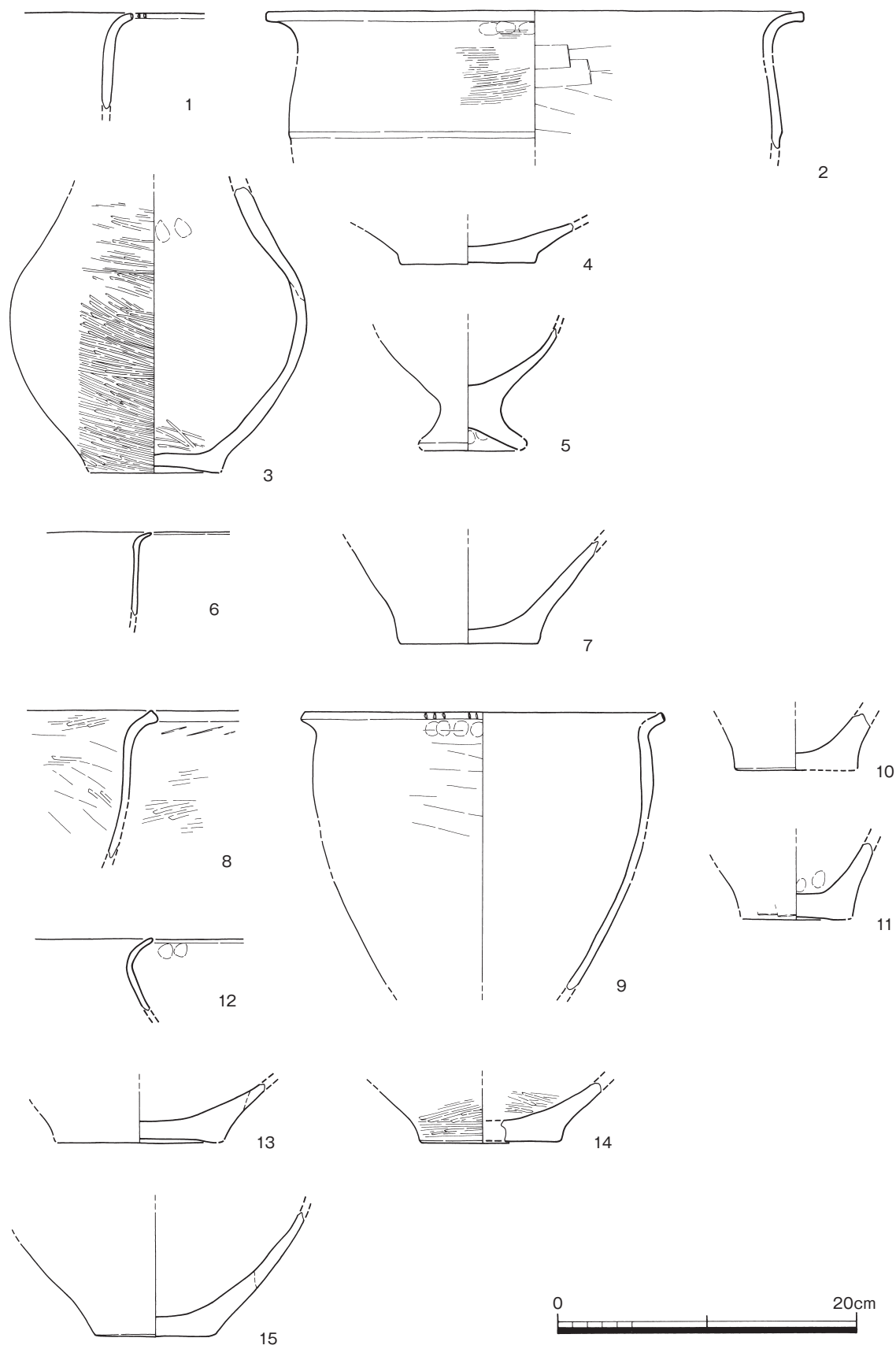


A 38.900m

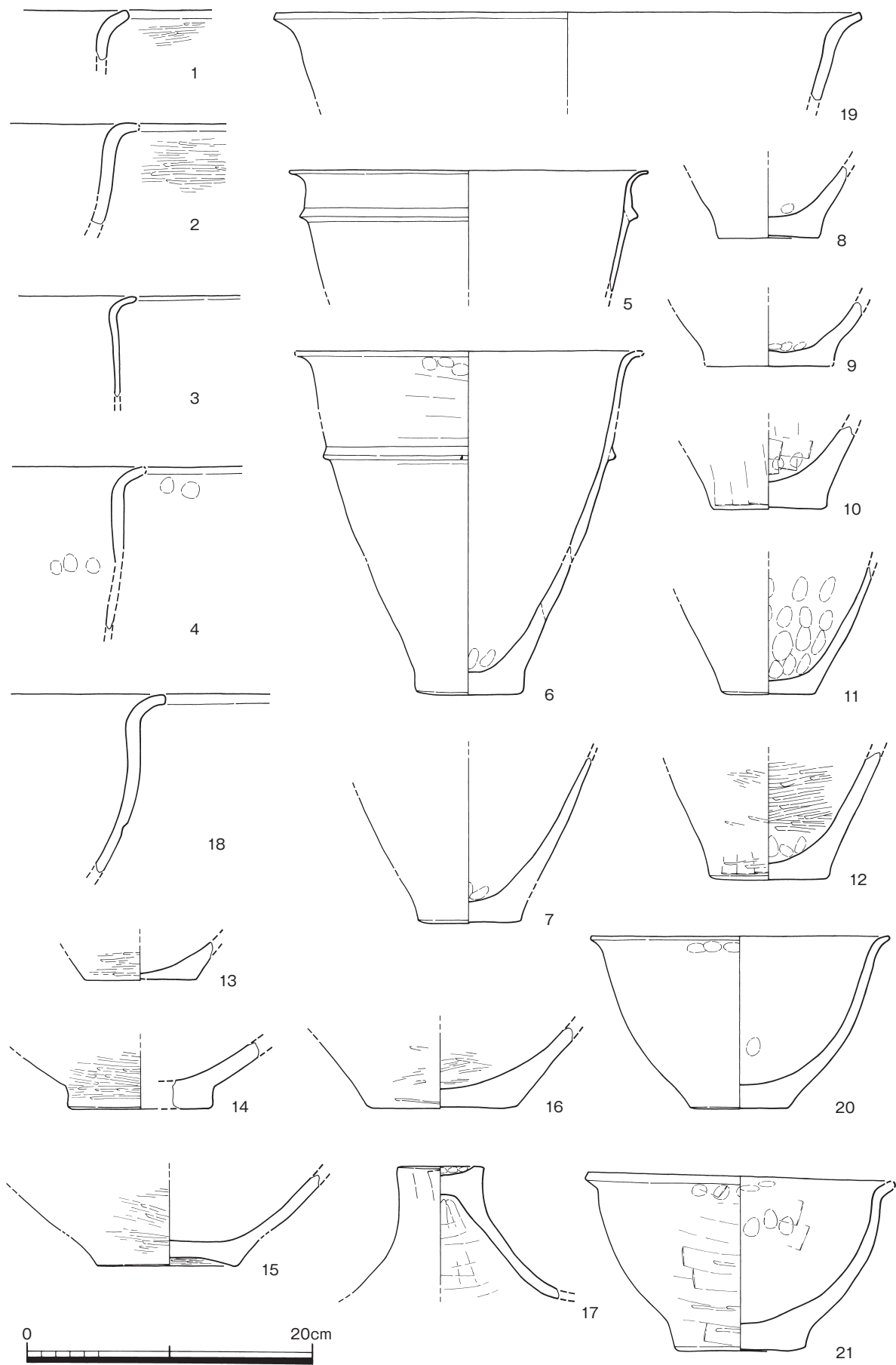


- <SK8 土層>
- 1: 灰褐色土 シルト、土器片含む
  - 2: におい褐色土 シルト、土器片含む
  - 3: 褐灰色土 シルト、土器片含む
  - 4: におい褐色土 2層より土色明るい、シルト、土器片含む
  - 5: 褐灰色土 3層より土色薄い、シルト
  - 6: 灰褐色土 1層より土色明るい、シルト、土器片含む
  - 7: 灰黄褐色土 シルト
  - 8: におい黄褐色土 シルト
  - 9: におい褐色土 シルト
  - 10: におい褐色土 2層より土色暗い、シルト、土器片含む
  - 11: におい褐色土 シルト、黒褐色土粒5%位含む
  - 12: におい褐色土 シルト、11層より土色濃い【掘りすぎ】
  - 13: におい褐色土 地山面の土【流れ込み】
  - 14: におい褐色土 シルト、土器片含む
  - 15: におい褐色土 シルト、11層より土色暗い、土器片含む
  - 16: におい褐色土 シルト、地山の土を30%位含む、土器片含む
  - 17: 灰褐色土 シルト、におい褐色土粒を5%位含む、土器片含む
  - 18: におい褐色土 シルト、土器片含む
  - 19: 褐灰色土 シルト、におい褐色土粒を20%位含む
  - 20: におい褐色土 シルト、地山面の土を50%位含む
  - 21: におい褐色土 シルト、土器片含む、黒褐色土粒10%位含む
  - 22: におい褐色土 21層より土色薄い、シルト、土器片含む、黒褐色土粒10%位含む
  - 23: におい褐色土 シルト、黒褐色土粒15%位含む、土器片含む
  - 24: におい褐色土 シルト、黒褐色土粒20%位含む
  - 25: におい黄褐色土 シルト
  - 26: におい褐色土 シルト、黒褐色土粒10%位含む
  - 27: におい褐色土 シルト、黒褐色土粒5%位含む
  - 28: 黒褐色土 シルト、におい黄褐色土粒を10%位含む
  - 29: 灰褐色土 シルト
  - 30: 黒褐色土 シルト、29層より土色濃い
  - 31: 黒褐色土 シルト、におい褐色土粒を20%位含む
  - 32: 灰褐色土 シルト、地山面の土を5%位含む
  - 33: 灰褐色土 シルト、32層より土色濃い
  - 34: におい褐色土 シルト
  - 35: 灰褐色土 シルト
  - 36: におい褐色土 シルト
  - 37: におい褐色土 シルト

第 51 図 横隈狐塚遺跡 9 8号土坑遺構実測図 (S=1/40)



第 52 図 横隈狐塚遺跡 9 8号土坑上層・中層・最下層出土土器実測図 (S=1/4)



第 53 图 横隈狐塚遺跡 9 8 号土坑下層出土土器実測図 (S=1/4)

最後に最下層出土遺物についてである。第 52 図 15 は壺であり、胴部から頸部にかけて残存する。底部は平底である。

上記の形態的特徴より、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相を中心とした一群であり、この時期の間に遺構が埋まっていったと考えられよう。

#### 9号土坑（第54図、図版21）

調査区西側北よりに位置する。西側調査区に一部延びると想定していたが、西側調査区の表土剥ぎを行った際に削りすぎたためか、残りの遺構部分について検出することができなかった。平面形は、現状 180 × 143cm の楕円形を呈し、深さは最大約 42cm を測る。

埋土からは、弥生土器が数点出土しているが、いずれも小片の為実測に至らなかった。

#### 10号土坑（第54図、図版21）

調査区西側北よりに位置し、一部調査区外へと延びる。平面形は、現状 172 × 101cm の隅丸長方形を呈し、深さは最大約 21cm を測る。北東隅は、ピットにより、本来の遺構の形状が削られていると考えられる。埋土は単層である。

埋土からは、出土遺物は検出できなかった。

#### 11号土坑（第54図、図版21・22）

調査区西側北よりに位置する。平面形は、現状 132 × 107cm の隅丸長方形を呈し、深さは最大約 29cm を測る。埋土は基本水平堆積を呈する。

埋土からは、弥生土器が数点出土しているが、いずれも小片の為実測に至らなかった。

#### 12号土坑（第55図、図版22）

調査区西側中央よりに位置する。平面形は、現状 114 × 80cm の隅丸長方形を呈し、深さは最大約 19cm を測る。土坑内には数多くのピットを確認しているが、周辺に竹の根が多数走っていたことから、竹や木の根の痕跡の可能性が想定されよう。埋土は単層である。

埋土からは、弥生土器が数点出土しているが、いずれも小片の為実測に至らなかった。

#### 13号土坑（第55図、図版22）

調査区西側北よりに位置する。平面形は、現状 162 × 147cm の隅丸長方形を呈し、深さは最大約 41cm を測る。埋土は基本水平堆積を呈する。

埋土からは、弥生土器が数点出土しているが、いずれも小片の為実測に至らなかった。

#### 14号土坑（第55図、図版22）

調査区中央北よりに位置する。平面形は、現状 191 × 149cm の隅丸長方形を呈し、深さは最大約 125cm を測る。

埋土からは、弥生土器数点と石器の剥片が少量出土しているが、実測するに至ったものは少ない。

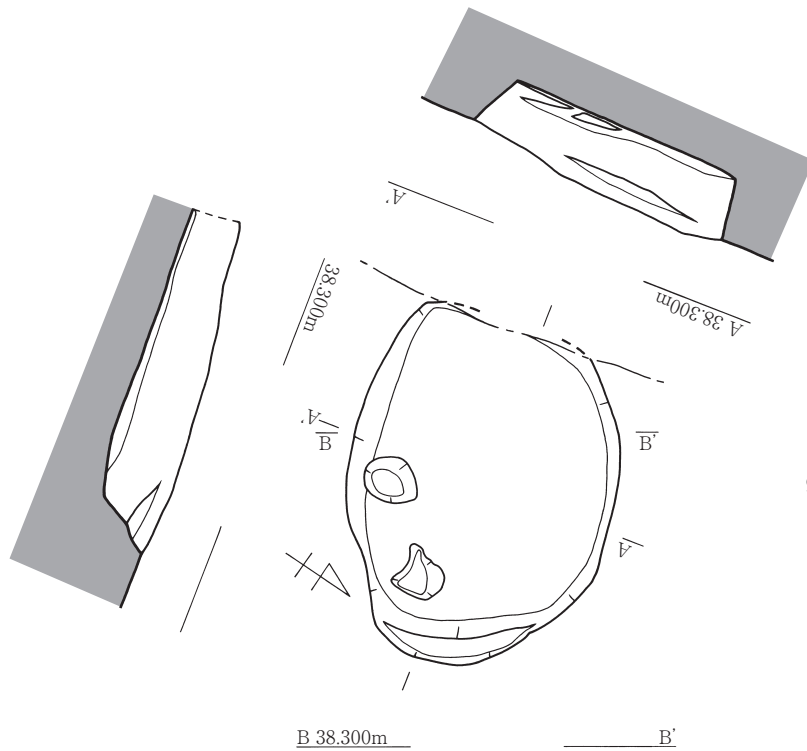
#### 出土遺物（第58図）

第 58 図 1 ～ 3 は弥生土器である。その内、第 58 図 3 は下層より出土している。

まず、出土地点を特定できていない出土遺物についてである。第 58 図 1 は甕であり、口縁部から胴部にかけて残存する小片である。素口縁から外傾気味に胴部へと伸びる。外面にはススが、内面にはコゲが付着している。2 は壺であり、胴部から底部にかけて残存する。平底の底部から胴部に向かって強く広がる。

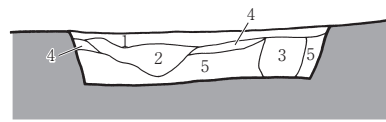
次に下層出土遺物についてである。第 58 図 3 は甕であり、胴部から底部にかけて残存する。底部は肉厚の平底である。



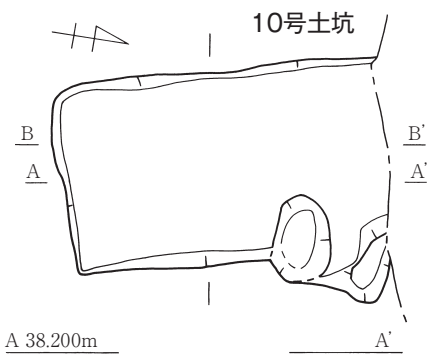


9号土坑

B 38.300m



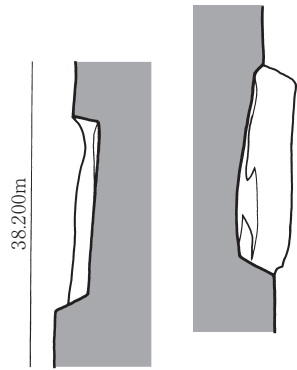
- <SK9 土層>  
 1 : にぶい橙色土  
 2 : 灰褐色土 橙色土粒を10%位含む  
 3 : 黒褐色土 橙色土粒を20%位含む  
 4 : にぶい褐色土  
 5 : にぶい褐色土 4層より土色暗い



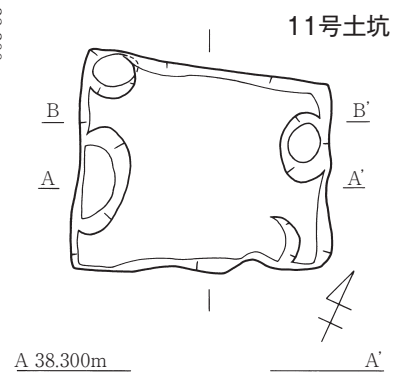
A 38.200m

B 38.200m

- <SK10 土層>  
 1 : 灰黄褐色土 橙色土粒5%位含む

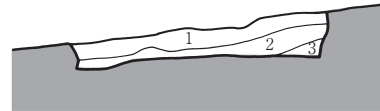


- <SK11 土層>  
 1 : 灰黄褐色土  
 2 : 褐色土  
 3 : にぶい褐色土

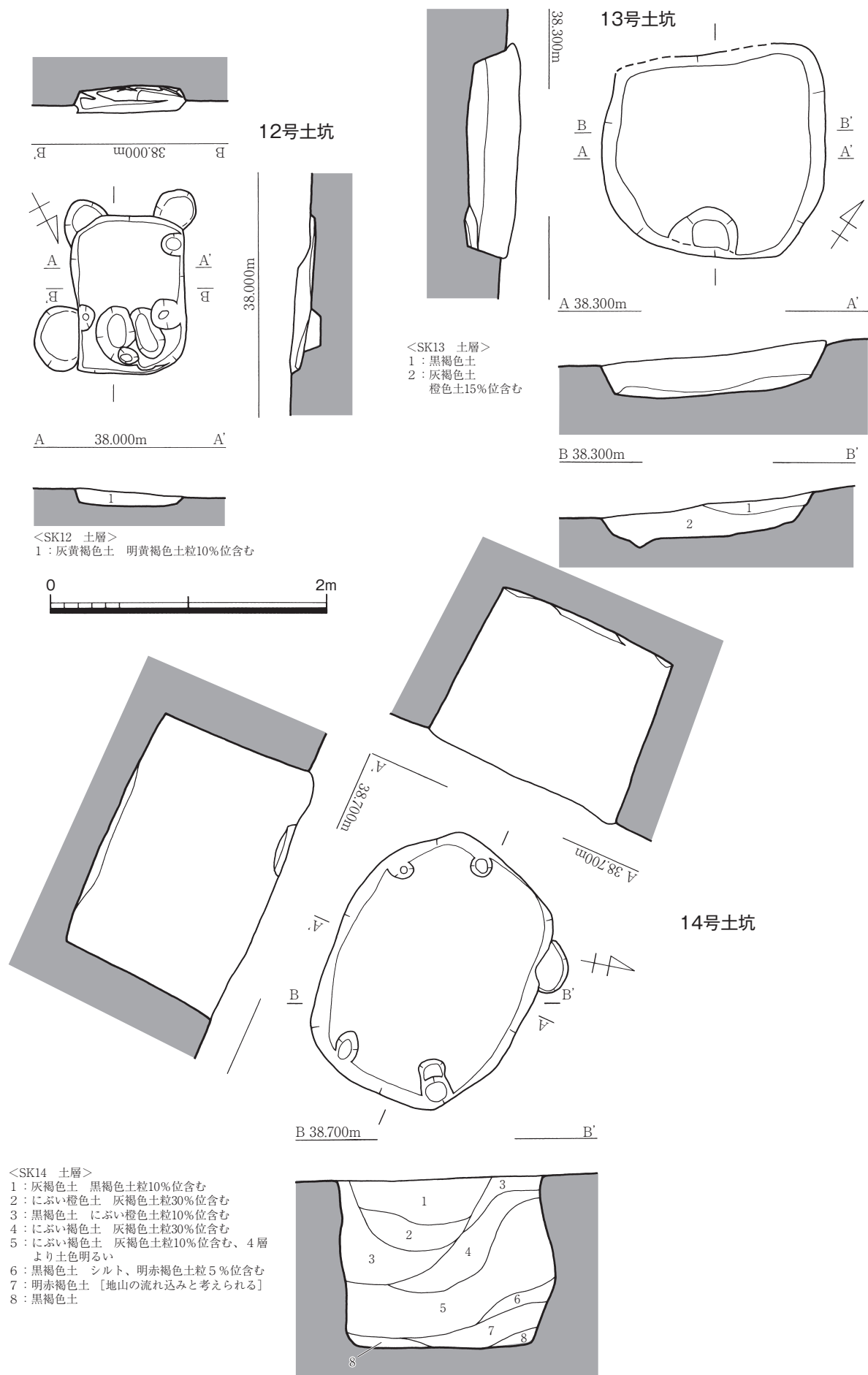


A 38.300m

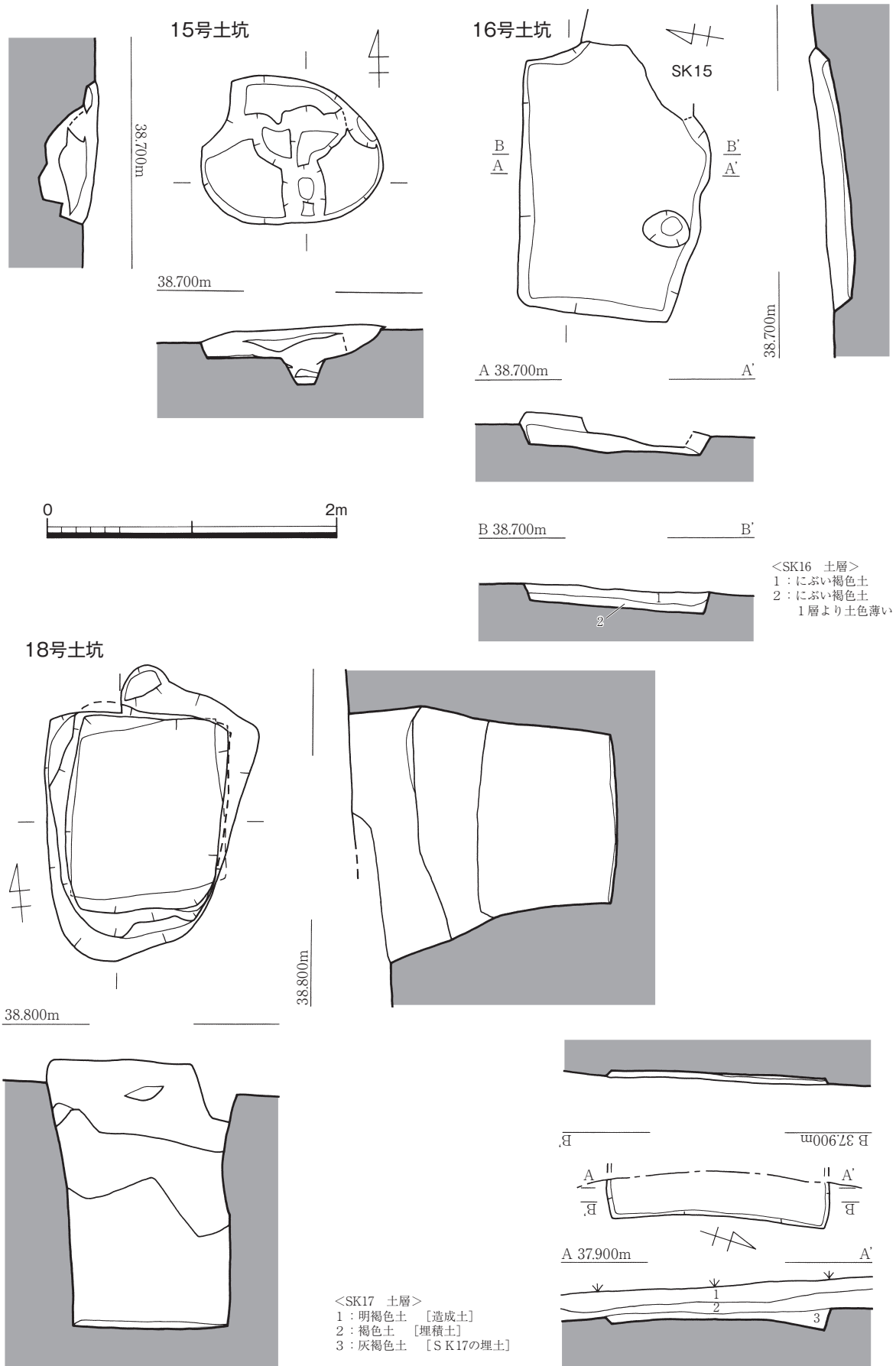
B 38.300m



第54図 横隈狐塚遺跡9 9号・10号・11号土坑遺構実測図 (S=1/40)



第55図 横隈狐塚遺跡9 12号・13号・14号土坑遺構実測図 (S=1/40)



第56図 横隈狐塚遺跡9 15号・16号・17号・18号土坑遺構実測図 (S=1/40)

出土遺物はいずれも小片であるが、上記の形態的特徴より、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられる。ただし、出土数が少なく小片の為、細分化は難しい状況である。

#### 15号土坑（第56図、図版22）

調査区西側北よりに位置し、16号・20号土坑を切る。平面形は、現状125×100cmの楕円形を呈し、深さは最大約40cmを測る。土坑内には多数のテラス面が段々に形成されているが、この背景には、周辺に多数走っていた竹の根や木の根による攪乱を受けて、図面のような形状へと変化した可能性が高く、本来は最初のテラス面である深さ最大約27cmの面が15号土坑に伴う底面と想定できようか。

埋土からは、黒曜石の剥片が少量出土しているが、いずれも小片のため実測に至らなかった。

#### 16号土坑（第56図、図版23）

調査区西側北よりに位置し、15号土坑に切られる。平面形は、現状180×130cmの隅丸長方形を呈し、深さは最大約36cmを測る。埋土は基本水平堆積を呈する。

埋土からは、出土遺物は発見できなかった。

#### 17号土坑（第56図、図版23）

調査区西側中央よりに位置し、西側調査区に一部延びると想定していたが、西側調査区の表土剥ぎを行った際に削りすぎたためか、残りの遺構部分について検出することができなかった。平面形は、現状154×31cmの隅丸長方形を呈し、深さは最大約10cmを測る。埋土は単層である。

埋土からは、出土遺物は発見できなかった。

#### 18号土坑（第56図、図版23）

調査区中央よりに位置し、1号竪穴式住居跡と7'号土坑に切られる。遺構は上面側の壁面が崩落しており、現状の平面形は、上面120×151cm、中段掘り込み面133×110cm、底面の平面形109×100cm、深さ最大約186cmを測る隅丸長方形を呈する。中段から底面までの箇所が本来の壁面が残存している部分であり、北東コーナー部分は、7'号土坑に切られているため、その他の掘り込みより若干内側に入り込んでいると想定できる。遺構の規模や形状から、貯蔵穴として使用された可能性が考えられよう。

埋土の下層を中心に、甕を中心とした弥生土器や、石製勾玉、紡錘車、太型蛤刃石斧、スクレイパーをはじめ剥片・河原石も多数出土しているが、小片のため実測に至ったものは少ない。

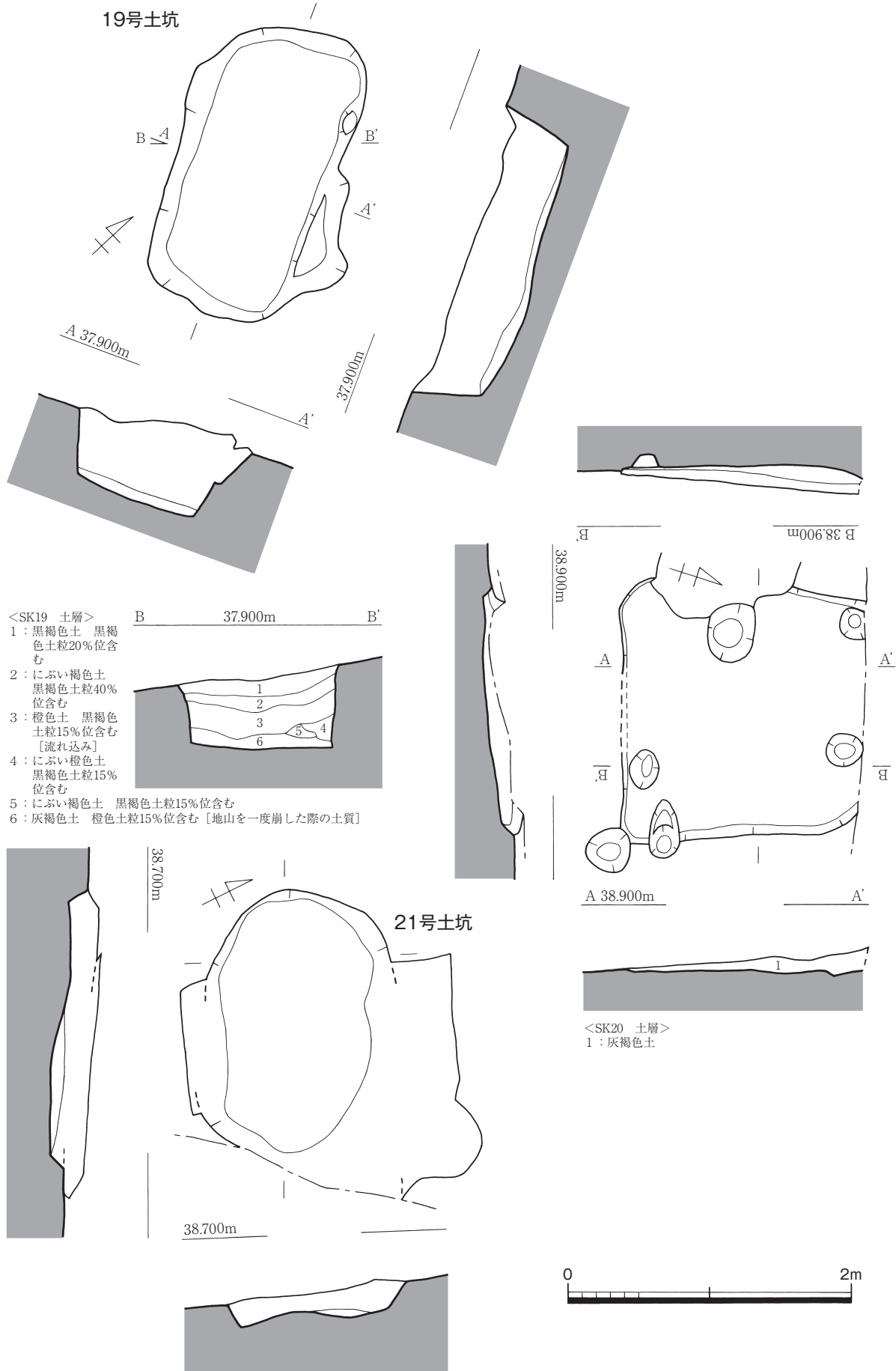
#### 出土遺物（第58・59図、図版29・31・32）

第58図4～12は弥生土器、第59図1～3は石器である。その内、第58図5～12と第59図1～3は下層より出土している。

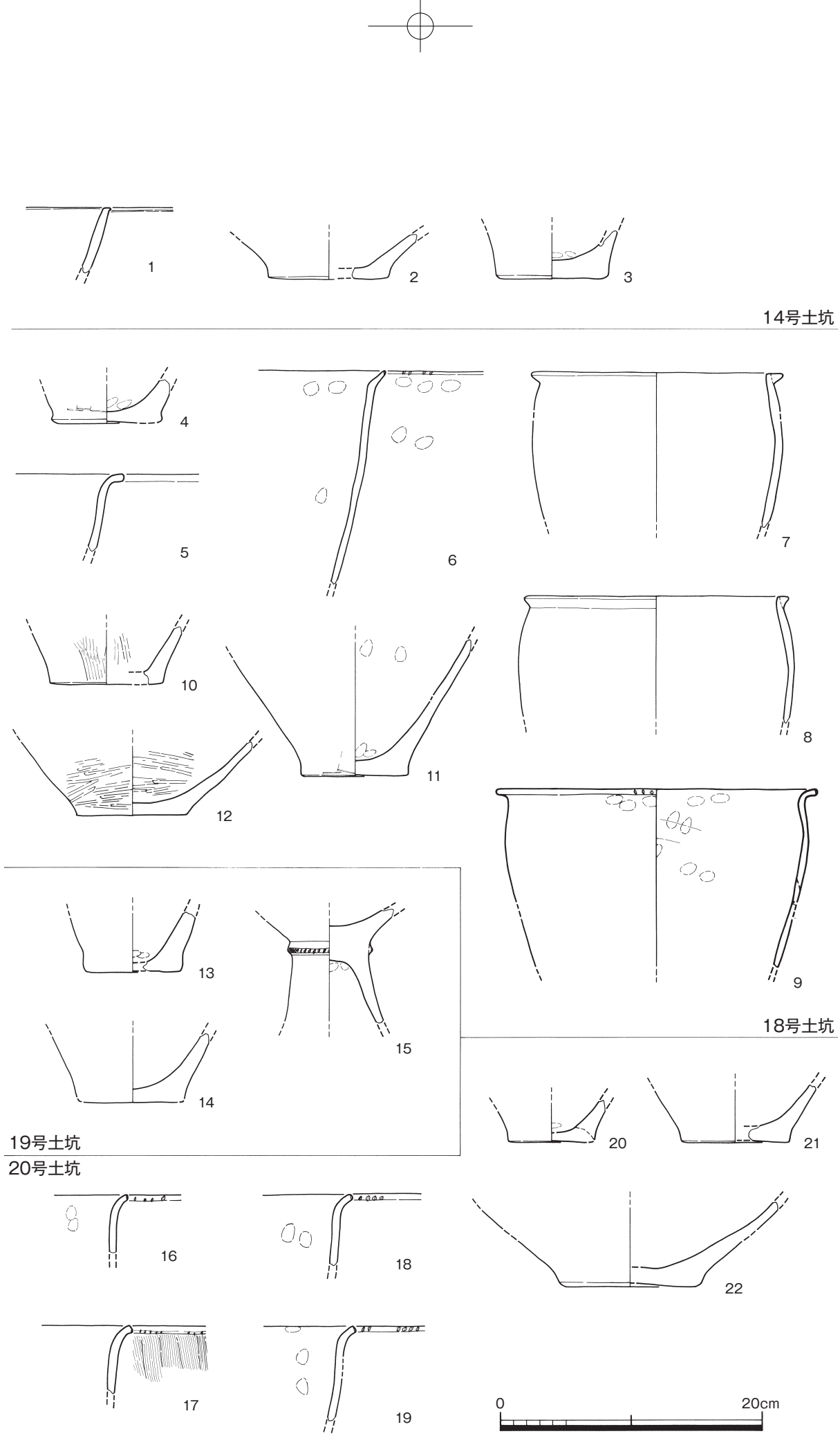
まず、出土地点を特定できていない出土遺物についてである。第58図4は甕であり、胴部から底部にかけて残存する。底部は平底を呈し、外面に種子圧痕が見られる。

次に下層出土遺物についてである。第58図5～11は甕である。5～9は口縁部から胴部にかけて残存する。口縁部については、5・6・9は如意口縁で特に5・9は水平方向への伸びが強く、7・8は断面三角形突帯を口縁端部に貼り付けている。また、6のみ口縁端部に刻目が施されている。胴部は6のみ直線的に外斜しながら伸びているのに対し、そのほかはやや外湾しながら伸びている。煮炊きによる痕跡か、7・8・9は外面胴部にススが付着しており、9は内面胴部にコゲも付着している。10・11は胴部から底部にかけて残存する。どちらも底部は平底であり、10は内面胴部にコゲが付着している。12は壺であり胴部から底部にかけて残存する。平底の底部から胴部に向かって強く広がる。石器は3点出土している。

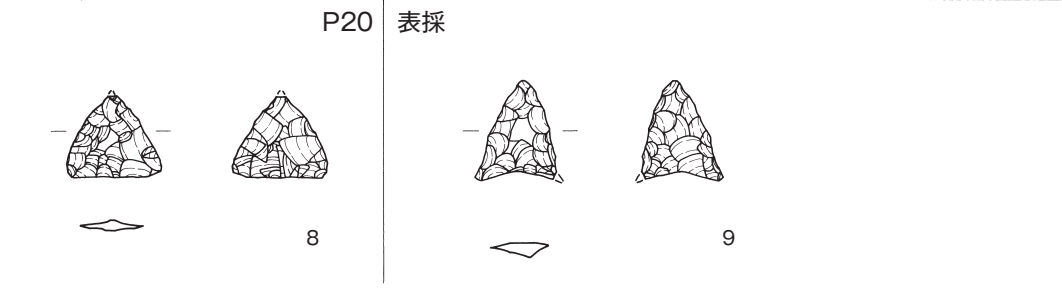
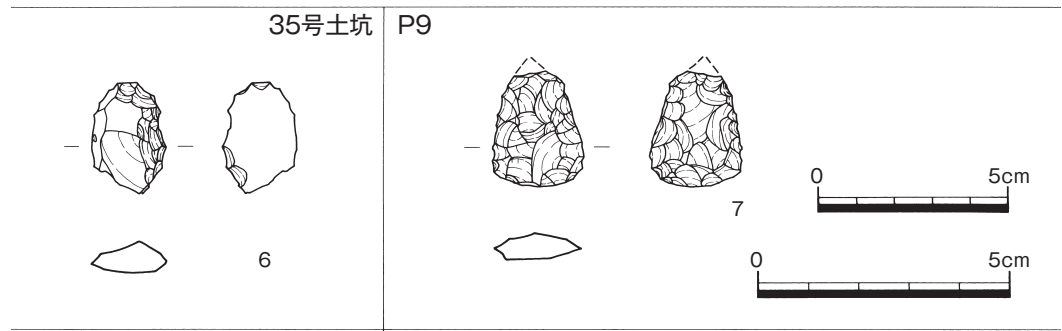
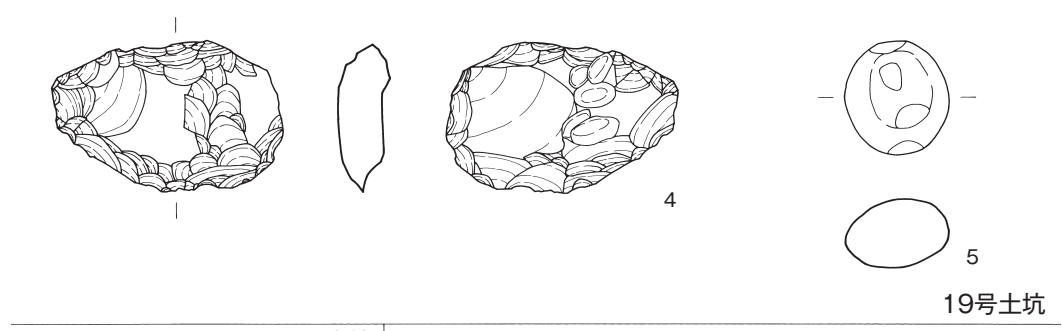
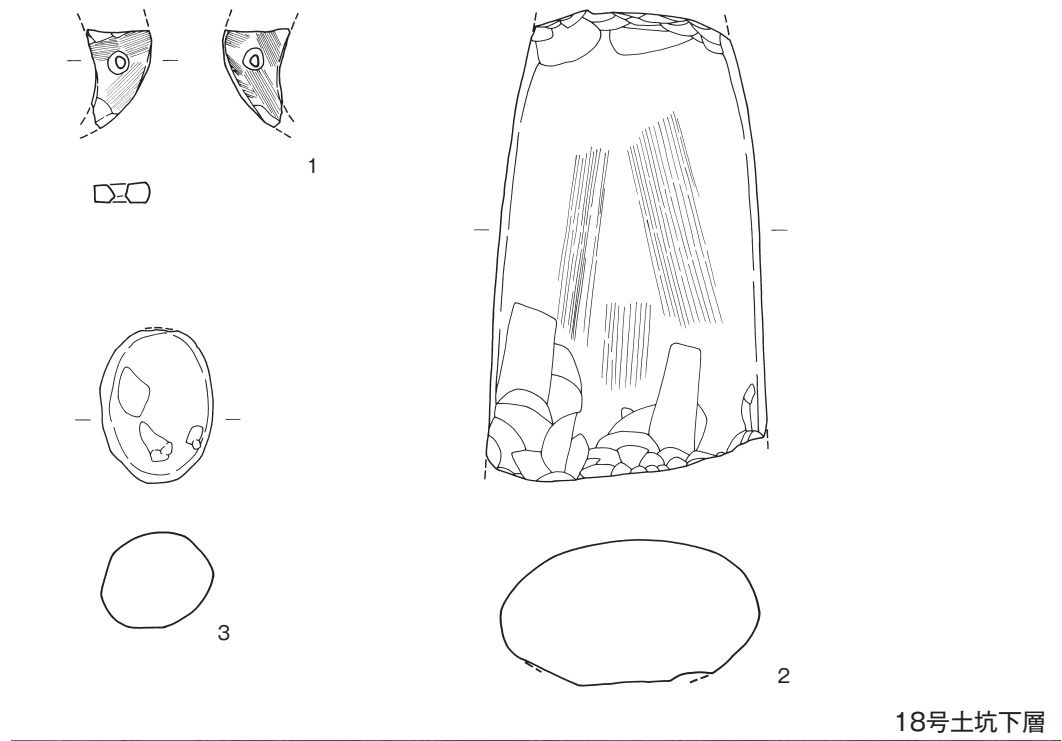
第59図1は勾玉の小片と想定される。くの字にカーブした中央から先端側が残存しており、中央には両側からの作業で穴をあけたと考えられる穿孔が施されている。2は太型蛤刃石斧である。刃先部分は残存していないものの、形態及び石材の材質・色調より、他の遺構で出土し



第 57 図 横隈狐塚遺跡 9 19号・20号・21号土坑遺構実測図 (S=1/40)



第 58 图 横隈狐塚遺跡 9 14 号 · 18 号 · 19 号 · 22 号土坑出土土器実測図 (S=1/4)



第59图 横隈狐塚遺跡9 18号土坑下層、19号・35号土坑、P9・P20、表採出土石器実測図  
(1~6:S=1/2、7~9:S=2/3)

ている大型蛤刃石斧と類似している。3は投弾である。

上記の形態的特徴より、口縁端部に突帯を貼り付けた甕が出土していることから、他の遺構に比べて若干新しい時期の様相を呈する弥生時代前期（板付Ⅱ式期）を中心とした一群であり、この時期の間に遺構が埋まっていったと考えられよう。

#### 19号土坑（第57図、図版23・24）

調査区西側南よりに位置する。遺構の形状や深さ、北側隣接地において土壙墓群が検出されていることを踏まえ、土壙墓、もしくは木棺墓の可能性が想定される。主軸方向はN-21°-Wである。遺構は単独で存在し、規模は長さ211cm、幅124cm、深さ最大67cmを測る。墓壙東側においてテラス状の高まりを一部確認しているが、周辺が竹の根や木の根による攪乱の影響を受けている可能性が高い。基本的に隅丸方形型の1段掘り式と捉えて問題ないとする。埋土の堆積状況からは、木柁などの痕跡を確認できなかったことから、土壙墓である可能性が高いと言えよう。

埋土からは、弥生土器が数点と石核・剥片・河原石といった石器も数点出土しているが、小片の為実測に至ったものは少ない。

#### 出土遺物（第58・59図、図版29・30）

第58図13～15は弥生土器、第59図4は石器、第59図5は土製品である。

第58図13・14は甕である。胴部から底部にかけて残存し、ともに平底である。13は内面にコゲが付着している。15は高杯である。外側に緩やかに広がる杯部に、太めの脚部から裾部に向かって緩やかに伸びている。杯部と脚部の境には、断面三角形突帯を1条巡らせ、さらに断面三角形突出帯の上に刻目を施している。

第59図4はスクレイパーであり、石材は安山岩である。第59図5は土製の投弾である。

出土遺物はいずれも小片であるが、上記の形態的特徴より、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられる。ただし、出土数が少なく小片の為、細分化は難しい状況である。

#### 20号土坑（第57図、図版24）

調査区西側北よりに位置し、15号土坑に切られ、一部調査区外へと延びる。平面形は、現状174×170cmの隅丸方形を呈し、深さは最大約17cmを測る。周辺が竹の根や木の根による攪乱の影響を受けている地点であるためか、多くのピットを土坑内で検出している。埋土は単層であり、南側に向かうにつれ、深さが浅くなっている。

埋土からは、弥生土器が数点出土しているが、いずれも小片の為実測に至らなかった。

#### 21号土坑（第57図、図版24）

調査区東側南よりに位置し、4号土坑と1号溝に切られ、一部調査区外へと延びる。平面形は、現状196×130cmの楕円形を呈し、深さは最大約33cmを測る。

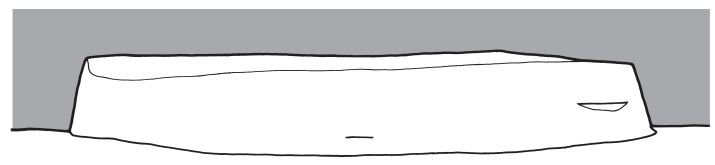
埋土からは、剥片が少量出土しているが、いずれも小片の為実測に至らなかった。

#### 22号土坑（第60図、図版24）

調査区西側中央よりに位置する。遺構の形状や深さ、北側隣接地において土壙墓群が検出されていることを踏まえ、土壙墓、もしくは木棺墓の可能性が想定される。主軸方向はE-8°-Sである。遺構は単独で存在し、規模は長さ303cm、幅200cm、深さ最大55cmを測る。墓壙北側において木の根によるピットの掘り込みを確認している。基本的に隅丸方形型の1段掘り式と捉えて問題ないとする。埋土の堆積状況からは、木柁などの痕跡を確認できなかったことから、土壙墓である可能性が高いと言えよう。

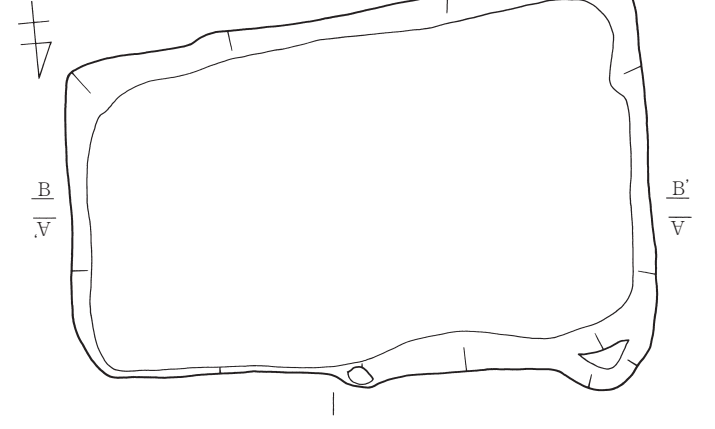
埋土からは、甕を中心とした弥生土器や大型蛤刃石斧、石核、剥片等が出土しているが、小片が多かったため、実測に至ったものは少ない。





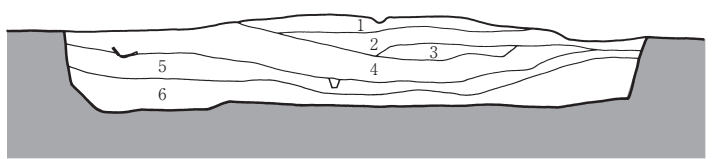
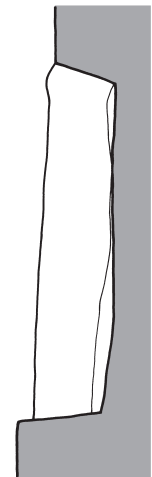
V 00098E V

22号土坑



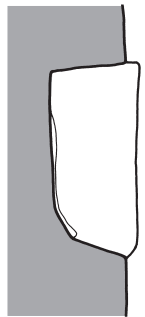
B 38.600m

38.600m

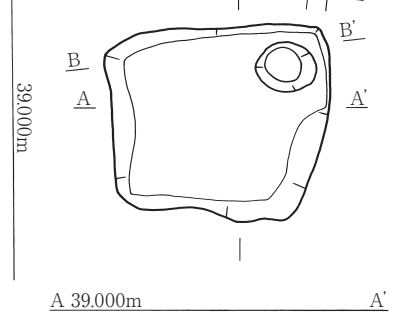


<SK22 土層>

- 1: にぶい褐色土
- 2: 灰褐色土 にぶい橙色土粒10%位含む
- 3: 灰褐色土 にぶい橙色土粒25%位含む、2層より土色橙色味強い
- 4: 黒褐色土 にぶい橙色土粒10%位含む、炭少量含む、土器片含む
- 5: 灰褐色土 にぶい赤褐色土粒10%位含む、炭少量含む、土器片含む
- 6: 灰褐色土 にぶい赤褐色土粒20%位含む、シルト

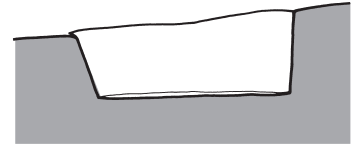
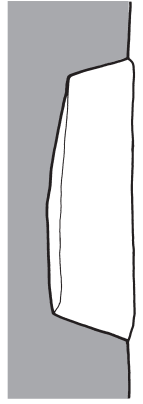


24号土坑



39.000m

A 39.000m



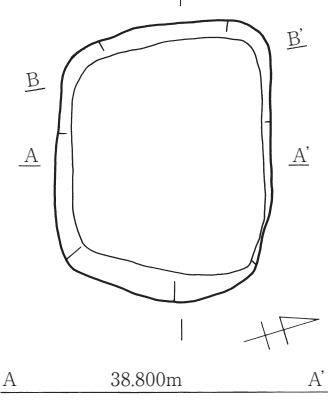
<SK24 土層>

- 1: 褐灰色土
- 2: 灰褐色土
- 3: 灰褐色土 2層より土色明るい
- 4: にぶい褐色土 地山の土が20%位含む [SK25の5層と同じ土質]

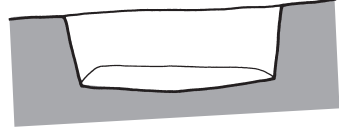


38.800m

25号土坑

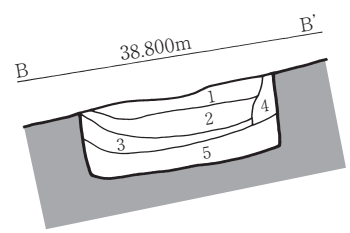


A 38.800m



<SK25 土層>

- 1: 灰褐色土
- 2: 黒褐色土 にぶい橙色土粒10%位含む
- 3: 灰褐色土 黒褐色土粒20%位含む
- 4: 灰褐色土 1層より土色明るい [流れ込み]
- 5: にぶい橙色土 黒褐色土粒や土山の土が10%位含む



第60図 横隈狐塚遺跡9 22号・24号・25号土坑遺構実測図 (S=1/40)

### 出土遺物（第 58・63 図、図版 30）

第 58 図 16～22 は弥生土器、第 63 図 1 は石器である。

第 58 図 16～21 は甕である。16～19 は口縁部から胴部にかけて残存する小片である。口縁部は如意口縁で、口縁端部に刻み目が施され、胴部に向かってやや直線的に伸びる。20・21 は胴部から底部にかけて残存する。ともに平底で、20 は内面胴部にコゲが付着している。22 は壺であり、胴部から底部にかけて残存する。やや上げ底気味の底部から胴部に向かって外側に広がっている。

第 63 図 1 は小さな剥離面を石材の側面の先端を中心に数か所確認したことから、打製石鏃の未製品であると考えられ、石材は黒曜石である。

出土遺物はいずれも小片であるが、上記の形態的特徴より、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられる。ただし、出土数が少なく小片の為、細分化は難しい状況である。

### 23 号・26 号土坑（第 61 図、図版 24・25）

調査区中央北よりに位置し、一部調査区外へと延びる。上段の掘り込みと下段の掘り込みで軸のズレが大きかったことから、上段を 23 号土坑、下段を 26 号土坑として記すこととした。なお、調査区北壁際で検出した土坑であり、一部調査区外へと延びていたため掘削可能な範囲が狭く、且つ、深さもかなり深かったことから、壁面が崩れる危険性があったため、各土坑の底面が見えた段階で掘削をストップしている。23 号土坑の平面形は、現状 165 × 107cm の隅丸方形を呈し、深さは最大約 140cm を測る。一方、26 号土坑は、23 号土坑より軸が北東側にズレており、土層観察より、26 号が埋まった後に 23 号土坑が使用されていることが窺える。しかし、26 号土坑の上面は、調査区壁際すぎて遺構検出を行なうには危険な状況であることから現状で掘り込みラインの検出はできなかった。よって、平面形は、現状で底面 192 × 60 + a cm、深さ最大 210 cm を測る。なお、23 号・26 号土坑南北土層断面の 10～14 層の状況と 26 号土坑東西土層断面の関係性から、26 号土坑が一度埋まった後に、軸を変えて 23 号土坑を掘りぬき、使用したと考えられよう。用途としては、23 号・26 号土坑ともににぶい橙色やにぶい褐色を中心とした埋土で構成され、土坑の深さも深いことから、貯蔵穴として使用されたと想定される。なお、埋土は、26 号土坑が水平堆積の様相を呈しているのに対し、23 号土坑はレンズ状堆積の様相を呈している。

埋土からは、23 号・26 号ともに弥生土器をはじめ打製石鏃、スクレイパー、砥石、磨石、投弾をはじめ剥片・河原石がまとまって出土しているが、小片のものが多く、実測に至ったものは少ない。なお、出土遺物については、23 号土坑と 26 号土坑それぞれに分けて記すこととする。

### 23 号出土遺物（第 62・63 図、図版 30・31・32）

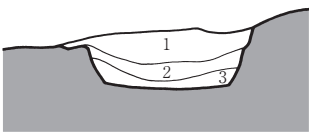
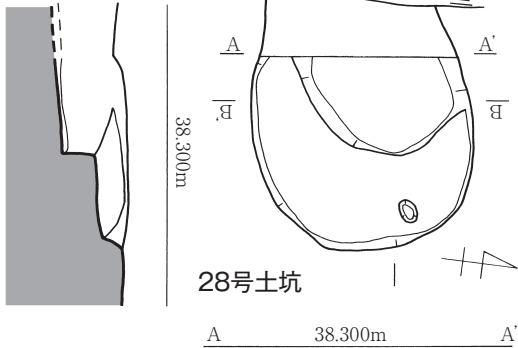
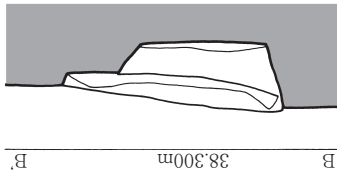
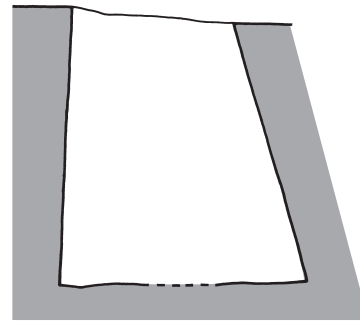
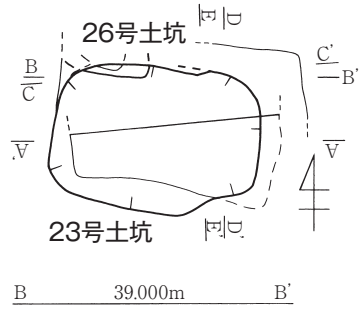
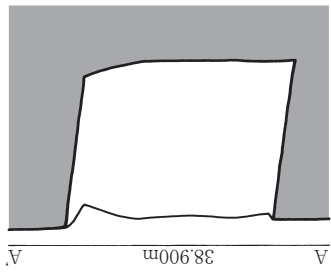
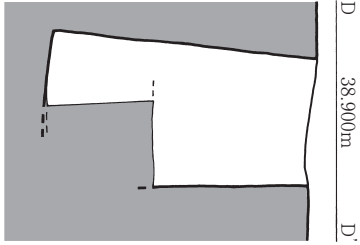
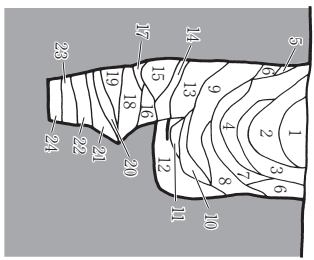
第 62 図 1～10 は弥生土器、第 63 図 2～9 は石器である。その内、第 62 図 7～10 と第 63 図 8・9 は上層より出土している。

まず、出土地点を特定できていない出土遺物についてである。第 62 図 1～4 は甕で、口縁部から胴部にかけて残存する。1・2・4 は水平方向への伸びの強い如意口縁で、3 は口縁端部に断面三角形突帯を 1 条貼り付けている。1・3・4 は口縁端部に刻目を施しており、外面胴部にススが付着している。5・6 は壺である。5 は口縁部から頸部にかけて残存する小片であり、やや肥厚した口縁部から内湾しながら頸部へと伸びる。6 は胴部から底部にかけて残存しており、肉厚の平底の底部から胴部に向かって外湾しながら伸びる。

石器は 6 点出土している。第 63 図 2 は打製石鏃で、石材は安山岩である。3 は小さな剥離面が石材の側面の先端を中心に数か所確認したことから、打製石鏃の未製品であると考えられ、石材は安山岩である。4 は磨石であり、一部敲打痕が残る。5～7 は投弾である。

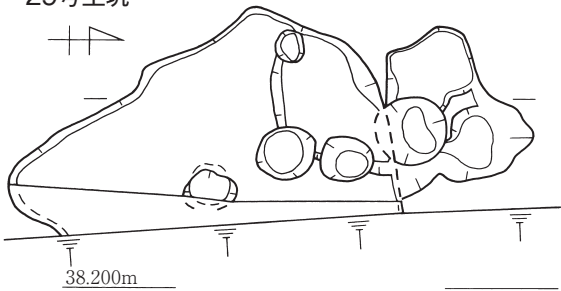
次に上層出土遺物についてである。第 62 図 7・8 は甕であり、胴部から底部にかけて残存する。どちらも平底であるが、7 は底部中央に焼成前に施された穿孔がある。9・10 は壺であり、口縁部から頸部にかけて残存する小片である。ともに素口縁の口縁部から内湾しながら頸部へと伸

- <SK23・26 南北土層>
- 1: 灰褐色土 シルト、土器片含む
  - 2: 灰褐色土 1層より土色濃い、シルト、土器片含む
  - 3: にぶい褐色土 シルト
  - 4: 灰褐色土 2層より土色濃い、土器片含む
  - 5: にぶい褐色土 シルト
  - 6: 褐色土 シルト
  - 7: にぶい褐色土 灰褐色土粒20%位含む
  - 8: 褐色土 灰褐色土粒20%位含む
  - 9: にぶい褐色土 シルト、地山の土10%位含む
  - 10: にぶい褐色土 9層より土色暗い、地山の土5%位含む
  - 11: にぶい褐色土 10層より土色やや暗い、地山の土15%位含む
  - 12: 褐灰色土 地山の土を15%位含む、シルト、土器片含む
  - 13: 褐灰色土 12層より土色暗い
  - 14: 褐色土 シルト
  - 15: にぶい褐色土 褐灰色土粒10%位含む、シルト
  - 16: 灰褐色土 シルト
  - 17: にぶい褐色土 シルト、地山の土を30%位含む
  - 18: 灰褐色土 シルト、にぶい褐色土粒10%位含む
  - 19: にぶい褐色土 シルト、灰褐色土粒15%位含む
  - 20: にぶい褐色土 シルト、地山面の土を10%位含む
  - 21: にぶい褐色土 シルト
  - 22: にぶい褐色土 地山の土10%位含む
  - 23: 灰褐色土 シルト
  - 24: にぶい褐色土 やや粒質、シルト、地山の土5%位含む



- <SK28 土層>
- 1: 灰褐色土 にぶい褐色土粒5%位含む
  - 2: にぶい褐色土
  - 3: 褐灰色土 にぶい褐色土粒10%位含む

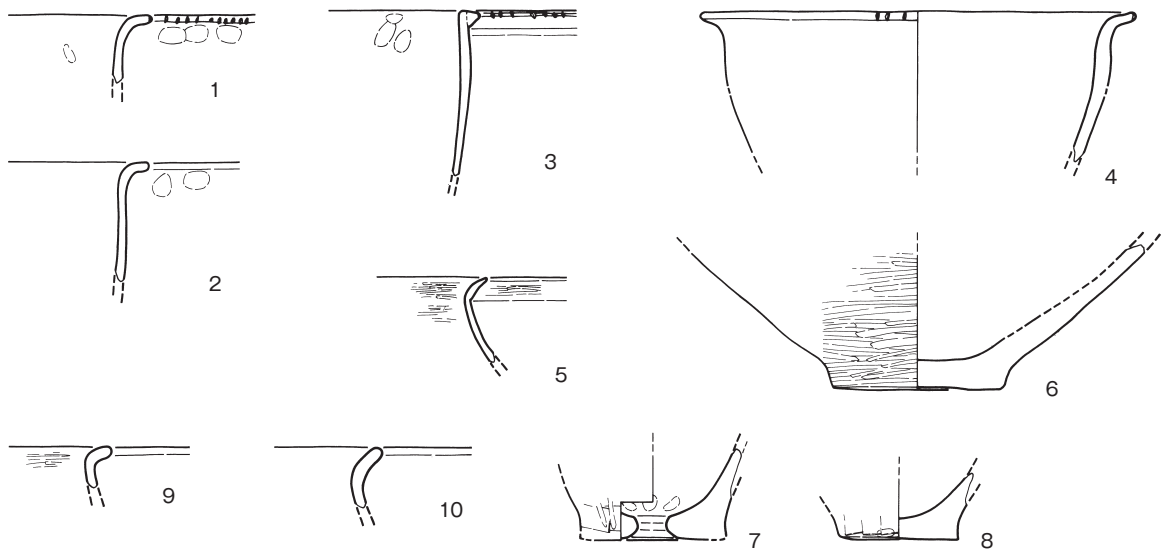
29号土坑



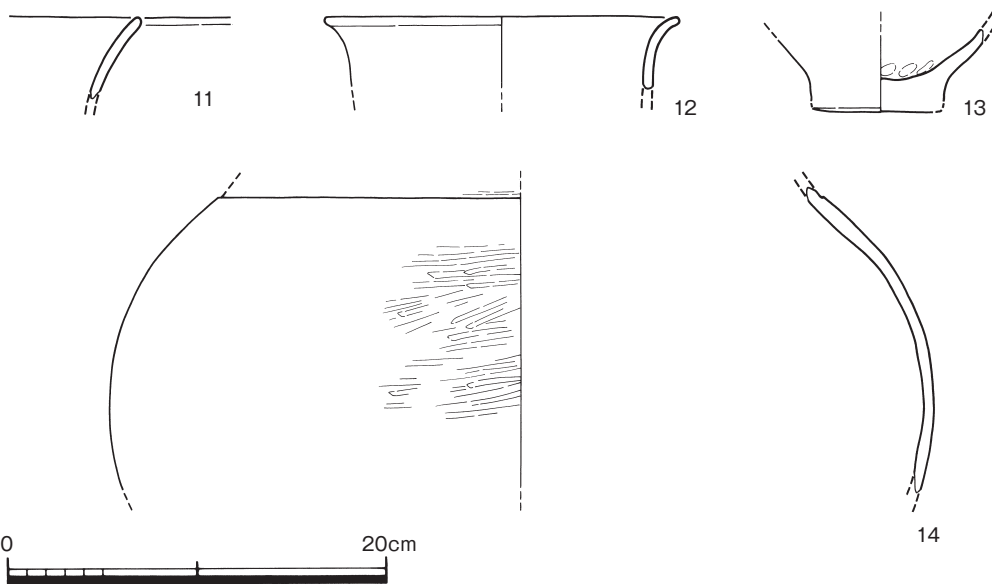
- <SK26東西 土層>
- 1: SK23 5層と同じ
  - 2: SK23 6層と同じ
  - 3: SK23 9層と同じ
  - 4: にぶい褐色土 3層より土色やや暗い
  - 5: 灰褐色土 シルト
  - 6: SK23 13層と同じ
  - 7: 灰黄褐色土 土器片含む
  - 7': SK23 14層と同じ
  - 8: SK23 15層と同じ
  - 9: SK23 17層と同じ
  - 10: SK23 18層と同じ
  - 11: にぶい褐色土 地山面の土 [流れ込み]
  - 12: SK23 19層と同じ
  - 13: SK23 20層と同じ
  - 14: SK23 21層と同じ
  - 15: SK23 22層と同じ、土器片含む
  - 16: SK23 23層と同じ
  - 17: SK23 24層と同じ
  - 18: SK23 14層と同じ



第61図 横隈狐塚遺跡9 23号・26号・28号・29号土坑遺構実測図  
(SK23・26: S=1/60, SK28・29: S=1/40)



23号土坑  
25号土坑

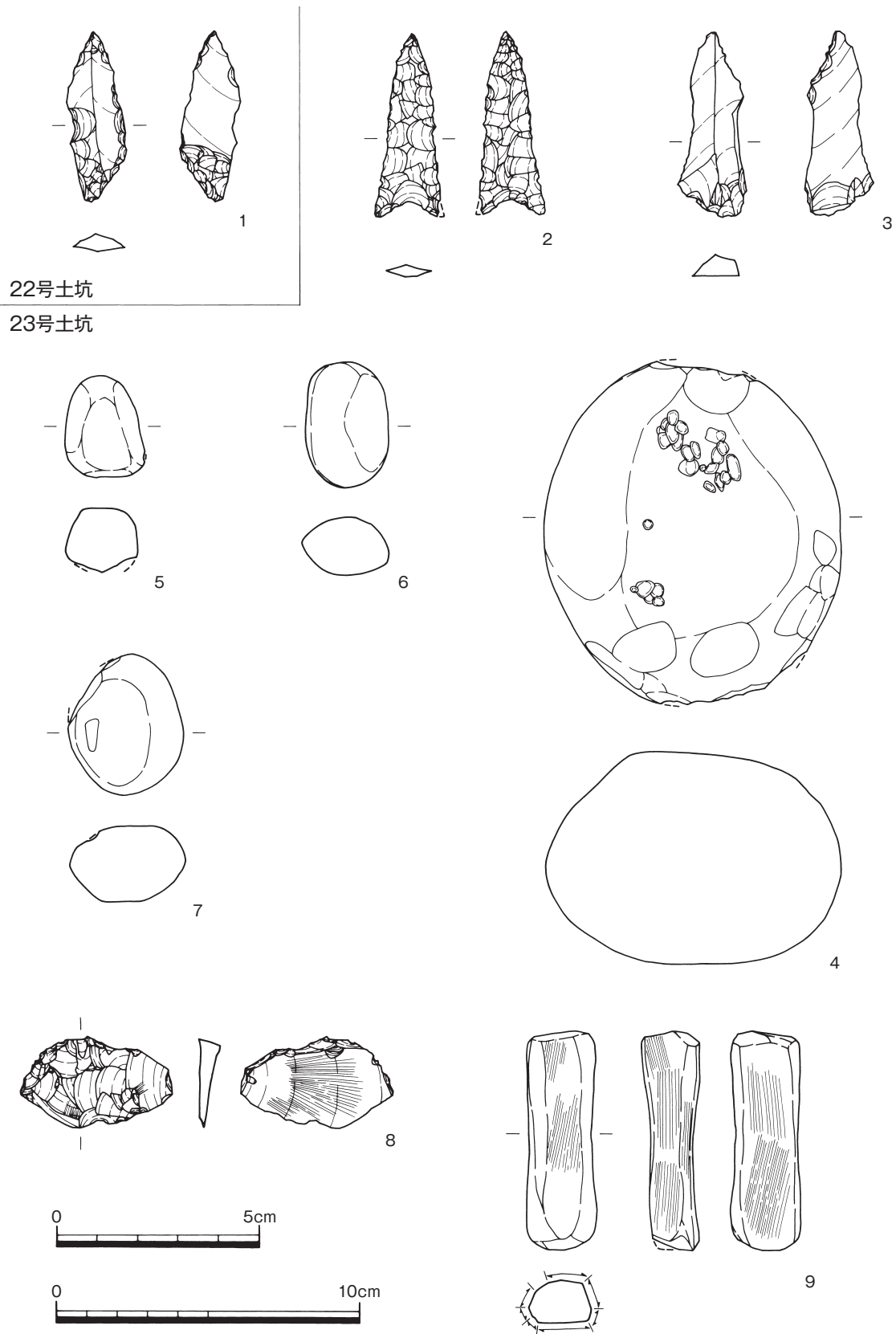


第62図 横隈狐塚遺跡9 23号・25号土坑出土土器実測図 (S=1/4)

びるが、9は口縁部から頸部へと変化する箇所の屈曲がやや強い。

石器は2点出土している。第63図8はスクレイパーで、石材は黒曜石である。9は砥石で、砥面を7面確認している。法量は縦7.2cm×横2.3cm×厚さ1.4cm、重さ37.6gと小型であることから、手に持って砥ぐ際に使用したと考えられる。

出土遺物はいずれも小片であるが、上記の形態的特徴より、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられる。ただし、出土数が少なく小片の為、細分化は難しい状況である。



第 63 图 横隈狐塚遺跡 9 22 号・23 号土坑出土石器実測図 (1 ~ 3 : S=2/3、4 ~ 9 : S=1/2)

## 26号出土遺物（第64図、図版29）

第64図1～6は弥生土器である。その内、1～5は下層、6は最下層より出土している。

まず、下層出土遺物についてである。第64図1・2は甕である。1は胴部から底部にかけて残存し、底部は平底である。2は口縁部から胴部にかけて残存する。口縁端部に刻目を施した如意口縁が胴部に向かってやや直線気味に伸びながら底部に向かってすぼまっていつている。3～5は壺である。3は口縁部から頸部にかけて残存する。口縁端部は上下に刻目が施され、頸部に向かって内湾しながら伸び、一部強いナデにより段を形成している。4・5は胴部から底部にかけて残存する。ともに平底の底部から胴部に向かって外湾しながら伸びる。

次に、最下層出土遺物についてである。第64図6は甕であり、口縁部から胴部にかけて残存する。素口縁の如意口縁を呈し、砲弾状の形態を呈しながら底部へとすぼまる。外面胴部にはススが付着している。

出土遺物は、第64図2・6のように一部残存率の良い遺物があるものの、相対的に小片のものが多くあったが、上記の形態的特徴より、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられる。ただし、出土数が少なく小片の為、細分化は難しい状況である。

## 24号土坑（第60図、図版25）

調査区中央北よりに位置する。平面形は、現状114×103cmの隅丸方形を呈し、深さは最大約43cmを測る。埋土は1層がピットの攪乱として掘り込まれている以外は、基本水平堆積を呈する。

埋土からは、出土遺物はみられなかった。

## 25号土坑（第60図、図版25）

調査区中央北よりに位置する。平面形は、現状148×114cmの隅丸長方形を呈し、深さは最大約45cmを測る。

埋土からは、弥生土器が少量出土している。

## 出土遺物（第62図）

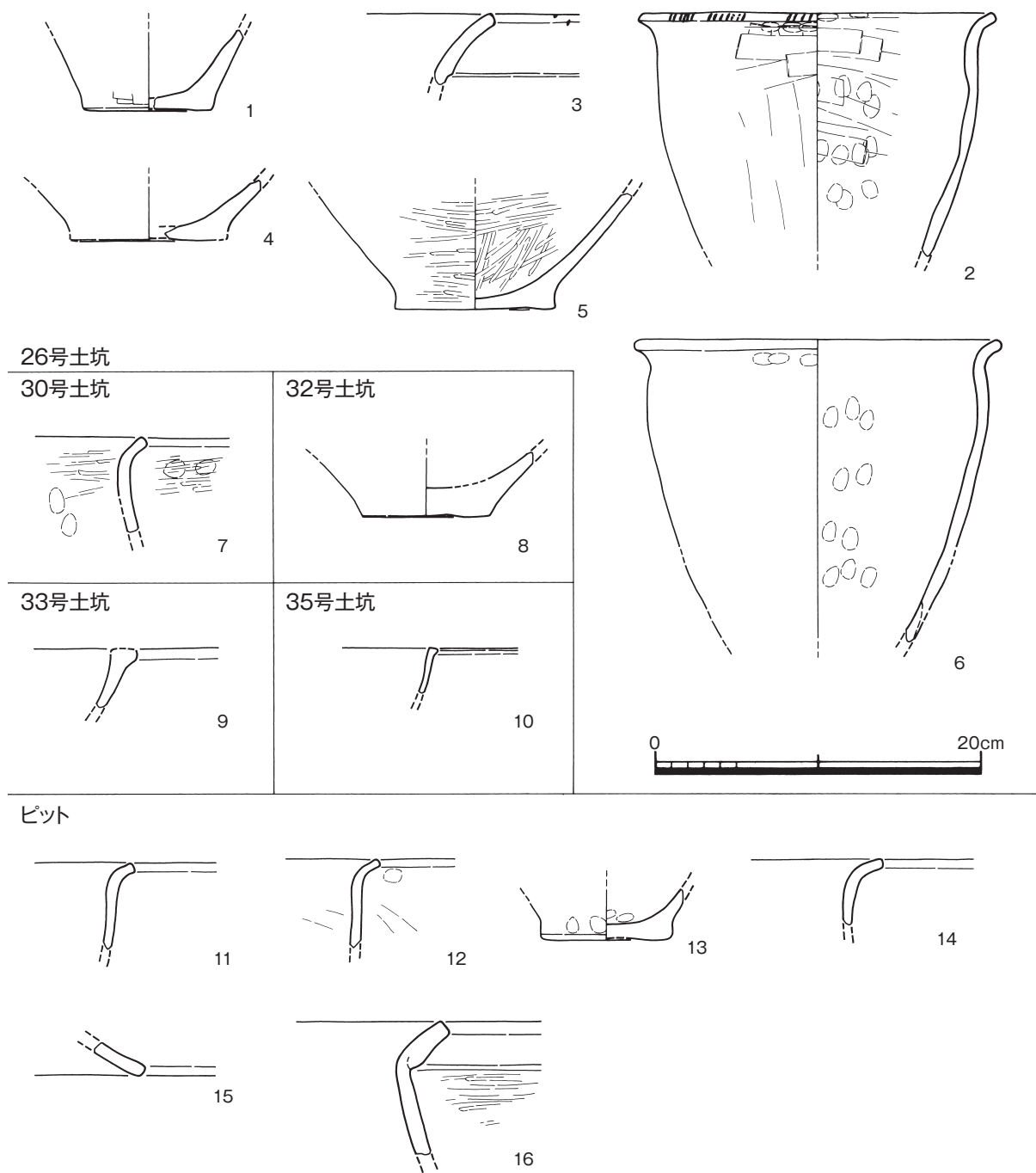
第62図11～14は弥生土器であり、すべて壺である。11・12は口縁部から頸部にかけて残存する。素口縁の口縁部から11はやや外側に内湾しながら頸部へと伸び、12は如意口縁の口縁部から頸部に向かって直線気味に伸びる。13は胴部から底部にかけて残存している。肉厚で平底の底部から胴部に向かって外湾しながら伸びている。14は大きく外湾した胴部片であり、頸部との境には強いナデ調整による窪みが胴部を一周めぐっている。

出土遺物は少ないものの、上記の形態的特徴より、弥生時代前期（板付Ⅱ式期）の様相に比定できると考えられる。ただし、相対的な出土数が少なく小片の為、細分化は難しい状況である。

## 27号土坑（第41図）

調査区西側中央よりに位置し、4号竪穴式住居跡に一部切られる。当初は、東側調査区の西端に位置しており、遺構の西端の壁を検出できなかったことから西側調査区に遺構が続くと想定していた。しかし、西側調査区の表土を重機で剥ぎすぎたためか、遺構の西端の輪郭を検出できなかった。平面形は、現状475cm×68cmの隅丸長方形を呈し、深さは10cm程度である。4号竪穴式住居跡に遺構の南側半分を切られているため、遺構の形状、用途としては判然としないうところが多い。

埋土からは、弥生土器が数点、石鏃未製品や剥片が数点出土しているが、いずれも小片の為、実測に至らなかった。



第64図 横隈狐塚遺跡9 26号・30号・32号・33号・35号土坑、ピット出土土器実測図 (S=1/4)

28号土坑 (第61図、図版25)

調査区中央南よりに位置する。平面形は、現状129×115cmの楕円形を呈し、中央部が深くなる2段掘りの構造を呈し、深さは最大約38cmを測る。埋土は水平堆積を呈する。

埋土からは、弥生土器が数点出土したが、いずれも小片の為、実測に至らなかった。

### 29号土坑（第61図、図版26）

調査区中央南よりに位置する。平面形は、現状206×103cmの楕円形を呈し、深さは最大約33cmを測る。北側に広がるやや大きめのピットの影響を受けてか、土坑内北側が一部深くなっている。

埋土からは、遺物は出土しなかった。

### 30号土坑（第65図、図版25）

調査区西側南よりに位置する。平面形は、現状151×132cmの楕円形を呈し、深さは最大約19cmを測る。

埋土からは、弥生土器が数点出土しているが、小片の為実測に至ったものは少ない。

#### 出土遺物（第64図）

第64図7は弥生土器の壺である。口縁部から頸部にかけて残存しており、如意口縁の口縁部から緩やかに内湾して胴部へと伸びる。

### 32号土坑（第65図、図版26）

西側調査区北よりに位置し、7号竪穴式住居跡を切り、調査区外へと延びる。平面形は、現状225×100cmの隅丸長方形を呈し、深さは最大約30cmを測る。

埋土からは、弥生土器が数点出土しているが、小片の為実測に至ったものは少ない。

#### 出土遺物（第64図）

第64図8は弥生土器の甕の底部である。胴部から底部にかけて残存しており、平底を呈する。

### 33号土坑（第65図、図版26）

西側調査区南壁際に位置し、4号竪穴式住居跡に切られ、調査区外へと延びる。平面形は、現状230×125cmの隅丸長方形を呈し、北東側から溝状の掘り込みもみられるが、この溝状遺構の延長線が西側調査区際にある大きな切り株にあたることから、この木から派生した根による攪乱の可能性も残る。深さは最大約25cmを測る。

埋土からは、弥生土器が数点出土している。

#### 出土遺物（第64図）

第64図9は弥生土器の高杯で、杯部のうち口縁部の小片である。口縁端部がやや外側に肥厚した肉厚を呈しており、やや膨らみを持ちながら脚部に向かってすぼまっていく。

### 34号土坑（第65図）

西側調査区北よりに位置し、東南側を攪乱により切られる。平面形は、現状140×125cmの楕円形を呈し、深さは最大17cmである。なお、34号土坑の東側の掘り込み部分は、竹の根による攪乱を受けていたことから現代の攪乱と捉えている。

埋土からは、弥生土器が数点出土しているが、いずれも小片の為実測に至らなかった。

### 35号土坑（第66図、図版26）

西側調査区北壁際に位置し、7号竪穴式住居跡に切られ、調査区外へと伸びる。平面形は、現状177×135cm、深さ約10cmの隅丸長方形を呈する。

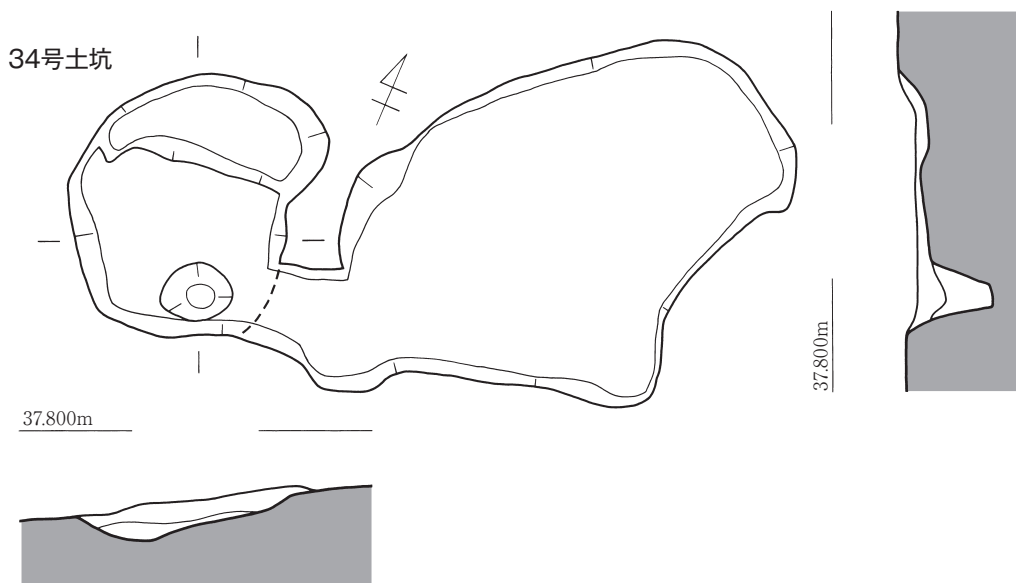
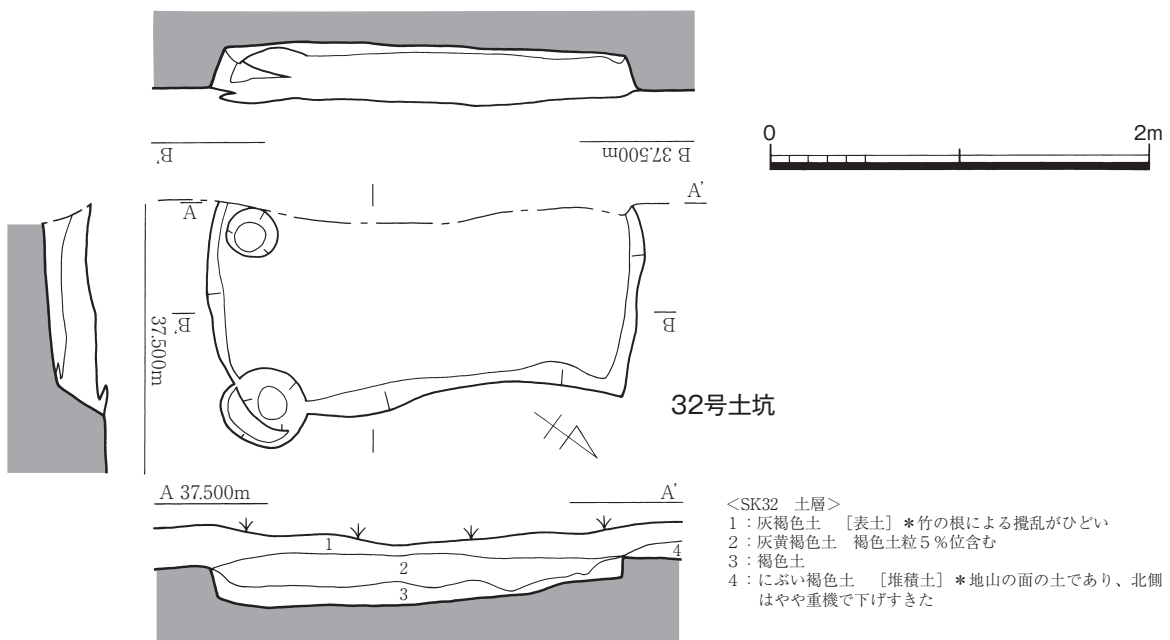
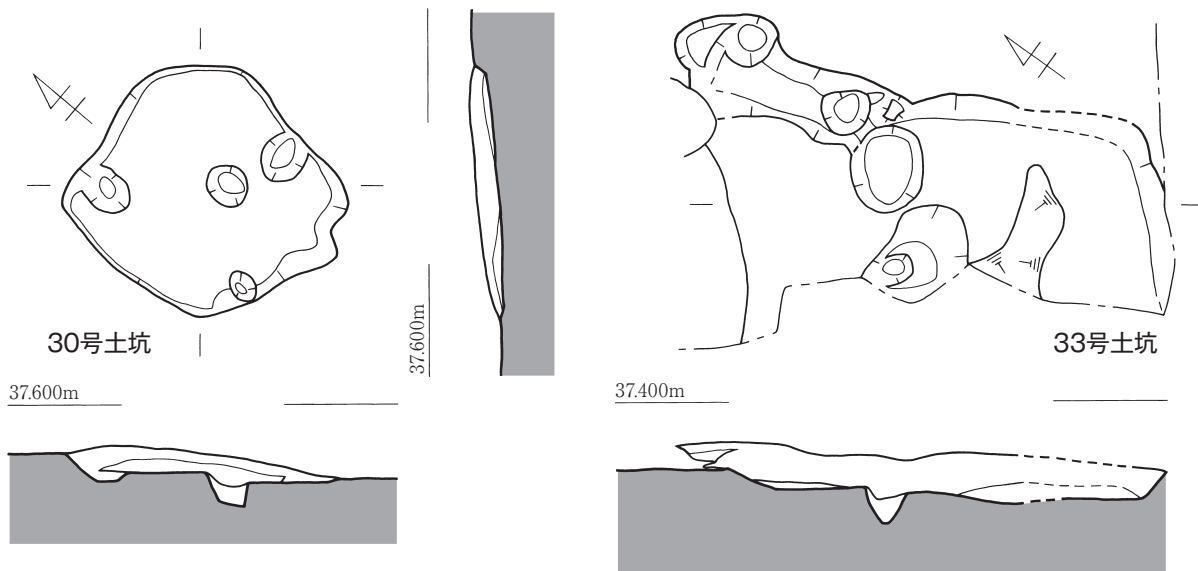
埋土からは、弥生土器数点と石核が出土している。

#### 出土遺物（第59・64図、図版30）

第64図10は弥生土器、第59図6は石器である。

第64図10は鉢である。つまむように外側に肥厚した口縁端部から胴部に向かってやや外湾しながらすぼまっていつている。第59図6は石核である。小さな剥離面を石材の側面の先端を中心に数か所確認したが、打製石鏃の未製品と判断するには全体的に判然としない。





第 65 図 横隈狐塚遺跡 9 30号・32号・33号・34号土坑遺構実測図 (S=1/40)

### 3. 溝【SD】

#### 1号溝（第66図、図版27）

調査区東側南よりに位置し、1号・4号・21号土坑に切られる。現状で全長約4.1m、幅約27～40cm、深さ最大約26cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は水平堆積の様相を示す。埋土からは、弥生土器が数点出土しているが、いずれも小片の為、実測に至らなかった。

### 4. ピット【P】

調査区域内において、27基のピットを確認した。その内、遺物が出土したピットは27基あるが、実測に耐えうる資料が出土したのはP6の3点、P8の1点、P9の1点、P20の2点、P21の1点である。

#### P6出土遺物（第64図）

第64図11～13は弥生土器の甕である。11・12は如意口縁から胴部に向かって直線的に伸びている。12は外面胴部にススが見られる。13は胴部から底部にかけて残存し、底部は平底である。

#### P8出土遺物（第64図）

第64図14は弥生土器の甕で、口縁部から胴部にかけて残存する小片である。如意口縁から胴部へと直線に伸びる。

#### P9出土遺物（第59図、図版30）

第59図7は打製石鏃であり、頂部が一部欠けている。石材は安山岩である。

#### P20出土遺物（第59・64図、図版30）

第64図15は弥生土器の蓋で、裾部の小片である。素口縁の裾部が直線気味に内傾しながら伸びる。

第59図8は打製石鏃で、石材は黒曜石である。

#### P21出土遺物（第64図）

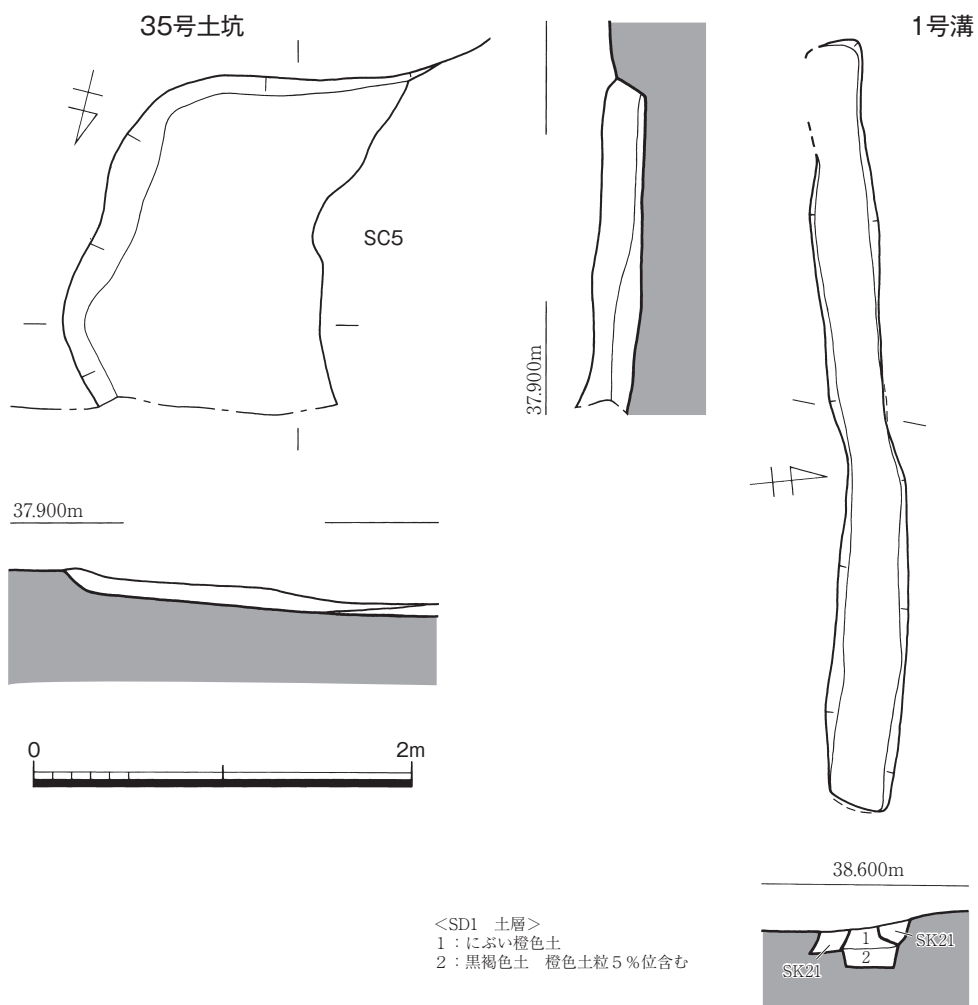
第64図16は弥生土器の壺であり、口縁部から頸部にかけて残存する。肥厚した口縁端部を持つ口縁部から、頸部に向かって内湾しながら伸びるが、口縁部と頸部との境の屈曲が強い。

### 5. その他

表土から遺構検出面までの深さが30cm程度と比較的浅いこともあってか、遺構検出時に打製石鏃や石核、剥片等を表採することが多かった。表採した遺物の中には、残存状況が良いものもあったことから、下記に示すこととした。

#### 出土遺物（第59図、図版30）

第59図9は打製石鏃であり、石材は安山岩である。



第66図 横隈狐塚遺跡9 35号土坑、1号溝遺構実測図 (S=1/40)

## 第7章 まとめ

本遺跡は、丘陵の西側から南側斜面部分に位置しており、7次調査区と同じ丘陵に所在することから、遺構評価を行う上で7次調査区の成果との検討は必要不可欠である。よって、以下では、まず、本遺跡の遺構概要をまとめた後、次に、7次調査区を含めた遺構の広がりについて考察を行うこととする。その後、本遺跡周辺における同時期の遺跡の広がりを整理すること、当時の人々の活動の広がりについて若干ではあるが考察を行うこととする。

### 1. 横隈狐塚遺跡8次調査区・9次調査区における弥生時代前期の遺構について

今回の調査で検出した遺構は、標高32.2m～38.8mの丘陵斜面部に位置する。8次調査区3号土坑を除くほとんどが弥生時代前期（板付Ⅱ式）に比定できる土器を中心とした一群が出土しており、弥生時代前期の集落を検出した遺跡と言える。

検出遺構は、竪穴式住居跡・土坑（貯蔵穴・土壙墓含む）・溝である。下記では特に竪穴住居跡と土坑についての特徴についてまとめることとする。

竪穴式住居跡は、標高36.6m～38.5mの丘陵頂部付近西側から南側を中心に7軒（円形住居：5軒、方形住居：2軒）検出した。住居跡の平面形は、円形だけでなく方形も確認しており、北松尾口遺跡2地点のように、2種類の平面形が混在することが指摘できる。

土坑は67基確認したが、そのうち形態・埋土・土器出土状況から「貯蔵穴」と判断したものが14基、「土壙墓」と判断したものが2基存在する。まず、貯蔵穴に該当するのは、8次調査区：8号・11号・15号・16号・19号・20号・24号・28号・34号土坑、9次調査区：7号・8号・18号・

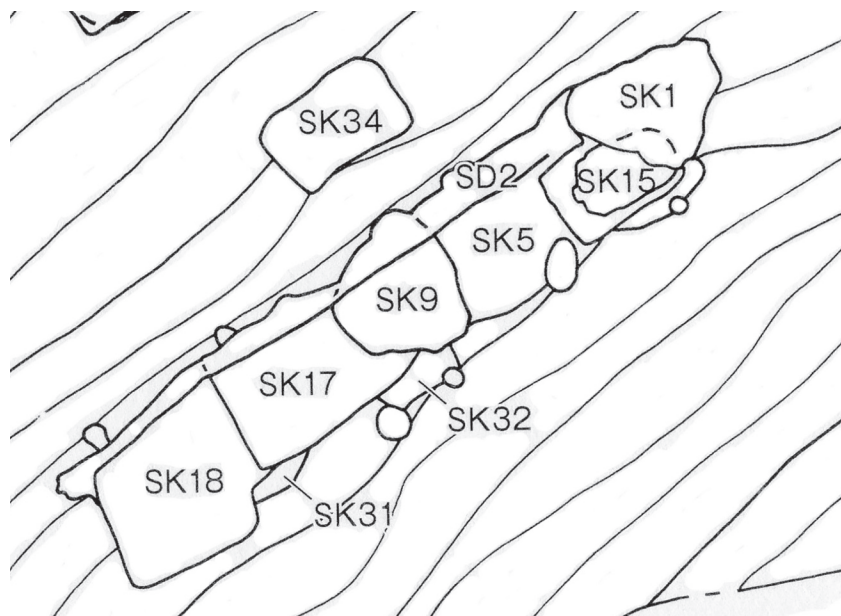
表2 横隈狐塚遺跡8次調査区・9次調査区 貯蔵穴一覧表

調査 次数	遺構 番号 (SK)	標高 (m)	形態・規模 (cm)						床面 ピット	備考
			上端		下端		壁面			
			形態	長×短	形態	長×短	形態	深さ		
8次 調査	8	39.6	隅丸方形	153×124	隅丸方形	152×87	やや内斜	148	—	
	11	36.7	隅丸方形	162×153	隅丸方形	154×128	やや内斜	164	—	一部壁崩落
	15	35.1	隅丸長方形	139×81	隅丸長方形	132×69	直立	120	—	
	16	36.6	隅丸方形	186×179	隅丸方形	176×132	直立	255	—	一部壁崩落
	19	35.6	隅丸長方形	253×196	—	—	やや内斜	130	—	半掘
	20	37.9	楕円形	210×194	—	—	—	242	—	壁面掘り 残し有り
	24	36.4	楕円形	267×226	—	—	やや内斜	142	—	半掘、 一部壁崩落
	28	36.6	隅丸長方形	237×134	—	—	直立	223	—	半掘
	34	35.9	長方形	187×117	長方形	150×96	直立	164	—	2段掘り
9次 調査	7	38.6	楕円形	159×137	楕円形	150×95	上側：直立 下側：やや外斜	190	—	
	8	38.7	隅丸方形	208×167	隅丸方形	195×165	上側：やや内斜 下側：やや外斜	233	—	2段掘り
	18	38.5	隅丸方形	151×120	隅丸方形	109×100	やや内斜	186	—	一部壁崩落
	23	38.8	隅丸方形	165×107	—	—	直立	140	—	半掘
	26	38.8	隅丸方形	192×60+α	—	—	やや外斜	210	—	半掘

23号・26号土坑であり、本遺跡調査区内において8次調査区20号土坑の深さ242cmが貯蔵穴において最大の深さを示している。貯蔵穴の構造としては、9次調査区23号・26号土坑において貯蔵穴同士の切り合い関係がみられ、8次調査区34号土坑と9次調査区8号土坑は2段掘りの構造を示している。その他の多くは単独の素掘りであるが、中には、8次調査区11号・16号・24号土坑、9次調査区18号土坑のように中段より上層で壁面の崩落による遺構の広がりも確認している。実際、本遺跡調査期間中には記録的豪雨を観測した時期を含む梅雨の時期や台風の影響により掘り上げた貯蔵穴の壁の一部が崩落することがあったことから、当時も風雨等により遺構の壁が崩落することがあったものと推察されよう。

次に、土壙墓に該当するのは、9次調査区：19号・22号土坑であり、19号土坑は南北方向、22号土坑は東西方向に主軸をとっている。特に19号土坑は7次調査区西端で検出されている南北方向の土壙墓と軸が一致することから関連している可能性が想定される、

最後に、8次調査区の標高35.0m～35.6mの斜面上において、1号・5号・9号・17号・18号土坑が重なり合うように掘削され、各遺構の形状は段状遺構の様相を呈していた。これらの遺構は、標高35.4m付近の等高線に沿って北東方向から南西方向に向かって各遺構の北側の下端が並ぶように掘削されていることから、時期を空けずに建物の建て替えという思考で繰り返し掘削した可能性が考えられよう。上記の遺構について本書では土坑として扱っているが、理由は、遺構の長辺が200～288cmと住居跡等を想定した場合短いためであった。しかしながら、本書を執筆する際に、三国丘陵に所在する同時期の集落が発見されている報告書を調べている際、三国丘陵においては、弥生時代前期後半から中期初頭にかけての集落が多数発見されているが、中には、本遺跡と同様に斜面上に方形の段状遺構が築かれている例が北松尾口遺跡2地点・3地点や一ノ口遺跡において検出されており、方形の竪穴式住居跡として捉えられていることを知った。これらの方形の竪穴式住居跡の長辺の長さは、北松尾口遺跡で最小271cm、一ノ口遺跡で最小229cmであり、200～300cm代の方形の竪穴式住居跡が発見されている。これらの事例を踏まえると、遺構の形態から5号・17号・18号土坑は作業小屋等の小型の竪穴式住居跡の可能性が考えられよう。というのも、北松尾口遺跡2地点の発掘調査を担当した柏原孝俊氏より、斜面上に築かれた方形の竪穴式住居跡を中心に柱状片刃石斧等伐採に関係する道具が出土していたことから、道具を保管する小屋的な性格が考えられるのではないかと調査時より感じていたと伺った。本書でも17号土坑より打製石鏃1点と投弾、18号土坑より石鎌1点と投弾が出土しており、狩猟や農耕のための道具が出土している。また、これらの土坑が丘陵上において斜面の傾斜がきつくなる直前の場所に位置することも考慮すると、道具のメンテナンスを行いやすいようなるべく集落に近い所に作業小屋を作り、丘陵上に築かれた集落から狩猟や農耕のため平地に降りる際にこの作業小屋から道具を持ち出していた可能性も想定できよう。なお、5号・17号・18号土坑の各遺構の北側の壁際沿いには数基のピットを検出しているが、これらが各遺構に伴うものかどうかについては確証を得られていない。しかし、仮に、これらのピットが柱穴であった場合、斜面上に小型の小屋が建て替えを繰り返しながら配置されている可能性がより高まるものと推察される。



第67図 横隈狐塚遺跡8 1号・5号・17号・18号土坑平面図 (S=1/100)

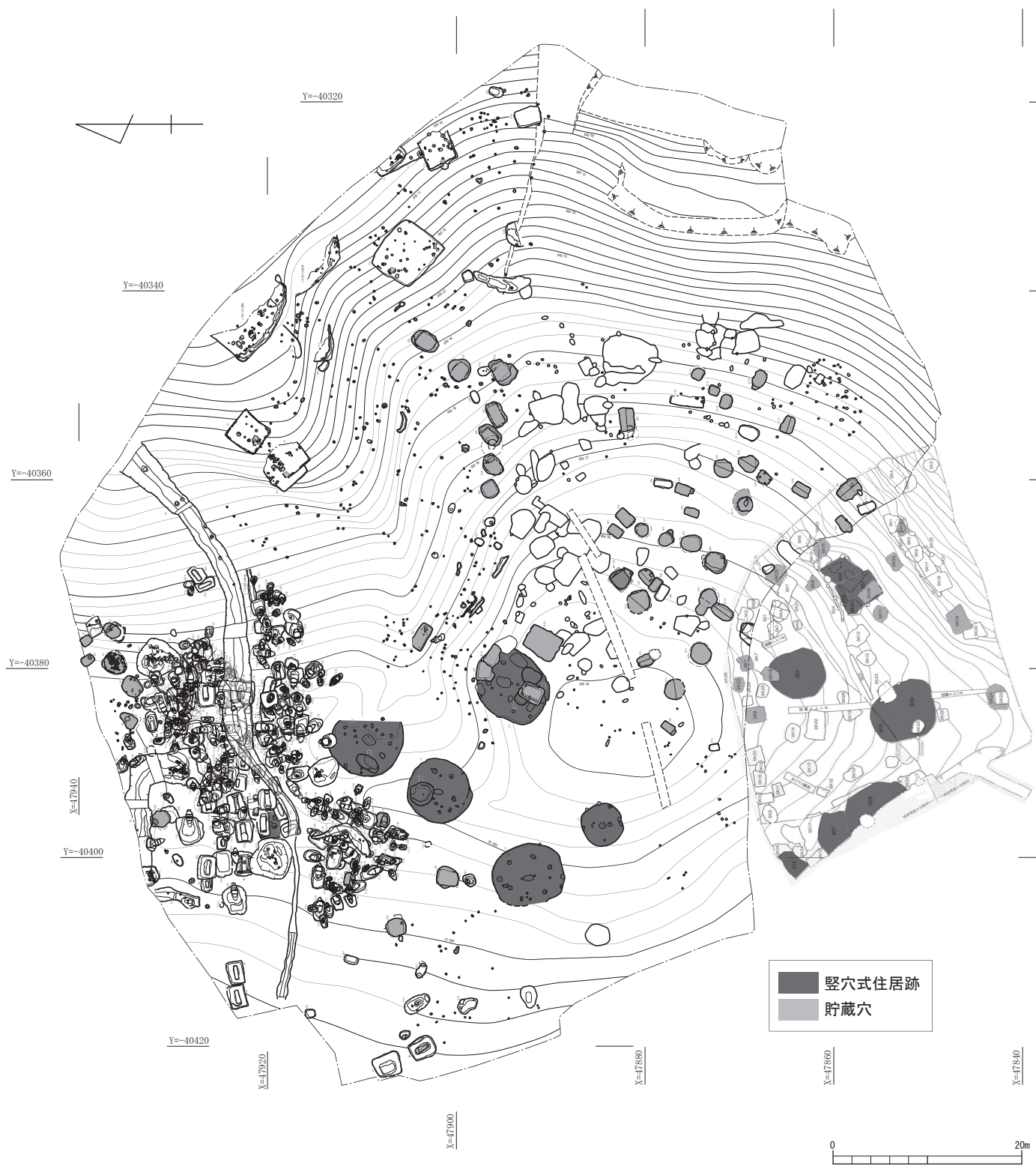
## 2. 横隈狐塚遺跡 8 次調査区・9 次調査区が位置する丘陵上の遺構の広がりについて

三国丘陵は、浅い谷が複雑に入り組むことで大小様々な丘陵が複雑に点在しており、これらの各丘陵上に遺跡が築かれる傾向が強いことがこれまでの調査成果により判明している。本報告の横隈狐塚遺跡 8 次調査区・9 次調査区は、7 次調査区と同一の丘陵上に位置していることから、遺跡の広がりを論ずる上では、7 次調査区との遺構の広がりについて整理することが必要である。7 次調査区は、丘陵全体で弥生時代前期集落、丘陵北側の尾根から斜面を中心に弥生時代中期墓地、丘陵北西部で古墳時代後期古墳、丘陵東側斜面で古代集落が検出されている。8 次調査区・9 次調査区で発見された遺構の多くは弥生時代前期集落であることから、以下では弥生時代前期集落の遺構分布に焦点をあてて考察を行うこととし、まずは代表的な遺構の概要についてまとめたい。

まず、竪穴式住居跡は、丘陵頂部を中心に東側斜面を除く標高 36.6m 以上の比較的傾斜の緩やかな地点に築かれている。その多くは弥生時代前期（板付Ⅱ式）の時期を示すが、7 次調査区 4 号・19 号竪穴住居は前期末～中期初頭とやや新しい様相を示している。遺構の深さが平均して 40～50cm 前後と比較的遺構の残存状況が良く、中には 7 次調査区 2 号竪穴住居のように遺構の深さが最大 90cm となるものも確認されている。竪穴式住居跡の平面プランは、同時期の北松尾口遺跡と同様に円形と方形が混在しており、円形住居が丘陵頂部近くに位置し、方形住居が頂部からやや離れた斜面上に位置する傾向が読み取れる。また、径 7.5m の 7 次調査区 1 号竪穴住居が松菊里型住居の要素を持っており、渡来文化を受容していた可能性が想定されている（杉本 2010『横隈狐塚遺跡 7』）。

次に、貯蔵穴は、北東部の丘陵が頂部方向へ一部入り組む箇所や西側斜面を除く標高 34.0m 以上の地点に築かれている。多くは弥生時代前期（板付Ⅱ式）の時期を示している。遺構の残存状況は良く、検出面から床面までの深さが 2 m を越えるものが 33 基あり、中には炭化物を検出できたものや藁を敷いている痕跡が確認されたものもあった。また、2 段掘りの複式土坑が 7 次調査区 46 号・94 号土坑で発見されていたが、8 次調査区 34 号土坑・9 次調査区 8 号土坑でも確認している。これまで集団内での土地利用に対する制約が指摘されていた（杉本 2010『横隈狐塚遺跡 7』）が、本書の事例からも改めて再確認できた。

以上を踏まえ、丘陵上における遺構の分布傾向について論じたい。まず、本丘陵は、現在、東側斜面を下ると溜池（前堤）に至る。このため池は、谷から下る水を貯水することを目的に明治時代以前に築造されたと考えられていることから、当時、溜池は存在せず、丘陵を下った後、宝満川へと低地が続いていたものと推察される。現状で、丘陵頂部は標高 39m、調査区域内の最低標高が 28.4m と少なくとも標高差 10 m 前後有ることから、東側からの風雨の影響は非常に受けやすい立地であったと推測できる。また丘陵も細い谷部が入っていたのか、北東部と南側の一部で丘陵が頂部方向に入り組む箇所があり、これらの箇所より西側に竪穴式住居跡が築かれていた。一方で、貯蔵穴は、竪穴式住居跡が築かれていない丘陵東側から南側の斜面の傾斜がややきつい箇所を中心に築かれている。また、7 次調査区の発掘調査を担当した杉本岳史氏によると、弥生時代中期墓地が築かれている丘陵北側部分においても貯蔵穴と想定できる遺構を確認していたが、甕棺の切り合いが激しく危険も伴ったため掘削ができなかった箇所があることを伺った。本丘陵は頂部よりやや標高の低い尾根が北側に向かって伸びながら、横隈狐塚遺跡 1 次調査区・2 次調査区・3 次調査区・4 次調査区・5 次調査区・6 次調査区が位置する別の丘陵頂部へと連なることが旧地形図より読み取れ、この丘陵上には 7 次調査区・8 次調査区・9 次調査区と同時期の遺跡は確認されていない。よって、竪穴式住居跡群の周りを貯蔵穴などの土坑で囲むことで自然の防塞を築いていた可能性が考えられよう。なお、本丘陵南側は、大小様々な丘陵が存在するものの徐々に丘陵からなだらかな平地部へと移行し、力武内畑遺跡付近では稲作が行われていた可能性がこれまでの調査で判明している。本丘陵南側には、8 次調査区 1 号・5 号・9 号・17 号・18 号土坑のように作業小屋とも成り得る遺構が集落域の端に所在していることから、農耕域の近くに関連施設を作るといった先人の知恵が伺えられよう。



第 68 図 横隈狐塚遺跡 7 次調査区・8 次調査区・9 次調査区の弥生時代前期遺構分布

### 3. 弥生時代前期後半～中期初頭における横隈狐塚遺跡周辺の遺跡動向

本遺跡が所在する三国丘陵では、弥生時代前期～中期にかけて数多くの遺跡が発見されてきている。特に、弥生時代前期後半～中期初頭にかけて爆発的に集落が形成されており、まさに弥生時代のニュータウンの様相を呈している。この時期に三国丘陵に築かれた集落の多くは、三国丘陵の特徴である細い谷部が複雑に入り組むことで大小様々な丘陵が独立丘陵として所在する1つ1つの丘陵上に位置するという特徴がある。これまでに、『北松尾口遺跡Ⅱ地点』（速水1990）や『三沢北中尾遺跡1地点環濠編』（片岡2003）等で三国丘陵上における同時期の集落の形成のあり方に付いて論じられてきている。横隈狐塚遺跡8次調査・9次調査の成果より、横隈狐塚遺跡としての集落形成の傾向が前項の「2. 横隈狐塚遺跡8次調査区・9次調査区が位置する丘陵上の遺構の広がりについて」で把握できたことから、以下では、本書の成果を踏まえ再度整理を行うこととする。なお、本項で着目するのは、弥生時代前期後半～中期初頭にかけての各集落が立地する空間配置についてである。三国丘陵における弥生時代前期～中期にかけての集落変遷に関しては、『三沢南崎遺跡』の中でまとめられている（山崎2007）ので参照したい。

まず、弥生時代前期初頭に力武内畑遺跡で水田域が形成され、その水田を維持したと目される集落跡が力武内畑遺跡と三沢南崎遺跡において広がり、三沢南崎遺跡1次調査地付近を中心に環濠で囲まれていた。また、環濠で囲まれていない範囲については、集落域の北側に落とし穴状遺構を配置することで獣等の侵入を防いでいた。その他には、前期前半には三沢栗原遺跡で住居跡が発見されているが、全体的に集落が発見されている地点が少ない状況である。

弥生時代前期中頃～後葉になると、三沢南崎遺跡は前期前半時よりさらに大きな環濠で竪穴式住居跡を含む集落域を囲むようになり、外敵からの集落の防御の仕方に変化が見られるようになる。また、三国丘陵上に爆発的に集落が形成されるようになり、力武内畑遺跡・三沢南崎遺跡より北側の南側に大きく広がる谷部の縁辺に位置する独立丘陵を中心に遺跡が発見されるようになる。横隈狐塚遺跡、横隈鍋倉遺跡、横隈山遺跡、三沢北中尾遺跡、北松尾口遺跡、三沢栗原遺跡、一ノ口遺跡、三沢蓬ヶ浦遺跡、三国の鼻遺跡で竪穴住居を含む集落域が形成された。ムラの形としては、横隈狐塚遺跡は竪穴式住居跡が分布しない地点を貯蔵穴等で囲んでおり前期前半の力武内畑遺跡のムラの作りに類似している。その他には、三沢北中尾遺跡・横隈山遺跡・横隈北田遺跡において貯蔵穴を囲む環濠が築かれており、環濠のめぐらし方も各ムラが所在する立地によってその機能が異なることが改めて確認できる。また、三国の鼻遺跡・横隈鍋倉遺跡・横隈北田遺跡では朝鮮系無文土器がまとまって出土している。加えて朝鮮系の遺物は出土していないものの、津古土取遺跡や横隈狐塚遺跡では松菊里型住居が検出されており、三国丘陵東側においては朝鮮からの外来文化が非常に受け入れられていたことが想定される。

一方で、墓域は横隈上内畑遺跡・横隈狐塚遺跡・横隈山遺跡・三沢ハサコの宮遺跡・北牟田遺跡・三国の鼻遺跡において広がっていた。横隈狐塚遺跡や三国の鼻遺跡は、集落域のすぐそばに墓域を形成しているのに対し、その他の遺跡は各独立丘陵で墓域を形成し、なおかつ、墓域が形成される独立丘陵は、集落域が形成されている独立丘陵に囲まれている位置にあった。このことから、共同墓地として使用された可能性が想定されよう。

農耕域としては、三沢公家隈遺跡で水田跡、三沢蓬ヶ浦遺跡で畠状遺構が発見されている。これらの遺跡は三沢蓬ヶ浦遺跡が所在する独立丘陵と三沢北中尾遺跡が所在する独立丘陵とに挟まれた丘陵の谷部に位置する。『小郡市史4巻』の「三沢公家隈遺跡」の中で指摘されているように、この谷部からは調査中湧き水が出ていたことから（片岡2001）、当時も水田域として重宝されていたと考えられよう。また、畠状遺構は、この谷部よりやや標高の高い丘陵斜面で発見されていることから、このあたり一帯は農耕地として使用されていたことがうかがえる。前期末～中期初頭になると、一ノ口遺跡で継続して集落が営まれ、三沢蓬ヶ浦遺跡・三沢北中尾遺跡・横隈山遺跡では集落域を変えて遺跡が広がり、三沢遺跡等他の丘陵においても集落が形成されるようになる。北牟田遺跡では墓域として最盛期を迎え、横隈狐塚遺跡でも中期にお



ける甕棺墓群のはしりの段階が見受けられる。この中で、一ノ口遺跡は、標高も高い位置に築かれ、なおかつ、集落の周囲を杭列で一部囲み、楼閣を持っていたことから、これらの集落の中の拠点集落であった可能性が考えられよう。

以上を踏まえ、弥生時代前期後半～中期初頭における遺跡の立地について若干ではあるが考察を行うこととする。

まず、弥生時代前期後半に遺跡が増加する際、遺跡の立地として2つの傾向が指摘できる。まず、力武内畑遺跡の成果より、前期前半まで農耕域として使用された南側に広がる低地に向かって伸びる独立丘陵を中心に遺跡が築かれることが指摘できる。次に、この時期の集落遺跡として、三国丘陵東端に位置する横隈狐塚遺跡の集落は西側に向かって広がり、低地に面する三国丘陵西側に位置する一ノ口遺跡、北松尾口遺跡、三沢栗原遺跡は東側に向かって集落域が広がっている。これらの遺跡に挟まれた地点の独立丘陵に位置する三沢北中尾遺跡・三沢蓬ヶ浦遺跡・横隈山遺跡は互いをつなげる平地を囲むように集落域を形成している。このことから、第69図で記した各集落は、各独立丘陵に築かれた集落がそれぞれ1つの小さなムラを築き、これらのムラが遺跡名がついている丘陵の範囲でムラ同士が相互に関係を持ち、遺跡名がつく程度の大きさのムラ同士が第69図で記したムラ同士で相互に関係を持ちながら、食糧の貯蔵や墓域の形成、農耕地の共有を行っていたのではないかと推察できる。ただし、弥生時代前期後半では、巨大な竪穴式住居跡の形成や貴重品などの出土がないことを考慮すると、一ノ口遺跡で中期初頭にみられる拠点集落としての形ではなく、相互が対等な関係の中で結びついていたのではと考えられよう。

次に、墓域の立地として、弥生時代前期後半では集落の縁辺部を中心に築かれていたことが、弥生時代前期末～中期初頭になると独立丘陵上に単独で墓域を築く形へと変化する。この背景には、当初は各ムラが集落のある丘陵内においてムラごとに墓域を含めた形での生活を行っていたことが、相互にムラ同士が協力する体制が整うことで、複数のムラが使用する共同墓地へと意識が変化し、その結果、集落の間にある独立丘陵に墓域を形成するようになったと言えよう。こうしたムラと墓域の変化については、これまで多くの研究で指摘（速水1990・片岡2003・山崎2007等）されており、改めて、その視点を再確認できたことは、本書で報告する遺跡の評価するうえで大きな成果である。

<主要参考文献> \* 報告書は割愛

片岡宏二 2001 「7. 三沢公家隈遺跡」『小郡市史 4 巻』小郡市

片岡宏二 2001 「8. 横隈北田遺跡」『小郡市史 4 巻』小郡市

片岡宏二 2003 「論考 水田稲作農耕の定着と展開」『三沢北中尾遺跡 1 地点』環濠編 小郡市文化財調査報告書第 181 集  
小郡市教育委員会

片岡宏二 2017 「7. 三沢ハサコの宮遺跡」『小郡市史補遺編』小郡市

杉本岳史 2017 「5. 横隈狐塚遺跡」『小郡市史補遺編』小郡市

中島達也 2001 「9. 横隈山遺跡」『小郡市史 4 巻』小郡市

中島達也 2001 「13. 横隈鍋倉遺跡」『小郡市史 4 巻』小郡市

速水信也 1990 「北松尾口遺跡Ⅱ地点の弥生時代集落」『北松尾口遺跡Ⅱ地点』下巻  
小郡市教育委員会文化財調査報告書第 63 集 小郡市教育委員会

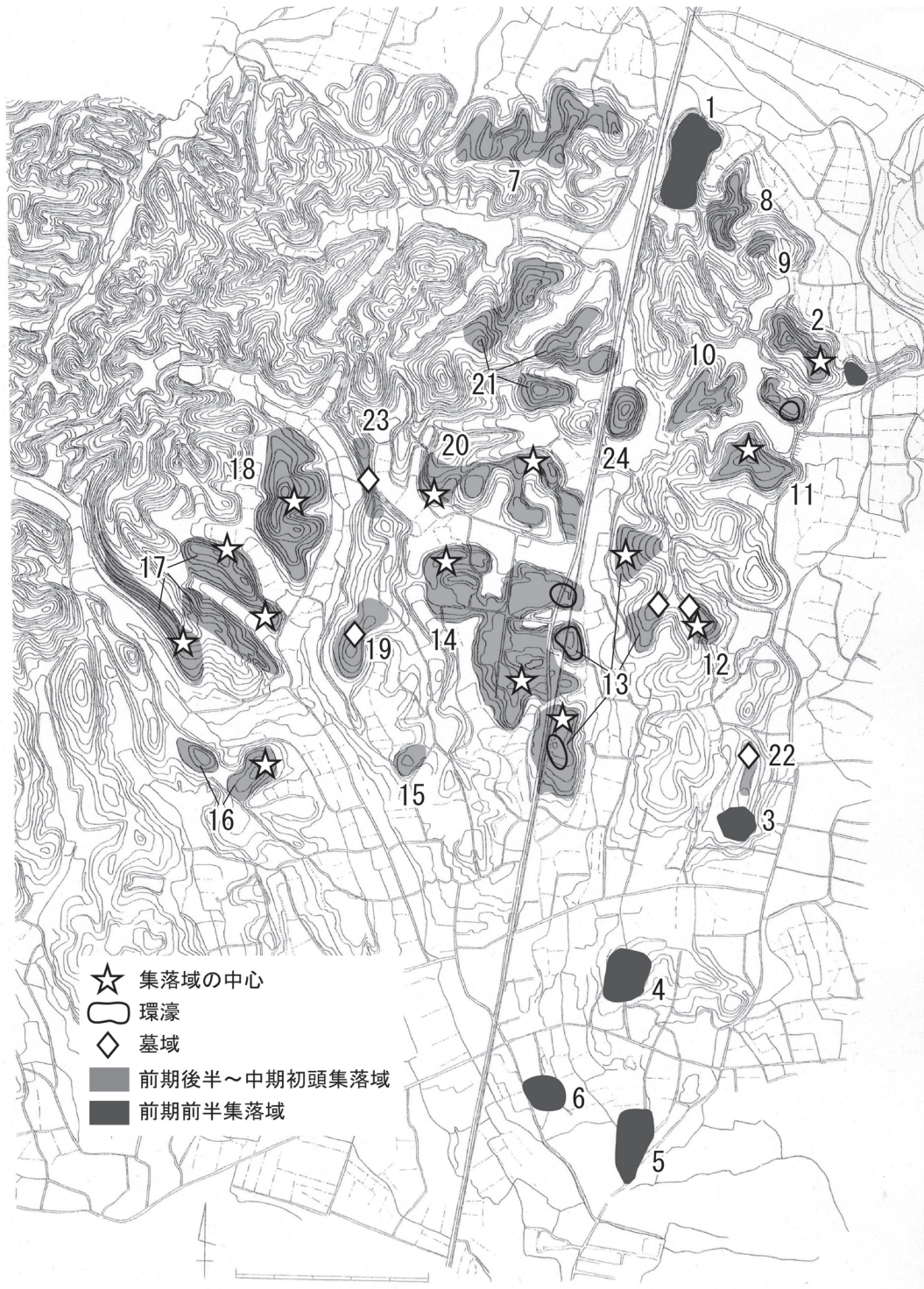
速水信也 2001 「11. 一ノ口遺跡 1 地点」『小郡市史 4 巻』小郡市

速水信也 2001 「12. 北松尾口遺跡Ⅱ地点」『小郡市史 4 巻』小郡市

山崎頼人 2007 「第 5 章 調査成果のまとめ」『三沢南崎遺跡』小郡市文化財調査報告書第 220 集 小郡市教育委員会

山崎頼人 2017 「1. 力武遺跡群」『小郡市史補遺編』小郡市

山崎頼人・久住愛子 2017 「3. 三沢北中尾遺跡」『小郡市史補遺編』小郡市



- 1.津古土取遺跡 2.三国の鼻遺跡 3.横隈中内畑遺跡 4.みくに保育所遺跡・三国小学校遺跡 5.力武内畑遺跡  
 6.三沢南崎遺跡 7.津古遺跡群 8.津古生掛遺跡 9.津古中剪遺跡 10.横隈井の浦遺跡 11.横隈鍋倉遺跡  
 12.横隈狐塚遺跡 13.横隈山遺跡 14.三沢北中尾遺跡 15.牟田々遺跡 16.三沢栗原遺跡 17.北松尾口遺跡  
 18.一ノ口遺跡 19.北牟田遺跡 20.三沢蓬ヶ浦遺跡 21.三沢遺跡 22.横隈上内畑遺跡 23.三沢ハサコの宮遺跡

第 69 図 弥生時代前期（板付Ⅱ式）における三国丘陵の遺跡分布

\*「小郡市内の指定文化財シリーズ 10 県指定史跡三沢遺跡」使用図を基に一部改変

# 横隈狐塚遺跡8 出土遺物観察表

## 1. 土器

法量＝口：口径、高：器高、頂：頂径、底：底径、厚さ：厚、胴部最大径：胴最径 器種＝弥：弥生土器

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	焼成	調整	残存率	備考
5-1		1号竪穴式住居跡	弥・壺	高：3.9	外：灰褐(7.5YR5/2) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ヨコナデ、磨減 内：ヨコナデ、磨減	口～胴上小片	口縁端部刻目。外面全面にスス有り。
5-2		1号竪穴式住居跡	弥・壺	高：5.75	外：にぶい黄橙(10YR6/4) 内：にぶい黄橙(10R6/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外面：磨減 内面：磨減	口～胴上小片	内面胴部にコゲ有り。
5-3		1号竪穴式住居跡	弥・壺	底：(7.1) 高：4.5	外：にぶい橙(5YR6/4～7.5YR6/4) 内：にぶい黄橙(10YR6/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨減 内：板状工具ナデ、押さえ、磨減	胴下～底約1/2	内面胴部にスス有り。
5-4		1号竪穴式住居跡	弥・壺	底：8.3 高：7.3	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：浅黄橙(7.5YR8/4)～ にぶい橙(7.5YR7/4)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外：板状工具ナデ、磨減 内：磨減、指押さえ	胴下約2/3 底完形	内面胴部下にコゲ有り。底部に焼成後穿孔有り。
5-5		2号竪穴式住居跡	弥・壺	高：4.65	外：にぶい黄橙(10YR6/4) 内：にぶい黄橙(10YR6/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ヨコナデ、磨減、指押さえ 内：ヨコナデ、板状工具ナデ、指押さえ	口～胴上約1/6	口縁端部に刻目有り。外面全体にスス有り。
5-6		2号竪穴式住居跡	弥・壺	底：(8.5) 高：2.9	外：橙(7.5YR7/6) 内：にぶい黄(10YR6/3)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨減 内：磨減	胴下～底約1/5	
5-7		2号竪穴式住居跡	弥・壺	高：5.15	外：にぶい橙(2.5YR6/4) 内：褐灰(10YR5/1)	粗 5mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨減 内：磨減	胴下～底小片	内面全面に黒斑有り。
5-8		3号竪穴式住居跡	弥・壺	高：4.45	外：にぶい橙(7.5YR7/4～6/4) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：指押さえ、磨減 内：指押さえ、磨減	口～胴上小片	
5-9		3号竪穴式住居跡	弥・壺	底：(8.6) 高：4.2	外：にぶい黄橙(10YR7/3～7/4) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨減、ナデ 内：磨減	胴下～底約1/4	外面底部に黒斑有り。
5-10		3号竪穴式住居跡	弥・壺	底：(8.5) 高：3.3	外：明黄褐(10YR6/6) 内：にぶい黄橙(10YR6/4)～ 浅黄橙(10YR8/4)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨減 内：磨減	胴下～底約1/4	
5-11		3号竪穴式住居跡	弥・壺	口：(13.9) 高：1.8	外：にぶい黄橙(10YR7/4) 内：黄灰(2.5Y4/1)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨減 内：磨減	口～頸約1/6	内面全面に黒斑有り。
5-12		3号竪穴式住居跡	弥・壺	底：(7.9) 高：4.7	外：にぶい黄橙(10YR7/4) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	やや粗 5mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨減 内：磨減	胴下～底約2/5	
5-13	11-1	3号竪穴式住居跡-P1	弥・壺	胴最径：(27.1) 底：8.9 高：22.3	外：にぶい橙(7.5YR7/3～5YR7/3) 内：にぶい橙(7.5YR6/4)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨減 内：磨減	胴上約1/6 胴中約1/5 胴下～底約1/1	胴部中央に沈線2条有り。
5-14		3号竪穴式住居跡	弥・鉢	口：(22.6) 高：11.05	外：浅黄橙(10YR8/3)～ にぶい黄橙(10YR7/3) 内：にぶい黄橙(10YR7/2)～ にぶい橙(5YR7/3)	粗 5mm以下の砂粒を多く含む	良	外：ヨコナデ、ヘラミガキ 内：ヨコナデ、指押さえ、磨減	口～胴下約1/6	外面前面に黒斑有り。内面胴部にコゲ有り。
10-1		1号土坑	弥・壺	高：2.8	外：にぶい黄橙(10YR7/4) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ヨコナデ、磨減 内：ヨコナデ、磨減	口～胴上小片	口縁端部に刻目有り。外面口縁部にスス有り。
10-2		1号土坑	弥・壺	高：3.6	外：明黄褐(10YR7/6) 内：明黄褐(10YR7/6)	粗 2mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨減 内：磨減	口～頸小片	内面口縁部に赤色顔料残存。
10-3		2号土坑	弥・壺	高：8.9	外：にぶい黄橙(10YR6/4) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨減 内：磨減	口～胴中小片	
10-4		2号土坑	弥・壺	高：8.2	外：にぶい黄橙(10YR6/4) 内：にぶい黄橙(10YR6/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨減 内：磨減	口～胴中小片	
10-5		2号土坑	弥・壺	高：7.7	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：にぶい黄橙(10YR7/3)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨減 内：磨減	口～胴中小片	器壁磨減のため本来の厚みよりも薄くなっている。
10-6		2号土坑	弥・壺	底：(8.9) 高：4.05	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：にぶい黄橙(10YR6/3～7/3)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨減 内：磨減、指押さえ	胴下～底約1/3	
10-7		2号土坑	弥・壺	底：(8.5) 高：4.1	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：板状工具ナデ、磨減 内：磨減、指押さえ	胴下～底約1/4	
10-8		2号土坑	弥・壺	底：(7.0) 高：5.1	外：橙(7.5YR6/6)～ にぶい橙(7.5YR5/3) 内：橙(7.5YR6/6)～ にぶい橙(7.5YR6/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：板状工具ナデ、磨減 内：板状工具ナデ、ナデ	胴下～底約1/2	内面胴部下に黒斑有り。
10-9		2号土坑	弥・壺	底：(5.5) 高：8.8	外：にぶい黄橙(10YR7/4) 内：橙(7.5YR7/6)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨減 内：磨減、指押さえ	胴下約1/4 底完形	
10-10		2号土坑	弥・壺	底：(9.2) 高：6.4	外：にぶい橙(7.5YR7/4～6/4) 内：にぶい黄橙(10YR7/4～6/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨減 内：磨減	胴下～底約1/6	
10-11		2号土坑	弥・壺	高：6.5	外：にぶい黄橙(10YR7/4) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：ヨコナデ、ヘラミガキ 内：磨減	口～胴上小片	
10-12		2号土坑	弥・壺	底：(13.7) 高：3.25	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：灰黄(2.5Y7/2)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨減 内：磨減	胴下～底約1/3	外面胴部下に赤色顔料有り。
10-13		2号土坑	弥・壺	底：(12.3) 高：5.35	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：浅黄橙(7.5YR8/4)	粗 5mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨減 内：磨減	胴下～底約1/3	
10-14		2号土坑	弥・壺	底：9.05 高：5.65	外：浅黄橙(7.4YR8/4)～ にぶい橙(7.5YR7/4) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨減、ヘラミガキ 内：磨減	胴下～底約1/1	外面胴部に黒斑有り。
10-15	11-2	2号土坑	弥・壺	底：13.65 高：16.6	外：灰赤(2.5YR6/2)～ 明褐灰(7.5YR7/2) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)～ にぶい橙(5YR7/3)	粗 5mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨減 内：磨減	胴下約1/6 底約1/1	
10-16		2号土坑	弥・壺	口：(26.5) 高：4.05	外：にぶい橙(7.5YR6/4) 内：にぶい橙(2.5YR6/4)	やや粗 5mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨減 内：磨減	体～口約1/6	
10-17		3号土坑	磁・埴	口：(10.2) 高：3.4	外：灰白(2.5GY8/1) 内：灰白(2.5GY8/1)	精緻 1mm以下の微砂をごくわずかに含む	堅緻	外：釉薬 内：釉薬	口～胴上約1/8	
10-18		3号土坑	磁・猪口	高台径：(2.1) 高：1.55	外：灰白(5Y8/1～10Y8/1) 内：灰白(5Y8/1～10Y8/1)	精緻 1mm以下の砂粒をごくわずかに含む	堅緻	外：釉薬 内：釉薬	胴下約1/4 底約1/2	外面胴部に染付有り。

挿入 番号	図版 番号	出土遺構	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	焼成	調整	残存率	備考
13-1		4号土坑	弥・壺	高：7.3	外：にふい黄橙(10YR7/4) 内：浅黄橙(5YR8/4)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外：ヨコナデ、指押さえ、摩 減 内：ヨコナデ、指押さえ、板 状工具ナデ	口～胴上小片	口縁端部刻目は磨滅の為不明
13-2		4号土坑	弥・壺	底：8.85 高：5.8	外：浅黄橙(7.5YR8/4) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外：摩滅 内：摩滅、指押さえ	胴下約1/5 底約1/1	内面胴部下に薄くコゲ有り。
13-3	11-3	4号土坑	弥・壺	口：20.6 底：7.15 高：18.5	外：浅黄橙(7.5YR8/4)～ 淡橙(5YR8/4) 内：浅黄橙(7.5YR8/4)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	口～胴上完形 胴下～底約3/4	口縁端部に刻目有り。内面口縁 部から胴部にかけて黒斑有 り。
13-4		4号土坑	弥・壺	高：6.9	外：浅黄橙(7.5YR8/6) 内：浅黄橙(7.5YR8/6)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	口～胴上約1/6	
13-5		4号土坑	弥・壺	高：3.55	外：にふい黄橙(10YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外：摩滅 内：摩滅	口～頭小片	
13-6		4号土坑	弥・壺	底：8.65 高：3.7	外：にふい黄橙(10YR7/4) 内：にふい橙(10YR7/4)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴下～底約1/1	
13-7		4号土坑	弥・壺	底：9.6 高：10.1	外：にふい黄橙(7.5YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/3～ 7/4)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外：ヘラミガキ、摩滅、ナ デ 内：摩滅	胴下約3/4 底完形	
13-8		4号土坑・ 下層	弥・壺	高：7.85	外：にふい黄橙(10YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅、ヨコナデ 内：摩滅	口～胴上小片	口縁端部に刻目有り。
13-9		4号土坑・ 下層	弥・壺	底：7.9 高：4.15	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅、ナデ 内：摩滅	胴下～底完形	外面胴部下～底に黒斑有り。底 部中央付近に穿孔有り。
13-10		4号土坑・ 下層	弥・壺	底：(9.2) 高：3.4	外：にふい黄橙(10YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴下～底約1/2	
13-11	11-4	4号土坑・ 下層	弥・高杯	高：8.9	外：にふい橙(5YR7/3) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	粗 2mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	杯下～脚上完形	
13-12		5号土坑	弥・壺	高：2.25	外：にふい黄橙(10YR7/2) 内：にふい黄橙(10YR7/3～7/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外：摩滅、指押さえ 内：摩滅	口～胴上小片	口縁端部に刻目有り。
13-13		5号土坑	弥・壺	高：3.0	外：にふい橙(10YR7/4) 内：にふい橙(10YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	口～胴上小片	
13-14		5号土坑	弥・壺	高：4.0	外：にふい黄橙(7.5YR6/3) 内：にふい黄橙(7.5YR6/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外：摩滅、指押さえ 内：摩滅、指押さえ	口～胴上小片	外面胴部にスス有り。内面胴 部に黒斑有り。口縁端部刻目 は磨滅の為不明。
13-15	11-5	5号土坑	弥・壺	口：(21.9) 底：10.0 高：23.8	外：にふい橙(7.5YR7/4)～ 褐灰(10YR6/1) 内：にふい橙(7.5YR6/4～ 7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外：ヨコナデ、指押さえ、ハ ケム後板状工具 ナ デ 内：板状工具ナデ、指押さ え	口～胴上約1/5 胴下～底約1/1	口縁端部に刻目有り。内面胴部 上に黒斑有り。外面胴部にスス有 り。
18-1		7号土坑	弥・壺	高：2.75	外：にふい黄橙(10YR7/4) 内：黄灰(2.5Y5/1)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴下～底小片	
18-2		8号土坑	弥・壺	底：8.35 高：5.35	外：にふい橙(7.5YR7/3) 内：にふい橙(7.5YR7/3)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外：摩滅 内：ハケム、摩滅	胴下～底約1/1	
18-3		8号土坑	弥・壺	底：(8.0) 高：4.55	外：にふい橙(7.5YR7/4～ 6/4) 内：にふい橙(7.5YR7/4)～ 橙(7.5YR7/6)	粗 5mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅、指押さえ、ナデ 内：摩滅、指押さえ	胴下～底約1/2	内面胴部にコゲ有り。
18-4		8号土坑	弥・壺	底：(7.5) 高：6.4	外：にふい橙(5YR7/4～6/3) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外：板状工具ナデ、指押さ え、不明、ナデ 内：板状工具ナデ、指押さ え、ナデ	胴下約1/4 底約3/4	
18-5	11-6	8号土坑	弥・壺	口：20.2 高：15.1	外：にふい橙(7.5YR7/4)～ 浅黄橙(7.5YR8/4) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外：ヨコナデ、指押さえ、摩 減 内：ヨコナデ、指押さえ、摩 減	口～胴中約1/1	口縁端部に刻目有り。外面胴部 上にコゲ有り。内面胴部にコ ゲ有り。
18-6		9号土坑	弥・壺	口：(14.6) 高：7.95	外：にふい橙(7.5YR6/4)～ にふい黄橙(10YR6/4) 内：にふい橙(7.5YR6/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外：摩滅 内：摩滅、指押さえ	口～胴中約1/3	
18-7		9号土坑	弥・壺	底：6.4 高：4.35	外：にふい橙(7.5YR6/4) 内：にふい橙(7.5YR6/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外：板状工具ナデ、摩滅 内：摩滅、指押さえ	胴下約1/4 底約1/1	外面全体にスス有り。内面全体 にコゲ有り。底部中央付近に焼 成後の穿孔有り。
18-8		9号土坑	弥・壺	底：(8.5) 高：3.85	外：にふい黄橙(10YR7/3) 内：にふい黄橙(10YR6/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴下～底約1/3	外面胴部にスス有り。
18-9	12-1	11号土坑	弥・壺	口：21.5 底：8.5 高：24.6	外：浅黄橙(7.5YR8/4)～ にふい橙(5YR6/4) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外：ヨコナデ、摩滅、ナデ 内：ヨコナデ、板状工具ナ デ	口～底約1/1	口縁端部に刻目有り。底部外面 に種子圧痕有り。外面口縁部か ら胴部にかけてスス付着。
18-10		11号土坑	弥・壺	底：(8.8) 高：3.75	外：にふい橙(7.5YR7/4)～ 橙(7.5YR6/6) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：板状工具ナデ、摩滅 内：摩滅	胴下～底約1/3	
18-11		11号土坑	弥・壺	高：3.95	外：橙(7.5YR7/6～6/6) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	口～頭小片	
18-12		11号土坑	弥・壺	高：5.3	外：にふい橙(7.5YR7/4)～ 明黄橙(10YR6/6) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	口～頭小片	
18-13	12-2	11号土坑	弥・壺	胴最径：(19.0) 高：12.95	外：橙(5YR7/6) 内：にふい橙(7.5YR7/4)～ 橙(7.5YR7/6)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：ヘラミガキ 内：指押さえ、摩滅	頭～胴下約2/5	内面頸部に有機質の炭化物残 存。内面胴部に黒斑有り。
18-14		11号土坑・ 下層	弥・壺	口：(18.7) 高：5.15	外：橙(5YR7/6) 内：橙(7.5YR7/6)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	口約1/4 頭約1/6	
22-1	12-3	13号土坑	弥・壺	底：9.85 胴最径：(31.1) 高：15.9	外：にふい黄橙(10YR6/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴中～下約1/5 底約1/1	外面胴部に黒斑有り。
22-2		13号土坑	弥・蓋	高：3.4	外：灰黄褐(10YR5/2)～ にふい橙(5YR6/4) 内：灰黄褐(10YR6/2)～ にふい黄橙(10YR6/3)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外：摩滅、ヨコナデ 内：ヘラミガキ、ヨコナデ	体下～口小片	外面体部にスス有り。内面体部 に黒斑有り。

挿入 番号	図版 番号	出土遺構	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	焼成	調整	残存率	備考
22-3	12-5	13号土坑	弥・鉢	口：(18.6) 高：6.9	外：にふい黄橙(10YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	口～胴下約1/5	外面胴に黒斑有り。
22-4		13号土坑・ 下層	弥・壺	高：12.45	外：浅黄橙(7.5YR8/4) 内：灰黄(2.5Y7/2)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ヨコナデ、指押さえ、板 状工具ナデ 内：摩滅、指押さえ	口～胴中小片	内面胴部に黒斑有り。
22-5		13号土坑・ 下層	弥・蓋	高：6.05	外：にふい黄橙(10YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/3)	やや粗 5mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅、指押さえ 内：摩滅、指押さえ	体約1/3	
22-6		13号土坑・ 下層	弥・鉢	高：4.2	外：にふい橙(7.5YR7/4) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ヨコナデ、ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	口～胴上小片	
22-7	12-4	13号土坑・ 最下層	弥・蓋	天頂：7.05 高：10.35	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：にふい黄橙(10YR7/3)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅、指押さえ、板状 工具ナデ 内：ナデ、指押さえ、板状 工具ナデ	天頂～胴下約1/1	外面天頂部に黒斑有り。外面体 部下にスス有り。内面体部下に 炭化物含むコゲ有り。
22-8		15号土坑・ 上層	弥・壺	高：8.05	外：橙(5YR6/6)～ にふい橙(7.5YR6/4) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ヨコナデ、板状工具 ナデ 内：ヨコナデ、ナデ、指押さ え	口～胴上小片	口縁端部に刻目有り。外面胴部 に刻目突帯有り。外面胴部にス ス有り。
22-9		15号土坑	弥・壺	高：2.25	外：にふい橙(7.5YR7/4) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	口～頸小片	
22-10		15号土坑 下層	弥・鉢	高：3.6	外：黄灰(2.5Y6/1) 内：黄灰(2.5Y6/1)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ヨコナデ、ヘラミガキ 内：ヨコナデ、ヘラミガキ	口～胴上小片	内外面前面に黒斑有り。
22-11		16号土坑	弥・壺	高：3.45	外：にふい黄橙(10YR7/4)～ 明黄橙(10YR7/6) 内：にふい黄橙(10YR7/4)～ 明黄橙(10YR7/6)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	口～胴上小片	
22-12		16号土坑	弥・壺	底：(8.3) 高：2.1	外：にふい橙(2.5YR6/4) 内：橙(2.5YR6/6)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴下～底約1/3	
22-13		16号土坑	弥・壺	底：(7.7) 高：3.0	外：橙(7.5YR7/6) 内：橙(7.5YR7/6)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴下～底約1/4	外面底にコゲ有り。
22-14		16号土坑	弥・壺	高：5.6	外：にふい橙(7.5YR5/4) 内：にふい黄(2.5Y6/3)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ヘラミガキ 内：指押さえ、ヘラミガキ	頸～胴上小片	
22-15		17号土坑	弥・壺	底：(8.5) 高：2.9	外：にふい橙(7.5YR6/4) 内：にふい橙(7.5YR6/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅、ナデ 内：ナデ、指押さえ	胴下～底約2/3	内面胴部下に薄コゲ有り。
22-16		17号土坑	弥・壺 (ミニチュア 土器)	底：(5.2) 高：3.5	外：にふい橙(7.5YR6/4) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：板状工具ナデ、摩滅 内：ナデ	胴下～底約3/4	外面胴下に黒斑有り。
22-17		18号土坑	弥・壺	底：(7.3) 高：5.7	外：にふい黄橙(10YR6/3) 内：にふい黄橙(10YR6/3)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅、指押さえ	胴下～底約1/5	内面胴部下にコゲ有り。
27-1		19号土坑	弥・壺	底：(8.4) 高：5.15	外：にふい橙(10YR6/3) 内：にふい黄橙(7.5YR7/4)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅、指押さえ	胴下～底約1/4	
27-2	12-6	19号土坑	弥・壺	高：3.65	外：にふい橙(7.5YR7/4) 内：にふい橙(7.5YR7/3)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	口～頸小片	
27-3		19号土坑	弥・壺	底：(5.2) 高：2.5	外：にふい橙(7.5YR7/4) 内：橙(7.5YR7/6)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴下約1/3 底約1/2	
27-4		19号土坑	弥・壺	底：(7.6) 高：3.75	外：にふい黄橙(10YR6/3)～ 橙(7.5YR6/6) 内：にふい黄橙(10YR6/4)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴下～底約1/3	外面底部に黒斑有り。
27-5		19号土坑	弥・壺	口：(21.6) 胴最径：(29.2) 高：24.5	外：橙(2.5YR7/6)～ 淡赤橙(2.5YR7/4) 内：にふい橙(2.5YR6/4)～ 橙(5YR6/6)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	口約1/4 頸約1/5 胴上約1/5	
27-6		19号土坑・ 上層	弥・蓋	高：3.0	外：灰黄橙(10YR5/2) 内：灰黄橙(10YR5/2)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ヘラミガキ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ、指押 さえ	体下～口小片	外面体部下に黒斑有り。
27-7		19号土坑・ 下層	弥・壺	高：7.1	外：にふい橙(7.5YR7/4)～ 灰褐(7.5YR6/2) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	口～胴上小片	外面口縁部に黒斑有り。外面口 縁部から胴部上にスス有り。
27-8		20号土坑	弥・壺	高：5.5	外：浅黄橙(10YR8/4)～ にふい黄橙(10YR6/3) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ヨコナデ、摩滅、指押 さえ 内：ヨコナデ、指押さえ、板 状工具ナデ	口～胴上小片	口縁端部に刻目有り。外面胴部 上にススと黒斑有り。内面胴部 上にコゲ有り。
27-9		20号土坑	弥・壺	高：8.6	外：にふい黄橙(10YR7/4)～6/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	口～胴中小片	口縁端部に刻目有り。外面口縁 部から胴部上にスス有り。
27-10	12-7	20号土坑	弥・壺	口：(23.6) 底：8.15 高：20.45	外：浅黄橙(10YR8/4)～ にふい橙(5YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ヨコナデ、摩滅、板 状工具ナデ、ナデ、指 押さえ 内：ヨコナデ、板状工具ナ デ、指押さえ、ナデ	口～胴上約2/5 胴下～底約1/1	口縁端部に刻目有り。外面胴部 下～底部に黒斑有り。内面胴部 に黒斑有り。
27-11		20号土坑	弥・壺	底：(7.8) 高：4.7	外：にふい橙(7.5YR7/4) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴下～底約1/5	
27-12		20号土坑	弥・壺	底：(8.2) 高：4.0	外：にふい橙(7.5YR7/4)～ 橙(7.5YR7/6) 内：にふい橙(7.5YR7/4)～ 橙(7.5YR7/6)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴下～底約1/5	外面胴部下から底にかけて黒 斑有り。
27-13		20号土坑	弥・壺	底：(8.6) 高：11.6	外：にふい橙(7.5YR7/4)～ 橙(7.5YR7/6) 内：緑灰(10YR6/1)～5/1)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：板状工具ナデ後ナデ、 摩滅、ナデ、指押さえ 内：板状工具ナデ後ナデ、 指押さえ、ナデ	胴下約1/6 底約1/1	内面前面に黒斑有り。
27-14		20号土坑	弥・壺	口：(11.2) 高：4.1	外：橙(7.5YR6/6) 内：にふい黄橙(10YR7/3)	やや粗 5mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	口～頸約1/4	
27-15		20号土坑	弥・壺	底：(7.6) 高：4.1	外：橙(5YR6/6) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴下～底約1/4	

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	焼成	調整	残存率	備考
27-16		20号土坑	弥・壺	底：(5.9) 高：3.5	外：にふい橙(7.5YR7/4) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴下約1/4 底約2/5	
27-17		20号土坑	弥・壺	底：(10.3) 高：3.35	外：にふい橙(7.5YR7/3) 内：橙(7.5YR7/6)	やや粗 6ミリの砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴下約1/5 底約1/4	
27-18	12-8	20号土坑	弥・壺	底：6.3 高：7.85	外：にふい橙(7.5YR6/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴下～底約1/1	外面胴部に黒斑有り。
27-19		20号土坑・ 上層	弥・壺	底：(8.8) 高：2.5	外：明黄褐(10YR7/6) 内：にふい黄橙(10YR7/3)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴下～底約1/4	
27-20		20号土坑・ 下層	弥・壺	底：(7.7) 高：4.3	外：橙(7.5YR6/6) 内：橙(7.5YR6/6)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：板状工具ナデ、摩滅、 ナデ 内：摩滅、指押さえ	胴下～底約1/3	
27-21		20号土坑・ 下層	弥・壺	底：9.35 高：10.7	外：にふい橙(7.5YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	粗 7mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴下約1/5 底約1/1	
31-1		21号土坑	弥・壺	口：(20.1) 高：5.95	外：にふい黄橙(10YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	口～頸約1/5	
31-2		22号土坑	弥・壺	底：(9.0) 高：2.6	外：にふい橙(7.5YR7/4)～ にふい黄橙(10YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外：ヘラミガキ、摩滅、ナ デ 内：摩滅	胴下～底約1/4	
31-3		23号土坑	弥・壺	高：8.6	外：にふい橙(7.5YR7/4) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ヨコナデ、板状工具 ナデ 内：摩滅	口～胴上小片	外面口縁部から胴部にかけて スス有り。
31-4		23号土坑	弥・壺	高：8.7	外：にふい黄橙(10YR6/3)～ にふい黄褐(10YR5/3) 内：にふい橙(7.5YR6/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ヨコナデ、摩滅、指押 さえ 内：ヨコナデ、摩滅、指押 さえ	口～胴上小片	口縁部に刻目有り。 外面口縁部から胴部にかけて スス有り。
31-5	12-9	23号土坑	弥・壺	高：14.25	外：にふい橙(7.5YR6/4)～ にふい黄(10YR6/4) 内：にふい橙(7.5YR6/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：ヨコナデ、摩滅 内：摩滅	口～胴中小片	口縁部に刻目有り。 外面胴部にスス有り。
31-6	12-10	23号土坑	弥・壺	口：(16.65) 底：6.75 高：16.0	外：にふい黄橙(10YR7/2)～ にふい橙(7.5YR7/3) 内：にふい橙(7.5YR6/4)～ にふい黄橙(10YR7/3)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ヨコナデ、摩滅、板状 工具ナデ、指押さえ、 ナデ 内：ヨコナデ、摩滅、板状 工具ナデ	口～胴上約3/4 胴中約1/2 胴下～底約1/1	口縁部に刻目有り。 外面胴部にスス有り。 内面胴部上にコゲ有り。 外面底部に種子圧痕有り。
31-7	12-11	23号土坑	弥・壺	底：7.7 高：17.35	外：にふい褐(7.5YR5/3)～ にふい黄橙(10YR6/4) 内：にふい褐(7.5YR5/3)～ にふい橙(7.5YR6/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅、指押さえ	胴上約1/6 胴下～底約3/4	外面胴部にスス有り。 内面胴部下にコゲ有り。
31-8		23号土坑	弥・壺	高：3.7	外：にふい黄橙(10YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	口～頸小片	
31-9		23号土坑	弥・壺	底：(7.4) 高：3.75	外：にふい橙(7.5YR7/4)～ 橙(7.5YR7/6) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ヘラミガキ、ナデ 内：ヘラミガキ、摩滅	胴下～底約1/2	
31-10		24号土坑	弥・壺	高：4.95	外：にふい橙(7.5YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/3)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅、指押さえ 内：摩滅、指押さえ	口～胴上小片	口縁部に刻目有り。
31-11		24号土坑	弥・壺	高：5.2	外：にふい黄橙(10YR6/4) 内：明黄褐(10YR6/6)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	口～胴上小片	
31-12		24号土坑・ 下層	弥・壺	高：6.15	外：にふい黄橙(10YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR6/3)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ヨコナデ、板状工具ナ デ、指押さえ 内：ヨコナデ、摩滅、指押 さえ	口～胴上小片	口縁部に刻目有り。
31-13		24号土坑・最 下層	弥・壺	底：7.65 高：9.75	外：にふい褐(7.5YR6/3)～ 明黄褐(10YR7/6) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 7mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：板状工具ナデ、摩滅、 指押さえ 内：板状工具ナデ、指押さ え	胴下約1/3 底約1/1	外面胴部下に薄くスス有り。
31-14		24号土坑・ 最下層	弥・壺	底：(6.7) 高：3.5	外：にふい橙(7.5YR7/4)～ 6/4) 内：にふい橙(7.5YR6/4)	粗 2mm以下の砂粒を多く含む	良	外：板状工具ナデ、ナデ、 指押さえ 内：板状工具ナデ、ナデ、 指押さえ	胴下～底約1/1	外面胴部下から底部にかけて 黒斑有り。
31-15	12-12	24号土坑・ 最下層	弥・壺	底：8.3 高：8.85	外：浅黄橙(7.5YR8/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 5mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅、ヘラミガキ	胴下約2/3 底約1/1	
31-16		25号土坑	弥・壺	高：3.55	外：にふい黄橙(10YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 5mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	口～胴上小片	口縁部に黒斑有り。
31-17	12-13	25号土坑	弥・鉢	口：(20.2) 高：6.15	外：にふい黄橙(10YR5/4)～ 灰黄褐(10YR5/2) 内：褐灰(10YR5/1)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外：ヨコナデ、ヘラミガキ 内：ヨコナデ、ヘラミガキ	口～胴上約1/5	内面に黒色顔料が塗布されて いる可能性有り。
35-1		28号土坑・ 下層	弥・壺	口：(20.8) 高：4.1	外：にふい橙(7.5YR7/4)～ にふい黄褐(10YR5/3) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	粗 5mm以下の砂粒を多く含む	良	外：ヨコナデ、摩滅、指押 さえ 内：ヨコナデ、摩滅、指押 さえ	口～胴上約1/4	口縁部に刻目有り。 外面口縁部から胴部にかけて スス有り。
35-2	13-2	28号土坑・ 下層	弥・壺	底：8.1 高：5.4	外：明黄褐(10YR7/6)～ 橙(5YR6/8) 内：明黄褐(10YR7/6)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：板状工具ナデ、摩滅、 指押さえ 内：摩滅	胴下～底完形	外面胴部にスス有り。 外面底部に種子圧痕有り。
35-3	13-1	28号土坑・ 下層	弥・壺	底：(7.65) 高：6.9	外：浅黄橙(7.5YR8/6～8/4) 内：浅黄橙(7.5YR8/4)～ にふい橙(7.5YR7/4)	粗 5mm以下の砂粒を多く含む	良	外：ハケメ、ナデ 内：板状工具ナデ、指押さ え、ナデ	胴下～底約1/1	外面胴部にスス有り。 外面底部に種子圧痕有り。
35-4		28号土坑・ 下層	弥・壺	底：(9.2) 高：6.7	外：橙(5YR6/6)～ にふい黄褐(10YR5/3) 内：にふい黄橙(10YR6/4)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴下～底約1/4	外面底部にスス有り。
35-5		28号土坑・ 下層	弥・壺	底：(10.5) 高：3.7	外：にふい褐(7.5YR5/4)～ 灰黄褐(10YR5/2) 内：灰褐(7.5YR4/2)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：摩滅 内：ヘラミガキ	胴下～底約1/2	外面底部に黒斑有り。
35-6		28号土坑・ 下層	弥・壺	底：(7.0) 高：2.95	外：にふい橙(7.5YR7/4) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ヘラミガキ 内：摩滅	胴下～底約1/4	
35-7		28号土坑・ 最下層	弥・壺	底：(6.5) 高：2.8	外：にふい黄橙(10YR6/4)～ 灰黄褐(10YR5/2) 内：にふい黄橙(10YR6/4)	粗 2mm以下の砂粒を多く含む	良	外：摩滅 内：摩滅	胴下～底約1/4	外面底部にスス有り。

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	焼成	調整	残存率	備考
35-8		30号土坑	弥・壺	底:(9.6) 高:10.3	外:にふい橙(7.5YR7/4) 内:にふい橙(7.5YR6/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:摩滅 内:摩滅	胴下～底約1/1	外面胴部下に黒斑有り。
35-9		30号土坑	弥・壺	底:(7.9) 高:2.15	外:明黄褐(10YR7/6)～ にふい黄橙(10YR7/4) 内:明黄褐(10YR7/6)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:摩滅 内:摩滅	胴下～底約1/1	外面胴部下から底部にかけて黒斑有り。
35-10		3号溝	弥・甕	高:8.4	外:にふい橙(7.5YR6/4) 内:にふい黄橙(10YR6/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:摩滅、ハケメ 内:摩滅	口～胴上小片	外面口縁部から胴部上にかけてスス有り。
35-11		3号溝	弥・壺	底:(10.0) 高:3.35	外:にふい黄橙(10YR7/3) 内:にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:摩滅 内:摩滅	胴下～底約1/4	外面胴部下に黒斑有り。
35-12	13-3	P10	弥・鉢	口:(23.0) 高:11.7	外:にふい橙(7.5YR6/4～7/4) 内:にふい橙(7.5YR6/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ヨコナデ、ヘラムガキ 内:ヘラムガキ	口～胴中約1/4	内面口縁部から胴部にかけて黒斑有り。

## 2. 土製品

挿図番号	図版番号	出土遺構	種類	計測値				備考
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
6-6	13-5	1号竪穴式住居跡P1	紡錘車	5.9	2.85	1.3	23.0	色調: Hue10YR6/6 明黄褐 焼成: 良 胎土: 2mm以下の微砂をやや多く含む
28-8	13-4	20号土坑下層	円盤	10.55	10.7	1.7	160	色調: Hue10YR6/6 明黄褐 焼成: 良 胎土: 4mm以下の微砂をやや多く含む 調整: 指押さえ後ナデ

## 3. 石器

挿図番号	図版番号	出土遺構	種類	計測値				備考
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
6-1	14-1	1号竪穴式住居跡	打製石鏃	1.65	1.2	0.25	0.5	石材: 安山岩
6-2	14-13	1号竪穴式住居跡	石核	4.6	1.95	0.75	6.7	石材: 安山岩 打製石鏃未製品の可能性有り
6-3	14-26	1号竪穴式住居跡	石核	2.9	2.15	0.85	7.0	石材: 黒曜石
6-4	15-3	1号竪穴式住居跡	砥石	11.8	3.9	2.75	125.0	砥石使用により、中央部分に向かって凹んでいったと考えられる。
6-5	16-1	1号竪穴式住居跡	投弾	5.7	3.95	1.8	42.8	
6-7	14-14	2号竪穴式住居跡	剥片	2.55	0.85	0.7	1.0	
6-8	14-12	2号竪穴式住居跡	石核	5.1	2.75	1.05	15.0	石材: 安山岩 打製石鏃未製品の可能性有り。
8-1	14-22	3号竪穴式住居跡	打製石鏃	1.6	1.1	0.2	0.5	石材: 黒曜石
8-2	14-8	3号竪穴式住居跡	打製石鏃	2.3	0.8	0.3	0.7	石材: 安山岩
8-3	14-10	3号竪穴式住居跡	打製石鏃未製品	3.75	1.55	0.6	3.2	石材: 安山岩
8-4	14-15	3号竪穴式住居跡	石核	4.0	5.5	1.4	29.8	石材: 安山岩
8-5	15-10	3号竪穴式住居跡	紡錘車	3.5	2.9	0.55	7.4	石材: 滑石 紡錘車の外縁部に穿孔とも考えられる穴有り。
8-6	16-2	3号竪穴式住居跡	投弾	5.05	3.3	2.1	48.4	
8-7	13-6	3号竪穴式住居跡	ひきりうす状石器	3.8	2.9	2.3	24.8	穿孔有り。外面に小さなでこぼこした凹みがある。
11-1	14-17	2号土坑	スクレイパー	3.4	5.3	1.25	29.0	石材: 安山岩
11-2	15-2	2号土坑	柱状片刃石斧	6.0	0.95	1.55	11.6	
11-3	15-6	2号土坑	石杵	6.95	3.95	2.9	145	敲打痕有り。
11-4	15-4	2号土坑	石斧	3.3	3.15	1.5	17.6	
11-5	16-6	2号土坑	投弾	4.65	3.7	2.4	41.6	
11-6	16-4	2号土坑	投弾	3.2	2.4	1.6	13.2	
11-7	16-9	2号土坑	投弾	3.75	2.4	2	19.4	
11-8	16-3	2号土坑	投弾	3.6	2.6	1.7	18.2	
11-9	16-5	2号土坑	投弾	3.55	2.75	1.9	17.6	外面にコゲが付着している。
11-10	16-8	2号土坑	投弾	3.9	2.9	2.0	21.2	
11-11	14-11	4号土坑	打製石鏃未製品	7.4	4.0	1.85	43.2	石材: 安山岩
11-12	14-18	4号土坑	スクレイパー	2.15	3.8	0.7	5.3	石材: 安山岩
11-13	16-10	4号土坑	投弾	3.8	2.7	2.3	26.8	
14-1	14-19	5号土坑	スクレイパー	4.15	6.1	1.55	35.0	石材: 安山岩

挿図 番号	図版 番号	出土遺構	種類	計測値				備考
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
14-2	16-11	5号土坑	投弾	5.05	3.0	2.35	41.2	
14-3	16-7	5号土坑	投弾	4.05	3.1	2.2	35.0	
14-4	14-2	7号土坑	打製石鏃	1.85	1.75	0.3	0.7	石材：安山岩
14-5	16-12	7号土坑	投弾	2.9	2.9	2.0	18.2	
14-6	16-13	7号土坑	投弾	3.75	2.7	1.75	20.0	
14-7	14-4	8号土坑	打製石鏃	1.75	1.3	0.3	0.4	石材：安山岩
14-8	14-9	8号土坑	打製石鏃未製品	1.9	1.85	0.6	1.2	石材：安山岩
14-9	14-25	8号土坑	打製石鏃未製品	2.15	1.75	0.75	1.9	石材：黒曜石
14-10	15-11	8号土坑	紡錘車	5.65	3.0	0.55	15	石材：滑石
14-11	14-20	9号土坑	スクレイパー	3.6	5.3	1.85	30.0	石材：安山岩
14-12	16-14	11号土坑	投弾	4.45	3.8	2.6	48.4	
14-13	16-15	12号土坑	投弾	5.35	4.3	2.65	77.5	
14-14	15-5	15号土坑	石杵	3.8	3.9	2.1	40.8	
14-15	16-16	16号土坑 下層	投弾	4.35	3.8	2.7	57.0	
24-1	14-5	17号土坑	打製石鏃	1.95	1.6	0.25	0.6	石材：安山岩
24-2	15-12	17号土坑 上層	紡錘車	5.7	5.85	0.6	31.4	石材：滑石
24-3	16-17	17号土坑	投弾	3.4	2.7	1.9	21.0	
24-4	16-18	17号土坑	投弾	4.75	3.8	2.4	48.6	
24-5	14-28	18号土坑 上層	石鏃	21.0	5.15	1.35	163.0	
24-6	16-21	18号土坑	投弾	5.0	3.8	2.65	58.5	
24-7	16-20	18号土坑	投弾	4.1	3.35	2.15	34.0	
24-8	16-19	18号土坑	投弾	3.15	1.9	1.0	7.5	
28-1	14-23	19号土坑 下層	打製石鏃	2.0	1.25	0.3	0.5	石材：黒曜石
28-2	16-22	19号土坑	投弾	3.4	3.1	1.85	22.8	
28-3	15-1	20号土坑	砥石	7.5	2.4	1.5	35.8	砥面1面
28-4	15-7	20号土坑 下層	大型絵刃石 斧	5.95	7.1	3.5	290.0	
28-5	15-9	20号土坑 下層	紡錘車	2.4	2.7	0.55	4.9	石材：滑石
28-6	16-23	20号土坑	投弾	2.5	2.4	0.95	7.7	
28-7	16-24	20号土坑	投弾	3.8	3.2	2.15	30.0	
28-9	14-3	23号土坑	打製石鏃	1.3	1.3	0.25	0.3	石材：安山岩
28-10	14-27	23号土坑	打製石鏃未製品	3.9	2.35	0.6	5.7	石材：黒曜石
28-11	16-25	24号土坑 下層	投弾	3.6	2.75	2.25	22.8	
33-1	13-7	25号土坑	砥石	37.3	38.8	22.8	40200	
33-2	14-6	28号土坑	打製石鏃	2.0	1.9	0.3	0.9	石材：安山岩
33-3	16-26	28号土坑	投弾	2.7	3.5	1.9	20.2	
33-4	14-16	30号土坑	石匙未製品	2.9	5.3	1.35	20.8	石材：安山岩
33-5	16-27	30号土坑	投弾	5.0	3.9	3.35	75.0	
33-6	16-28	32号土坑	投弾	3.5	2.9	1.8	23.4	
33-7	14-21	34号土坑	スクレイパー	4.55	5.9	1.75	45.4	石材：安山岩
33-8	15-8	34号土坑 下層	大型絵刃石 斧	4.95	6.3	4.0	157.0	焼成の影響か両側面にコゲ付着。
37-1	14-7	2号溝	打製石鏃	1.55	1.25	0.3	0.5	石材：安山岩
37-2	16-29	3号溝	投弾	3.6	3.0	1.6	22.8	
37-3	16-30	3号溝	投弾	3.95	3.5	2.05	37.6	
37-4	14-24	遺構検出	打製石鏃	2.75	2.0	0.45	1.6	石材：黒曜石



横隈狐塚遺跡9 出土遺物観察表

1. 土器

法量=口：口径、高：器高、頂：頂径、底：底径、厚さ：厚、胴部最大径：胴最径 器種=弥：弥生土器

挿図 番号	図版 番号	出土遺構	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	焼成	調整	残存率	備考
39-1		1号竪穴式住居跡・中央土壌	弥・壺	高：2.65	外：にふい橙(7.5YR7/4)・ 浅黄橙(7.5YR8/4) 内：にふい橙(7.5YR7/4)・ 浅黄橙(7.5YR8/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：押さえ、磨滅 内：磨滅	口～胴上小片	口縁端部刻目は磨滅の為不明
39-2		1号竪穴式住居跡	弥・壺	高：4.3	外：にふい橙(7.5YR7/4～6/4) 内：にふい橙(7.5YR7/4～6/4)	粗 2mm以下の砂粒を多く含む	良	外面：磨滅 内面：磨滅	口～胴上小片	鉢の可能性もあり
39-3		1号竪穴式住居跡・中央土壌	弥・壺	底：6.75 高：3.6	外：明黄褐(10YR7/6)・ 橙(7.5YR7/6) 内：明黄褐(10YR7/6)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨滅 内：磨滅	胴下～底約3/4	外面底部に黒斑有り
39-4		1号竪穴式住居跡・中央土壌	弥・壺	底：(7.3) 高：11.25	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)・ 明黄褐(10YR7/6)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨滅 内：磨滅	胴下～底約1/4	
39-5		1号竪穴式住居跡・P8	弥・壺	底：(8.5) 高：13.0	外：にふい橙(7.5YR7/4～7/3) 内：にふい橙(7.5YR7/4)・ 灰褐(7.5YR6/2)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外：板状工具ナデ 内：磨滅	胴下約1/4 底約1/1	外面底部・胴部中に黒斑有り。
39-6	27-1	1号竪穴式住居跡	弥・壺	口：(15.2) 高：19.9 胴最径：(11.7)	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：浅黄橙(10YR8/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ヘラミガキ、磨滅 内：押さえ、磨滅	口～胴中約1/6	外面頸部に沈線2条有り。
39-7		1号竪穴式住居跡	弥・壺	底：(9.3) 高：4.4	外：にふい黄橙(10YR7/4) 内：浅黄(2.5YR7/4)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨滅 内：磨滅	胴下～底約1/4	
39-8		1号竪穴式住居跡・最下層	弥・壺	高：9.75	外：にふい黄橙(10YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨滅 内：磨滅	口～胴中小片	
39-9		1号竪穴式住居跡・最下層	弥・壺	底：(8.5) 高：6.4	外：にふい黄橙(10YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	粗 5mm以下の砂粒を多く含む	良	外：板状工具ナデ 内：磨滅	胴下～底約1/2	
39-10		1号竪穴式住居跡・最下層	弥・壺	底：7.0 高：6.55	外：浅黄橙(10YR8/4～7.5YR8/4) 内：にふい黄橙(10YR7/3)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外：ヘラミガキ、ナデ 内：磨滅	胴下約1/6 底1/1	
39-11		2号竪穴式住居跡	弥・壺	底：(7.3) 高：3.25	外：にふい橙(5YR7/4)～ にふい橙(7.5YR6/3) 内：にふい橙(7.5YR6/3)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨滅、ナデ 内：磨滅	胴下～底約1/4	底部中央は穿孔の可能性もあるが、磨滅が激しく判然としない。
39-12		2号竪穴式住居跡	弥・壺	口：(18.7) 高：4.1	外：にふい橙(7.5YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/3～10YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨滅 内：磨滅	口～胴上約1/5	
39-13		2号竪穴式住居跡	弥・壺	底：(11.7) 高：3.7	外：にふい黄橙(10YR7/3)～ にふい橙(7.5YR7/3) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	粗 5mm以下の砂粒を多く含む	良	外：ハケメ後ヘラミガキ 内：磨滅	胴下～底約1/2	外面底部に赤色顔料塗布。
44-1		4号竪穴式住居跡	弥・壺	底：(7.1) 高：2.75	外：にふい黄橙(10YR7/3)～ にふい橙(5YR7/4) 内：にふい橙(7.5YR6/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨滅 内：磨滅	胴下～底約1/4	
44-2	27-2	4号竪穴式住居跡	弥・壺	底：(7.2) 高：3.0	外：にふい黄橙(10YR6/3) 内：不明(黒斑のため)	粗 2mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨滅 内：ナデ、押さえ	胴下～底約2/3	内面前面に黒斑有り。 外面胴部中心部に縄縞痕有り。
44-3		4号竪穴式住居跡・下層	弥・壺	底：8.3 高：9.0	外：にふい黄橙(10YR7/4)～ 浅黄橙(10YR8/3) 内：淡黄(2.5Y8/4)～ 浅黄(2.5Y7/3)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨滅 内：磨滅	胴下約1/4 底約1/1	外面胴部黒斑有り。 内面胴部に黒斑有り。
44-4		5号竪穴式住居跡	弥・壺	高：8.9	外：にふい黄橙(10YR7/3～7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 5mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨滅 内：磨滅	口～胴上小片	口縁端部刻目有り。 外面胴部中に黒斑有り。
44-5		5号竪穴式住居跡	弥・壺	高：3.6	外：にふい黄橙(10YR7/3) 内：浅黄橙(10YR8/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨滅 内：磨滅	口～胴上小片	口縁端部に刻目有り。 外面胴部中に黒斑有り。
44-6		5号竪穴式住居跡	弥・壺	底：7.25 高：3.55	外：にふい黄橙(10YR7/3) 内：にふい黄橙(10YR7/3～6/3)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外：板状工具ナデ、ナデ 内：磨滅	胴下～底約3/5	
44-7		5号竪穴式住居跡	弥・壺	底：(7.7) 高：6.0	外：にふい橙(7.5YR7/4～7/3) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ナデ 内：ナデ、押さえ	胴下～底約1/4	外面底部に黒斑有り。
44-8	27-3	5号竪穴式住居跡	弥・壺	底：8.7 高：9.7	外：橙(7.5YR7/6)～ 浅黄橙(10YR8/3) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	粗 5mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨滅 内：磨滅	胴下約1/6 底約1/1	外面底部に靱圧痕有り。
44-9		7号竪穴式住居跡	弥・壺	底：(9.1) 高：2.1	外：にふい橙(7.5YR7/4)～ にふい黄橙(10YR7/4) 内：淡黄(2.5YR8/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨滅 内：磨滅	胴下～底約1/5	内外面底部に黒斑有り。
44-10		1号土坑	弥・壺	高：1.6	外：にふい黄橙(10YR7/3) 内：にふい黄橙(10YR7/3)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨滅 内：磨滅	口～胴上小片	
44-11		1号土坑	弥・壺	高：4.6	外：にふい黄橙(10YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨滅 内：磨滅	胴下～底小片	
49-1	28-3	7号土坑	弥・壺	高：19.95	外：淡赤橙(2.5YR7/4)～ にふい橙(5YR7/3) 内：にふい橙(7.5Y7/4)～ 橙(2.5YR7/6)	粗 5mm以下の砂粒を多く含む	良	外：ハケメ 内：板状工具ナデ、磨滅	口～胴下小片	口縁端部に刻目有り。 外面胴部下にスス付着。
49-2		7号土坑	弥・壺	高：4.0	外：浅黄橙(7.5YR8/4)～ にふい橙(7.5YR7/4) 内：にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨滅 内：磨滅	胴下～底小片	内面胴部下にコゲ有り。
49-3		7号土坑	弥・壺	底：(7.7) 高：4.7	外：橙(7.5YR7/4) 内：にふい橙(7.5YR7/6)	粗 2mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨滅 内：磨滅	胴下～底約1/4	内面胴部下にコゲ有り。
49-4		7号土坑	弥・壺	高：5.8	外：橙(7.5YR7/6) 内：橙(7.5YR7/6)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：磨滅 内：磨滅	口～胴上小片	
49-5		7号土坑	弥・壺	底：8.1 高：5.7	外：褐(7.5YR7/6) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	粗 8mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨滅 内：磨滅	胴下～底約1/1	
49-6	27-4	7号土坑	弥・壺	底：7.7 高：7.4	外：灰白(10YR8/2)～ にふい黄橙(10YR7/2) 内：にふい黄橙(10YR7/3)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ハケメ後ヘラミガキ、 ナデ 内：板状工具ナデ	胴中～底約1/1	黒色磨研土器 外面全体に黒斑有り。 外面底部に植物圧痕有り。
49-7		7号土坑	弥・壺	天頂：7.45 高：9.0	外：にふい橙(7.5Y7/4) 内：にふい橙(7.5YR7/4)	粗 2mm以下の砂粒を多く含む	良	外：磨滅 内：ナデ、押さえ	天頂～ 体部上約1/1	外面天頂部端部に黒斑有り。 内面体部にコゲ有り。

挿入 番号	図版 番号	出土遺構	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	焼成	調整	残存率	備考
49-8	28-1	7号土坑	弥・壺	底:(7.8) 高:4.3	外:にふい橙(5YR7/4)～ 淡橙(5YR8/4) 内:にふい橙(7.5YR6/4)～ 橙(5YR7/6)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外:ハケメ 内:磨滅	胴下～底約1/1	外面胴部下～底部にスス付着。 外面底部に植物圧痕有り。
49-9	28-4	7号土坑 下層	弥・壺	口:(20.6) 高:17.9	外:淡赤橙(2.5YR7/3)～ 橙(2.5YR6/6) 内:橙(2.5YR6/8)～ 浅黄橙(10YR8/3)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨滅 内:指押さえ、磨滅	口～胴下約2/5	
49-10	28-2	7号土坑 下層	弥・壺	口:20.4 底:7.1 高:22.35	外:にふい橙(7.5YR7/4)～ 浅黄橙(7.5YR8/4) 内:橙(7.5YR7/6)～ にふい橙(7.5YR6/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外:板状工具ナデ、ナデ 内:板状工具ナデ、指押 さえ	口約1/6 胴上約1/5 胴下～底約1/1	内面胴部下半にスス付着。 底部に焼成後の穿孔有り。
49-11		7号土坑	弥・壺	高:11.65	外:にふい黄橙(10YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外:ヨコナデ、指押さえ、 磨滅内:磨滅	口～胴中小片	
49-12		7号土坑	弥・壺	高:8.9	外:にふい黄橙(10YR7/4) 内:浅黄橙(10YR8/4)～ にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外:ヘラミガキ、磨滅 内:磨滅	口～頭小片	内外面口縁部にスス付着。
49-13		7号土坑	弥・壺	底:(13.5) 高:5.6	外:にふい橙(7.5YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 10mm以下の砂粒をやや多く 含む	良	外:磨滅 内:磨滅	胴下～底約2/5	
49-14	28-5	7号土坑	弥・壺	底:(9.4) 胴最:(33.9) 高:17.1	外:浅黄橙(10YR8/4)～ にふい黄橙(10YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨滅 内:磨滅	胴中～胴下約1/4 底約1/1	外面胴部に黒斑有り。
52-1		8号土坑	弥・壺	口:(36.0) 高:8.95	外:にふい黄橙(10YR7/3) 内:にふい黄橙(10YR6/3)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外:磨滅、ハケメ 内:磨滅、板状工具ナデ む	口～胴上約1/6	
52-2		8号土坑	弥・壺	高:6.0	外:浅黄(2.5YR7/4) 内:浅黄(2.5YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨滅 内:磨滅	口～胴上小片	口縁端部に刻目有り。
52-3	28-6	8号土坑	弥・壺	底:(8.75) 胴最:19.7 高:18.65	外:浅黄橙(7.5YR8/4～8/3) 内:にふい橙(7.5YR7/3～7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外:ヘラミガキ 内:押さえ、磨滅、ヘラミ ガキ	頸約1/6 胴上～底約1/1	外面胴部に黒斑有り。
52-4		8号土坑	弥・壺	底:(9.1) 高:2.7	外:浅黄橙(7.5YR8/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨滅 内:磨滅	胴下～底約1/4	内面底部にコゲ有り。
52-5	28-7	8号土坑	弥・高杯	脚裾:(8.25) 高:7.9	外:浅黄橙(10YR8/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨滅 内:磨滅	杯下～脚約1/1	内外面脚部裾に黒斑有り。
52-6		8号土坑・ 上層	弥・壺	高:5.45	外:にふい橙(7.5YR7/4) 内:橙(2.5YR7/6)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨滅 内:磨滅	口～胴上小片	
52-7		8号土坑・ 上層	弥・壺	底:9.55 高:6.75	外:浅黄橙(10YR8/4) 内:褐灰(10YR5/1)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨滅 内:磨滅	胴下～底約1/1	内外面に黒斑有り。
52-8		8号土坑・ 中層	弥・鉢	高:9.4	外:にふい橙(7.5YR7/4) 内:褐灰(10YR4/1)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外:ヨコナデ、ヘラミガキ 磨滅 内:ヘラミガキ、板状工具 ナデ後ヘラミガキ、 磨滅	口～胴上小片	外面口縁部から内面にかけて 黒斑有り。
52-9	28-8	8号土坑・ 中層	弥・壺	口:(24.3) 高:18.3	外:浅黄橙(7.5YR8/4)～ にふい黄橙(10YR7/3) 内:にふい橙(7.5YR7/4)～ にふい黄橙(10YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:ヨコナデ、板状工具 ナデ、磨滅 内:磨滅	口～胴下約1/5	口縁端部に刻目有り。 外面に黒斑有り。
52-10		8号土坑・ 中層	弥・壺	底:(8.2) 高:3.55	外:浅黄橙(10YR8/4)～ にふい黄橙(10YR7/3) 内:浅黄橙(7.5YR8/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外:磨滅、ナデ 内:磨滅	胴下～底約1/1	外面底部に黒斑有り。
52-11		8号土坑・ 中層	弥・壺	底:7.4 高:5.05	外:淡赤橙(2.5YR7/4)～ にふい橙(7.5YR7/4) 内:にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外:板状工具ナデ、ナデ 内:磨滅、指押さえ	胴下～底約1/1	
52-12		8号土坑・ 中層	弥・壺	高:4.6	外:橙(7.5YR7/6) 内:にふい橙(7.5YR7/6)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外:指押さえ、磨滅 内:磨滅	口～頭小片	
52-13		8号土坑・ 中層	弥・壺	底:(11.0) 高:3.9	外:にふい黄橙(10YR7/3～7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/3)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨滅 内:磨滅	胴下～底約1/1	内面胴部下半に黒斑有り。
52-14		8号土坑・ 中層	弥・壺	底:(10.5) 高:3.8	外:浅黄橙(10YR8/4)～ にふい黄橙(10YR7/2) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外:ヘラミガキ 内:ヘラミガキ	胴下～底約1/3	内面底部に黒斑有り。
52-15		8号土坑・ 最下層	弥・壺	底:8.15 高:8.2	外:浅黄橙(10YR8/4) 内:浅黄橙(10YR8/4)	粗 5mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨滅 内:磨滅	胴下～底約1/1	
53-1		8号土坑・ 下層	弥・鉢	高:3.3	外:にふい黄橙(10YR7/4) 内:浅黄橙(7.5YR8/4)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外:磨滅、ヘラミガキ 内:磨滅	口～胴上小片	外面口縁部から胴部上につ けて黒斑有り。
53-2	28-11	8号土坑・ 下層	弥・鉢	高:6.0	外:浅黄橙(10YR8/4) 内:浅黄橙(10YR8/4)	やや粗 7mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外:ヘラミガキ 内:磨滅	口～胴上小片	内面胴部に黒斑有り。
53-3		8号土坑・ 下層	弥・壺	高:6.8	外:浅黄橙(7.5YR8/6) 内:浅黄橙(7.5YR8/6)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外:磨滅 内:磨滅	口～胴上約1/4	
53-4		8号土坑・ 下層	弥・壺	高:11.1	外:浅黄橙(10YR8/4) 内:浅黄橙(10YR8/4)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含 む	良	外:ヨコナデ、磨滅 内:ヨコナデ、指押さえ	口～胴下小片	内面胴部に黒斑有り。
53-5		8号土坑・ 下層	弥・壺	口:(25.0) 高:8.35	外:浅黄橙(7.5YR8/6)～ 黄橙(10YR8/6) 内:浅黄橙(7.5YR8/6)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨滅 内:磨滅	口～胴上約1/2	
53-6	28-10	8号土坑・ 下層	弥・壺	口:(24.2) 底:7.65 高:24.1	外:浅黄橙(7.5YR8/4～8/3) 内:にふい橙(7.5YR7/4)～ にふい橙(7.5YR6/3)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外:ヨコナデ、板状工具 ナデ、磨滅内:磨滅、 指押さえ	口約1/6 胴上～中約1/5 胴下～底完形	胴部に刻目突帯1条。 内面胴部下半にコゲ有り。
53-7	28-12	8号土坑・ 下層	弥・壺	底:7.15 高:11.5	外:橙(7.5YR7/6)～ にふい黄橙(10YR7/2) 内:橙(7.5YR7/6)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨滅 内:磨滅、指押さえ	胴下～底約1/1	
53-8		8号土坑・ 下層	弥・壺	底:(6.9) 高:5.0	外:にふい橙(7.5YR7/4～6/4) 内:にふい橙(5YR6/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨滅 内:磨滅、指押さえ	胴下～底約3/5	外面底部に黒斑有り。 内面胴部から底部につ けて黒斑有り。
53-9		8号土坑・ 下層	弥・壺	底:(8.7) 高:4.35	外:にふい黄橙(10YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨滅、ナデ 内:磨滅、指押さえ	胴下～底約1/1	

挿入 番号	図版 番号	出土遺構	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	焼成	調整	残存率	備考
53-10	28-9	8号土坑・ 下層	弥・壺	底:8.15 高:5.6	外:浅黄橙(10YR8/3) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:板状工具ナデ、ナデ 内:板状工具ナデ、ナデ 指押さえ	胴下～底完形	外面底部に種子圧痕有り。
53-11		8号土坑・ 下層	弥・壺	底:6.6 高:8.85	外:浅黄橙(7.5YR8/3) 内:浅黄橙(7.5YR8/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:板状工具ナデ 内:板状工具ナデ、ナデ、 指押さえ	胴下約1/3 底完形	外面胴部に黒斑有り。
53-12		8号土坑・ 下層	弥・壺	底:8.4 高:8.5	外:にふい黄橙(10YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR6/3～7/3)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:板状工具ナデ後ヘラ ミガキ 内:ヘラミガキ、指押さえ	胴下～底完形	内面胴部にコゲ有り。
53-13		8号土坑・ 下層	弥・壺	底:(7.9) 高:2.55	外:浅黄橙(2.5YR8/4) 内:淡黄(2.5YR8/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ヘラミガキ 内:磨減	胴下～底約1/2	
53-14		8号土坑・ 下層	弥・壺	底:(10.2) 高:4.5	外:橙(5YR6/6)～ にふい黄橙(10YR7/4) 内:灰黄橙(10YR5/2)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ヘラミガキ、磨減 内:磨減	胴下～底約1/4	内面胴部に黒斑有り。
53-15		8号土坑・ 下層	弥・壺	底:9.9 高:6.2	外:浅黄橙(10YR8/4) 内:褐灰(10YR5/1)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外:ヘラミガキ 内:磨減	胴下～底約1/1	内面胴部から底部にかけて黒斑有り。
53-16		8号土坑・ 下層	弥・壺	底:10.6 高:7.5	外:浅黄橙(10YR8/4) 内:にふい黄橙(10YR7/3)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ヘラミガキ、磨減 内:ヘラミガキ	胴下～底約1/1	外面胴部から底部にかけて黒斑有り。内面胴部に黒斑有り。
53-17	28-13	8号土坑・ 下層	弥・蓋	天頂:(6.1) 高:9.2	外:にふい橙(7.5YR6/4～5YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ナデ、板状工具ナデ 内:ナデ	天頂～体部上約2/3	外面天頂部に黒斑有り。 内面体部にスス有り。
53-18		8号土坑・ 下層	弥・鉢	高:12.3	外:にふい黄橙(10YR7/4) 内:浅黄橙(10YR8/4)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨減 内:磨減	口～胴中小片	内面胴部に黒斑有り。
53-19		8号土坑・ 下層	弥・鉢	口:(41.6) 高:11.8	外:にふい黄橙(10YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	粗 5mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨減 内:磨減	口～胴上約1/6	
53-20	29-3	8号土坑・ 下層	弥・鉢	口:(20.8) 底:(6.8) 高:12.1	外:浅黄橙(7.5YR8/4)～ にふい黄橙(7.5YR7/4) 内:橙(7.5YR7/6～6/6)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨減、指押さえ 内:磨減、指押さえ	口～胴上約1/2 胴下～底完形	外面胴部下から底部にかけて黒斑有り。
53-21	29-2	8号土坑・ 下層	弥・鉢	口:(21.6) 底:9.1 高:13.05	外:にふい黄橙(10YR7/4) ～浅黄橙(10YR8/3) 内:灰白(10YR8/2)～ 浅黄橙(10YR8/3)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:磨減、板状工具ナデ 内:磨減、板状工具ナ デ、指押さえ	口約1/2 胴上～底完形	外面胴部に黒斑有り。
58-1		14号土坑	弥・壺	高:4.6	外:にふい黄橙(10YR7/3) 内:にふい黄橙(10YR7/3)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:磨減 内:磨減	口～胴上小片	外面胴部にスス有り。 内面胴部にコゲ有り。
58-2		14号土坑	弥・壺	底:(9.2) 高:3.35	外:にふい橙(7.5YR7/4) 内:浅黄橙(7.5YR8/4)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:磨減 内:磨減	胴下～底約1/4	
58-3		14号土坑・ 下層	弥・壺	底:(8.5) 高:3.5	外:にふい黄橙(10YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	粗 2mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨減 内:指押さえ、磨減	胴下～底約3/4	外面底部に黒斑有り。
58-4	29-1	18号土坑	弥・壺	底:(8.6) 高:3.2	外:にふい黄橙(10YR7/4～6/3) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:板状工具ナデ、磨減 内:ナデ、指押さえ	胴下～底約3/5	外面底部に種子圧痕有り。
58-5		18号土坑・ 下層	弥・壺	高:5.7	外:橙(5YR6/6) 内:橙(5YR6/6)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨減 内:磨減	口～胴上小片	
58-6		18号土坑・ 下層	弥・壺	高:16.0	外:橙(7.5YR7/6)～ 明黄橙(10YR7/6) 内:橙(7.5YR7/6)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:指押さえ、磨減 内:指押さえ、磨減	口～胴下小片	口縁端部に刻目有り。
58-7	29-4	18号土坑・ 下層	弥・壺	口:(19.1) 高:11.25	外:浅黄橙(7.5YR8/4～8/6) 内:橙(7.5YR7/6)～ 明黄橙(10YR7/6)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:磨減 内:磨減	口～胴中約3/4	外面胴部にスス有り。
58-8		19号土坑・ 下層	弥・壺	口:(20.1) 高:9.3	外:にふい橙(7.5YR7/4) 内:橙(7.5YR7/6)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:磨減 内:磨減	口～胴中約1/4	外面胴部にスス有り。
58-9	29-5	18号土坑・ 下層	弥・壺	口:(24.5) 高:13.6	外:にふい黄橙(10YR7/4)～ にふい橙(5YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4～6/3)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外:ヨコナデ、指押さえ、 磨減 内:ヨコナデ、指押さえ、 板状工具ナデ	口約1/4 胴中約1/5	外面胴部にスス有り。 内面胴部にコゲ有り。
58-10		18号土坑・ 下層	弥・壺	底:(8.6) 高:4.25	外:明赤褐(2.5YR5/6) 内:コゲの為不明	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ハケメ、磨減 内:ハケメ	胴下～底約1/4	内面胴部にコゲ有り。
58-11		18号土坑・ 下層	弥・壺	底:8.2 高:10.35	外:にふい橙(5YR7/4～7.5YR7/4) 内:にふい橙(7.5YR7/4～6/4)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ハケメ(板状工具ナ デの可能性)、磨 減 内:指押さえ、磨減	胴下約1/2 底約1/1	
58-12		18号土坑・ 下層	弥・壺	底:8.3 高:5.5	外:橙(5YR7/6)～ にふい橙(5YR7/4) 内:浅黄橙(7.5YR8/4～8/6)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ヘラミガキ、ナデ 内:ヘラミガキ	胴下約3/4 底完形	外面胴部に黒斑有り。
58-13		19号土坑	弥・壺	底:(7.6) 高:4.5	外:にふい橙(5YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/2)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:板状工具ナデ 内:ナデ、指押さえ	胴下～底約1/2	内面にコゲ有り。
58-14		19号土坑	弥・壺	底:(8.0) 高:5.0	外:にふい橙(7.5YR7/4)～ にふい黄橙(10YR6/4) 内:にふい橙(7.5YR7/4)～ 浅黄橙(7.5YR8/4)	やや粗 5mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:磨減 内:磨減	胴下～底約1/1	
58-15	29-6	19号土坑	弥・高杯	高:8.4	外:浅黄橙(7.5YR7/6) 内:橙(7.5YR7/6)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨減、刻目 内:磨減、指押さえ	杯下～脚部1/1	杯部と脚部の境に刻目突帯1条有り。
58-16		22号土坑	弥・壺	高:4.35	外:にふい橙(7.5YR7/4) 内:にふい橙(5YR7/4)～ にふい黄橙(10YR7/2)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:磨減 内:磨減、指押さえ	口～胴上小片	口縁端部に刻目有り。
58-17		22号土坑	弥・壺	高:4.9	外:にふい黄橙(10YR6/3) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ヨコナデ、ハケメ 内:磨減	口～胴上小片	口縁端部に刻目有り。
58-18		22号土坑	弥・壺	高:5.2	外:にふい橙(5YR7/4～7.5YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:磨減 内:磨減、指押さえ	口～胴上小片	口縁端部に刻目有り。
58-19		22号土坑	弥・壺	高:7.0	外:にふい黄橙(10YR7/3)～ にふい橙(5YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/3)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ヨコナデ、磨減 内:ヨコナデ、指押さえ、 磨減	口～胴上小片	口縁端部に刻目有り。
58-20		22号土坑	弥・壺	底:(6.6) 高:3.1	外:にふい橙(7.5YR7/4) 内:にふい橙(7.5YR7/4～6/4)	粗 2mm以下の砂粒を多く含む	良	外:磨減 内:磨減	胴下～底約1/4	内面胴部にコゲ有り。

挿図 番号	図版 番号	出土遺構	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	焼成	調整	残存率	備考
58-21		22号土坑	弥・甕	底:(8.2) 高:4.35	外:にふい橙(7.5YR7/4) 内:浅黄(2.5Y7/3)	粗 2mm以下の砂粒を多く含む	良	外:摩滅 内:摩滅	胴下~底約1/4	
58-22		22号土坑	弥・壺	底:(10.8) 高:6.4	外:浅黄橙(10YR8/4) 内:浅黄橙(10YR8/4)	粗 2mm以下の砂粒を多く含む	良	外:摩滅 内:摩滅	胴下約1/4 底約1/3	
62-1		23号土坑	弥・甕	高:3.3	外:にふい橙(7.5YR7/4) 内:浅黄橙(10YR8/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ヨコナデ、指押さえ 内:ヨコナデ、指押さえ	口~胴上小片	口縁端部に刻目有り。 外面胴部にスス有り。
62-2		23号土坑	弥・甕	高:6.2	外:にふい橙(7.5YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:摩滅 内:摩滅	口~胴上小片	外面胴部に黒斑有り。
62-3		23号土坑	弥・甕	高:8.6	外:にふい黄橙(10YR6/3) 内:橙(5YR6/6)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ヨコナデ、摩滅 内:ヨコナデ、指押さえ、 摩滅	口~胴上小片	口縁端部に刻目有り。 外面頸部にスス有り。 外面口縁部から内面全体に かけて黒斑有り。
62-4		23号土坑	弥・甕	口:(22.9) 高:7.5	外:にふい黄橙(10YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外:ヨコナデ、摩滅 内:ヨコナデ、摩滅	口~胴上約1/5	口縁端部に刻目有り。 外面頸部にスス有り。 外面胴部にスス有り。
62-5		23号土坑	弥・壺	高:4.4	外:橙(7.5YR6/6) 内:橙(5YR6/6)	精良 1mm以下の微砂をごわずかに含む	良	外:ヨコナデ、ヘラミガキ、 摩滅 内:ヘラミガキ、摩滅	口~胴上小片	外面胴部に黒斑有り。
62-6		23号土坑	弥・壺	底:9.05 高:7.4	外:にふい橙(5YR7/4~7.5YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR6/3)	粗 2mm以下の砂粒を多く含む	良	外:ヘラミガキ 内:摩滅	胴下約1/6 底約1/1	内面胴部下に黒斑有り。
62-7		23号土坑・ 上層	弥・甕	底:(7.85) 高:4.5	外:にふい橙(7.5YR7/4)~ にふい黄橙(10YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/3~6/3)	粗 4mm以下の砂粒を多く含む	良	外:板状工具ナデ後ヘラ ミガキ、摩滅、ナデ 内:ナデ、摩滅	胴下~底約1/1	底部中央に焼成前にあけた穿 孔有り。
62-8		23号土坑・ 上層	弥・甕	底:6.3 高:3.2	外:にふい橙(7.5YR7/4) 内:にふい橙(7.5YR6/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:板状工具ナデ、摩 滅、ナデ、指押さえ 内:摩滅	胴下~底完形	外面胴部下から底部に黒斑有 り。
62-9		23号土坑・ 上層	弥・壺	高:2.0	外:にふい橙(7.5YR7/4) 内:にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ヨコナデ、摩滅 内:ヘラミガキ	口~胴上小片	
62-10		23号土坑・ 上層	弥・壺	高:3.0	外:にふい黄橙(10YR6/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:摩滅 内:摩滅	口~胴上小片	
62-11		25号土坑	弥・壺	高:3.95	外:にふい橙(7.5YR7/4) 内:にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:摩滅 内:摩滅	口~頸小片	
62-12		25号土坑	弥・壺	口:(18.7) 高:3.7	外:にふい黄橙(10YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:摩滅 内:摩滅	口~胴上約1/6	
62-13		25号土坑	弥・甕	底:(7.0) 高:4.25	外:浅黄橙(7.5YR8/4)~ にふい橙(7.5YR7/4) 内:にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 5mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:摩滅、ナデ 内:摩滅、指押さえ	胴下~底約1/1	
62-14		25号土坑	弥・壺	胴最:(43.5) 高:15.7	外:にふい橙(7.5YR7/4)~ にふい橙(7.5YR5/4) 内:にふい橙(7.5YR7/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ヘラミガキ、摩滅 内:摩滅	胴約1/4	外面胴部に黒斑有り。
64-1		26号土坑・ 下層	弥・甕	底:(8.0) 高:4.95	外:浅黄橙(7.5YR8/4)~ にふい橙(7.5YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:板状工具ナデ、摩滅 内:摩滅	胴下~底約1/2	
64-2	29-7	26号土坑・ 下層	弥・甕	口:(21.8) 高:14.5	外:にふい橙(7.5YR7/4)~ 橙(5YR6/6) 内:にふい橙(7.5YR7/4)~ にふい黄橙(10YR6/3)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:ヨコナデ、板状工具 ナデ、摩滅 内:ヨコナデ、板状工具 ナデ、摩滅	口~胴中約1/2	口縁端部に刻目有り。 外面頸部にスス有り。 内面胴部にコゲ有り。
64-3		26号土坑・ 下層	弥・壺	高:4.25	外:にふい橙(7.5YR7/4) 内:浅黄橙(10YR8/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:摩滅 内:摩滅	口~頸小片	口縁端部に刻目有り。
64-4		26号土坑・ 下層	弥・壺	底:(9.7) 高:3.5	外:にふい橙(7.5YR7/4) 内:浅黄橙(7.5YR8/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:摩滅 内:摩滅	胴下~底約1/3	外面全面に黒斑有り。
64-5		26号土坑・ 下層	弥・壺	底:(9.8) 高:7.0	外:浅黄橙(10YR8/4)~ 橙(7.5YR7/6) 内:橙(7.5YR7/6)	やや粗 10mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ヘラミガキ、摩滅 内:ヘラミガキ、摩滅	胴下~底約1/2	
64-6	29-8	26号土坑・ 最下層	弥・甕	口:(22.5) 高:18.3	外:灰褐(7.5YR6/2)~ にふい橙(5YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)~ 灰黄褐(10YR5/2)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:摩滅、指押さえ 内:摩滅、指押さえ	口~胴下約1/2	外面胴部にスス有り。
64-7		30号土坑	弥・壺	高:5.8	外:にふい橙(7.5YR6/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ヨコナデ、ヘラミガキ、 指押さえ 内:ヨコナデ、ヘラミガキ、 指押さえ	口~胴上小片	
64-8		32号土坑	弥・甕	底:(7.8) 高:3.95	外:にふい黄橙(10YR6/4) 内:にふい黄橙(10YR6/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:摩滅 内:摩滅	胴下~底約2/3	
64-9		33号土坑	弥・高杯	高:2.5	外:にふい黄橙(10YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR6/4)	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:摩滅 内:摩滅	口~杯上小片	
64-10		35号土坑	弥・鉢	高:2.7	外:にふい黄橙(10YR6/4) 内:にふい黄橙(10YR6/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:摩滅 内:摩滅	口~胴上小片	
64-11		P6	弥・甕	高:5.2	外:にふい黄橙(10YR7/4) 内:にふい橙(7.5YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:摩滅 内:摩滅	口~胴上小片	
64-12		P6	弥・甕	高:5.0	外:にふい黄橙(10YR7/4) 内:浅黄橙(7.5YR8/4)	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ヨコナデ、指押さえ、 板状工具ナデ 内:ヨコナデ、板状工具 ナデ	口~胴上小片	外面胴部にスス有り。
64-13		P6	弥・甕	底:(8.1) 高:3.0	外:浅黄橙(10YR8/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	粗 5mm以下の砂粒を多く含む	良	外:摩滅、指押さえ 内:摩滅、指押さえ	胴下~底約3/5	外面胴部に黒斑有り。
64-14		P8	弥・壺	高:4.05	外:にふい橙(7.5YR7/4) 内:にふい橙(7.5YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:摩滅 内:摩滅	口~胴上小片	
64-15		P20	弥・蓋	高:2.0	外:にふい黄橙(10YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	粗 2mm以下の砂粒を多く含む	良	外:摩滅 内:摩滅	体下~握小片	
64-16		P21	弥・壺	高:8.15	外:にふい黄橙(10YR7/4) 内:にふい黄橙(10YR7/4)	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	良	外:摩滅、ヘラミガキ 内:摩滅	口~胴上小片	

## 2. 土製品

挿図 番号	図版 番号	出土遺構	種類	計測値				備考
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
40-9	29-13	1号竪穴式 住居跡	投弾	2.8	2.2	1.8	11.8	色調：Hue2.5Y5/4 黄褐色 焼成：良 胎土：1mm以下の微砂を少し含む その他：一部にスス付着。
40-10	29-12	1号竪穴式 住居跡	投弾	2.7	1.65	0.65	3.7	色調：Hue7.5YR7/4 にぶい橙色 焼成：良 その他：赤変部分有り
40-11	29-9	1号竪穴式 住居跡	紡錘車	3.4	3.45	0.85	11.2	色調：Hue10YR6/2 灰黄褐色 焼成：良 胎土：1mm以下の微砂をやや多く含む 調整：ナデ
50-5	29-10	7' 土坑	紡錘車	4.8	4.65	1.1	26.0	色調：Hue7.5YR5/4 焼成：良 胎土：2mm以下の砂粒をやや多く含む 調整：指押さえ、摩滅
50-6	29-11	7' 土坑	紡錘車	4.9	5.0	1.05	29.6	色調：Hue10YR6/6 明黄褐 焼成：良胎土：2mm以下の砂粒を多く含む 調整：ナデ
59-5	29-14	19号土坑	投弾	3.05	2.75	1.8	16	色調：Hue2.5Y5/3 黄褐 焼成：良 胎土：1mm以下の微砂をやや多く含む 調整：ナデ

## 3. 石器

挿図 番号	図版 番号	出土遺構	種類	計測値				備考
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
40-1	30-12	1号竪穴式住 居跡	打製石鏃	1.85	1.25	0.25	0.7	石材：黒曜石
40-2	30-11	1号竪穴式住 居跡	打製石鏃	2	1.3	0.3	0.7	石材：黒曜石
40-3	30-21	1号竪穴式住 居跡	打製石鏃 未製品	2.6	1.6	0.65	1.9	石材：黒曜石 打製石鏃未製品の可能性有り
40-4	30-8	1号竪穴式住 居跡	石錐	2.55	1.05	0.3~0.4	0.8	石材：安山岩
40-5	30-7	1号竪穴式住 居跡	石錐	2.4	1.8	0.6	2.0	石材：安山岩
40-6	31-9	1号竪穴式住 居跡	大型蛤刃 石斧	12.7	6.2	3.6	375	
40-7	31-5	1号竪穴式住 居跡	砥石	4.95	4.4	2.65	59.0	石材：砂岩 砥面：2面 その他：コゲ or タール状のものが一部付着。
40-8	31-4	1号竪穴式住 居跡	砥石	8.7	6.2	3.5	132.5	砥面：2面
40-12	30-25	1号竪穴式住 居跡・最下層	石核	3.4	3.45	1.05	12	石材：黒曜石
40-13	32-1	1号竪穴式住 居跡・最下層	投弾	3.1	2.8	2.3	23.2	
40-14	32-2	1号竪穴式住 居跡・最下層	投弾	3.8	2.7	0.7	10.2	
40-15	32-3	1号竪穴式住 居跡・最下層	投弾	3.35	2.8	2.1	18.8	
43-1	32-5	4号竪穴式住 居跡	投弾	3.9	2.9	2.3	33.6	
43-2	32-4	4号竪穴式住 居跡・下層	投弾	5.45	4.6	1.4	50.5	
43-3	31-7	5号竪穴式住 居跡	大型蛤刃 石斧	5.25	5.9	2.7	175	その他：所々コゲの痕有り
43-4	32-6	7号竪穴式住 居跡	投弾	4	3.5	2.6	45	
43-5	32-7	7号竪穴式住 居跡	投弾	3.65	2.3	1.3	11.6	
48-1	30-15	7号土坑・ 下層	打製石鏃	1.65	1.15	0.25	0.4	石材：黒曜石
48-2	30-16	7号土坑・ 下層	打製石鏃	1.5	1.4	0.2	0.4	石材：黒曜石
48-3	30-14	7号土坑・ 下層	打製石鏃	2.2	1.95	0.45	1.4	石材：黒曜石
48-4	30-1	7号土坑	打製石鏃	2	1.75	0.4	1	石材：安山岩
48-5	30-18	7号土坑	打製石鏃	2.7	2.1	0.35	1.3	石材：黒曜石
48-6	30-23	7号土坑	石核	3.9	2.7	1.1	9.3	石材：黒曜石 打製石鏃未製品か
48-7	30-10	7号土坑	石核	5.65	3.2	1.2	21.8	石材：安山岩
48-8	30-22	7号土坑	石核	3.9	2.35	0.85	5.4	石材：黒曜石 打製石鏃作成途中で廃棄か
48-9	31-8	7号土坑	石斧	6.85	4.3	1.1	60.5	
48-10	32-8	7号土坑	投弾	4.55	1.55	2.1	15.8	
48-11	32-9	7号土坑	投弾	4.4	2.95	1.85	24.6	

挿図 番号	図版 番号	出土遺構	種類	計測値				備考
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
50-1	30-17	7'号土坑	打製石鏃	1.6	1.5	0.3	0.5	石材：黒曜石
50-2	30-16	7'号土坑	打製石鏃	2.25	1.65	0.65	1.7	石材：黒曜石
50-3	32-10	7'号土坑	投弾	3.15	3.1	1.9	22	
50-4	32-11	7'号土坑	投弾	4.35	3.1	2.3	31	
50-7	31-1	8号土坑・ 最上層	管玉	1.2	0.55	0.55	0.5	色調：Hue7.5GY8/1 明緑灰
50-8	30-2	8号土坑	打製石鏃	1.6	1.1	0.2	0.3	石材：安山岩
50-9	32-12	8号土坑	投弾	3.8	2.6	2.3	22.4	
50-10	32-13	8号土坑	投弾	4.7	2	1.75	29.2	
50-11	31-3	8号土坑・ 下層	砥石	31.25	22.2	20.1	19.800	砥面3面有り。
59-1	31-2	18号土坑・ 下層	勾玉	2.6	1.7	0.55	3.4	石材：滑石
59-2	31-10	18号土坑・ 下層	大型蛤刃 石斧	12.45	7.35	3.8	475	
59-3	32-14	18号土坑・ 下層	投弾	4.05	3.0	2.5	35.2	
59-4	30-9	19号土坑	スクレイパー	4.95	6.1	1.35	32.2	石材：安山岩
63-1	30-20	22号土坑	打製石鏃 未製品	4.15	1.4	0.45	2.3	石材：黒曜石
63-2	30-5	23号土坑	打製石鏃 未成品	4.5	1.75	0.3	1.7	石材：安山岩
63-3	30-6	23号土坑	打製石鏃 未製品	4.55	1.7	0.55	3.4	石材：安山岩
63-4	31-11	23号土坑	磨石	11.25	9.75	7.0	1000	
63-5	32-17	23号土坑	投弾	3.35	2.65	2.1	23.0	
63-6	32-15	23号土坑	投弾	4.15	2.75	1.9	28.0	
63-7	32-16	23号土坑	投弾	4.6	3.8	2.5	45.6	
63-8	30-24	23号土坑・ 上層	スクレイパー	3.0	4.95	0.75	7.8	石材：黒曜石
63-9	31-6	23号土坑・ 上層	砥石	7.2	2.3	1.4	37.6	砥面が7面
59-6	30-26	35号土坑	石核	2.9	1.95	0.8	4.4	石材：黒曜石
59-7	30-3	P9	打製石鏃	2.25	1.8	0.5	2.5	石材：安山岩
59-8	30-19	P20	打製石鏃	1.6	1.9	0.2	0.7	石材：黒曜石
59-9	30-4	表採	打製石鏃	1.95	1.6	0.3	0.8	石材：安山岩